

桐壺 三

帚木 空蟬 夕顏

若紫 一九

末摘花

紅葉賀 四九

花宴 六七

葵 七五

賢木 一〇五

花散里 一三六

須磨 一四〇

明石 一六七

濤標 一九二

蓬生 関屋

絵合 二二三

松風 二二五

薄雲 二三九

朝顔 二五九

少女 二七三

玉鬘 初音 胡蝶 螢 常夏 篝火 野分 行幸 藤袴 真木柱

梅枝 三〇四

藤裏葉 三二六

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「新日本古典文学体系」版にて改行・読点修正  
(<http://sksrsg.blog82.fc2.com>)

桐

壺

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤しくなりゆきもの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり、唐土にもかかる事の起りにこそ世も乱れあしかりけれ、とやうやう天の下にもあぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具しさしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、何ごとの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、事とある時はなほ抛り所なく心細げなり。

先の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる稚児の御かたちなり。一の皇子は右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と世にもてかしづききこゆれど、この御にはひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしぶしには、まづ参う上らせたま

ふ、ある時には大殿籠もり過ぐしてやがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にもようせずはこの御子の居たまふべきなめり、と一の皇子の女御は思し疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。御局は桐壺なり。あまたの御方がたを過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参う上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたくまさなきこともあり。またある時にはえ避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を他に移させたまひて、上局に賜はす。その恨みましてやらむ方なし。この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くしていみじうせさせたまふ。それにつけても世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすげもおはする御かたち、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず、ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目をおどろかしたまふ。

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、

暇さらに許させたまはず。年ごろ常の篤しきになりたまへれば、御目馴れて、「なほしばしこころみよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏してまかでさせたまつりたまふ。かかる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとどめてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。限りあれば、さのみもえとどめさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなきを言ふ方なく思ほさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧ずるに、来し方行く末思し召されず。よろづのことを泣く泣く契りたまはずれど、御いらへもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと我かの気色にて臥したれば、いかさまにと思し召しまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえ許させたまはず。限りあらむ道にも後れ先立たじ、と契らせたまひけるを、「さりともうち捨ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへましかば」と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはてむと思し召すに、「今日始むべき祈りども、さるべき人びとうけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。御胸つとふたがりてつゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐるほどになむ絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こし召す御心まどひ、何ごとも思し召しわかれず、籠もりおはします。

御子はかくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでたまひなむとす。何事かあらむとも思したらず、さぶらふ人びとの泣きまどひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、よろしきことにだにかかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

限りあれば例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、「同じ煙にのぼりなむ」と泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふ所にいとかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ、むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふがいかひなければ、「灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなむ」とさかしうのたまへれど、車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかし、と人びともてわづらひきこゆ。内より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来てその宣命読むなむ悲しきことなりける。女御とだに言はずなりぬる、あかず口惜しう思さるれば、いま一きざみの位をだに、と贈らせたまふなりけり。これにつけても憎みたまふ人びと多かり。もの思ひ知りたまふは、様かたちなどのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく憎みがたかりしことなど、今ぞ思し出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそすげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情けありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とはかかる折にやと見えたり。

はかなく日ごろ過ぎて、後のわぎなどにもこまかにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方がたの御殿なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ弘徽殿などにはなほ許しなうのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにも、

若宮の御恋しきのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などを遣はしつつありさまを聞こし召す。

野分立ちてにはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、鞍負命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがて眺めおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を搔き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も人よりはことなりしけはひかたちの、面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。

命婦、かしこに参で着きて、門引き入るるよりけはひあはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇に暮れて臥し沈みたまへるほどに、草も高くなり、暴風にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にも障はらず差し入りたる。

南面に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の蓬生の露分け入りたまふにつけてもいと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「参りてはいとど心苦しう、心肝も尽くるやうになむ」と、内侍の典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて仰せ言伝へきこゆ。「しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひ静まるにしも、覚むべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく露けき中に過ぐしたまふも心苦しう思さるるを、とく参りたまへ」などはかばかしうものたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむ、と思しつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承り果てぬやうにてなむまかではべりぬる」とて御文奉る。「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなむ」とて見たまふ。



ほど経ばすこしうち紛るることもやと、待ち過ぐす月日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともに育まぬおぼつかなさを、今はなほ昔のかたみになずらへてものしたまへ。

などこまやかに書かせたまへり。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見たまひ果てず。「命長さのいとつらう思うたまへ知らるるに、松の思はむことだに恥づかしう思うたまへはべれば、百敷に行きかひはべらむことはましていと憚り多くなむ。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、みづからはえなむ思ひたまへたつまじき。若宮はいかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみなむ思し急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、などうちうちに思うたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも忌ま忌ましようかたじけなくなむ」とのたまふ。宮は大殿籠もりにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらむに、夜更けはべりぬべし」とて急ぐ。「暮れまどふ心の闇も堪へがたき片端をだにはるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかでたまへ。年ごろうれしく面だたしきついでにて立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言いまはとなるまで、「ただこの人の宮仕への本意かならず遂げさせたまつれ。我れ亡くなりぬとて口惜しう思ひくづほるな」と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなき交じらひはなかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だし立てはべりしを、身に余るまでの御心ぎしのよろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ交じらひたまふめりつるを、人の

そねみ深く積もり安からぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様なるやうにてつひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむかしこき御心ぎしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」と言ひもやらずむせかへりたまふほどに、夜も更けぬ。「上もしかなむ。「我が御心ながら、あながちに人目おどろくばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ。世にいささかも人の心を曲げたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにてあまたさるまじき人の恨みを負ひし果て果ては、かううち捨てられて心をさめむ方なきに、いとど人わろうかたくなになり果つるも、前の世ゆかしうなむ」とうち返しつつ御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず御返り奏せむ」と急ぎ参る。月は入り方に空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声ごゑもよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな  
えも乗りやらす。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人  
かごと聞こえつべくなむ」と言はせたまふ。をかしき御贈り物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一くだり、御髪上げの調度めく物添へたまふ。若き人びと、悲しきことはさらにも言はず、内わたりを朝夕にならひて、いとさうぎうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことをそそのかしきこゆれど、かく忌ま忌ましき身の添ひたてまつらむもいと人聞き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらむはいとうしろめたう思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたてまつりたまはぬなりけり。

命婦は、まだ大殿籠もらせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前

の壺前裁のいとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに、心に  
き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。この  
ごろ明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院のかかせたまひて、伊勢、貫之に  
詠ませたまへる、大和言の葉をも唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせ  
たまふ。いとこまやかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやか  
に奏す。御返り御覧ずれば、

いともかしこきは置き所もはべらず。かかる仰せ言につけてもかきくらす

乱り心地になむ。

荒き風ふせぎし蔭の枯れしより小萩がうへぞ静心なき

などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほどと御覧じ許すべし。いと  
うしも見えじと思し静むれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じ初めし  
年月のことさへかき集め、よろづに思し続けられて、時の間もおぼつかなかり  
しを、かくても月日は経にけり、とあさましう思し召さる。「故大納言の遺言  
あやまたず宮仕への本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにこそ  
思ひわたりつれ。言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに思しや  
る。「かくてもおのづから若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもあり  
なむ。命長くところ思ひ念ぜぬ」などのたまはす。かの贈り物御覧ぜさす。亡  
き人の住みか尋ね出でたりけむしるしの髪ざしならましかば、と思ほすもいと  
かひなし。

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵にかける楊貴妃のかたちは、いみじき絵師といへども、筆限りありければ、  
いとにほひ少なし。大液芙蓉、未央柳もげに通ひたりしかたちを、唐めいたる  
装ひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、  
花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、翼をならべ枝を交は

さむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせず恨めしき。風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参う上りたまはず、月のおもしろきに夜更くるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじうものしと聞こし召す。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、ことにもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。月も入りぬ。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

思し召しやりつつ、灯火をかかけ尽くして起きおはします。右近の司の宿直申の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、「明くるも知らで」と思し出づるにも、なほ朝まつりごとは怠らせたまひぬべかめり。ものなども聞こし召さず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、大床子の御膳などはいと遙かに思し召したれば、陪膳にさぶらふ限りは心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて近うさぶらふ限りは、男女、「いとわりなきわざかな」と言ひ合はせつつ嘆く。「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことに触れたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも思ほし捨てたるやうになりゆくはいとたいだいしきわざなり」と、人のみかどの例まで引き出で、ささめき嘆きけり。

月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすげたまへれば、いとゆゆしう思したり。明くる年の春、坊定まりたまふにも、いと引き越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなか危く思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬる

を、「さばかり思したれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心落ちゐたまひぬ。

かの御おぼ北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむと願ひたまひししるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しび思すこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまひつるを、見たてまつり置く悲しびをなむ、返す返すのたまひける。

今は内へのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡う賢くおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。「今は誰れも誰れもえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、あたかたきなりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女御子たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしく恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊び種に誰れも誰れも思ひきこえたまへり。わぎとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けばことごとしうたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

そのころ高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こし召して、宮の内にも召さむことは宇多の帝の御誠めあれば、いみじう忍びてこの御子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きてあまたたび傾きあやしぶ。「国の祖となりて、帝王の上なき位に昇るべき相おはします人の、そなたにて見れば乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天の下をたすくる方にて見れば、またその相

違ふべし」と言ふ。弁もいと才かしくき博士にて、言ひ交はしたることどもなむいと興ありける。文など作り交はして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、御子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。おほやけよりも多くの物賜はず。おのづから事広がりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにか、と思し疑ひてなむありける。帝、かしくき御心に、大和相を仰せて思しよりにける筋なれば、今までこの君を御子にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思して、無品の親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にておほやけの御後見をするなむ行く先も頼もしげなめること、と思し定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。際ことに賢くて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜の賢き道の人に勘へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。

年月に添へて御息所の御ことを思し忘るる折なし。慰むやとさるべき人びと参らせたまへど、なずらひに思さるるだにいとかたき世かなと疎ましうのみよろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御かたちすぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、上にさぶらふ内侍のすけは、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましたし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御かたちに似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそいとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御かたち人になむ」と奏しけるに、まことにやと御心とまり

て、ねむごろに聞こえさせたまひけり。母后、あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう、と思しつづみて、さすががしうも思し立たざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ、わが女御子たちの同じ列に思ひきこえむ」といねむごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人びと、御後見たち、御兄の兵部卿の御子など、かく心細くておはしまさむよりは、内住みせさせたまひて御心も慰むべく、など思しなりて、参らせたてまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御かたちありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。これは人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりて飽かぬことなし。かれは人の許しきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。思し紛るとはなけれど、おのづから御心移ろひて、こよなう思し慰むやうなるもあはれなるわざなりけり。

源氏の君は御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方はえ恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。母御息所も影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と内侍のすけの聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。上も限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしと思さでらうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うち添へてもとよりの憎さも立ち出で

て、ものしと思したり。世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御かたちにも、なほ匂はしきはたとへむ方なくうつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。

この君の御童姿いと変へまうく思せど、十二にて御元服したまふ。居起ち思しいとなみて、限りある事に事を添へさせたまふ。ひととせの春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きに落とさせたまはず。所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞととりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。角髪結ひたまへるつらつき、顔のほひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人、仕うまつる。いと清らなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと思し出づるに、堪へがたきを心強く念じかへさせたまふ。かうぶりしたまひて、御休所にまかだたまひて御衣奉り替へて、下りて拝したてまつりたまふさまに、みな人涙落としたまふ。帝はたましてえ忍びあへたまはず、思し紛るる折もありつる昔のこととりかへし悲しく思さる。いとかうきびはなるほどはあげ劣りやと疑はしく思されつるを、あさましようつくしげさ添ひたまへり。

引き入れの大臣の御子腹に、ただ一人かしづきたまふ御むすめ、春宮よりも御けしきあるを、思しわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内にも御けしき賜はらせたまへりければ、「さらばこの折の後見なかめるを、添ひ臥しにも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。さぶらひにまかだたまひて、人びと大御酒など参るほど、御子たちの御座の末に源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、もののつつましきほどにて、ともかく



もあへしらひきこえたまはず。御前より内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大桂に御衣一くだり、例のことなり。御盃のついでに、

いとよなき初元結ひに長き世を契る心は結びこめつや

御心ばへありておどろかさせたまふ。

結びつる心も深き元結ひに濃き紫の色し褪せずは

と奏して、長橋より下りて舞踏したまふ。左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据ゑて賜はりたまふ。御階のもとに、御子たち、上達部つらねて、祿ども品々に賜はりたまふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なむ承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなどところせきまで、春宮の御元服の折にも数まされり。なかなか限りもなくいかめしうなむ。その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまでもてかしづききこえたまへり。いとよきびはにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひきこえたまへり。女君はすこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思いたり。この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内の一つ后腹になむおはしければ、いづ方につけてもいとかなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にてつひに世の中を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらず圧されたまへり。御子どもあまた腹々にもものしたまふ。宮の御腹は蔵人の少将にていと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいと好からねど、え見過ぐしたまはでかしづきたまふ四の君にあはせたまへり。劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。

源氏の君は上の常に召しまつはせば、心安く里住みもえしたまはず。心のうちにはただ藤壺の御ありさまを類なしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君いとをかしげにかしづかれたる

人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声を慰めて、内住みのみ好ましうおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は幼き御ほどに罪なく思しなして、いとなみかしづききこえたまふ。御方々の人びと、世の中におしなべたらぬをとりとのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほな思しいたつく。内にはもとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人びとまかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる所に思ふやうならむ人を据ゑて住まばやとのみ嘆かしう思しわたる。光る君といふ名は高麗人のめできこえてつけたてまつりける、とぞ言ひ伝へたとむ。

若

紫

わらは病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持など参らせたまへど、しるしなくてあまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむなにかし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる。こぞの夏も世におこりて、人びとまじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、とくこそ試みさせたまはめ」など聞こゆれば、召しに遣はしたるに、「老いかがまりて室の外にもまかでず」と申したれば、「いかがはせむ。いと忍びてものせむ」とのたまひて、御供にむつましき四五人ばかりして、まだ暁におはす。

やや深う入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花盛りはみな過ぎにけり、山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまならひたまはず、所狭き御身にて、めづらしう思されけり。寺のさまもいとあはれなり。峰高く深き巖屋の中にぞ聖入りりたりける。登りたまひて、誰とも知らせたまはず、いといたうやつれたまへれど、しるき御さまなれば、「あなかしこや、一日召しはべりしにやおはしますらむ。今はこの世のことを思ひたまへねば、験方の行ひも捨て忘れてはべるを、いかでかうおはしましつらむ」とおどろき騒ぎ、うち笑みつつ見たてまつる。いと尊き大徳なりけり。さるべきもの作りてすかせたてまつり、加持など参るほど、日高くさし上がりぬ。

すこし立ち出でつつ見渡したまへば、高き所にて、ここかしこ僧坊どもあらはに見おろさるる、ただこのつづら折りの下に、同じ小柴なれど、うるはしくし渡して、清げなる屋、廊など続けて、木立いとよしあるは、「何人の住むにか」と問ひたまへば、御供なる人、「これなむなにかし僧都の二年籠もりはべる方にはべるなる」「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうもあまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。清げなる童などあまた

出で来て、闕伽たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。「かしこに女こそありけれ」「僧都はよもさやうには据ゑたまはじを」「いかなる人ならむ」と口々言ふ。下りて覗くもあり。「をかしげなる女子ども、若き人、童女なむ見ゆる」と言ふ。

君は行ひしたまひつつ、日たくるままに、いかならむと思したるを、「とかう紛らはさせたまひて思し入れぬなむよくはべる」と聞こゆれば、後への山に立ち出でて京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなう煙りわたれるほど、「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、「これはいと浅くはべり。人の国などにはべる海山のありさまなどを御覽ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ。富士の山、なにがしの嶽」など語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯の上を言ひ続けるもありて、よろづに紛らはしきこゆ。「近き所には播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何の至り深き隈はなけれど、ただ海の面を見わたしたるほどなむあやしく異所に似ずゆほびかなる所にはべる。かの国の前の守、新発意の、むすめかしづきたる家いといたしかし。大臣の後にて出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて交じらひもせず、近衛の中将を捨てて申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、「何の面目にてかまた都にも帰らむ」と言ひて頭も下ろしはべりにけるを、すこし奥まりたる山住みもせでさる海づらに出でゐたる、ひがひがしきやうなれど、げに、かの国のうちにさも人の籠もりゐぬべき所々はありながら、深き里は人離れ、心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住まひになむはべる。先つころ、まかり下りてはべりしついでに、ありさま見たまへに寄りてはべりしかば、京にてこそ所得ぬやうなりければ、そこらはるかにいかめしう占めて造れるさま、さは言へど、国の司にてし置き

けることなれば、残りの齡ゆたかに経べき心構へも二なくしたりけり。後の世の勤めもいとよくして、なかなか法師まさりしたる人になむはべりける」と申せば、「さて、そのむすめは」と、問ひたまふ。「けしうはあらず、かたち心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。「我が身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れてその志とげず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と常に遺言しおきてはべるなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人びと、「海龍王の后になるべきいつきむすめなり。心高さ苦しや」とて笑ふ。かく言ふは播磨守の子の、蔵人より今年かうぶり得たるなりけり。「いと好きたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらむかし」「さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへり。「いで、さ言ふとも田舎びたらむ。幼くよりさる所に生ひ出でて古めいたる親にのみ従ひたらむは」「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなき所々より類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」「情けなき人なりて行かば、さて心安くてしもえ置きたらじをや」など言ふもあり。君、「何心ありて海の底まで深う思ひ入らむ。底のみるめものむつかしう」などのたまひて、ただならず思したり。かやうにてもなべてならずもてひがみたること好みたまふ御心なれば、御耳とどまらむをや、と見たてまつる。

「暮れかかりぬれど、おこらせたまはずなりぬるにこそはあめれ。はや帰らせたまひなむ」とあるを、大徳、「御もののけなど加はれるさまにおはしましけるを、今宵はなほ静かに加持など参りて、出でさせたまへ」と申す。「さもあること」とみな人申す。君も、かかる旅寝も慣らひたまはねば、さすがにかしくて、「さらば暁に」とのたまふ。

人なくてつれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のほ

どに立ち出でたまふ。人びとは帰したまひて、惟光の朝臣と覗きたまへば、ただこの西面にしも仏据ゑたてまつりて行ふ、尼なりけり、簾すこし上げて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みゐたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれどつらつきふくらかに、まみのほど、髪の毛のうつくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ、中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひさき見えてうつくしげなるかたちなり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて尼君の見上げたるに、すこしおぼえたところあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」とていと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしうやうやうなりつるものを、烏などもこそ見つくれ」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く」とて、「こちや」と言へば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。尼君、髪をかき撫でつつ、「梳ることをうるさがりたまへど、を

かしの御髪や。いとかなうものしたまふこそあはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとからぬ人もあるものを。故姫君は十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりしぞかし。ただ今おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき  
またるたる大人、「げに」とうち泣きて、

初草の生ひ行く末も知らぬまにいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましたしけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将のわらは病まじなひにもおしたまひけるを、ただ今なむ聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、知りはべらで、ここにはべりながら御とぶらひにもまでぎりける」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて簾下ろしつ。「この世にののしりたまふ光源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、齡延ぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえむ」とて、立つ音すれば、帰りたまひぬ。あはれなる人を見つるかな、かかればこの好き者どもはかかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだにかく思ひのほかなることを見るよ、とをかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

うち臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でます。ほどなき所なれば、君もやがて聞きたまふ。「過ぎりおはしましたしけるよし、ただ今なむ人申す



に、おどろきながらさぶらべきを、なにがしこの寺に籠もりはべりとはしろしめしながら忍びさせたまへるを、憂はしく思ひたまへてなむ。草の御むしろもこの坊にこそ設けはべるべけれ。いと本意なきこと」と申したまへり。「いぬる十余日のほどよりわらは病にわづらひはべるを、度重なりて堪へがたくはべれば、人の教へそのままにはかに尋ね入りはべりつれど、かやうなる人の験あらはさぬ時はしたなかるべきも、ただなるよりはいとほしう思ひたまへつつみてなむいたう忍びはべりつる。今そなたにも」とのたまへり。すなはち僧都参りたまへり。法師なれどいと心恥づかしく、人柄もやむごとなく世に思はれたまへる人なれば、軽々しき御ありさまをはしたなう思す。かく籠もれるほどの御物語など聞こえたまひて、「同じ柴の庵なれど、すこし涼しき水の流れも御覽ぜさせむ」とせちに聞こえたまへば、かのまだ見ぬ人びとにことごとしう言ひ聞かせつるをつつましう思せど、あはれなりつるありさまもいぶかしくておはしぬ。げにいと心ことによしありて、同じ木草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、灯笼なども参りたり。南面いと清げにしつらひたまへり。そらだきものいと心にくく薫り出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人びとも心づかひすべかめり。

僧都、世の常なき御物語、のち世のことなど聞こえ知らせたまふ。我が罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれを思ひ悩むべきなめり、まして後の世のいみじかるべき思し続けて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、「ここにものしたまふは、誰れにか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえたまへば、うち笑ひて、「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても御心劣りせさせたまひぬべし。故按察使大納言は世になくて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の

方なむなながしが妹にはべる。かの按察使かくれて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふことはべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠もりてもものしはべるなり」と聞こえたまふ。「かの大納言の御むすめものしたまふと聞きたまへしは。好き好きしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推し当てにのたまへば、「むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらむ。故大納言、内にたてまつらむなどかしよういつきはべりしを、その本意のごとくものしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君一人もてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、本の北の方やむごとくなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れ物を思ひてなむ亡くなりはべりにし。物思ひに病づくものと目に近く見たまへし」など申したまふ。さらばその子なりけり、と思しあはせつ。親王の御筋にてかの人にもかよひきこえたるにや、といとどあはれに見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばや、と思す。「いとあはれにもものしたまふことかな。それはとどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行方のなほ確かに知らまほしくて問ひたまへば、「亡くなりはべりしほどにこそはべりしか。それも女にてぞ。それにつけて物思ひのもよほしになむ齡の末に思ひたまへ嘆きはべるめる」と聞こえたまふ。さればよと思さる。「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてむや。思ふ心ありて、行きかかづらふ方もはべりながら、世に心の染まぬにやあらむ、独り住みにてのみなむ。まだ似げなきほどと、常の人に思しなずらへて、はしたなくや」などのたまへば、「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいはきなきほどにはべるめれば、たはぶれにても御覧じがたくや。そもそも女人は人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、詳しくはえとり申さず、かの祖母に語らひはべりて

聞こえさせむ」とすくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。「阿弥陀仏ものしたまふ堂にする事はべるころになむ。初夜、いまだ勤めはべらず。過ぐしてさぶらはむ」とて上りたまひぬ。

君は心地もいと悩ましきに、雨すこしうちそそき、山風ひややかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて音高う聞こゆ。すこしねぶたげなる読経の絶え絶えすぐく聞こゆるなど、すずろなる人も所からもあはれなり。まして思しめぐらすこと多くて、まどろませたまはず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息に引き鳴らさるる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひあてはかなりと聞きたまひて、ほどもなく近ければ、外に立てわたしたる屏風の中をすこし引き開けて扇を鳴らしたまへば、おぼえなき心地すべかめれど、聞き知らぬやうにやとてゐざり出づる人あなり。すこし退きて、「あやし。ひが耳にや」とたどるを聞きたまひて、「仏の御するべは暗きに入りてもさらに違ふまじかなるものを」とのたまふ御声のいと若うあてなるに、うち出でむ声づかひも恥づかしけれど、「いかなる方の御しるべにか。おぼつかなく」と聞こゆ。「げにうちつけなりとおぼめきたまはむも道理なれど、

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

と聞こえたまひてむや」とのたまふ。「さらにかやうの御消息うけたまはりわくべき人もものしたまはぬさまはしろしめしたりげなるを。誰れにかは」と聞こゆ。「おのづから、さるやうありて聞こゆるならむと思ひなしたまへかし」とのたまへば、入りて聞こゆ。「あな、今めかし。この君や世づいたるほどにおはするとぞ思すらむ、さるにては、かの若草をいかで聞いたまへることぞ」とさまざまあやしきに心乱れて、久しうなれば情けなしとて、

「枕結ふ今宵ばかりの露けさを深山の苔に比べざらなむ

乾がたうはべるものを」と聞こえたまふ。

「かうやうのついでなる御消息はまださらに聞こえ知らず、ならばぬ事になむ。かたじけなくとも、かかるついでにまめまめしう聞こえさすべきことなむ」と聞こえたまへれば、尼君、「ひがこと聞きたまへるならむ。いとむつかしき御けはひに、何ごとをかはいらへきこえむ」とのたまへば、「はしたなうもこそ思せ」と人びと聞こゆ。「げに、若やかなる人こそうたてもあらめ、まめやかにのたまふかたじけなし」とてゐざり寄りたまへり。「うちつけにあさはかなりと御覽ぜられぬべきついでなれど、心にはさもおぼえはべらねば、仏はおのづから」とて、おとなおとなしう恥づかしげなるにつつまれて、とみにもえうち出でたまはず。「げに思ひたまへ寄りがたきついでに、かくまでのたまはせ聞こえさするも、いかが」とのたまふ。「あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎたまひにけむ御かはりに思しないでむや。言ふかひなきほどの齢にてむつまじかるべき人にも立ち後ればべりにければ、あやしう浮きたるやうにて年月をこそ重ねはべれ。同じさまにもしたまふなるを、たぐひになさせたまへ」と聞こえまほしきを、かかる折はべりがたくてなむ思されむところをも憚らずうち出ではべりぬる」と聞こえたまへば、「いとうれしう思ひたまへぬべき御ことながらも、聞こしめしひがめたることなどやはべらむと、つつましうなむ。あやしき身一つを頼もし人にする人なむはべれど、いとまだ言ふかひなきほどにて、御覽じ許さるる方もはべりがたげなれば、えなむうけたまはりどめられざりける」とのたまふ。「みなおぼつかかなからずうけたまはるものを、所狭う思し憚らで、思ひたまへ寄るさまことなる心のほどを御覽ぜよ」と聞こえたまへど、いと似げなきことをさも知らでのたまふ、と思して、心解けたる御答へもなし。僧都おはしぬれば、「よし、かう聞こえそめはべりぬれ

ば、いと頼もしうなむ」とて、おし立てたまひつ。

暁方になりにつければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくるいと尊く、滝の音に響きあひたり。

吹きまよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

「さしぐみに袖ぬらしける山水に澄める心は騒ぎやはする

耳馴れはべりにけりや」と聞こえたまふ。明けゆく空はいといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなうさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花どもいろいろに散りまじり錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、悩ましさも紛れ果てぬ。聖、動きもえせねど、とかうして護身参らせたまふ。かれたる声のいといたうすきひがめるもあはれに功づきて、陀羅尼誦みたり。

御迎への人びと参りて、おこたりたまへる喜び聞こえ、内よりも御とぶらひあり。僧都、世に見えぬさまの御くだもの、何くれと谷の底まで堀り出でいなみきこえたまふ。「今年ばかりの誓ひ深うはべりて御送りにもえ参りはべるまじきこと。なかなかにも思ひたまへらるべきかな」など聞こえたまひて、大御酒参りたまふ。「山水に心とまりはべりぬれど、内よりもおぼつかながらせたまへるもかしこければなむ。今この花の折過ぐさず参り来む。

宮人に行きて語らむ山桜風よりさきに来ても見るべく」

とのたまふ御もてなし、声づかひさへ目もあやなるに、

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそ移らね

と聞こえたまへば、ほほゑみて、「時ありて一度開くなるはかたかなるものを」とのたまふ。聖、御土器賜はりて、

奥山の松のとぼそをまれに開けてまだ見ぬ花の顔を見るかな

とうち泣きて見たてまつる。聖、御まもりに独鉢たてまつる。見たまひて、僧

都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝に付けて、紺瑠璃の壺どもに御薬ども入れて、藤、桜などに付けて、所につけたる御贈物どもささげたてまつりたまふ。君、聖よりはじめ、読経しつる法師の布施ども、まうけの物ども、さまざまに取りにつかはしたりければ、そのわたり山がつまでさるべき物ども賜ひ、御誦経などして出でたまふ。内に僧都入りたまひて、かの聞こえたまひしことまねびきこえたまへど、「ともかくもただ今は聞こえむかたなし。もし御志あらば、いま四五年を過ぐしてこそはともかくも」とのたまへば、さなむ、と同じさまにのみあるを、本意なしと思す。御消息、僧都のもとなる小さき童して、

夕まぐれほのかに花の色を見て今朝は霞の立ちぞわづらふ  
御返し、

まことにや花のあたりは立ち憂きと霞むる空の気色をも見む  
とよしある手のいとあてなるをうち捨て書いたまへり。

御車にたてまつるほど、大殿より、「いづちともなくておはしましにけること」とて、御迎への人びと、君達などあまた参りたまへり。頭中将、左中弁、さらぬ君達も慕ひきこえて、「かうやうの御供には仕うまつりはべらむと思ひたまふるを、あさましくおくらさせたまへること」と恨みきこえて、「いとみじき花の蔭にしはしもやすらはず立ち帰りはべらむは飽かぬわざかな」とのたまふ。岩隠れの苔の上に並みゐて土器参る。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。頭中将、懐なりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」と歌ふ。人よりは異なる君達を、源氏の君いといたううち悩みて岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ何ごとにも目移るまじかりける。例の、箏篋吹く隨身、笙

の笛持たせたる好き者などあり。僧都、琴をみづから持て参りて、「これ、ただ御手一つあそばして、同じうは山の鳥もおどろかしはべらむ」と切に聞こえたまへば、「乱り心地いと堪へがたきものを」と聞こえたまへど、けに憎からずかき鳴らして、みな立ちたまひぬ。飽かず口惜しと、言ふかひなき法師、童べも涙を落としあへり。まして内には年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、「この世のものとおぼえたまはず」と聞こえあへり。僧都も、「あはれ、何の契りにて、かかる御さまなごらいとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとなむ悲しき」とて目おしのごひたまふ。この若君、幼な心地に、めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりもまさりたまへるかな」などのたまふ。「さらばか人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、うちうなづきて、いとようありなむ、と思したり。雛遊びにも、絵かいたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ。

君はまづ内に参りたまひて、日ごろの御物語など聞こえたまふ。いといたう衰へにけりとて、ゆゆしと思し召したり。聖の尊かりけることなど問はせたまふ。詳しく奏したまへば、「阿闍梨などにもなるべき者にこそあなれ。行ひの労は積もりて、おほやけにしろしめされざりけること」と尊がりのたまはせけり。大殿参りあひたまひて、「御迎へにもと思ひたまへつれど、忍びたる御歩きに、いかがと思ひ憚りてなむ。のどやかに一二日うち休みたまへ」とて、「やがて御送り仕うまつらむ」と申したまへば、さしも思さねど、引かされてまかだたまふ。我が御車に乗せたてまつりたまうて、自らは引き入りてたてまつれり。もてかしづききこえたまへる御心ばへのあはれなるをぞさすがに心苦しく思しける。殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しく見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。女君例

のはひ隠れて、とみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひてからうして渡りたまへり。ただ絵にかきたるものの姫君のやうにし据ゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてもものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山道の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしういらへたまはばこそあはれならめ、世には心も解けずうとく恥づかしきものに思して、年のかさなるに添へて御心の隔てもまさるを、いと苦しく、思はずに、「時々は世の常なる御気色を見ばや。堪へがたうわづらひはべりしをいかがとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれどなほうらめしう」と聞こえたまふ。からうして、「問はぬはつらきものにやあらむ」と後目に見おこせたまへる、まみいと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御かたちなり。「まれまれは、あさましの御ことや。「問はぬ」など言ふ際は異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにしたなき御もてなしを、もし思し直る折もやと、とぎまかうさまに試みきこゆるほど、いとと思ほし疎むなめりかし。よしや命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君ふとも入りたまはず。聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。

この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、似げないほどと思へりしもことわりぞかし、言ひ寄りがたきことにもあるかな、いかにかまへて、ただ心やすく迎へ取りて明け暮れの慰めに見む、兵部卿宮はいとあてになまめいたまへれど、匂ひやかになどもあらぬを、いかでかの一族におぼえたまふらむ、ひとつ后腹なればにや、など思す。ゆかりいとむつまじきに、いかでか、と深うおぼゆ。またの日、御文たてまつれたまへり。僧都にもほのめかしたまふべし。尼上には、

もて離れたりし御気色のつつまじきに、思ひたまふるさまをもえあらはし



果てはべらずなりにしをなむ。かばかり聞こゆるにても、おしなべたらぬ志のほどを御覧じ知らば、いかにうれしう。

などあり。中に小さく引き結びて、

面影は身をも離れず山桜心の限りとめて来しかど

夜の間の風もうしろめたくなむ。

とあり。御手などはさるものにて、ただはかなうおし包みたまへるさまも、さだすぎたる御目どもには目もあやにこのましう見ゆ。あなかたはらいたや、いかが聞こえむ、と思しわづらふ。

ゆくての御ことはなほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむかたなくなむ。まだ難波津をだにはかばかしう続けはべらざめれば、かひなくなむ。さても、

嵐吹く尾の上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

いとどうしろめたう。

とあり。僧都の御返りも同じさまなれば、口惜しくて、二三日ありて惟光をぞたてまつれたまふ。「少納言の乳母と言ふ人あべし。尋ねて詳しう語らへ」などのたまひ知らず。さもかからぬ隈なき御心かな、さばかりいはけなげなりしけはひを、とまほならねども見しほどを思ひやるもをかし。わざとかう御文あるを僧都もかしこまり聞こえたまふ。少納言に消息して会ひたり。詳しく、思しのためふさま、おほかたの御ありさまなど語る。言葉多かる人にて、つきづきしう言ひ続くれど、いとわりなき御ほどを、いかに思すにか、とゆゆしうなむ誰も誰も思しける。御文にもいとねむごろに書いたまひて、例の、中に「かの御放ち書きなむなほ見たまへまほしき」とて、

あさか山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ

御返し、

汲み初めてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき

惟光も同じことを聞こゆ。「このわづらひたまふことよろしくは、このごろ過ぐして、京の殿に渡りたまひてなむ聞こえさすべき」とあるを、心もとなう思す。

藤壺の宮、悩みたまふことありて、まかでたまへり。上のおぼつかながら嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかる折だにと心もあくがれ惑ひて、いづくにもいづくにもまうでたまはず、内にても里にても、昼はつれづれと眺め暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いかたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ現とはおぼえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしを思し出づるだに世ととも御もの思ひなるを、さてだにやみなむ、と深う思したるに、いと憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうち交じりたまはざりけむ、とつらうさへぞ思さるる。何ごとをか聞こえ尽くしたまはむ、くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがて紛るる我が身ともがなとむせかへりたまふさまもさすがにいみじければ、

世語りに人や伝へむたぐひなく憂き身を覚めぬ夢になしても

思し乱れたるさまもいと道理に、かたじけなし。命婦の君ぞ御直衣などはかき集め持て来たる。

殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども例の御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも、つらういみじう思しほれて、内へも参らで二三日籠もりおはすれば、またいかなるにかと御心動かせたまふべかめるも、

恐ろしうのみおぼえたまふ。宮もなほいと心憂き身なりけりと思し嘆くに、悩  
 ましさもまさりたまひて、とく参りたまふべき御使しきれど、思しも立たず。  
 まことに御心地例のやうにもおはしまさぬは、いかなるにかと、人知れず思す  
 こともありければ、心憂くいかならむとのみ思し乱る。暑きほどはいとど起き  
 も上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人びと見たて  
 まつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し。人は思ひ寄らぬことなれ  
 ば、この月まで奏せさせたまはざりけること、と驚ききこゆ。我が御心一つに  
 はしるう思しわくこともありけり。御湯殿などにも親しう仕うまつりて何事の  
 御気色をもしるく見たてまつり知れる御乳母子の弁、命婦などぞあやしと思へ  
 ど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、なほ逃れがたかりける御宿世をぞ命  
 婦はあさましと思ふ。内には御物の怪の紛れにてとみに気色なうおはしましけ  
 るやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。いとどあはれに限りなう  
 思されて、御使などのひまなきもそら恐ろしう、ものを思すことひまなし。中  
 将の君もおどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問  
 はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中に違ひ  
 目ありて慎しませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえ  
 て、「みづからの夢にはあらず。人の御ことを語るなり。この夢合ふまでまた  
 人にまねぶな」とのたまひて、心のうちにはいかなることならむと思しわたる  
 に、この女宮の御こと聞きたまひて、もしさるやうもやと思し合はせたまふに、  
 いとどしくいみじき言の葉尽くしきこえたまへど、命婦も思ふに、いとむくつ  
 けうわづらはしきまさりて、さらにたばかるべきかたなし。はかなき一くだり  
 の御返りのたまさかなりしも絶え果てにたり。七月になりてぞ参りたまひける。  
 めづらしうあはれにて、いとどしき御思ひのほど限りなし。すこしふくらかに  
 なりたまひて、うちなやみ面瘦せたまへるはた、げに似るものなくめでたし。

例の、明け暮れこなたにのみおはしまして、御遊びもやうやうをかしき空なれば、源氏の君も暇なく召しまつはしつ、御琴、笛などさまさまに仕うまつらせたまふ。いみじうつつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づる折々、宮もさすがなる事どもを多く思し続けけり。

かの山寺の人はよろしくなりて出でたまひにけり。京の御住みか尋ねて時々御消息などあり。同じさまにのみあるもことわりなるうちに、この月ごろはありしにまさる物思ひに、異事なくて過ぎゆく。

秋の末つ方、いどもの心細くて嘆きたまふ。月のをかしき夜、忍びたる所からうして思ひ立ちたまへるを、時雨めいてうちそそく。おはする所は六条京極わたりにて、内よりなれば、すこしほど遠き心地するに、荒れたる家の木立いともの古りて木暗く見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、「故按察使大納言の家にはべりて、もののたよりにとぶらひてはべりしかば、かの尼上いたう弱りたまひにたれば何ごともおぼえず、となむ申してはべりし」と聞こゆれば、「あはれのことや。とぶらふべかりけるを。などかきなむとものせざりし。入りて消息せよ」とのたまへば、人入れて案内せさす。わぎとかう立ち寄りたまへることと言はせられたれば、入りて、「かく御とぶらひになむおはしましたる」と言ふに、おどろきて、「いとかたはらいたきことかな。この日ごろ、むげにいと頼もしげなくなせたまひにたれば、御対面などもあるまじ」と言へども、帰したてまつらむはかしこしとて、南の廂ひきつくろひて、入れたてまつる。「いとむつかしげにはべれど、かしこまりをだにとて。ゆくりなう、もの深き御座所になむ」と聞こゆ。げにかかる所は例に違ひて思さる。「常に思ひたまへ立ちながら、かひなきさまにのみもてなさせたまふにつつまればべりてなむ。悩ませたまふこと重く、ともうけたまはらざりけるおぼつかなき」など聞こえたまふ。「乱り心地はいつともなくのみはべるが、限りのさまにな

りはべりて、いとかたじけなく立ち寄せたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたまはすること筋たまさかにも思し召し変はらぬやうはべらば、かくわりなき齡過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへ置くなむ願ひはべる道のほだしに思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。いと近ければ、心細げなる御声絶え絶え聞こえて、「いとかたじけなきわざにもはべるかな。この君だにかしこまりも聞こえたまつべきほどならましかば」とのたまふ。あはれに聞きたまひて、「何か、浅う思ひたまへむことゆゑかう好き好ききさまを見えたてまつらむ。いかなる契りにか、見たてまつりそめしよりあはれに思ひきこゆるも、あやしきまでこの世のことにはおぼえはべらぬ」などのたまひて、「かひなき心地のみしはべるを、かのいはけなうものしたまふ御一声いかで」とのたまへば、「いでや、よろづ思し知らぬさまに大殿籠もり入りて」など聞こゆる折しも、あなたより来る音して、「上こそ。この、寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」とのたまふを、人びといとかたはらいたしと思ひて、「あなかま」と聞こゆ。「いさ、見しかば心地のあしきなぐさみき、とのたまひしかばぞかし」と、かしこきこと聞こえたりと思してのたまふ。いとをかしと聞いたまへど、人びとの苦しと思ひたれば聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞こえ置きたまひて帰たまひぬ。げに言ふかひなのけはひや、さりともしとよう教へてむと思す。

またの日も、いとまめやかにとぶらひきこえたまふ。例の小さくて、

いはけなき鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ

同じ人にや。

とことさら幼く書きなしたまへるも、いみじうをかしげなれば、やがて御手本に、と人びと聞こゆ。少納言ぞ聞こえたる。

問はせたまへるは、今日をも過ぐしがたげなるさまにて、山寺にまかりわ

たるほどにて。かう問はせたまへるかしこまりはこの世ならでも聞こえさせむ。

とあり。いとあはれと思す。秋の夕べはまして心のいとまなく、思し乱るる人の御あたりに心をかけて、あながちなる、ゆかりも尋ねまほしき心もまさりたまふなるべし。「消えむ空なき」とありし夕べ思し出でられて、恋しくも、また見ば劣りやせむと、さすがにあやふし。

手に摘みていつしかも見む紫の根にかよひける野辺の若草

十月に朱雀院の行幸あるべし。舞人などやむごとなき家の子ども、上達部、殿上人なども、その方につきづきしきはみな選らせたまへれば、親王達、大臣よりはじめてとりどりの才ども習ひたまふ、いとまなし。山里人にも久しく訪れたまはざりけるを思し出でて、ふりはへ遣はしたりければ、僧都の返り事のみあり。

立ちぬる月の二十日のほどになむつひに空しく見たまへなして、世間の道理なれど、悲しび思ひたまふる。

などあるを見たまふに、世の中のはかなさもあはれに、うしろめたげに思へりし人もいかならむ、幼きほどに恋ひやすらむ、故御息所に後れたてまつりしなど、はかばかしからねど思ひ出でて、浅からずとぶらひたまへり。少納言ゆゑなからず御返りなど聞こえたり。

忌みなど過ぎて京の殿に、など聞きたまへば、ほど経てみづからのどかなる夜おはしたり。いとすごげに荒れたる所の、人少ななるに、いかに幼き人恐ろしからむと見ゆ。例の所に入れたてまつりて、少納言、御ありさまなどうち泣きつつ聞こえ続けるに、あいなう御袖もただならず。「宮に渡したてまつらむとはべるめるを、故姫君のいと情けなく憂きものに思ひきこえたまへりに、いとむげに見ならぬ齡の、まだはかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず、

中空なる御ほどにて、あまたものしたまふなる中の、あなづらはしき人にてや交じりたまはむ、など過ぎたまひぬるも世とともに思し嘆きつること。しるきこと多くはべるに、かくかたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどりきこえさせず、いとうれしう思ひたまへられぬべき折節にはべりながら、すこしもなぞらひなるさまにもものしたまはず、御年よりも若びてならひたまへれば、いとかたはらいたくはべる」と聞こゆ。「何か、かう繰り返し聞こえ知らする心のほどをつつみたまふらむ。その言ふかひなき御心のありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ心ながら思ひ知られける。なほ人づてならで聞こえ知らせばや。

あしわかぬ浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かはめぎましからむ」とのたまへば、「げにこそいとかしこけれ」とて、

「寄る波の心も知らでわかぬ浦に玉藻なびかむほどぞ浮きたる

わりなきこと」と聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆるされたまふ。「なぞ越えざらむ」とうち誦じたまへるを、身にしみて若き人びと思へり。君は上を恋ひきこえたまひて泣き臥したまへるに、御遊びがたきどもの、「直衣着たる人のおはする、宮のおはしますなめり」と聞こゆれば、起き出でたまひて、

「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」とて寄りおはしたる御声、いとらうたし。「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず。こち」とのたまふを、恥づかしかりし人とさすがに聞きなして、あしう言ひてけりと思して、乳母にさし寄りて、「いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、「今さらに、など忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠もれよ。今すこし寄りたまへ」とのたまへば、乳母の、「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」とて押し寄せたてまつりたれば、何心もなくゐたまへるに、手をさし入れて探りたまへれば、なよらかなる御衣に髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探

りつけられたる、いとうつくしう思ひやらる。手をとらへたまへれば、うたて例ならぬ人のかく近づきたまへるは恐ろしうて、「寝なむと言ふものを」とて強ひて引き入りたまふに、つきてすべり入りて、「今はまろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」とのたまふ。乳母、「いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせたまふともさらに何のしるしもはべらじものを」とて苦しげに思ひたれば、「さりともし、かかる御ほどをいかがはあらむ。なほただ世に知らぬ心ざしのほどを見果てたまへ」とのたまふ。霰降り荒れてすごき夜のさまなり。「いかで、かう人少なに心細うて過ぐしたまふらむ」とうち泣いたまひて、いと見棄てがたきほどなれば、「御格子参りね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。人びと近うさぶらはれよかし」とて、いと馴れ顔に御帳のうちに入りたまへば、あやしう思ひのほかにもとあきれて誰も誰もみたり。乳母は、うしろめたなうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつみたり。若君は、いと恐ろしういかならむとわななかれて、いとうつくしき御肌つきもそぞろ寒げに思したるを、らうたくおぼえて、単衣ばかりを押しくくみて、わが御心地もかつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひのいとなつかしきを、幼き心地にもいといたう怖ぢず、さすがにむつかしう寝も入らずおぼえて身じろき臥したまへり。夜一夜、風吹き荒るるに、「げにかうおはせざらましかば、いかに心細からまし。同じくはよろしきほどにおはしまさましかば」とささめきあへり。乳母はうしろめたさにいと近うさぶらふ。風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふもことあり顔なりや。「いとあはれに見たてまつる御ありさまを、今はまして片時の間もおぼつかかなかるべし。明け暮れ眺めはべる所に渡したてまつらむ。かくてのみはいかが。もの怖ぢしたまはざりけり」



とのたまへば、「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど、この御四十九日過ぐしてや、など思うたまふる」と聞こゆれば、「頼もしき筋ながらも、よそよそにてならひたまへるは、同じうこそ疎うおぼえたまはめ。今より見たてまつれど、浅からぬ心ざしはまさりぬべくなむ」とて、かい撫でつつかへりみがちにて出でたまひぬ。

いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸想もをかしかりぬべきに、さうぎうしう思ひおはす。いと忍びて通ひたまふ所の、道なりけるを思し出でて、門うちたたかせたまへど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人して歌はせたまふ。

朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも行き過ぎがたき妹が門かな

と二返りばかり歌ひたるに、よしある下仕ひを出だして、

立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草のとぎしにさはりしもせじ

と言ひかけて入りぬ。また人も出で来ねば、帰るも情けなけれど、明けゆく空もはしたなくて殿へおはしぬ。をかしかりつる人のなごり恋しく、独り笑みしつつ臥したまへり。日高う大殿籠もり起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつすさびるたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。

かしこには今日しも宮わたりたまへり。年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、いとど人少なに久しければ、見わたしたまひて、「かかる所にはいかでかしばしも幼き人の過ぐしたまはむ。なほかしこに渡したてまつりてむ。何の所狭きほどにもあらず。乳母は曹司などしてさぶらひなむ。君は若き人びとあればもろともに遊びていとようものしたまひなむ」などのたまふ。近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香のいみじう艶に染みかへらせたまへれば、をかしの御匂ひや、御衣はいと萎えて、と心苦しげに思

いたり。「年ごろもあつしくさだ過ぎたまへる人に添ひたまへるよ。かしこにわたりて見ならしたまへなどものせしを、あやしう疎みたまひて、人も心置くめりしを、かかる折にしもものしたまはむも心苦しう」などのたまへば、「何かは。心細くとも、しばしはかくておはしましたなむ。すこしものの心し知りなむにわたらせたまはむこそよくははべるべけれ」と聞こゆ。「夜昼恋ひきこえたまふに、はかなきものもきこしめさず」とて、げにいといたう面瘦せたまへれど、いとあてにうつくしくなかなか見えたまふ。「何か、さしも思す。今は世に亡き人の御ことはかひなし。おのれあれば」など語らひきこえたまひて、暮るれば帰らせたまふを、いと心細しと思ひて泣いたまへば、宮うち泣きたまひて、「いとかう思ひな入りたまひそ。今日明日渡したてまつらむ」など、返す返すこしらへおきて出でたまひぬ。なごりも慰めがたう泣きゐたまへり。行く先の身のあらむことなどまでも思し知らず、ただ年ごろ立ち離るる折なうまつはしならひて、今は亡き人となりたまひにけると思すがいみじきに、幼き御心地なれど胸つとふたがりて、例のやうにも遊びたまはず、昼はさても紛らしたまふを、夕暮となればいみじく屈したまへば、かくてはいかでか過ぎしたまはむ、と慰めわびて乳母も泣きあへり。

君の御もとよりは惟光をたてまつれたまへり。「参り来べきを、内より召あればなむ。心苦しう見たてまつりしもしづ心なく」とて宿直人たてまつれたまへり。「あぢきなうもあるかな。戯れにてもものはじめにこの御ことよ。宮聞こし召しつけば、さぶらふ人びとのおろかなるにぞさいなまむ。あなかしこ、もののついでにいはけなくうち出できこえさせたまふな」など言ふも、それをば何とも思したらぬぞあさましきや。少納言は惟光にあはれなる物語どもして、「あり経て後やさるべき御宿世逃れきこえたまはぬやうもあらむ、ただ今はかけてもいと似げなき御ことと見たてまつるを、あやしう思しのたまはするもい

かなる御心にか。思ひ寄るかたなう乱れはべる。今日も宮渡らせたまひて、「うしろやすく仕うまつれ。心幼くもてなしきこゆな」とのたまはせつるも、いとわづらはしう、ただなるよりはかかる御好き事も思ひ出でられはべりつる」など言ひて、この人もことあり顔にや思はむなどあいなければ、いたう嘆かしげにも言ひなさず。大夫もいかなることにかあらむと心得がたう思ふ。参りてありさまなど聞こえければ、あはれに思しやらるれど、さて通ひたまはむもさすがにすすろなる心地して、軽々しうもてひがめたと人もや漏り聞かむ、などつつましかれば、ただ迎へてむと思す。御文はたびたびたてまつれたまふ。暮るれば例の大夫をぞたてまつれたまふ。

障はる事どものありて、え参り来ぬを、おろかにや。

などあり。「宮より、明日にはかに御迎へにとのたまはせたりつれば、心あわたたしくてなむ。年ごろの蓬生を離れなむもさすがに心細く、さぶらふ人びとも思ひ乱れて」と言少なに言ひて、をさをさあへしらず、もの縫ひいとなむけはひなどしるければ、参りぬ。

君は大殿におはしけるに、例の、女君とみにも対面したまはず。ものむつかしくおぼえたまひて、あづまをすががきて、「常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきてすさびるたまへり。参りたれば、召し寄せてありさま問ひたまふ。しかしかなど聞こゆれば、口惜しう思して、かの宮に渡りなばわざと迎へ出でむも好き好きしかるべし、幼き人を盗み出でたりともどきおひなむ、そのさきにしばし人にも口固めて渡してむ、と思して、「暁、かしこにものせむ。車の装束さながら隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。うけたまはりて立ちぬ。

君、いかにせまし、聞こえありて好きがましきやうなるべきこと、人のほだにものを思ひ知り、女の心交はしけることと推し測られぬべくは世の常なり、

父宮の尋ね出でたまへらむもはしたなうすずろなるべきを、と思し乱るれど、さてはづしてむはいと口惜しかべければ、まだ夜深う出でたまふ。女君、例のしづしぶに心もとけずものしたまふ。「かしこにいとせちに見るべきことのはべるを思ひたまへ出でて。立ちかへり参り来なむ」とて出でたまへば、さぶらふ人びとも知らざりけり。わが御方にて、御直衣などはたてまつる。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。門うちたたかせたまへば、心知らぬ者の開けたるに、御車をやら引き入れさせて、大夫妻戸を鳴らしてしはぶけば、少納言聞き知りて出で来たり。「ここにおはします」と言へば、「幼き人は御殿籠もりてなむ。などかいと夜深うは出でさせたまへる」と、ものたよりと思ひて言ふ。「宮へ渡らせたまふべかなるを、そのさきに聞こえ置かむとてなむ」とのたまへば、「何ごとにかはべらむ。いかにはかばかりき御答へ聞こえさせたまはむ」とて、うち笑ひてゐたり。君入りたまへば、いとかたはらいたく、「うちとけて、あやしき古人どものはべるに」と聞こえさす。「まだおどろいたまはじな。いで、御目覚ましきこえむ。かかる朝霧を知らでは寝るものか」とて入りたまへば、「や」ともえ聞こえず。君は何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかしたまふに、おどろきて、宮の御迎へにおはしたると寝おびれて思したり。御髪かき繕ひなどしたまひて、「いざたまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」とのたまふに、あらざりけりとあきれて、恐ろしと思ひたれば、「あな心憂。まろも同じ人ぞ」とてかき抱きて出でたまへば、大輔、少納言など、「こはいかに」と聞こゆ。「ここには、常にもえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心憂く渡りたまへるなれば、まして聞こえがたかべければ。人一人参られよかし」とのたまへば、心あわたたしくて、「今日はいと便なくなむはべるべき。宮の渡らせたまはむにはいかさまにか聞こえやらむ。おのづからほど経てさるべきにおはしまさばともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことに

はべれば、さぶらふ人びと苦しうはべるべし」と聞こゆれば、「よし、後にも人は参りなむ」とて御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまに、と思ひあへり。若君もあやしと思して泣いたまふ。少納言、とどめきこえむかたなければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて自らもよろしき衣着かへて乗りぬ。

二条院は近ければ、まだ明かうもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をばいと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。少納言、「なほいと夢の心地しはべるを、いかにしはべるべきことにか」とやすらへば、「そは心ななり。御自ら渡したてまつりつれば、帰りなむとあらば送りせむかし」とのたまふに、笑ひて下りぬ。にはかに、あさましう、胸も静かならず。

宮の思しのたまはむこと、いかになり果てたまふべき御ありさまにか、とてもかくても頼もしき人びとに後れたまへるがいみじさ、と思ふに涙の止まらぬを、さすがにゆゆしければ念じりたり。こなたは住みたまはぬ対なれば、御帳などもなかりけり。惟光召して、御帳、御屏風などあたりあたり仕立てさせたまふ。御几帳の帷子引き下ろし、御座などただひき繕ふばかりにてあれば、東の対に御宿直物召しに遣はして、大殿籠もりぬ。若君は、いとむくつけく、いかにすることならむ、とふるはれたまへど、さすがに声立ててもえ泣きたまはず。

「少納言がもとに寝む」とのたまふ声いと若し。「今はさは大殿籠もるまじきぞよ」と教へきこえたまへば、いとわびしくて泣き臥したまへり。乳母はうちも臥されず、ものもおぼえず起きるたり。明けゆくままに見わたせば、御殿の造りざま、しつらひざまさらにも言はず、庭の砂子も玉を重ねたらむやうに見えて、かかやく心地するに、はしたなく思ひるたれど、こなたには女などもさぶらはざりけり、け疎き客人などの参る折節の方なりければ、男どもぞ御簾の外にありける、かく人迎へたまへりと聞く人、「誰れならむ。おぼろけにはあらじ」ときさめく。御手水、御粥などこなたに参る。日高う寝起きたまひて、

「人なくてあしかめるを、さるべき人びと、夕づけてこそは迎へさせたまはめ」とのたまひて、対に童女召しにつかはす。「小さき限り、ことさらに参れ」とありければ、いとをかしげにて四人参りたり。君は御衣にまとはれて臥したまへるを、せめて起こして、「かう心憂くなおはせそ。すずろなる人はかうはありなむや。女は心柔らかなるなむよき」など今より教へきこえたまふ。御かたちはさし離れて見しよりも清らにて、なつかしううち語らひつつ、をかしき絵、遊びものども取りに遣はして見せたてまつり、御心につくことどもをしたまふ。やうやう起きゐて見たまふに、鈍色のこまやかなるがうち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐたまへるがいつくしきに、我もうち笑まれて見たまふ。東の対に渡りたまへるに、立ち出でて、庭の木立、池の方など覗きたまへば、霜枯れの前栽、絵にかけるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、げにをかしき所かなと思す。御屏風どもなどいとをかしき絵を見つつ慰めておはするもはかなしや。

君は二三日内へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にと思すにや、手習、絵などさまさまに書きつつ見せたてまつりたまふ。いみじうをかしげに書き集めたまへり。「武蔵野と言へばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨つきのいとことなるを取りて見るたまへり。すこし小さくて、

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露分けわぶる草のゆかりを

とあり。「いで君も書いたまへ」とあれば、「まだようは書かず」とて見上げたまへるが何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、「よからねどむげに書かぬこそわろけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるもらうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへ

ば、

かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらむ

と、いと若けれど生ひ先見えてふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。今めかしき手本習はばいとよう書いたまひてむ、と見たまふ。雛などわざと屋ども作り続けて、もろともに遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。

かのとまりにし人びと、宮渡りたまひて尋ねきこえたまひけるに、聞こえやる方なくてぞわびあへりける。「しばし人に知らせじ」と君ものたまひ、少納言も思ふことなれば、せちに口固めやりたり。ただ、「行方も知らず、少納言が率て隠しきこえたる」とのみ聞こえさするに、宮も言ふかひなう思して、故尼君もかしこに渡りたまはむことをいともものしと思したりしことなれば、乳母のいとさし過ぐしたる心ばせのあまり、おいらかに渡さむを便なしなどは言はで、心にまかせ率てはふらかしつるなめり、と泣く泣く帰りたまひぬ。「もし聞き出でたてまつらば告げよ」とのたまふもわづらはしく、僧都の御もとも尋ねきこえたまへど、あとはかなくて、あたらしかりし御かたちなど恋しく悲しと思す。北の方も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心も失せて、わが心にまかせつべう思しけるに、違ひぬるは口惜しう思しけり。

やうやう人参り集りぬ。御遊びがたきの童女、児ども、いとめづらかに今めかしき御ありさまどもなれば、思ふことなく遊びあへり。君は、男君のおはせずなどしてさうざうしき夕暮などばかりぞ尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず。もとより見ならひきこえたまはでならひたまへれば、今はただこの後の親をいみじう睦びまつはしきこえたまふ。ものよりおはすればまづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りみて、いささか疎く恥づかしとも思ひたらず。さるかたにいみ

じうらうたきわざなりけり。さかしら心あり、何くれとむつかしき筋になりぬれば、わが心地もすこし違ふふしも出で来やと心おかれ、人も恨みがちに、思ひのほかのことおのづから出で来るを、いとをかしきもてあそびなり。むすめなどはた、かばかりになれば、心やすくうちふるまひ、隔てなきさまに臥し起きなどはえしもすまじきを、これはいとさまかはりたるかしづきぐさなり、と思ほいためり。



紅  
葉  
賀

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならずおもしろかるべきた  
びのことなりければ、御方々物見たまはぬことを口惜しがりたまふ。上も、藤  
壺の見たまはざらむを飽かず思さるれば、試楽を御前にてせさせたまふ。源氏  
中将は青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将、かたち用意、人に  
はことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入り方の日か  
げさやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足  
踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや仏の御迦  
陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝涙を拭ひたまひ、上  
達部、親王たちもみな泣きたまひぬ。詠はてて袖うちなほしたまへるに、待ち  
とりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたま  
ふ。春宮の女御、かくめでたきにつけてもただならず思して、「神など空にめ  
でつべきかたちかな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂し  
と耳とどめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見  
えましと思すに、夢の心地なむしたまひける。宮は、やがて御宿直なりけり。  
「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」と聞こえた  
まへば、あいなう御いらへ聞こえにくくて、「殊にはべりつ」とばかり聞こえ  
たまふ。「片手もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま手づかひなむ家の子  
は殊なる。この世に名を得たる舞の男どもも、げにいとかしこけれど、ここし  
うなまめいたる筋をえなむ見せぬ。試みの日かく尽くしつれば、紅葉の蔭やさ  
うざうしくと思へど、見せたてまつらむの心にて、用意せさせつる」など聞こ  
えたまふ。

つとめて、中将君、

いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや

あなかしこ。

とある御返り、目もあやなりし御さまかたち、見たまひ忍ばれずやありけむ、唐人の袖振ることは遠けれど立ち居につけてあはれとは見き

大方には。

とあるを、限りなうめづらしう、かやうの方さへたどしからず、ひとのみかどまで思ほしやれる、御后言葉のかねても、とほほ笑まれて、持経のやうにひき広げて見られたまへり。

行幸には、親王たちなど世に残る人なく仕うまつりたまへり。春宮もおはします。例の、楽の舟ども漕ぎめぐりて、唐土、高麗と尽くしたる舞ども、種多かり。楽の声、鼓の音、世を響かす。一日の源氏の御夕影ゆゆしう思されて、御誦経など所々にせさせたまふを、聞く人もことわりとあはれがり聞こゆるに、春宮の女御は、あながちなりと、憎みきこえたまふ。垣代など、殿上人、地下も、心殊なりと世人に思はれたる有職の限りとのへさせたまへり。宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の楽のこと行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつつ、おのおの籠りゐてなむ習ひける。木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かぎしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて左大将さし替へたまふ。日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々移ろひ、えならぬをかぎして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえずもの見知るまじき下人などの、木のもと、岩隠れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落としけり。承香殿の御腹の四の御子、まだ童に

て、秋風楽舞ひたまへるなむ、さしつぎの見物なりける。これらにおもしろさの尽きにければ、こと事に目も移らず、かへりてはことざましにやありけむ。その夜、源氏中将、正三位したまふ。頭中将、正下の加階したまふ。上達部は、みなさるべき限りよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目をもおどろかし、心をもよろこばせたまふ、昔の世ゆかしげなり。

宮は、そのころまかでたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひありきたまふをことにて、大殿には騒がれたまふ。いとどかの若草たづね取りたまひてしを、「二条院には人迎へたまふなり」と人の聞こえければ、いと心づきなしと思ひたり。うちうちのありさまは知りたまはず、さも思さむはことわりなれど、心うつくしく例の人のやうに怨みのたまはば、我もうらなくうち語りて慰めきこえてむものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきさびごととも出で来るぞかし、人の御ありさまの、かたほにそのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも知りたまはぬほどこそあらめ、つひには思し直されなむ、とおだしく軽々しからぬ御心のほども、おのづからと頼まるる方はことなりけり。

幼き人は、見ついたまふままに、いとよき心ざまかたちにて、何心もなくむつれまとはしきこえたまふ。しばし殿の内の人にも誰れと知らせじと思して、なほ離れたる対に御しつらひ二なくして、我も明け暮れ入りおはして、よろづの御ことどもを教へきこえたまひ、手本書きて習はせなどしつつ、ただほかなりける御むすめを迎へたまへらむやうにぞ思したる。政所、家司などをはじめ、ことに分かちて心もとなからず仕うまつらせたまふ。惟光よりほかの人は、おぼつかなくのみ思ひきこえたり。かの父宮もえ知りきこえたまはざりけり。

姫君は、なほ時々思ひ出できこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふ折多か

り。君のおはするほどは紛らはしたまふを、夜などは、時々こそ泊まりたまへ、ここかしこの御いとまなくて、暮るれば出でたまふを、慕ひきこえたまふ折などあるを、いとらうたく思ひきこえたまへり。二三日内にさぶらひ大殿にもおはする折は、いといたく屈しなどしたまへば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩きも静心なくおぼえたまふ。僧都は、かくなむと聞きたまひて、あやしきものからうれしとなむ思ほしける。かの御法事などしたまふにも、いかめしうとぶらひきこえたまへり。

藤壺のまかでたまへる三条の宮に、御ありさまもゆかしうて参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人びと対面したり。けぎやかにもてなしたまふかなとやすからず思へど、しづめて、大方の御物語聞こえたまふほどに、兵部卿宮参りたまへり。この君おはすと聞きたまひて対面したまへり。いとよしあるさまして、色めかしうなよびたまへるを、女にて見むはをかしかりぬべく、人知れず見たてまつりたまふにも、かたがたむつましくおぼえたまひて、こまやかに御物語など聞こえたまふ。宮も、この御さまの常よりことになつかしううちとけたまへるを、いとめでたしと見たてまつりたまひて、婿になどは思し寄らで、女にて見ばやと色めきたる御心には思ほす。暮れぬれば御簾の内に入りたまふを、うらやましく、昔は上の御もてなしに、いとけ近く、人づてならでものを聞こえたまひしを、こよなう疎みたまへるも、つらうおぼゆるぞわりなきや。「しばしばもさぶらふべけれど、事ぞとはべらぬほどは、おのづからおこたりはべるを、さるべきことなどは、仰せ言もはべらむこそ、うれしく」など、すすすくしうて出でたまひぬ。命婦もたばかりきこえむかたなく、宮の御けしきも、ありしよりはいとど憂きふしに思おきて、心とけぬ御けしきも恥づかしくいとほしければ、何のしるしもなく過ぎてゆく。はかなの契りやと思し乱ること、かたみに尽きせず。

少納言は、おぼえずをかしき世を見るかな、これも故尼上の、この御ことを思して、御行ひにも祈りきこえたまひし仏の御しるしにや、とおぼゆ。大殿いとやむごとなくておはします、ここかしこあまたかかづらひたまふをぞ、まことに大人びたまはむほどは、むつかしきこともや、とおぼえける。されど、かくとりわきたまへる御おぼえのほどは、いと頼もしげなりかし。御服、母方は三月こそはとて、つごもりには脱がせたてまつりたまふを、また親もなくて生ひ出でたまひしかば、まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地の限り織れる御小桂などを着たまへるさま、いみじう今めかしくをかしげなり。男君は、朝拝に参りたまふとて、さしのぞきたまへり。「今日よりは、大人しくなりたまへりや」とてうち笑みたまへる、いとめでたう愛敬づきたまへり。いつしか雛をし据ゑて、そそきゐたまへる、三尺の御厨子一よろひに、品々しつらひ据ゑて、また小さき屋ども作り集めてたてまつりたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。「雛やらふとて、いぬきがこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。「げに、いと心なき人のしわざにもはべるなるかな。今つくろはせはべらむ。今日は言忌みして、な泣いたまひそ」とて出でたまふけしきところせきを、人びと端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛のなかの源氏の君つくろひ立てて、内に参らせなどしたまふ。「今年だにすこし大人びさせたまへ。十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを。かく御をとこなどまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてまつらせたまはめ。御髪参るほどをだに、もの憂くせさせたまふ」など、少納言聞こゆ。御遊びにのみ心入れたまへれば、恥づかしと思はせたてまつらむとて言へば、心のうちに、我はさはをとこまうけてけり、この人びとのをとことてあるは、醜くこそあれ、我はかく、をかしげに若き人をも持たりけるかな、と今ぞ思ほし知りける。さ

はいへど、御年の数添ふしるしなめりかし。かく幼き御けはひの、ことに触れてしるければ、殿のうちの人びともあやしと思ひけれど、いとかう世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。

内より大殿にまかでたまへれば、例のうるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御けしきもなく苦しければ、「今年よりだに、すこし世づきて改めたまふ御心見えば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人据ゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとなく思し定めたることにこそはと心のみ置かれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひには、えしも心強からず、御いらへなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。四年ばかりがこのかみにおはすれば、うち過ぐし恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。何ごとははこの人の飽かぬところはものしたまふ、我が心のあまりけしからぬすさびに、かく怨みられたてまつるぞかし、と思し知らる。同じ大臣と聞こゆるなかにも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹に一人いつきかしづきたまふ御心おごりいとこよなくて、すこしもおろかなるをばめざましと思ひきこえたまへるを、男君は、などかいときしもと、ならはいたまふ、御心の隔てもなるべし。大臣も、かく頼もしげなき御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れてかしづきいとなみきこえたまふ。つとめて、出でたまふところにさしのぞきたまひて、御装束したまふに、名高き御帶、御手づから持たせてわたりたまひて、御衣のうしろひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。「これは、内宴などいふこともはべるなるを、さやうの折にこそ」など聞こえたまへば、「それはまさされるもはべり。これはただ目馴れぬさまなればなむ」とて、しひてささせたてまつりたまふ。げに、よろづにかしづき立てて見たてまつりたまふに、生けるかひあり、

たまさかにも、かからむ人を出だし入れて見むにますことあらじ、と見えたまふ。参座しにとても、あまた所も歩きたまはず、内、春宮、一院ばかり、さては藤壺の三条の宮にぞ参りたまへる。「今日はまたことにも見えたまふかな。ねびたまふままに、ゆゆしきまでなりまさりたまふ御ありさまかな」と人びとめできこゆるを、宮、几帳の隙よりほの見たまふにつけても、思ほすことしげかりけり。

この御ことの、師走も過ぎにしが心もとなきに、この月はさりともと宮人も待ちきこえ、内にもさる御心まうけどもあり、つれなくて立ちぬ。御もののにやと世人も聞こえ騒ぐを、宮、いとわびしう、このことにより身のいたづらになりぬべきこと、と思し嘆くに、御心地もいと苦しくて悩みたまふ。中将君は、いとど思ひあはせて、御修法など、さとはなくて所々にせさせたまふ。世の中の定めなきにつけても、かくはかなくてや止みなむと、取り集めて嘆きたまふに、二月十余日のほどに、男御子生まれたまひぬれば、名残なく内にも宮人も喜びきこえたまふ。命長くもと思ほすは心憂けれど、弘徽殿などのうけはしげにのたまふと聞きしを、むなく聞きなしたまはましかば人笑はれにやと思し強りてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。上のいつしかとゆかしげに思し召したること限りなし。かの人知れぬ御心にも、いみじう心もとなくて、人まに参りたまひて、「上のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてまつりて詳しく奏しはべらむ」と聞こえたまへど、「むつかしげなるほどなれば」とて、見せたてまつりたまはぬもことわりなり。さるは、いとあさましうめづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひとがめじや、さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか、と思しつづくるに、身のみぞいと心憂



き。命婦の君にたまさかに逢ひたまひて、いみじき言どもを尽くしたまへど、何のかひあるべきにもあらず。若宮の御ことを、わりなくおぼつかながりきこえたまへば、「など、かうしもあながちにのたまはすらむ。今おのづから見たてまつらせたまひてむ」と聞こえながら、思へるけしきかたみにただならず。かたはらいたきことなれば、まほにもえのたまはで、「いかならむ世に人づてならで聞こえさせむ」とて、泣いたまふさまぞ心苦しき。

「いかさまに昔結べる契りにてこの世にかかるなかの隔てぞ

かかることこそ心得がたけれ」とのたまふ。命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに、えはしたなうもさし放ちきこえず。

「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人のまどふてふ闇

あはれに、心ゆるびなき御ことどもかな」と忍びて聞こえけり。かくのみ言ひやる方なくて帰りたまふものから、人のもの言ひもわづらはしきを、わりなきことにのたまはせ思して、命婦をも、昔おぼいたりしやうにも、うちとけむつびたまはず。人目立つまじくなだらかにもてなしたまふものから、心づきなしと思す時もあるべきを、いとわびしく思ひのほかなる心地すべし。

四月に内へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起き返りなどしたまふ。あさましきまでまぎれどころなき御顔つきを、思し寄らぬことにしあれば、またならびなきどちは、げにかよひたまへるにこそはと思ほしけり。いみじう思ほしかしづくこと限りなし。源氏の君を限りなきものに思し召しながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、飽かず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさまかたち、ねびもておはするを御覧ずるままに、心苦しく思し召すを、かうやむごとなき御腹に同じ光にてさし出でたまへれば、疵なき玉と思しかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸のひまなくやすからずものを思ほす。例の、中将の

君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、「御子たちあまたあれど、そこをのみなむかかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。中将の君、面の色変はる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがた移ろふ心地して、涙落ちぬべし。もの語りなどしてうち笑みたまへるがいとゆゆしうつくしきに、わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふぞ、あながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなる心地の乱るやうなれば、まかでたまひぬ。

わが御かたに臥したまひて、胸のやるかたなきほど過ぐして、大殿へと思す。御前の前裁の何となく青みわたれるなかに、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまさる撫子の花

花に咲かなむと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ。

とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覽ぜさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

袖濡るる露のゆかりと思ふにもなほ疎まれぬ大和撫子

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、よろこびながらたてまつれる、例のことなれば、しるしあらじかしくづぼれて眺め臥したまへるに、胸うち騒ぎて、いみじくうれしきにも涙落ちぬ。

つくづくと臥したるにも、やるかたなき心地すれば、例の、慰めには西の対にぞ渡りたまふ。しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき、あざれたる桂姿に

て、笛をなつかしう吹きすさびつつ、のぞきたまへれば、女君、ありつる花の露に濡れたる心地して添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼるるやうにて、おはしながらとくも渡りたまはぬ、なまうらめしかりければ、例ならず背きたまへるなるべし、端の方について、「こちや」とのたまへどおどろかず、「入りぬる磯の」と口ずさみて、口おほひしたまへるさま、いみじうされてうつくし。「あな憎。かかること口馴れたまひにけりな。みるめに飽くはまさなきことぞよ」とて、人召して御琴取り寄せて弾かせたてまつりたまふ。「箏の琴は、中の細緒の堪へがたきこそとせけれ」とて、平調におしくだして調べたまふ。かき合はせばかり弾きて、さしやりたまへれば、え怨じ果てず、いとうつくしう弾きたまふ。小さき御ほどに、さしやりてゆしたまふ御手つきいとうつくしければ、らうたしと思して、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ。いとさとくて、かたき調子どもを、ただひとわたりに習ひとりたまふ。大方らうらうじうをかき御心ばへを、思ひしことかなふと思す。保曾呂惧世利といふものは、名は憎けれど、おもしろう吹きすさびたまへるに、かき合はせまだ若けれど、拍子違はず上手めきたり。大殿油参りて、絵などもなど御覧ずるに、出でたまふべしとありつれば、人びと声づくりきこえて、「雨降りはべりぬべし」など言ふに、姫君、例の、心細くて屈したまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば、いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかかりたるをかき撫でて、「他なるほどは恋しくやある」とのたまへば、うなづきたまふ。「我も、一日も見たてまつらぬはいと苦しうこそあれど、幼くおはするほどは心やすく思ひきこえて、まづくねくねしく怨むる人の心破らじと思ひて、むつかしければ、しばしかくもありくぞ。おとなしく見なしては他へもさらに行くまじ。人の怨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えたてまつらむと思ふぞ」など、こまごまと語らひきこえたまへば、さすがに恥

づかしうてともかくもいらへきこえたまはず。やがて御膝に寄りかかりて寝入りたまひぬれば、いと心苦しうて、「今宵は出でずなりぬ」とのたまへば、みな立ちて、御膳などこなたに参らせたり。姫君起こしたてまつりたまひて、「出でずなりぬ」と聞こえたまへば、慰みて起きたまへり。もろともものなご参る。いとはかなげにすさびて、「さらば寝たまひねかし」と危ふげに思ひたまへれば、かかるを見捨てては、いみじき道なりとも、おもむきがたくおぼえたまふ。

かやうにとどめられたまふ折々なども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿に聞こえければ、「誰れならむ。いとめざましきことにもあるかな。今までその人とも聞こえず、さやうにまつはしたはぶれなどすらむは、あてやかに心にくき人にはあらじ。内わたりなどにはかなく見たまひけむ人をものめかしたまひて、人やとがめむと隠したまふななり。心なげにいはけて聞こゆるは」など、さぶらふ人びとも聞こえあへり。内にも、かかる人ありと聞こし召して、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、などか情けなくはもてなすなるらむ」とのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思し召す。「さるは、好き好きしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人びとなど、なべてならずなども見え聞こえざめるを、いかなるものくまに隠れありきて、かく人にも怨みらるらむ」とのたまはず。

帝の御年ねびさせたまひぬれど、かうやうの方、え過ぐさせたまはず、采女、女蔵人などをも、かたち心あるをば、ことにもてはやし思し召したれば、よしある宮仕へ人多かるころなり。はかなきことをも言ひ触れたまふには、もて離るることもありがたきに、目馴るるにやあらむ、げにぞあやしう好いたまはざ

めると、試みに戯れ事を聞こえかかりなどする折あれど、情けなからぬほどにうちいらへて、まことには乱れたまはぬを、まめやかにさうぎうしと思ひきこゆる人もあり。年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせあり、あてにおぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ぎまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまで、などさしも乱るらむと、いぶかしくおぼえたまひければ、戯れ事言ひ触れて試みたまふに、似げなくも思はざりける。あさましと思しながら、さすがにかかるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむも古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女はいとつらしと思へり。上の御梳櫛にさぶらひけるを、果てにければ、上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍、常よりもきよげに様体頭つきなまめきて、装束ありさまいとはなやかに好ましげに見ゆるを、さも古りがたうもと心づきなく見たまふものから、いかが思ふらむとさすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはぼりのえならずゑがきたるをさし隠して見返りたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、わが持たまへるにさしかへて見たまへば、赤き紙の、うつるばかり色深きに、木高き森のかたを塗り隠したり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず、「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、ことしもあれ、うたての心ばへや、と笑まれながら、「森こそ夏の、と見ゆめる」とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけむと苦しきを、女はさも思ひたらず、

君し来ば手なれの駒に刈り飼はむ盛り過ぎたる下葉なりとも  
 と言ふさま、こよなく色めきたり。

「笹分けば人やとがめむいつとなく駒なつくめる森の木隠れ

わづらはしきに」とて、立ちたまふをひかへて、「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる身の恥になむ」とて泣くさま、いといみじ。「いま聞こえむ。思ひながらぞや」とて、引き放ちて出でたまふを、せめておよびて、「橋柱」と怨みかくるを、上は御桂果てて、御障子より覗かせたまひけり。似つかはしからぬあはひかなと、いとをかしう思されて、「好き心なしと、常にもて悩むめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」とて笑はせたまへば、内侍はなままばゆけれど、憎からぬ人ゆゑは、濡れ衣をだに着まほしがるとぐひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。人びとも、思ひのほかなることかなと扱ふめるを、頭中将聞きつけて、至らぬ隈なき心にて、まだ思ひ寄らざりけるよと思ふに、尽きせぬ好み心も見まほしうなりにければ、語らひつきにけり。

この君も人よりはいとことなるを、かのつれなき人の御慰めにと思ひつれど、見まほしきは限りありけるをとや。うたての好みや。いたう忍ぶれば、源氏の君はえ知りたまはず。見つけこえてはまづ怨みきこゆるを、齢のほどいとほしければ慰めむと思せど、かなはぬもの憂さにいと久しくなりにけるを、夕立して、名残涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみありきたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きむたり。御前などにても、男方の御遊びに交じりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、もの恨めしうおぼえける折から、いとあはれに聞こゆ。「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうて歌ふぞ、すこし心づきなき。鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむと、耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、いといたう思ひ乱れたるけはひなり。君、東屋を忍びやかに歌ひて寄りたまへるに、「押し開いて来ませ」とうち添へたるも、例に違ひたる心地ぞする。

立ち濡るる人しもあらし東屋にうたてもかかる雨そそきかな

とうち嘆くを、我ひとりしも聞き負ふまじけれど、うとましや、何ごとをかくまでは、とおぼゆ。

人妻はあなわづらはし東屋の真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ

とてうち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひ返して、人に従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。頭中将は、この君の、いたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふがねたきを、つれなくてうちうち忍びたまふかたが多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これを見つけたる心地、いとうれし。かかる折に、すこしおどしきこえて、御心まどはして、「懲りぬや」と言はむと思ひて、たゆめきこゆ。風ひややかにうち吹きて、やや更けゆくほどに、すこしまどろむにやと見ゆるけしきなれば、やをら入り来るに、君はとけてしも寝たまはぬ心なれば、ふと聞きつけて、この中将とは思ひ寄らず、なほ忘れがたくすなる修理の大夫にこそあらめと思すに、おとなおとなしき人に、かく似げなきふるまひをして、見つけられむことは恥づかしければ、「あなわづらはし。出でなむよ。蜘蛛のふるまひはしるかりつらむものを。心憂くすかしたまひけるよ」とて、直衣ばかりを取りて、屏風のうしろに入りたまひぬ。中将、をかしきを念じて、引きたてまつる屏風のもとに寄りて、ごほごほと畳み寄せて、おどろおどろしく騒がすに、内侍はねびたれど、いたくよしばみなよびたる人の、先々もかやうにて心動かす折々ありければ、ならひて、いみじく心あわたたしきにも、この君をいかにしきこえぬるか、わびしきに、ふるふるふ、つとひかへたり。誰れと知られで出でなばやと思せど、しどけなき姿にて、冠などうちゆがめて走らむうしろで思ふに、いとをこなるべしと思しやすらふ。中将、いかで我と知られきこえじと思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れるけしきにもてなして、太刀を引き抜けば、女、「あが君、あが君」と向ひて手をするに、ほと

ほと笑ひぬべし。好ましう若やぎてもてなしたるうはべこそきてもありけれ、五十七八の人の、うちとけてもの言ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御なかにももの怖ぢしたる、いとつきなし。かうあらぬさまにもてひがめて、恐ろしげなるけしきを見すれど、なかなかしるく見つけたまひて、我と知りてことさらにするなりけりとをこになりぬ。その人なめりと見たまふに、いとをかしかれば、太刀抜きたるかひなをとらへて、いといたうつみたまへれば、ねたきものから、え堪へで笑ひぬ。「まことはうつし心かとよ。戯れにくしや。いでこの直衣着む」とのたまへど、つととらへてさらに許しきこえず。「さらばもろともにこそ」とて、中将の帯をひき解きて、脱がせたまへば、脱がじとすまふを、とかくひきしろふほどに、ほころびはほろほろと絶えぬ。中将、

「つつむめる名や漏り出でむ引きかはしかくほころぶる中の衣に上に取り着ば、しるからむ」と言ふ。君、

隠れなきものと知る知る夏衣着たるを薄き心とぞ見る

と言ひかはして、うらやみなきしどけな姿に引きなされて、みな出でたまひぬ。君は、いと口惜しく見つけられぬることと思ひ臥したまへり。内侍は、あさましくおぼえければ、落ちとまれる御指貫、帯など、つとめてたてまつれり。

恨みてもいふかひぞなきたちかさね引きてかへりし波のなごりに

底もあらはに。

とあり。面なのさまやと見たまふも憎けれど、わりなしと思へりしもさすがにて、

荒らだちし波に心は騒がねど寄せけむ磯をいかが恨みぬ

とのみなむありける。帯は、中将のなりけり。わが御直衣よりは色深しと見たまふに、端袖もなかりけり。あやしのことどもや、おり立ちて乱るる人は、むべをこがましきことは多からむ、といとど御心をさめられたまふ。中将、宿直



所より、「これまづ綴ぢつけさせたまへ」とて、おし包みておこせたるを、いかで取りつらむと心やまし。この帯を得ざらましかばと思す。その色の紙に包みて、

なか絶えばかことや負ふと危ふさにはなだの帯を取りてだに見ずとてやりたまふ。立ち返り、

君にかく引き取られぬる帯なればかくて絶えぬるなとかこたむ

え逃れさせたまはじ。

とあり。日たけて、おのおの殿上に参りたまへり。いと静かに、もの遠きさましておはするに、頭の君もいとをかしけれど、公事多く奏しくだす日にて、いとうるはしくすくよかなるを見るも、かたみにほほ笑まる。人まにさし寄りて「もの隠しは懲りぬらむかし」とて、いとねたげなるしり目なり。「などてかさしもあらむ。立ちながら帰りけむ人こそいとほしけれ。まことは、憂しや世の中よ」と言ひあはせて、「鳥籠の山なる」と、かたみに口がたむ。

さてそののち、ともすればことのついでごとに言ひ迎ふるくさはひなるを、いとどものむつかしき人ゆゑと、思し知るべし。女は、なほいと艶に怨みかくるを、わびしと思ひありきたまふ。中將は、妹の君にも聞こえ出でず、たださるべき折のおどしぐさにせむとぞ思ひける。やむごとなき御腹々の親王たちだに、上の御もてなしのこよなきにわづらはしがりて、いとことにさりきこえたまへるを、この中將は、さらにおし消たれきこえじと、はかなきことにつけても思ひいどみきこえたまふ。この君一人ぞ姫君の御一つ腹なりける。帝の御子といふばかりにこそあれ、我も、同じ大臣と聞こゆれど、御おぼえことなるが、御子腹にて、またなくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際とおぼえたまはぬなるべし。人がらもあるべき限りとのひて、何ごともあらまほしく、たらひてぞものしたまひける。この御仲どもの挑みこそあやしかりしか。されどう

るさくてなむ。

七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりみさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方の、みな親王たちにて、源氏の公事しりたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。されど、「春宮の御世、いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」とぞ聞こえさせたまひける。げに、春宮の御母にて二十余年になりたまへる女御をおきたてまつりては、引き越したてまつりたまひがたきことなりかしと、例のやすからず世人も聞こえけり。参りたまふ夜の御供に、宰相の君も仕うまつりたまふ。同じ宮と聞こゆるなかにも、后腹の御子、玉光りかかやきて、たぐひなき御おぼえにさへものしたまへば、人もいとことに思ひかしづききこえたり。ましてわりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いとど及びなき心地したまふに、すずろはしきまでなむ。

尽きもせぬ心の闇に暮るるかな雲居に人を見るにつけても  
とのみ独りごたれつつ、ものいとあはれなり。

御子はおよすけたまふ月日に従ひて、いと見たてまつり分きがたげなるを、  
宮いと苦しと思せど、思ひ寄る人なきなめりかし。げにいかさまに作り変へて  
かは、劣らぬ御ありさまは世に出でものしたまはまし。月日の光の空に通ひた  
るやうにぞ世人も思へる。

花

宴

如月の二十日あまり、南殿の桜の宴させたまふ。后、春宮の御局、左右にして、参う上りたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしごとによすからず思せど、物見にはえ過ぐしたまはで参りたまふ。

日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も心地よげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のは、みな探韻賜はりて文つくりたまふ。宰相中将、「春といふ文字賜はれり」とのたまふ声さへ、例の、人に異なり。次に頭中将、人の目移しもただならずおぼゆべかめれど、いとめやすくもてしづめて、声づかひなどものものしくすぐれたり。さての人びとは、みな臆しがちに鼻白める多かり。地下の人はまして、帝、春宮の御才かしくすぐれておはします、かかる方にやむごとなき人多くものしたまふころなるに、恥づかしく、はるばると曇りなき庭に立ち出づるほどはしたなくて、やすきことなれど苦しげなり。年老いたる博士どもの、なりあやしくやつれて、例馴れたるもあはれに、さまざま御覧ずるなむをかしかりける。

楽どもなどは、さらにもいはずととのへさせたまへり。やうやう入り日になるほど、春の鶯囀るといふ舞いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折思し出でられて、春宮、かざし賜はせて、せちに責めのたまはするに逃がれがたくて、立ちて、のどかに袖返すところを一折れ、けしきばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、恨めしさも忘れて涙落したまふ。「頭中将、いづら。遅し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今すこし過ぐして、かかることもやと心づかひやしけむ、いとおもしろければ、御衣賜はりて、いとめづらしきことに人思へり。上達部みな乱れて舞ひたまへど、夜に入りては、ことにけぢめも見えず。文など講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえ読みやらず、句ごとに誦じののしる。博士どもの心にもいみじう思へり。

かうやうの折にも、まづこの君を光にしたまへれば、帝もいかでかおろかに

思されむ、中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思し返されける。

おほかたに花の姿を見ましかばつゆも心のおかれまじやは

御心のうちなりけむこと、いかで漏りにけむ。

夜いたう更けてなむ事果てける。上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君、酔ひ心地に見過ぐしがたくおぼえたまひければ、上の人びともうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。女御は上の御局にやがて参う上りたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の柩戸も開きて人音もせず。かやうにて世の中のあやまちはするぞかしと思ひて、やをら上りて覗きたまふ。人はみな寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、「あなむくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、「何か、疎ましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱き下ろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく、「ここに、人」とのたまへど、「まろはみな人に許されたれば、召し寄せたりとも、なんでふことかあらむ。ただ忍びてこそ」とのたまふ声に、この君なりけり、と聞き定めて、いささか慰めけり。わびしと思へるものから、情けなくこはごはしうは見えじと思へり。酔ひ心地や例ならざりけむ、許さむことは口惜しきに、女も若うたをや

ぎて、強き心も知らぬなるべし、らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女はまして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。「なほ名のりしたまへ。いかでか聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりとも思されじ」とのたまへば、

憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ  
 と言ふさま、艶になまめきたり。「ことわりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、

「いづれぞと露のやどりを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け  
 わづらはしく思すことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」とも  
 言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきどもしげくまよへば、  
 いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取り換へて出でたまひぬ。桐壺には人び  
 と多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかるを、「さもたゆみなき御忍  
 びありきかな」とつきしろひつつ、そら寝をぞしあへる。入りたまひて臥した  
 まへれど、寝入られず。をかしかりつる人のさまかな、女御の御おとうとたち  
 にこそはあらめ、まだ世に馴れぬは五、六の君ならむかし、帥宮の北の方、頭  
 中将のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか、なかなかそれならましかば、  
 今すこしをかしからまし、六は春宮にたてまつらむところざしたまへるを、  
 いとほしうもあるべいかな、わづらはしう、尋ねむほどもまぎらはし、さて絶  
 えなむとは思はぬけしきなりつるを、いかなれば言通はすべきさまを教へずな  
 りぬらむ、などよろづに思ふも、心のとまるなるべし。かうやうなるにつけて  
 も、まづ、かのわたりのありさまのこよなう奥まりたるはや、とありがたう思  
 ひ比べられたまふ。

その日は後宴のことありて、まぎれ暮らしたまひつ。箏の琴仕うまつりたま  
 ふ。昨日のことよりも、なまめかしうおもしろし。藤壺は、暁に参う上りたま

ひにけり。かの有明、出でやしぬらむと心もそらにて、思ひ至らぬ隈なき良清、惟光をつけてうかがはせたまひければ、御前よりまかでたまひけるほどに、

「ただ今北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。

御方々の里人はべりつるなかに、四位の少将、右中弁など、急ぎ出でて送りしはべりつるや、弘徽殿の御あかれならむと見たまへつる。けしうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」と聞こゆるにも、胸うちつぶれたまふ。いかにしていづれと知らむ、父大臣など聞きて、ことごとしうもてなさむもいかにぞや、まだ人のありさまよく見さだめぬほどはわづらはしかるべし、さりとして知らであらむ、はたいと口惜しかるべければ、いかにせまし、と思しわづらひて、つくづくとながめ臥したまへり。姫君いかにつれづれならむ、日ごろになれば屈してやあらむ、とらうたく思しやる。かのしるしの扇は桜襲ねにて、濃きかたにかすめる月を描きて、水にうつしたる心ばへ、目馴れたれど、ゆゑなつかしうもてならしたり。「草の原をば」と言ひしさまのみ心にかかりたまへば、

世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて

と書きつけたまひて、置きたまへり。

大殿にも久しうなりにけると思せど、若君も心苦しければ、こしらへむと思して二条院へおはしぬ。見るままに、いとうつくしげに生ひなりて、愛敬づきらうらうじき心ばへいことなり。飽かぬところなう、わが御心のままに教へなさむと思すにかなひぬべし。男の御教へなれば、すこし人馴れたることや混じらむと思ふこそうしろめたけれ。日ごろの御物語、御琴など教へ暮らして出でたまふを、例のと、口惜しう思せど、今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。

大殿には、例の、ふとも対面したまはず。つれづれとよろづ思しめぐらされ

て、箏の御琴まさぐりて、「やはらかに寝る夜はなくて」とうたひたまふ。大臣渡りたまひて、一日の興ありしこと聞こえたまふ。「ここの年の齢にて、明王の御代、四代をなむ見はべりぬれど、このたびのやうに、文ども警策に、舞、楽、物の音どもとのほりて、齡延ぶることなむはべらざりつる。道々のもの上手ども多かるころほひ、詳しうしろしめしとのへさせたまへるけなり。翁もほとほと舞ひ出でぬべき心地なむしはべりし」と聞こえたまへば、「ことにととのへ行ふこともはべらず。ただ公事に、そしうなる物の師どもを、ここかしこに尋ねはべりしなり。よろづのことよりは、柳花苑、まことに後代の例ともなりぬべく見たまへしに、ましてさかゆく春に立ち出でさせたまへらましかば、世の面目にやはべらまし」と聞こえたまふ。弁、中将など参りあひて、高欄に背中おしつ、とりどりに物の音ども調べ合はせて遊びたまふ、いとおもしろし。

かの有明の君は、はかなかりし夢を思し出でて、いともの嘆かしうながめたまふ。春宮には卯月ばかりと思し定めたれば、いとわりなう思し乱れたるを、男も、尋ねたまはむにあとはかなくはあらねど、いづれとも知らで、ことに許したまはぬあたりにかかづらはむも人悪く思ひわづらひたまふに、弥生の二十余日、右の大殿の弓の結に、上達部、親王たち多く集へたまひて、やがて藤の宴したまふ。花盛りは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、遅れて咲く桜二木ぞいとおもしろき。新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり、はなばなともしたまふ殿のやうにて、何ごとも今めかしうもてなしたまへり。源氏の君にも、一日、内にて御対面のついでに聞こえたまひしかど、おはせねば口惜しうものの榮なし、と思して、御子の四位少将をたてまつりたまふ。

わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし



内におはするほどにて、上に奏したまふ。「したり顔なりや」と笑はせたまひて、「わざとあめるを、早うものせよかし。女御子たちなども生ひ出づるところなれば、なべてのさまには思ふまじきを」などのたまはず。御装ひなどひきつくろひたまひて、いたう暮るるほどに、待たれてぞ渡りたまふ。桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて、みな人は袍なるに、あざれたる大君姿のなまめきたるにて、いつかれ入りたまへる御さま、げにいと異なり。花の匂ひもけおされて、なかなかことざましになむ。遊びなどいとおもしろうしたまひて、夜すこし更けゆくほどに、源氏の君、いたく酔ひ悩めるさまにもてなしたまひて、紛れ立ちたまひぬ。寝殿に、女一宮、女三宮のおはします。

東の戸口におはして、寄りゐたまへり。藤はこなたの妻にあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人びと出でゐたり。袖口など、踏歌の折おぼえて、こときらめきもて出でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる。

「なやましきに、いといたう強ひられて、わびにてはべり。かしこけれど、この御前にこそは、蔭にも隠させたまはめ」とて、妻戸の御簾を引き着たまへば、「あなわづらはし。よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこちはべるなれ」と言ふけしきを見たまふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。そらだきものいと煙たうくゆりて、衣の音なひ、いとほなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々もの見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。さしもあるまじきことなれど、さすがにをかしう思ほされて、いづれならむと胸うちつぶれて、「扇を取られて、からきめを見る」と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。

「あやしくもさま変へける高麗人かな」といらふるは、心知らぬにやあらむ。いらへはせで、ただ時々うち嘆くけはひする方に寄りかかりて、几帳越しに手

をとらへて、

「梓弓いるさの山に惑ふかなほの見し月の影や見ゆると  
何ゆゑか」と推し当てにのたまふを、え忍ばぬなるべし、

心いる方ならませば弓張の月なき空に迷はましやは  
と言ふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。

葵

世の中かはりて後、よろづもの憂く思され、御身のやむごとなさも添ふにや、軽々しき御忍び歩きもつつましようて、ここもかしこもおぼつかなさの嘆きを重ねたまふ報いにや、なほ我につれなき人の御心を尽きせずのみ思し嘆く。今はましてひまなう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今後は心やましよう思すにや、内へのみさぶらひたまへば、立ち並ぶ人なう心やすげなり。折ふしに従ひては、御遊びなどを好ましよう世の響くばかりせさせたまひつつ、今の御ありさましもめでたし。ただ春宮をぞいと恋しよう思ひきこえたまふ。御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞こえつけたまふも、かたはらいたきものからうれしと思す。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。院にも、かかることなむと聞こし召して、「故宮のいとやむごとなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。齋宮をもこの御子たちの列になむ思へば、いづかたにつけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかく好きわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など御けしき悪しければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥ぢがましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こし召しつけたらむ時、と恐ろしければ、かしこまりてまかだたまひぬ。

また、かく院にも聞こし召しのたまはするに、人の御名もわがためも、好きがましよういとほしきに、いとどやむごとなく心苦しき筋には思ひきこえたまへど、まだ表はれてはわざともてなしきこえたまはず。女も、似げなき御年のほ

どを恥づかしく思して、心とけたまはぬけしきなれば、それにつつまたるさまにもてなして、院に聞こし召し入れ、世の中の人も知らぬなりにたるを、深うしもあらぬ御心のほどを、いみじう思し嘆きけり。

かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもさをさなし。さりとて、人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御けしきを、君もなほことなりと思しわたる。

大殿には、かくのみ定めなき御心を心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御けしきのいふかひなければにやあらむ、深うも怨じきこえたまはず。心苦しきさまの御心地に悩みたまひて、もの心細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰れも誰れもうれしきものからゆゆしう思して、さまさまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。かやうなるほどに、いとど御心のいとまなくて思しおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし。

そのころ、齋院も下りりたまひて、后腹の女三宮もたまひぬ。帝、后とことに思ひきこえたまへる宮なれば、筋ことになりたまふをいと苦しう思したれど、こと宮たちのさるべきおはせず。儀式など、常の神わざなれど、いかめしうののしる。祭のほど、限りある公事に添ふこと多く、見所こよなし。人からと見えたり。御禊の日、上達部など数定まりて仕うまつりたまふわぎなれど、おぼえことにかたちある限り、下襲の色、表の袴の紋、馬、鞍までみな調へたり。とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。かねてより物見車心づかひしけり。一条の大路、所なくむくつけきまで騒ぎたり。所々の御棧敷、心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物なり。

大殿には、かやうの御歩きもさをさしたまはぬに、御心地さへ悩ましければ、思しかげざりけるを、若き人びと、「いでや、おのがどちひき忍びて見はべらむこそ榮なかるべけれ。おほよそ人だに、今日の物見には、大将殿をこそ

は、あやしき山賤さへ見たてまつらむとすなれ。遠き国々より妻子を引き具しつつも参うで来なるを。御覽ぜぬはいとあまりもはべるかな」と言ふを、大宮聞こしめして、「御心地もよろしき隙なり。さぶらふ人びともさうぎうしげなめり」とて、にはかにめぐらし仰せたまひて見たまふ。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしう引き続きて立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさするなかに、網代のすこしなれたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、ものの色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と口ごはくて手触れさせず。いづかたにも、若き者ども酔ひ過ぎ、立ち騒ぎたるほどのことはえしたためあへず。おとなおとなしき御前の人びとは、「かくな」など言へど、えとどめあへず。齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしつくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人も混じれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。

つひに御車ども立て続けつれば、ひとだまひの奥におしやられて物も見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろくくやしう、何に来つらむと思ふにかひなし。物も見で帰らむとしたまへど、通り出でむ隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがに、つらき人の御前渡りの待たるも心弱しや。笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに常よりも

好みととのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつしり目にとどめたまふもあり。大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人びとうちかしこまり、心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさま、こよなう思さる。

影をのみ御手洗川のつれなきに身の憂きほどぞいとど知らるる

と、涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さまかたちのいとどしう出でばえを見ざらましかば、と思さる。

ほどほどにつけて、装束、人のありさま、いみじくととのへたりと見ゆるなかにも、上達部はいとことなるを、一所の御光にはおし消たれたためり。大将の御仮の隨身に殿上の将監などのすることは常のことにもあらず、めづらしき行幸などの折のわざなるを、今日は右近の蔵人の将監仕うまつれり。さらぬ御隨身どもも、かたち姿まばゆくととのへて、世にもてかしづかれたまへるさま、木草もなびかぬはあるまじげなり。壺装束などいふ姿にて、女房の卑しからぬや、また尼などの世を背きけるなども、倒れまどひつつ物見に出でたるも、例は、あながちなりや、あなにくと見ゆるに、今日はことわりに、口うちすげみて髪着こめたるあやしの者どもの、手をつくりて額にあてつつ見たてまつりあげたるも、をこがましげなるしづのをまで、おのが顔のならむさまをば知らで、笑みさかえたり。何とも見入れたまふまじきえせ受領の娘などさへ、心の限り尽くしたる車どもに乗り、さまことさらび、心げさうしたるなむ、をかしきやうやうの見物なりける。まして、ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所々は、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも多かり。

式部卿の宮、棧敷にてぞ見たまひける。いとまばゆきまでねびゆく人のかたちかな、神などは目もこそとめたまへ、とゆゆしく思したり。姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、

ましてかうしもいかで、と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人びとは聞きにくきまでめできこえあへり。

祭の日は、大殿にはもの見たまはず。大将の君、かの御車の所争ひをまねび聞こゆる人ありければ、いといとほしう憂しと思して、なほ、あたら、重りかにおはする人の、ものに情けおくれ、すすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしも思さざりけめども、かかる仲らひは情け交はすべきものとも思いたらぬ御おきてに従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし、御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけむ、といとほしくて参うでたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとは思しながら、「なぞや、かくかたみにそばそばしからでおはせかし」とうちつぶやかれたまふ。

今日は、二条院に離れおはして、祭見に出でたまふ。西の対に渡りたまひて、惟光に車のこと仰せたり。「女房、出で立つや」とのたまひて、姫君のいとうつくしげにつくろひたてておはするを、うち笑みて見たてまつりたまふ。「君は、いざたまへ。もろともに見むよ」とて、御髪の常よりもきよらに見ゆるをかきなでたまひて、「久しう削ぎたまはざめるを、今日は吉き日ならむかし」とて、暦の博士召して時間はせなどしたまふほどに、「まづ、女房出でね」とて、童の姿どものをかしげなるを御覧す。いとらうたげなる髪どものすそはなやかに削ぎわたして、浮紋の表の袴にかかれるほど、けぎやかに見ゆ。「君の御髪は、我削がむ」とて、「うたて、所狭うもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを。むげに後れたる筋のなきや、あまり情けなからむ」とて、削ぎ果てて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、あはれにかたじけなしと見たてまつ



る。

はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆくすゑは我のみぞ見む  
と聞こえたまへば、

千尋ともいかでか知らむ定めなく満ち干る潮ののどけからぬに  
とものに書きつけておはするさま、らうらうじきものから若うをかしきを、め  
でたしと思す。

今日も所もなく立ちにけり。馬場の御殿のほどに立てわづらひて、「上達部  
の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」とやすらひたまふに、よろし  
き女車のいたう乗りこぼれたるより、扇をさし出でて人を招き寄せて、「ここ  
にやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。いかなる好き者なら  
むと思されて、所もげによきわたりなれば、引き寄せさせたまひて、「いかで  
得たまへる所ぞ、とねたさになむ」とのたまへば、よしある扇のつまを折りて、  
はかなしや人のかぎせる葵ゆるぎ神の許しの今日を待ちける  
しめの内には。

とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。あさまじう旧りがたくも今めく  
かな、と憎さに、はしたなう、

かぎしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人になべて逢ふ日を  
女はつらしと思ひきこえけり。

悔しくもかぎしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

と聞こゆ。人と相ひ乗りて簾をだに上げたまはぬを、心やまじう思ふ人多かり。  
一日の御ありさまのうるはしかりしに、今日うち乱れて歩きたまふかし、誰な  
らむ、乗り並ぶ人けしうはあらじはや、と推し量りきこゆ。挑ましからぬかぎ  
し争ひかな、ときうざうしく思せど、かやうにいと面なからぬ人はた、人相ひ  
乗りたまへるにつつまれて、はかなき御いらへも心やすく聞こえむもまばゆし

かし。

御息所は、ものを思し乱るること、年ごろよりも多く添ひにけり。つらき方に思ひ果てたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむは、いと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならむことと思す。さりとして立ち止まるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるもやすからず、釣する海人の浮けなれや、と起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、悩ましうしたまふ。大将殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず。「数ならぬ身を見ま憂く思し捨てむもことわりなれど、今はなほいふかひなきにても、御覧じ果てむや浅からぬにはあらむ」と聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと、立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいと憂く思し入れたり。

大殿には、御もののけめきていたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。もののけ、いきずだまなどいふもの多く出で来て、さまざまの名のりするなかに、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしう、わづらはしきこゆることもなければ、また、片時離るる折もなきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしきおぼろけのものにあらず、と見えたり。大将の君の御通ひ所、ここかしこと思し当つるに、「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、怨みの心も深からめ」とささめきて、ものなど問はせたまへど、さして聞こえ当つることもなし。もののけとても、わぎと深き

御かたきと聞こゆるもなし。過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ伝はりたるものの、弱目に出で来たるなど、むねむねしからずぞ乱れ現はるる。ただつくづくと音をのみ泣きたまひて、折々は胸をせき上げつつ、いみじう堪へがたげに惑ふわざをしたまへば、いかにおはすべきにか、とゆゆしう悲しく思しあわてたり。

院よりも御とぶらひ隙なく、御祈りのことまで思し寄せたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに、人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思し寄せらざりけり。

かかる御もの思ひの乱れに、御心地なほ例ならずのみ思さるれば、ほかに渡りたまひて、御修法などせさせたまふ。大将殿聞きたまひて、いかなる御心地にかと、いとほしう思し起して渡りたまへり。例ならぬ旅所なれば、いたう忍びたまふ。心よりほかなるおこたりなど罪ゆるされぬべく聞こえつづけたまひて、悩みたまふ人の御ありさまも憂へきこえたまふ。「みづからはさしも思ひ入れはべらねど、親たちのいとことしう思ひまどはるるが心苦しきに、かかるほどを見過ぐさむとてなむ。よろづを思しのどめたる御心ならば、いとうれしうなむ」など、語らひきこえたまふ。常よりも心苦しげなる御けしきを、ことわりに、あはれに見たてまつりたまふ。

うちとけぬ朝ぼらけに出でたまふ御さまのをかしきにも、なほふり離れなむことは思し返さる。やむごとなき方に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、一つ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ暮れつ方ある。

日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引きよかでなむ。

とあるを、例のことつけと見たまふものから、

袖濡るる恋路とかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞ憂き

山の井の水もことわりに。

とぞある。御手はなほこらの人のなかにすぐれたりかしと見たまひつつ、いかにぞやもある世かな、心もかたちもとりどりに、捨つべくもなく、また思ひ定むべきもなきを苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、

袖のみ濡るるやいかに。深からぬ御ことになむ。

浅みにや人はおりたつわが方は身もそぼつまで深き恋路を

おぼろけにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ。

などあり。

大殿には、御もののけいたう起こりて、いみじうわづらひたまふ。この御いきずだま、故父大臣の御霊など言ふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身一つの憂き嘆きよりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむ、と思し知らるることもあり。年ごろよろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしも碎けぬを、はかなきことの折に、人の思ひ消ち、なきものにもてなすさまなりし御禊の後、ひとふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君とおぼしき人のいときよらにてある所に行きて、とかく引きまさぐり、うつつにも似ず、たけくいかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと度かさなりにけり。あな心憂や、げに身を捨ててや往にけむ、とうつし心ならずおぼえたまふ折々もあれば、さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれはいとよう言

ひなしつべきたよりなりと思すに、いと名だたしう、ひたすら世に亡くなりて後に怨み残すは世の常のことなり、それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、うつつのわが身ながら、さる疎ましきことを言ひつけらるる、宿世の憂きこと、すべてつれなき人にいかで心もかけきこえじ、と思し返せど、思ふものをなり。

齋宮は、こぞ内に入りたまふべかりしを、さまざま障はることありて、この秋入りたまふ。九月には、やがて野の宮に移ろひたまふべければ、ふたたびの御被へのいそぎとりかさねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つくづくと臥し悩みたまふを、宮人いみじき大事にて、御祈りなどさまさま仕うまつる。おどろおどろしきさまにはあらず、そこはかとなくて月日を過ぐしたまふ。大将殿も常にとぶらひきこえたまへど、まさる方のいたうわづらひたまへば、御心のいとまなげなり。

まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみたまへるに、にはかに御けしきありて悩みたまへば、いとどしき御祈り数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御ものけ一つ、さらに動かず。やむごとなき験者ども、めづらかなりともてなやむ。さすがにいみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」とのたまふ。「さればよ。あるやうあらむ」とて、近き御几帳のもとに入れたてまつりたり。むげに限りのさまにものしたまふを、聞こえ置かまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮もすこし退きたまへり。加持の僧ども声しづめて法華経を誦みたる、いみじう尊し。御几帳の帷子引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に色あひいとはなやかにて、御髪のいと長うこちたきを引き結ひてうち添へたるも、かうてこそ

らうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

あまりいたう泣きたまへば、心苦しき親たちの御ことを思し、またかく見たまふにつけて口惜しうおぼえたまふにや、と思して、「何ごともいとかうな思し入れそ。さりともけしうはおはせじ。いかなりともかならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えぎなれば、あひ見るほどありなむと思せ」と慰めたまふに、「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」となつかしげに言ひて、

嘆きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがへのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変はりたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることも聞きにくく思してのたまひ消つを、目に見す見す、世にはかかることこそはありけれ、と疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど、誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るもかたはらいたう思さる。

すこし御声もしづまりたまへれば、隙おはするにやとて、宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、ほどなく生まれたまひぬ。うれしと思すこと限りなきに、人に駆り移したまへる御もののけども、ねたがりまどふけは

ひいとももの騒がしうて、後の事またいと心もとなし。言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なり果てぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おしのごひつつ、急ぎまかでぬ。多くの人の心を尽くしつる日ごろの名残すこしうちやすみて、今はさりともと思す。御修法などは、またまた始め添へさせたまへど、まづは興あり、めづらしき御かしづきに、みな人ゆるべり。院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部残るなき産養どものめづらかにいかめしきを、夜ごとに見ののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法にぎははしくめでたし。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。かねてはいと危ふく聞こえしを、たひらかにもはた、とうち思しけり。あやしう、我にもあらぬ御心地を思しつづくるに、御衣などもただ芥子の香に染み返りたるあやしさに、御ゆるする参り、御衣着替へなどしたまひて、試みたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだに疎ましう思さるるに、まして人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひとつに思し嘆くに、いとど御心変はりもまさりゆく。大将殿は、心地すこしのどめたまひて、あさましかりしほどの問はず語りも心憂く思し出でられつつ、いとほど経にけるも心苦しう、また気近う見たてまつらむには、いかにぞや、うたておぼゆべきを、人の御ためいとほしうよろづに思して、御文ばかりぞありける。

いたうわづらひたまひし人の、御名残ゆゆしう、心ゆるびなげに誰も思したれば、ことわりにて御歩きもなし。なほいと悩ましげにのみしたまへば、例のさまにてもまだ対面したまはず。若君のいとゆゆしきまで見えたまふ御ありさまを、今からいとさまことにもてかしづききこえたまふさまおろかならず、こゝとあひたる心地して、大臣もうれしういみじと思ひきこえたまへるに、ただこの御心地おこたり果てたまはぬを、心もとなく思せど、さばかりいみじかりし

名残にこそはと思して、いかでかはさのみは心をも惑はしたまはむ。

若君の御まみのうつくしきなどの、春宮にいみじう似たてまつりたまへるを見たてまつりたまひても、まづ恋しう思ひ出でられさせたまふに忍びがたくて、参りたまはむとて、「内などにもあまり久しう参りはべらねば、いぶせさに、今日なむ初立ちしはべるを、すこし気近きほどにて聞こえさせばや。あまりおぼつかなき御心の隔てかな」と恨みきこえたまへれば、「げにただひとへに艶にのみあるべき御仲にもあらぬを、いたう衰へたまへりと言ひながら、物越しにてなどあべきかは」とて、臥したまへる所に御座近う参りたれば、入りてものなど聞こえたまふ。御いらへ時々聞こえたまふも、なほいと弱げなり。されど、むげに亡き人と思ひきこえし御ありさまを思し出づれば、夢の心地して、ゆゆしかりしほどのことどもなど聞こえたまふついでにも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引き返しつぶつぶとのたまひしことども思し出づるに、心憂ければ、「いさや、聞こえまほしきこといと多かれど、まだいとたゆげに思しためればこそ」とて、「御湯参れ」などさへ扱ひきこえたまふを、いつならひたまひけむと、人びとあはれがりきこゆ。

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかのけしきにて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまで見ゆれば、年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむ、とあやしきまでうちまもられたまふ。「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにておぼつかなからず見たてまつらばうれしかるべきを、宮のつとおはするに、心地なくやとつみみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強く思しなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなしたまへば、かたへはかくもものしたまふぞ」など聞こえおきたまひて、いときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて見出だして臥したま



へり。秋の司召あるべき定めにて、大殿も参りたまへば、君達もいたはり望みたまふことどもありて、殿の御あたり離れたまはねば、みなひき続き出でたまひぬ。

殿の内人少なにしめやかなるほどに、にはかに例の御胸をせきあげていいたう惑ひたまふ。内に御消息聞こえたまふほどもなく絶え入りたまひぬ。足を空にて、誰も誰もまかでたまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御障りなれば、みな事破れたるやうなり。ののしり騒ぐほど、夜中ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちもえ請じあへたまはず。今はさりとと思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、ものにぞあたる。所々の御とぶらひの使など立ちこみたれど、え聞こえつかずゆすりみちて、いみじき御心惑ひども、いと恐ろしきまで見えたまふ。御もののけのたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど、やうやう変はりたまふことどものあれば、限りと思し果つるほど、誰も誰もいといみじ。

大将殿は、悲しきことにことを添へて、世の中をいと憂きものに思し染みぬれば、ただならぬ御あたりの巾ひどもも、心憂しとのみぞなべて思さる。院に思し嘆き弔ひきこえさせたまふさま、かへりて面立たしげなるを、うれしき瀬もまじりて、大臣は御涙のいとまなし。人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふとさまさまに残ることなく、かつ損なはれたまふことどものあるを見る見るも、尽きせず思し惑へど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて、鳥辺野に率てたてまつるほど、いみじげなること多かり。

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。院をばさらにも申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りちがひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ち上がりたまはず。「かかる齡の末に、若く盛りの子に後れたてまつりてもごよふこと」と

恥ぢ泣きたまふを、ここの人悲しう見たてまつる。夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御かばねばかりを御名残にて、暁深く帰りたまふ。

常のことなれど、人一人か、あまたしも見たまはぬことなればにや、類ひなく思し焦がれたり。八月二十余日の有明なれば、空もけしきもあはれ少なからぬに、大臣の闇に暮れ惑ひたまへるさまを見たまふもことわりにいみじければ、空のみ眺められたまひて、

のぼりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲居のあはれなるかな

殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず、年ごろの御ありさまを思し出でつつ、などで、つひにはおのづから見直したまひてむと、のどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ、世を経て疎く恥づかしきものに思ひて過ぎ果てたまひぬる、など悔しきこと多く思しつづけらるれど、かひなし。にばめる御衣たてまつれるも夢の心地して、われ先立たましかば、深くぞ染めたまはまし、と思すさへ、

限りあれば薄墨衣浅けれど涙ぞ袖を淵となしける

とて、念誦したまへるさま、いとどなまめかしさまさりて、経忍びやかに誦みたまひつつ、「法界三昧普賢大士」とうちのたまへる、行ひ馴れたる法師よりはけなり。若君を見たてまつりたまふにも、何に忍ぶのと、いとど露けけれど、かかる形見さへなからましかば、と思し慰む。

宮はしづみ入りて、そのままに起き上がりたまはず、危ふげに見えたまふを、また思し騒ぎて、御祈りなどせさせたまふ。はかなう過ぎゆけば、御わざのいそぎなどせさせたまふも、思しかけざりしことなれば、尽きせずいみじうなむ。なのめにかたほなるをだに、人の親はいかが思ふめる。ましてことわりなり。また類ひおはせぬをだにさうざうしく思しつるに、袖の上の玉の砕けたりけむ

よりもあさましげなり。

大将の君は、二条院にだにあらさまにも渡りたまはず、あはれに心深う思ひ嘆きて、行ひをまめにしたまひつつ明かし暮らしたまふ。所々には御文ばかりぞたてまつりたまふ。かの御息所は、齋宮は左衛門の司に入りたまひにければ、いとどいつくしき御きよまはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。憂しと思ひ染みにし世もなべて厭はしうなりたまひて、かかるほだしだに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなましと思すには、まづ対の姫君のさうぎうしくてものしたまふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。夜は御帳の内に一人臥したまふに、宿直の人びとは近うめぐりてさぶらへど、かたはら寂しくて、時しもあれ、と寝覚めがちなるに、声すぐれたる限り選りさぶらはせたまふ念仏の、暁方など忍びがたし。

深き秋のあはれまさりゆく風の音、身にしみけるかなと、ならはぬ御独寝に、明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。今めかしうも、とて見たまへば、御息所の御手なり。

聞こえぬほどは、思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきに後るる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ。

とあり。常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひや、と心憂し。さりとして、かき絶え音なう聞こえざらむいとほしく、人の御名の朽ちぬべきことを思し乱る。過ぎにし人は、とてもかくてもさるべきにこそはものしたまひけめ、何にさることをさださだどけぎやかに見聞きけむ、と悔しきは、わが御心ながらなほえ思し直すまじきなめりかし。齋宮の御きよまはりもわづらはしくや、など久しう思ひわづらひ

たまへど、わざとある御返りなくは情けなくや、とて紫のにぼめる紙に、

こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへおこたらずながら、つつましく  
きほどは、さらば思し知るらむや、とてなむ。

とまる身も消えしもおなじ露の世に心置くらむほどぞはかなき

かつは思し消ちてよかし。御覽ぜずもやとて、誰れにも。

と聞こえたまへり。

里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへるけしきを心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいといみじ。なほいと限りなき身の憂さなりけり、かやうなる聞こえありて、院にもいかに思さむ、故前坊の同じき御はらからと言ふなかにも、いみじう思ひ交はしきこえさせたまひて、この齋宮の御ことをもねむごろに聞こえつけさせたまひしかば、「その御代はりにも、やがて見たてまつり扱はむ」など常にのたまはせて、「やがて内住みしたまへ」とたびたび聞こえさせたまひしをだに、いとあるまじきことと思ひ離れにしを、かく心よりほかに、若々しきもの思ひをして、つひに憂き名をさへ流し果てつべきこと、と思し乱るるに、なほ例のさまにもおはせず。さるは、おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえありて、昔より名高くものしたまへば、野の宮の御移ろひのほどにも、をかしう今めきたること多しなして、殿上人どもの好ましきなどは、朝夕の露分けありくをそのころの役になむするなど聞きたまひても、大将の君は、ことわりぞかし、ゆゑは飽くまでつきたまへるものを、もし世の中に飽き果てて下りたまひなば、さうざうしくもあるべきかな、とさすがに思されけり。

御法事など過ぎぬれど、正日まではなほ籠もりおはす。ならばぬ御つれづれを心苦しがりたまひて、三位中將は常に参りたまひつつ、世の中の御物語など、まめやかなるもまた例の乱りがはしきことをも聞こえ出でつつ、慰めきこえた

まふに、かの内侍ぞうち笑ひたまふくきはひにはなるめる。大将の君は、「あ  
ないとほしや。おば殿の上ないたう軽めたまひそ」といさめたまふものから、  
常にをかしと思したり。かの十六夜のさやかならざりし秋のことなど、さらぬ  
も、さまざまの好き事どもをかたみに隈なく言ひあらはしたまふ、果て果ては  
あはれなる世を言ひ言ひて、うち泣きなどもしたまひけり。

時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫うすら  
かに衣更へして、いと雄々しうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。  
君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前裁見たまふほどなりけり。  
風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲  
とやなりにけむ、今は知らず」とうちひとりごちて、頬杖つきたまへる御さま、  
女にては見捨てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし、と色めかしき心地に  
うちまもられつつ、近うついるたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさま  
ながら、紐ばかりをさし直したまふ。これは、今すこしまやかなる夏の御直  
衣に、紅のつややかなるひき重ねて、やつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地  
ぞする。中将も、いとあはれなるまみに眺めたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきて眺めむ  
行方なしや」と独り言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかき暮らすころ

とのたまふ御けしきも、浅からぬほどしく見ゆれば、あやしう、年ごろはい  
としもあらぬ御心ざしを、院などゐたちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心  
苦しう、大宮の御方さまにもて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、  
えしもふり捨てたまはで、もの憂げなる御けしきながらあり経たまふなめりか  
しと、いとほしう見ゆる折々ありつるを、まことにやむごとなく重きかたはこ  
とに思ひきこえたまひけるなめり、と見知るに、いよいよ口惜しうおぼゆ。よ

ろづにつけて光失せぬる心地して、屈じいたかりけり。枯れたる下草のなかに、龍胆、撫子などの咲き出でたるを折らせたまひて、中將の立ちたまひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れのまがきに残る撫子を別れし秋のかたみとぞ見る

にほひ劣りてや御覽ぜらるらむ」と聞こえたまへり。げに何心なき御笑み顔ぞいみじうつくしき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉よりけにもろき御涙は、ましてとりあへたまはず。

今も見てなかなか袖を朽たすかな垣ほ荒れにし大和撫子

なほ、いみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、今日のははれはさりと見知りたまふらむと推し量らるる御心ばへなれば、暗きほどなれど聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりたる御文なれば、咎なくて御覽ぜさす。空の色したる唐の紙に、

わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまた経ぬれど

いつも時雨は。

とあり。御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人も聞こえ、みづからも思されければ、

大内山を、思ひやりきこえながら、えやは。

とて、

秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかがとぞ思ふ

とのみ、ほのかなる墨つきにて思ひなし心にくし。何ごとにつけても、見まざりはかたき世なめるを、つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざまなる。つれなながら、さるべき折々のあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情けも見果つべきわざなれ、なほゆるぎよしづきて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり、対の姫君をさは生ほし立てじ、と思す。

つれづれにて恋しと思ふらむかし、と忘るる折なけれど、ただ女親なき子を置きたらむ心地して、見ぬはどうしろめたく、いかが思ふらむとおぼえぬぞ心やすきわざなりける。

暮れ果てぬれば、御殿油近く参らせたまひて、さるべき限りの人びと、御前にて物語などせさせたまふ。中納言の君といふは、年ごろ忍び思ししかど、この御思ひのほどは、なかなかさやうなる筋にもかけたまはず。あはれなる御心かなと見たてまつる。おほかたには、なつかしううち語らひたまひて、「かうこの日ごろ、ありしよりけに誰も誰も紛るるかたなく見なれ見なれて、えしも常にかからずは恋しからじや。いみじきことをばさるものにて、ただうち思ひめぐらすこそ耐へがたきこと多かりけれ」とのたまへば、いとどみな泣きて、「いふかひなき御ことは、ただかきくらす心地しはべるはさるものにて、名残なきさまにあくがれ果てさせたまはむほど、思ひたまふるこそ」と聞こえもやらず。あはれと見わたしたまひて、「名残なくはいかがは。心浅くも取りなしたまふかな。心長き人だにあらば見果てたまひなむものを。命こそはかなけれど、火をうち眺めたまへるまみのうち濡れたまへるほどぞめでたき。とりわきてらうたくしたまひし小さき童の、親どももなくいと心細げに思へる、ことわりに見たまひて、「あてきは、今は我をこそは思ふべき人なめれ」とのたまへば、いみじう泣く。ほどなき相、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、萱草の袴など着たるもをかしき姿なり。「昔を忘れざらむ人は、つれづれを忍びても、幼なき人を見捨てずものしたまへ。見し世の名残なく、人びとさへ離れなば、たづきなさままさりぬべくなむ」など、みな心長かるべきことどもをのたまへど、いでや、いとど待遠にぞなりたまはむと思ふに、いとど心細し。大殿は、人びとに、際々ほど置きつつ、はかなきもてあそびものども、またまことにかの御形見なるべきものなど、わざとならぬさまに取りなしつつ、みな配らせた

まひけり。

君は、かくてのみもいかでかはつくづくと過ぐしたまはむとて、院へ参りたまふ。御車さし出でて、御前など参り集るほど、折知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ風あわたたしう吹き払ひたるに、御前にさぶらふ人びと、ものいと心細くて、すこし隙ありつる袖ども潤ひわたりぬ。夜さは、やがて二条院に泊りたまふべしとて、侍ひの人びともかしこにて待ちきこえむとなるべし、おのおの立ち出づるに、今日にしもとぢむまじきことなれど、またなくもの悲し。大臣も宮も、今日のけしきにまた悲しき改めて思さる。宮の御前に御消息聞こえたまへり。

院におぼつかながりのたまはするにより、今日なむ参りはべる。あからさまに立ち出ではべるにつけても、今日までながらへはべりにけるよと乱り心地のみ動きてなむ、聞こえさせむもなかなかにはべるべければ、そなたにも参りはべらぬ。

とあれば、いとどしく宮は目も見えたまはず沈み入りて、御返りも聞こえたまはず。大臣ぞやがて渡りたまへる。いと堪へがたげに思して、御袖も引き放ちたまはず。見たてまつる人びともいと悲し。

大将の君は、世を思しつづくることいとさまさまにて、泣きたまふさまあはれに心深きものから、いとさまよくなまめきたまへり。大臣久しうためらひたまひて、「齢のつもりには、さしもあるまじきことにつけてだに、涙もろなるわぎにはべるを、まして干る世なう思ひたまへ惑はれはべる心を、えのどめはべらねば、人目もいと乱りがはしう心弱きさまにはべるべければ、院などにも参りはべらぬなり。ことのついでには、さやうにおもむけ奏せさせたまへ。いくばくもはべるまじき老いの末に、うち捨てられたるがつらうもはべるかな」と、せめて思ひ静めてのたまふけしき、いとわりなし。君もたびたび鼻うちか



みて、「後れ先立つほどの定めなさは、世のさがと見たまへ知りながら、さしあたりておぼえはべる心惑ひは、類ひあるまじきわざとなむ。院にも、ありさま奏しはべらむに、推し量らせたまひてむ」と聞こえたまふ。「さらば、時雨も隙なくはべるめるを、暮れぬほどに」とそそのかしきこえたまふ。

うち見まはしたまふに、御几帳の後、障子のあなたなどのあき通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き薄き鈍色どもを着つつ、みないみじう心細げにて、うちしほたれつつる集りたるを、いとあはれと見たまふ。「思し捨つまじき人もとまりたまへれば、さりともものついでには立ち寄せたまはじやなど、慰めはべるを、ひとへに思ひやりなき女房などは、今日を限りに思し捨てつる故里と思ひ屈じて、長く別れぬる悲しびよりも、ただ時々馴れ仕うまつる年月の名残なかるべきを嘆きはべるめるなむ、ことわりなる。うちとけおはしますことははべらざりつれど、さりともつひにはとあいな頼めしはべりつるを、げにこそ心細き夕べにはべれ」とても泣きたまひぬ。「いと浅はかなる人びとの嘆きにもはべるなるかな。まことに、いかなりともとのどかに思ひたまへつるほどは、おのづから御目離るる折もはべりつらむを、なかなか今は何を頼みにてかはおこたりはべらむ。今御覧じてむ」とて出でたまふを、大臣見送りきこえたまひて入りたまへるに、御しつらひよりはじめ、ありしに變はることもなければ、空蟬のむなしき心地ぞしたまふ。

御帳の前に御硯などうち散らして、手習ひ捨てたまへるを取りて、目おししぼりつつ見たまふを、若き人びとは、悲しきなかにもほほ笑むあるべし。あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつつ、草にも真名にも、さまざまめづらしきさまに書き混ぜたまへり。「かしこの御手や」と空を仰ぎて眺めたまふ。よそ人に見たてまつりなさむが惜しきなるべし。「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

なき魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

また、「霜の花白し」とある所に、

君なくて塵つもりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ

一日の花なるべし、枯れて混じれり。宮に御覽ぜさせたまひて、「いふかひなきことをばさるものにて、かかる悲しき類ひ世になくやはと思ひなしつつ、契り長からでかく心を惑はすべくてこそはありけめ、とかへりてはつらく前の世を思ひやりつつなむ覺ましはべるを、ただ日ごろに添へて恋しきの堪へがたきと、この大将の君の、今はとよそになりたまはむなむ、飽かずいみじく思ひたまへらるる。一日二日も見えたまはず、かれがれにおはせしをだに、飽かず胸いたく思ひはべりしを、朝夕の光失ひては、いかでかながらふべからむ」と御声もえ忍びあへたまはず泣いたまふに、御前なるおとなおとなしき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕べのけしきなり。若き人びとは、所々に群れるつつ、おのがどちあはれなることどもうち語らひて、「殿の思しのためはするやうに、若君を見たてまつりてこそは慰むべかめれと思ふも、いとほかなきほどの御形見にこそ」とて、おのおの、「あからさまにまかでて、参らむ」と言ふもあれば、かたみに別れ惜しむほど、おのがじしあはれなることども多かり。

院へ参りたまへれば、いといたう面瘦せにけり、精進にて日を経るけにや、と心苦しげに思し召して、御前にて物など参らせたまひて、とやかくやと思し扱ひきこえさせたまへるさま、あはれにかたじけなし。中宮の御方に参りたまへれば、人びとめづらしがり見たてまつる。命婦の君して、「思ひ尽きせぬことどもを、ほど経るにつけてもいかに」と御消息聞こえたまへり。「常なき世はおほかたにも思うたまへ知りしを、目に近く見はべりつるに、厭はしきこと多く思うたまへ乱れしも、たびたびの御消息に慰めはべりてなむ今日までも」

とて、さらぬ折だにある御けしき取り添へて、いと心苦しげなり。無紋の表の御衣に鈍色の御下襲、纓卷きたまへるやつれ姿、はなやかなる御装ひよりもなまめかしきまさりたまへり。春宮にも久しう参らぬおぼつかなさなど聞こえたまひて、夜更けてぞまかでたまふ。

二条院には、方々払ひみがきて、男女待ちきこえたり。上臈どもみな参う上りて、我も我もと装束き化粧じたるを見るにつけても、かのみ並み屈じたりつるけしきどもぞ、あはれに思ひ出でられたまふ。御装束たてまつり替へて、西の対に渡りたまへり。衣更への御しつらひ、くもりなくあぎやかに見えて、よき若人、童女のなり、姿めやすくとのへて、少納言がもてなし心もとなきところなう心にくしと見たまふ。

姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。「久しかりつるほどに、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ」とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うちそばみて笑ひたまへる御さま、飽かぬところなし。火影の御かたはらめ、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくなりゆくかな、と見たまふに、いとうれし。近く寄りたまひて、おぼつかなかりつるほどのことどもなど聞こえたまひて、「日ごろの物語のどかに聞こえまほしけれど、いまいまいしうおぼえはべれば、しばし異方にやすらひて参り来む。今はとだえなく見たてまつるべければ、厭はしうさへや思されむ」と語らひきこえたまふを、少納言はうれしと聞くものから、なほ危ふく思ひきこゆ。やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきや立ち代はりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。

御方に渡りたまひて、中將の君といふに御足など参りすさびて、大殿籠もりぬ。朝には、若君の御もとに御文たてまつりたまふ。あはれなる御返りを見たまふにも、尽きせぬことどものみなむ。

いとつれづれに眺めがちなれど、何となき御歩きもの憂く思しなられて、思しも立たれず。姫君の、何ごともあらまほしうととのひ果てて、いとめでたうのみ見えたまふを、似げなからぬほどにはた見なしたまへれば、けしきばみたることなど、折々聞こえ試みたまへど、見も知りたまはぬけしきなり。

つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつづ日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく愛敬づき、はかなき戯れごとのなかにも、うつくしき筋をし出でたまへば、思し放ちたる年月こそ、たださるかたのらうたさのみはありつれ、しのびがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけぢめ見たてまつりわくべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。人びと、「いかなればかくおはしますならむ。御心地の例ならず思さるるにや」と見たてまつり嘆くに、君は渡りたまふとて、御硯の箱を御帳のうちにさし入れておはしにけり。人まに、からうして頭もたげたまへるに、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなくひき開けて見たまへば、

あやなくも隔てけるかな夜をかさねさすがに馴れし夜の衣を

と書きすさびたまへるやうなり。かかる御心おはすらむとは、かけても思し寄らざりしかば、などてかう心憂かりける御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむ、とあさましう思さる。

昼つかた渡りたまひて、「悩ましげにしたまふらむはいかなる御心地ぞ。今日は碁も打たでさうごうしや」とて覗きたまへば、いよいよ御衣ひきかづきて臥したまへり。人びとは退きつつさぶらへば、寄りたまひて、「などかくいぶせき御もてなしぞ。思ひのほか心憂くこそおはしけれな。人もいかにあやしと思ふらむ」とて、御衾をひきやりたまへれば、汗におしひたして、額髪もいたう濡れたまへり。「あなうたて。これはいとゆゆしきわざぞよ」とて、よろ

づにこしらへきこえたまへど、まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず。「よしよし。さらに見えたてまつらじ。いと恥づかし」など怨じたまひて、御硯開けて見たまへど、物もなければ、「若の御ありさまや」とらうたく見たてまつりたまひて、日一日、入りゐて慰めきこえたまへど、解けがたき御けしき、いとどらうたげなり。

その夜さり、亥の子もちひ参らせたり。かかる御思ひのほどなれば、ことごとしきさまにはあらで、こなたばかりに、をかしげなる松破籠などばかりを、色々にて参れるを見たまひて、君、南のかたに出でたまひて、惟光を召して、「この餅、かう数々に所狭きさまにはあらで、明日の暮れに参らせよ。今日はいまいましき日なりけり」とうちほほ笑みてのたまふ御けしきを、心とき者にて、ふと思ひ寄りぬ。惟光、たしかにも承らで、「げに、愛敬の初めは日選りして聞こし召すべきことにこそ。さても子の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」とまめだちて申せば、「三つが一つかにもあらむかし」とのたまふに、心得果てて立ちぬ。もの馴れのさまや、と君は思す。人にも言はで、手づからといふばかり、里にてぞ、作りゐたりける。

君はこしらへわびたまひて、今はじめ盗みもて来たらむ人の心地するも、いとをかしくて、年ごろあはれと思ひきこえつるは片端にもあらざりけり、人の心こそうたであるものはあれ、今は一夜も隔てむことのわりなかるべきこと、と思さる。のたまひしもちひ、忍びていたう夜更かして、持て参れり。少納言はおとなしくて、恥づかしくや思さむ、と思ひやり深く心しらひて、娘の弁といふを呼び出でて、「これ忍びて参らせたまへ」とて、香壺の箱を一つさし入れたり。「たしかに御枕上に参らすべき祝ひの物にはべる。あなかしこ、あだにな」と言へば、あやしと思へど、「あだなることはまだならぬものを」とて取れば、「まことに、今はさる文字忌ませたまへよ。よも混じりはべらじ」

と言ふ。若き人にて、けしきもえ深く思ひ寄らねば、持て参りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君ぞ、例の聞こえ知らせたまふらむかし。

人はえ知らぬに、つとめて、この箱をまかでさせたまへるにぞ、親しき限りの人びと、思ひ合はすることどもありける。御皿どもなど、いつのまにかし出でけむ、花足いときよらにして、もちひのさまもことさらび、いとをかしう調へたり。少納言は、いとかうしもや、とこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、思しいたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。「さて、うちうちのたまはせよな。かの人もいかに思ひつらむ」とさきめきあへり。

かくて後は、内にも院にも、あからさまに参りたまへるほどだに、静心なく面影に恋しければ、あやしの心や、と我ながら思さる。通ひたまひし所々よりは、うらめしげにおどろかしきこえたまひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新手枕の心苦しくて夜をや隔てむと思しわづらはるれば、いともの憂くて、悩ましげにのみもてなしたまひて、「世の中のいと憂くおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみいらへたまひつつ過ぐしたまふ。

今后は、御匣殿なほこの大将にのみ心つけたまへるを、「げにはた、かくやむごとなかりつる方も失せたまひぬめるを、さてもあらむに、なか口惜しからむ」など大臣のたまふに、いと憎しと思ひきこえたまひて、宮仕へもをさをさしくだにしましたまへらば、なか悪しからむ、と参らせたてまつらむことを思しはげむ。君も、おしなべてのさまにはおぼえざりしを、口惜しとは思せど、ただ今はことさまに分くる御心もなく、何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の怨みも負ふまじかりけり、といとど危ふく思し懲りにたり。

かの御息所はいといとほしけれど、まことのよるべと頼みきこえむには、かならず心おかれぬべし、年ごろのやうにて見過ぐしたまはば、さるべき折ふし

にもの聞こえあはする人にてはあらむなど、さすがにことのほかには思し放たず。

この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬも、物げなきやうなり、父宮に知らせきこえてむ、と思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意など、いとありがたけれど、女君はこよなう疎みきこえたまひて、年ごろよろづに頼みきこえて、まつはしきこえけるこそあさましき心なりけれ、と悔しうのみ思して、さやかにも見合はせてまつりたまはず、聞こえ戯れたまふも苦しうわりなきものに思しむすぼほれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさまを、をかしうもいとほしうも思されて、「年ごろ思ひきこえし本意なく、馴れはまさらぬ御けしきの心憂きこと」と怨みきこえたまふほどに、年も返りぬ。

ついたちの日は、例の、院に参りたまひてぞ、内、春宮などにも参りたまふ。それより大殿にまかでたまへり。大臣、新しき年ともいはず、昔の御ことども聞こえ出でたまひて、さうざうしく悲しと思すに、いとど、かくさへ渡りたまへるにつけて、念じ返したまへど堪へがたう思したり。御年の加はるけにや、ものものしきけさへ添ひたまひて、ありしよりけにきよらに見えたまふ。立ち出でて御方に入りたまへれば、人びともめづらしう見たてまつりて忍びあへず。若君見たてまつりたまへば、こよなうおよすけて、笑ひがちにおはするもあはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、人もこそ見たてまつりとがむれ、と見たまふ。御しつらひなども変はらず、御衣掛の御装束など、例のやうにし掛けられたるに、女のが並ばぬこそ、栄なくさうざうしく栄なけれ。宮の御消息にて、「今日はいみじく思ひたまへ忍ぶるを、かく渡らせたまへるになむ、なかなか」など聞こえたまひて、「昔にならひはべりにける御よそひも、月ごろはいとど涙に霧りふたがりて、色あひなく御覽ぜられはべらむと

思ひたまふれど、今日ばかりはなほやつれさせたまへ」とて、いみじくし尽くしたまへるものども、また重ねてたてまつれたまへり。かならず今日たてまつるべきと思しける御下襲は、色も織りざまも世の常ならず心ことなるを、かひなくやはとて着替へたまふ。来ざらましかば口惜しう思さましと、心苦し。御返りに、

春や来ぬるともまづ御覧ぜられになむ参りはべりつれど、思ひたまへ出でらるること多くて、え聞こえさせはべらず。

あまた年今日改めし色衣着ては涙ぞふる心地する

えこそ思ひたまへしづめね」

と聞こえたまへり。御返り、

新しき年ともいはずふるものはふりぬる人の涙なりけり

おろかなるべきことにぞあらぬや。



賢

木

齋宮の御下り近うなりゆくままに、御息所、もの心細く思ほす。やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりともと、世人も聞こえあつかひ、宮のうちにも心ときめきせしを、その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことに憂しと思すことこそありけめ、と知り果てたまひぬれば、よろづのあはれを思し捨てて、ひたみちに出で立ちたまふ。親添ひて下りたまふ例もことになけれど、いと見放ちがたき御ありさまなるにつけて、憂き世を行き離れむと思すに、大将の君、さすがに今はとかけ離れたまひなむも口惜しく思されて、御消息ばかりはあはれなるさまにてたびたび通ふ。対面したまはむことをば、今さらにあるまじきこと、と女君も思す。人は心づきなしと思ひ置きたまふこともあらむに、我は今すこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

もとの殿には、あからさまに渡りたまふ折々あれど、いたう忍びたまへば、大将殿え知りたまはず。たはやすく御心にまかせて、参うでたまふべき御すみかにはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御悩みにはあらで、例ならず時々悩ませたまへば、いとど御心の暇なけれど、つらき者に思ひ果てたまひなむいとほしく、人聞き情けなくやと思し起して、野の宮に参うでたまふ。九月七日ばかりなれば、むげに今日明日と思すに、女方も心あわたたしけれど、立ちながらとたびたび御消息ありければ、いでやとは思しわづらひながら、いとあまり埋もれいたきを、物越ばかりの対面は、と人知れず待ちきこえたまひけり。

遙けき野辺を分け入りたまふより、いとものあはれなり。秋の花みな衰へつつ、浅茅が原も枯れ枯れなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞き分かれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。むつましき御前十余人ばかり、御隨身こととしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、

ことにひきつくるひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なる好き者ども、所からさへ身にしみて思へり。御心にも、などで今まで立ちならさざりつらむと、過ぎぬる方悔しう思さる。ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋ども、あたりあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居ども、さすがに神々しう見わたされて、わづらはしきけしきなるに、神官の者ども、ここかしこうちしはぶきて、おのがどち物うち言ひたるけはひなども、他にはさま変はりて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人気すくなくしめじめとして、ここにも思はしき人の月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに、遊びはみなやめて、心にききはひあまた聞こゆ。何くれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、いともものしと思して、「かうやうの歩きも、今はつきなきほどになりてはべるを思ほし知らば、かうしめの外にはもてなしたまはで。いぶせうはべることをもあきらめはべりにしがな」とまめやかに聞こえたまへば、人びと、「げにいとかたはらいたう、立ちわづらはせたまふに、いとほしう」などあつかひきこゆれば、いさや、この人目も見苦しう、かの思さむことも若々しう、出でるむが今さらにつつましきこと、と思すに、いとももの憂けれど、情けなうもてなさむにもたけからねば、とかくうち嘆きやすらひて、ゐざり出でたまへる御けはひ、いと心にくし。「こなたは、簀子ばかりの許されははべりや」とて、上りゐたまへり。はなやかにさし出でたる夕月夜に、うち振る舞ひたまへるさま、匂ひに似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりければ、榊をいささか折りて持たまへりけるを、挿し入れて、「変らぬ色をしるべにてこそ斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」と聞こえたまへば、

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ

と聞こえたまへば、

少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり。

心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひざまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。また心のうちに、いかにぞや、疵ありて思ひきこえたまひにし後、はたあはれもさめつつ、かく御仲も隔たりぬるを、めづらしき御対面の昔おぼえたるに、あはれと思し乱ること限りなし。来し方行く先思し続けられて、心弱く泣きたまひぬ。女は、さしも見えじと思しつつむれど、え忍びたまはぬ御けしきを、いよいよ心苦しう、なほ思しとまるべきさまにぞ聞こえたまふめる。月も入りぬるにや、あはれなる空を眺めつつ怨みきこえたまふに、こころ思ひ集めたまへるつらさも消えぬべし。やうやう今はと思ひ離れたまへるに、さればよと、なかなか心動きて思し乱る。殿上の若君達などうち連れて、とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なるかたにうけばりたるありさまなり。思ほし残すことなき御仲らひに、聞こえ交はしたまふことども、まねびやらむかたなし。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

暁の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし。風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、折知り顔なるを、さして思ふことなきだに聞き過ぐしがたげなるに、ましてわりなき御心惑ひどもに、なかなかこともゆかぬにや。

おほかたの秋の別れも悲しきに鳴く音な添へそ野辺の松虫

悔しきこと多かれど、かひなければ、明け行く空もはしたなうて出でたまふ。道のほどいと露けし。女もえ心強からず、名残あはれにて眺めたまふ。ほの見たてまつりたまへる月影の御かたち、なほとまれる匂ひなど、若き人びとは身にしめて、あやまちもしつべくめできこゆ。「いかばかりの道にてか、かかる御ありさまを見捨てては別れきこえむ」と、あいなく涙ぐみあへり。

御文、常よりもこまやかなるは、思しなびくばかりなれど、またうち返し定めかねたまふべきことならねば、いとかひなし。男は、さしも思さぬことをだに、情けのためにはよく言ひ続けたまふべかめれば、ましておしなべての列には思ひきこえたまはざりし御仲の、かくて背きたまひなむとするを、口惜しうもいとほしうも思し悩むべし。旅の御装束よりはじめ、人びとのまで、何くれの御調度など、いかめしうめづらしきさまにてとぶらひきこえたまへど、何とも思されず。あはあはしう心憂き名をのみ流して、あさましき身のありさまを、今はじめたらむやうに、ほど近くなるままに、起き臥し嘆きたまふ。齋宮は、若き御心地に、不定なりつる御出で立ちのかく定まりゆくを、うれしとのみ思したり。世人は、例なきことと、もどきもあはれがりもさまさまに聞こゆべし。何ごとも、人にもどきあつかはれぬ際はやすげなり。なかなか世に抜け出でぬる人の御あたりは、所狭きこと多くなむ。

十六日、桂川にて御祓へしたまふ。常の儀式にまさりて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとなくおぼえあるを選らせたまへり。院の御心寄せもあればなるべし。出でたまふほどに、大将殿より、例の尽きせぬことども聞こえたまへり。

かけまくもかしこき御前にて  
と、木綿につけて、

鳴る神だにこそ、

八洲もる国つ御神も心あらば飽かぬ別れの仲をことわれ

思うたまふるに、飽かぬ心地しはべるかな。

とあり。いとさわがしきほどなれど、御返りあり。宮の御をば女別当して書かせたまへり。

国つ神空にことわる仲ならばなほざりごとをまづや糾さむ

大将は、御ありさまゆかしうて内にも参らまほしく思せど、うち捨てられて見送らむも人わろき心地したまへば、思しとまりて、つれづれに眺められたまへり。宮の御返りのおとなおとなしきを、ほほ笑みて見られたまへり。御年のほどよりはをかしうもおはすべきかな、とただならず。かうやうに、例に違へるわづらはしきに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ、世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし、など思す。

心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に内に参りたまふ。御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の、限りなき筋に思し志して、いつきたてまつりたまひしありさま変はりて、末の世に内を見たまふにも、もののみ尽きせずあはれに思さる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ今日また九重を見たまひける。

そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにもものぞ悲しき

齋宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞいとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ。

出でたまふを待ちたてまつるとて、八省に立て続けたる出車どもの袖口、色あひも、目馴れぬさまに心にくきけしきなれば、殿上人どもも、私の別れ惜しむ多かり。暗う出でたまひて、二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条の

院の前なれば、大将の君いとあはれに思されて、榊にさして、

振り捨てて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖は濡れじや

と聞こえたまへれど、いと暗うものさわがしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ御返しある。

鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢まで誰れか思ひおこせむ

ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよしよしくなまめきたるに、あはれなるけをすこし添へたまへらましかば、と思す。霧いたう降りてただならぬ朝ぼらけに、うち眺めて独りごちおはす。

行く方を眺めもやらむこの秋は逢坂山を霧な隔てそ

西の対にも渡りたまはで、人やりならずもの寂しげに眺め暮らしたまふ。まして旅の空は、いかに御心尽くしなること多かりけむ。

院の御悩み、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみきこえぬ人なし。内にも思し嘆きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を返す返す聞こえさせたまひて、次には大将の御こと、「はべりつる世に変はらず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしきに親王にもなさず、ただ人にておほやけの御後見をせさせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片端だにかたはらいたし。帝もいと悲しと思して、さらに違へきこえさすまじきよしを、返す返す聞こえさせたまふ。御かたちもいとよきにねびまさらせたまへるを、うれしく頼もしく見たてまつらせたまふ。限りあれば急ぎ帰らせたまふにも、なかなかなること多くなむ。

春宮も、一度にと思し召しけれど、ものさわがしきにより、日を変へて渡ら

せたまへり。御年のほどよりは大人びうつくしき御さまにて、恋しと思ひきこえさせたまひけるつもりに、何心もなくうれしと思し、見たてまつりたまふ御けしき、いとあはれなり。中宮は涙に沈みたまへるを、見たてまつらせたまふも、さまざま御心乱れて思し召さる。よろづのことを聞こえ知らせたまへど、いとものはかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。大将にも、おほやけに仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことを、返す返すのたまはず。夜更けてぞ帰らせたまふ。残る人なく仕うまつりてののしるさま、行幸に劣るけぢめなし。飽かぬほどにて帰らせたまふを、いみじう思し召す。

大后も参りたまはむとするを、中宮のかく添ひおはするに御心置かれて、思しやすらふほどに、おどろおどろしきさまにもおはしまさで隠れさせたまひぬ。足を空に思ひ惑ふ人多かり。御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせたまへることも、我が御世の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、おほぢ大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなむ世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。

中宮、大将殿などは、ましてすぐれてものも思しわかれず、後々の御わぎなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの御子たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながらいとあはれに、世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。去年今年とうち続き、かかることを見たまふに、世もいとあぢきなう思さるれど、かかるついでにも、まづ思し立たるることはあれど、またさまざまの御ほだし多かり。

御四十九日までは、女御、御息所たち、みな院に集ひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまかだたまふ。師走の二十日なれば、おほかたの世の中とぢむる空のけしきにつけても、まして晴るる世なき中宮の御心のうちなり。大



後の御心も知りたまへれば、心にまかせたまへらむ世の、はしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを思ひ出できこえたまはぬ時の間なきに、かくてもおはしますまじう、みな他々へと出でたまふほどに、悲しきこと限りなし。

宮は、三条の宮に渡りたまふ。御迎へに兵部卿宮参りたまへり。雪うち散り、風はげしうて、院の内やうやう人目かれゆきてしめやかなるに、大将殿こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえたまふ。御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、親王、

蔭ひろみ頼みし松や枯れにけむ下葉散りゆく年の暮かな

何ばかりのことにもあらぬに、折からものあはれにて、大将の御袖いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれし影を見ぬぞ悲しき

と思すままに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、

年暮れて岩井の水もこほりとぢ見し人影のあせもゆくかな

そのついでにいと多かれど、さのみ書き続くべきことかは。渡らせたまふ儀式変はらねど、思ひなしにあはれにて、旧き宮は、かへりて旅心地したまふにも、御里住み絶えたる年月のほど、思しめぐらさるべし。

年かへりぬれど、世の中今めかしきことなく静かなり。まして大将殿は、もの憂くて籠もりゐたまへり。除目のころなど、院の御時をばさらにもいはず、年ごろ劣るけぢめなくて、御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬、車うすらぎて、宿直物の袋をさをさ見えす、親しき家司どもばかり、ことに急ぐことなげにてあるを見たまふにも、今よりはかくこそはと思ひやられて、ものすさまじくなむ。

御匣殿は、二月に尚侍になりたまひぬ。院の御思ひにやがて尼になりたまへ

るかはりなりけり。やむごとなくもてなし、人がらもいとよくおはすれば、あまた参り集りたまふなかにもすぐれて時めきたまふ。后は、里がちにおはしまして、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には、かむの君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らず集ひ参りて、今めかしう花やぎたまへど、御心の中は、思ひのほかなりしことどもを、忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことは、なほ同じさまなるべし。ものの聞こえもあらばいかならむ、と思しながら、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。

院のおはしましつる世こそ憚りたまひつれ、後の御心いちはやくて、かたがた思しつめたることどもの報いせむと思すべかめり。ことにふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世の憂さに立ちまふべくも思されず。

左の大殿も、すさまじき心地したまひて、ことに内にも参りたまはず。故姫君を、引きよきてこの大将の君に聞こえつけたまひし御心を、后は思しおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。大臣の、御仲ももとよりそばそばしうおはするに、故院の御世にはわがままにおはせしを、時移りてしたり顔におはするを、あぢきなしと思したる、ことわりなり。大将はありしに変はらず渡り通ひたまひて、さぶらひし人びとをも、なかなかこまかに思しおきて、若君をかしづき思ひきこえたまへること限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとどいたつききこえたまふことども、同じさまなり。限りなき御おぼえの、あまりもの騒がしきまで暇なげに見えたまひしを、通ひたまひし所々も、かたがたに絶えたまふことどもあり。軽々しき御忍びありきも、あいなう思しなりてことにしたまはねば、いとのだやかに今しもあらまほしき御ありさまなり。

西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。少納言なども人知れず、故尼上

の御祈りのしるしと見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえ交はしたまふ。向かひ腹の限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方はやすからず思すべし。物語に、ことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

齋院は御服にて下りゐたまひにしかば、朝顔の姫君は、かほりにゐたまひにき。賀茂のいつきには孫王のゐたまふ例多くもあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけむ。大将の君、年月経れどなほ御心離れたまはざりつるを、かう筋ことになりたまひぬれば、口惜しくと思す。中將におとづれたまふことも同じことにて、御文などは絶えざるべし。昔に変わる御ありさまなどをば、ことに何とも思したらず、かやうのはかなしごとどもを、紛るることなきままに、こなたかなたと思し惱めり。

帝は、院の御遺言違へずあはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたるかたに過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりしたまふことはえ背かせたまはず、世のまつりごと御心にかなはぬやうなり。

わづらはしきのみまされど、かむの君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくてとおぼつかなくはあらず。五壇の御修法の初めにて、慎しみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君、紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。朝夕に見たてまつる人だに飽かぬ御さまなれば、ましてめづらしきほどにのみある御対面の、いかでかはおろかならむ。女の御さまもげにぞめでたき御盛りなる、重りかなるかたはいかがあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。ほどなく明け行くにやとおぼゆるに、ただここにしも、「宿直申しさぶらふ」と声づくるなり。また

このわたりに隠るへたる近衛司ぞあるべき、腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし、と大将は聞きたまふ。をかしきものからわづらはし。ここかしこ尋ねありきて、「寅一つ」と申すなり。女君、

心からかたがた袖を濡らすかなあくと教ふる声につけても  
とのたまふさま、はかなだちていとをかし。

嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく

静心なくて出でたまひぬ。夜深き暁月夜のえもいはず霧りわたれるに、いといたうやつれて振る舞ひなしたまへるしも、似るものなき御ありさまにて、承香殿の御兄の藤少将、藤壺より出でて、月の少し隈ある立部のもとに立てりけるを知らで、過ぎたまひけむこそいとほしけれ。もどききこゆるやうもありなむかし。

かやうのことにつけても、もて離れ、つれなき人の御心を、かつはめでたしと思ひきこえたまふものから、わが心の引くかたにては、なほつらう心憂しとおぼえたまふ折多かり。

内に参りたまはむことは、うひうひしく所狭く思しなりて、春宮を見たてまつりたまはぬをおぼつかなく思ほえたまふ。また頼もしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君をぞよろづに頼みきこえたまへるに、なほこの憎き御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶしたまひつつ、いささかもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、今さらにまたさる事の聞こえありて、わが身はさるものにて、春宮の御ためにならずよからぬこと出で来なむ、と思すに、いと恐ろしければ、御祈りをさへせさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、思しいたらぬことなく逃れたまふを、いかなる折にかありけむ、あさましようて近づき参りたまへり。心深くたばかりたまひけむことを知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。

まねぶべきやうなく聞こえ続けたまへど、宮いとこよなくもて離れきこえたまひて、果て果ては御胸をいたう悩みたまへば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつりあつかふ。男は憂しつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明け果てにけれど出でたまはずなりぬ。御悩みにおどろきて、人びと近う参りてしげうまがへば、我にもあらで塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地どもいとむつかし。宮はものをいとわびしと思しけるに、御氣上がりて、なほ悩ましうせさせたまふ。兵部卿宮、大夫など参りて、「僧召せ」など騒ぐを、大将いとわびしう聞きおはす。からうして暮れゆくほどにぞおこたりたまへる。

かく籠もりゐたまへらむとは思しもかけず、人びともまた御心惑はさじとて、かくなむとも申さぬなるべし、昼の御座にゐざり出でておはします。よろしう思さるるなめりとて、宮もまかでたまひなどして、御前人少なになりぬ。例もけ近くならさせたまふ人少なければ、ここかしこの物のうしろなどにぞさぶらふ。命婦の君などは、「いかにたばかりて出だしたてまつらむ。今宵さへ御氣上がらせたまはむ、いとほしう」など、うちささめき扱ふ。君は、塗籠の戸の細めに開きたるをやをらおし開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。「なほいと苦しうこそあれ。世や尽きぬらむ」とて、外の方を見出だしたまへるかたはら目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。「御くだものをだに」とて参り据ゑたり。箱の蓋などにも、なつかしきさまにてあれど、見入れたまはず。世の中をいたう思し悩めるけしきにて、のどかに眺め入りたまへる、いみじうらうたげなり。髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなき匂はしきなど、ただかの対の姫君に違ふところなし。年ごろすこし思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼ

えたまへるかな、と見たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。気高う恥づかしげなるさまなども、さらに異人とも思ひ分きがたきを、なほ限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかな、とたぐひなくおぼえたまふに、心惑ひして、やをら御帳のうちにかかづらひ入りて、御衣の褌を引きならしたまふ。けはひしるくさと匂ひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれ伏したまへり。「見だに向きたまへかし」と、心やましうつらうて引き寄せたまへるに、御衣をすべし置きてるぎりのきたまふに、心にもあらず御髪を取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世のほど思し知られて、いみじと思したり。男も、こころ世をもてしづめたまふ御心みな乱れて、うつしぎまにもあらず、よろづのことを泣く泣く怨みきこえたまへど、まことに心づきなしと思して、いらへも聞こえたまはず。ただ「心地のいと悩ましきを、かからぬ折もあらば聞こえてむ」とのたまへど、尽きせぬ御心のほどを言ひ続けたまふ。さすがにいみじと聞きたまふふしもまじるらむ、あらざりしことにはあらねど、改めていと口惜しう思さるれば、なつかしきものから、いとようのたまひ逃れて、今宵も明け行く。せめて従ひきこえざらむもかたじけなく、心恥づかしき御けはひなれば、「ただかばかりにても、時々いみじき愁へをだにはるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もはべらじ」などたゆめきこえたまふべし。なのめなることだに、かやうなる仲らひは、あはれなることも添ふなるを、ましてたぐひなげなり。

明け果つれば、二人していみじきことどもを聞こえ、宮は、半ばは亡きやうなる御けしきの心苦しければ、「世の中にありと聞こし召されむもいと恥づかしければ、やがて亡せはべりなむも、またこの世ならぬ罪となりはべりぬべきこと」など聞こえたまふも、むくつけきまで思し入れり。

「逢ふことのかたきを今日に限らずは今幾世をか嘆きつつ経む御ほだしにもこそ」と聞こえたまへば、さすがにうち嘆きたまひて、

長き世の恨みを人に残してもかつは心をあたと知らなむ

はかなく言ひなさせたまへるさまの、言ふよしなき心地すれど、人の思さむところもわが御ためも苦しければ、我にもあらで出でたまひぬ。

いづこを面にてかはまたも見えたてまつらむ、いとほしと思し知るばかり、と思して、御文も聞こえたまはず。うち絶えて、内、春宮にも参りたまはず、籠もりおはして、起き臥し、いみじかりける人の御心かな、と人わろく恋しう悲しきに、心魂も失せにけるにや、悩ましうさへ思さる。もの心細く、なぞや、世に経れば憂きこそまさされ、と思し立つには、この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへるを、振り捨てむこといとかたし。宮も、その名残例にもおはしまさず。かうことさらめきて籠もりゐ、おとづれたまはぬを、命婦などはいとほしがりきこゆ。宮も、春宮の御ためを思すには、御心置きたまはむこといとほしく、世をあぢきなきものに思ひなりたまはば、ひたみちに思し立つこともや、とさすがに苦しう思さるべし。かかること絶えずは、いとどしき世に憂き名さへ漏り出でなむ、大后のあるまじきことにたまふなる位をも去りなむ、とやうやう思しなる。院の思しのたまはせしさまの、なのめならざりしを思し出づるにも、よろづのこと、ありしにもあらず変はりゆく世にこそあめれ、戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑へなることはありぬべき身にこそあめれ、など、世の疎ましく過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思し取るに、春宮見たてまつらで面変はりせむこと、あはれに思さるれば、忍びやかにて参りたまへり。大将の君は、さらぬことだに思し寄らぬことなく仕うまつりたまふを、御心地悩ましきにつけて、御送りにも参りたまはず。おほかたの御とぶらひは同じやうなれど、むげに思し屈しにけ

ると、心知るどちはいとほしがりきこゆ。

宮は、いみじううつくしうおとなびたまひて、めづらしううれしと思してむつれきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふにも、思し立つ筋はいとかたけれど、内わたりを見たまふにつけても、世のありさまあはれにはかなく、移り変はることのみ多かり。大後の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまふにもはしたなく、事に触れて苦しければ、宮の御ためにも危ふくゆゆしう、よろづにつけて思ほし乱れて、「御覽ぜで久しからむほどに、かたちの異ざまにて、うたてげに変はりてはべらば、いかが思さるべき」と聞こえたまへば、御顔うちまもりたまひて、「式部がやうにや。いかでかさはなりたまはむ」と笑みてのたまふ。いふかひなくあはれにて、「それは、老いてはべれば醜きぞ。さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむこともいとど久しかるべきぞ」とて泣きたまへば、まめだちて、「久しうおはせぬは恋しきものを」とて、涙の落つれば、恥づかしと思して、さすがに背きたまへる、御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげに匂ひたまへるさま、おとなびたまふままに、ただかの御顔を脱ぎすべたまへり。御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへる薫りうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。いとかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれと、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしさの空恐ろしうおぼえたまふなりけり。

大将の君は、宮をいと恋しう思ひきこえたまへど、あさましき御心のほどを、時々思ひ知るさまにも見せたてまつらむと、念じつつ過ぐしたまふに、人わろくつれづれに思さるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり。故母御息所の御兄の律師の籠もりたまへる坊にて、法文など読み、行なひせむと思して、二三日おはするに、あはれなること多かり。紅葉やうやう色づきわ



たりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、故里も忘れぬべく思さる。法師ばらの才ある限り召し出でて、論議せさせて聞こしめさせたまふ。所からに、いとど世の中の常なさを思し明かしても、なほ憂き人しもぞ、と思し出でらるるおし明け方の月影に、法師ばらの闕伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも、はかなげなれど、このかたのいとなみは、この世もつれづれならず、後の世はた、頼もしげなり。さもあぢきなき身をもて悩むかな、など思し続けたまふ。律師のいと尊き声にて、「念仏衆生撰取不捨」と、うちのべて行なひたまへるはいとうらやましかれば、なぞやと思しなるに、まづ姫君の心にかかりて思ひ出でられたまふぞ、いとわろき心なるや。

例ならぬ日数もおぼつかなくのみ思さるれば、御文ばかりぞしげう聞こえたまふめる。

行き離れぬべしやと試みはべる道なれど、つれづれも慰めがたう、心細さまさりてなむ。聞きさしたることありて、やすらひはべるほど、いかに。

など、陸奥紙にうちとけ書きたまへるさへぞめでたき。

浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき

など、こまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返し、白き色紙に、

風吹けばまづぞ乱るる色変はる浅茅が露にかかるささがに

とのみありて、「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」と独りごちて、うつくしとほほ笑みたまふ。常に書き交はしたまへば、わが御手にいとよく似て、今すこしなまめかしう、女しきところ書き添へたまへり。何ごとにつけても、けしうはあらず生ほし立てたりかし、と思ほす。

吹き交ふ風も近きほどにて、齋院にも聞こえたまひけり。中将の君に、

かく旅の空になむもの思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらかし。

など怨みたまひて、御前には、

かけまくはかしこけれどもそのかみの秋思ほゆる木綿櫛かな

昔を今にと思ひたまふるもかひなく、とり返されむものやうに。

と、なれなれしげに、唐の浅緑の紙に、櫛に木綿つけなど、神々しうしなして  
参らせたまふ。御返り、中将、

紛るることなくて、来し方のことを思ひたまへ出づるつれづれのままには、  
思ひやりきこえさすること多くはべれど、かひなくのみなむ。

と、すこし心とどめて多かり。御前のは、木綿の片端に、

そのかみやいかがはありし木綿櫛心にかけてしのぶらむゆゑ

近き世に。

とぞある。御手こまやかにあらねど、らうらうじう、草などをかしうなりに  
けり、まして朝顔もねびまさりたまへらむかし、と思ほゆるもただならず、恐  
ろしや。あはれ、このころぞかし、野の宮のあはれなりしこと、と思し出でて、  
あやしう、やうのものと、神恨めしう思さるる御癖の見苦しきぞかし。わりな  
う思さば、さもありぬべかりし年ごろは、のどかに過ぐいたまひて、今は悔し  
う思さるべかめるも、あやしき御心なりや。院も、かくなべてならぬ御心ばへ  
を見知りきこえたまへれば、たまさかなる御返りなどは、えしももて離れきこ  
えたまふまじかめり。すこしあいなきことなりかし。

六十巻といふ文読みたまひ、おぼつかなきところどころ解かせなどしておは  
しますを、山寺にはいみじき光行なひ出だしたてまつれりと、仏の御面目あり  
と、あやしの法師ばらまでよろこびあへり。しめやかにて世の中を思ほしつづ  
くるに、帰らむことももの憂かりぬべけれど、人一人の御こと思しやるがほだ  
しなれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦経いかめしうせさせたまふ。  
あるべき限り、上下の僧ども、そのわたりの山賤まで物賜び、尊きことの限り

を尽くして出でたまふ。見たてまつり送るとて、このもかのもとに、あやしきはふるひどもも集りてゐて、涙を落としつつ見たてまつる。黒き御車のうちに、藤の御袂にやつれたまへれば、ことに見えたまはねど、ほのかなる御ありさまを、世になく思ひきこゆべかめり。

女君は、日ごろのほどにねびまさりたまへる心地して、いといたうしづまりたまひて、世の中いかがあらむと思へるけしきの、心苦しうあはれにおぼえたまへば、あいなき心のさまさま乱るるやしるからむ、「色変はる」とありしもらうたうおぼえて、常よりことに語らひきこえたまふ。山づとに持たせたまへりし紅葉、御前に御覧じ比ぶれば、ことに染めましける露の心も見過ぐしがたう、おぼつかなさも人悪るきまでおぼえたまへば、ただおほかたにて宮に参らせたまふ。命婦のもとに、

入らせたまひにけるを、めづらしきこととうけたまはるに、宮の間の事、おぼつかなくなりはべりにければ、静心なく思ひたまへながら、行ひもつとめむなど、思ひ立ちはべりし日数を、心ならずやとてなむ、日ごろになりはべりにける。紅葉は、一人見はべるに、錦暗う思ひたまふればなむ。折よくて御覧せさせたまへ。

などあり。げにいみじき枝どもなれば、御目とまるに、例のいささかなるものありけり。人びと見たてまつるに、御顔の色も移ろひて、なほかかる心の絶えたまはぬこそ、いと疎ましけれ、あたら思ひやり深うものしたまふ人の、ゆくりなくかうやうなること折々混ぜたまふを、人もあやしと見るらむかし、と心づきなく思されて、瓶に挿させて、廂の柱のもとにおしやらせたまひつ。おほかたのことども、宮の御事に触れたることなどをば、うち頼めるさまに、すくよかなる御返りばかり聞こえたまへるを、さも心かしこく、尽きせずもと、恨めしうは見たまへど、何ごとも後見きこえならひたまひにたれば、人あやしと

見とがめもこそすれと思して、まかでたまふべき日参りたまへり。

まづ内の御方に参りたまへれば、のどやかにおはしますほどにて、昔今の御物語聞こえたまふ。御かたちも、院にいとよう似たてまつりたまひて、今すこしなまめかしき気添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあはれと見たてまつりたまふ。尚侍の君の御ことも、なほ絶えぬさまに聞こし召し、けしき御覧ずる折もあれど、何かは、今はじめたることならばこそあらめ、さも心交はさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし、とぞ思しなして、咎めさせたまはざりける。よろづの御物語、文の道のおぼつかなく思さるることどもなど問はせたまひて、また好き好きしき歌語りなども、かたみに聞こえ交はさせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、かたちのをかしくおはせしなど語らせたまふに、我もうちとけて、野の宮のあはれなりし曙も、みな聞こえ出でたまひてけり。

二十日の月やうやうさし出でて、をかしきほどなるに、「遊びなどもせまほしきほどかな」とのたまはす。「中宮の今宵まかでたまふなる、とぶらひにものはべらむ。院ののたまはせおくことはべりしかば、また後見仕うまつる人もはべらぎめるに、春宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられはべりて」と奏したまふ。「春宮をば、今の御子になして、などのたまはせ置きしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさしわきたるさまにも何ごとをかは、とてこそ。年のほどよりも御手などのわざとかしこうこそものしたまふべけれ。何ごとにもはかばかしからぬみづからの面起こしになむ」とのたまはすれば、「おほかた、したまふわざなど、いとさとく大人びたるさまにもものしたまへど、まだいと片なりに」など、その御ありさまも奏したまひてまかでたまふに、大宮の御兄の藤大納言の子の頭の弁といふが、世にあひ、はなやかなる若人にて、思ふことなきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大将の御前駆を忍びやか

に追へば、しばし立ちとまりて、「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」といとうゆるるかにうち誦じたるを、大将いとまばゆしと聞きたまへど、咎むべきことかは。後の御けしきは、いと恐ろしうわづらはしげにのみ聞こゆるを、かう親しき人びとも、けしきだち言ふべかめることどももあるに、わづらはしう思されけれど、つれなうのみもてなしたまへり。「御前にさぶらひて、今まで更かしはべりにける」と聞こえたまふ。

月のはなやかなるに、昔かうやうなる折は、御遊びせさせたまひて、今めかしうもてなさせたまひしなど、思し出づるに、同じ御垣の内ながら、変はれること多く悲し。

九重に霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな

と命婦して聞こえ伝へたまふ。ほどなければ、御けはひもほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、つらさも忘られて、まづ涙ぞ落つる。

「月影は見し世の秋に変はらぬを隔つる霧のつらくもあるかな

霞も人のとか、昔もはべりけることにや」など聞こえたまふ。宮は、春宮を飽かず思ひきこえたまひて、よろづのことを聞こえさせたまへど、深うも思し入れたらぬを、いとうしろめたく思ひきこえたまふ。例はいととく大殿籠もるを、出でたまふまでは起きたらむ、と思すなるべし。恨めしげに思したれど、さすがにえ慕ひきこえたまはぬを、いとあはれと見たてまつりたまふ。

大将、頭の弁の誦じつることを思ふに、御心の鬼に、世の中わづらはしうおぼえたまひて、尚侍の君にも訪れきこえたまはで久しうなりにけり。初時雨、いつしかとけしきだつに、いかが思しけむ、かれより、

木枯の吹くにつけつつ待ちし間におぼつかなさのころも経にけり

と聞こえたまへり。折もあはれに、あながちに忍び書きたまへらむ御心ばへも憎からねば、御使とどめさせて、唐の紙ども入れさせたまへる御厨子開けさせ

たまひて、なべてならぬを選び出でつつ、筆なども心ことにひきつくろひたまへるけしき艶なるを、御前なる人びと、誰ればかりならむ、とつきしろふ。

聞こえさせてもかひなきもの懲りにこそ、むげにくづほれにけれ。身のみもの憂きほどに、

あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての空の時雨とや見る

心の通ふならば、いかに眺めの空ももの忘れしはべらむ。

など、こまやかになりにけり。かうやうにおどろかしきこゆるたぐひ多かめれど、情けなからずうち返りごちたまひて、御心には深う染まざるべし。

中宮は、院の御はてのことにうち続き、御八講のいそぎをさまざまに心づかひせさせたまひけり。霜月のついたちごろ、御国忌なるに雪いたう降りたり。大将殿より宮に聞こえたまふ。

別れにし今日は来れども見し人に行き逢ふほどをいつと頼まむ  
いづこにも、今日はもの悲しう思さるるほどにて、御返りあり。

ながらふるほどは憂けれど行きめぐり今日はその世に逢ふ心地して  
ことにつくろひてもあらぬ御書きざまなれど、あてに気高きは思ひなしなるべし。筋変はり今めかしうはあらねど、人にはことに書かせたまへり。今日はこの御ことも思ひ消ちて、あはれなる雪の雫に濡れ濡れ行ひたまふ。

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々には供養せさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙篋の飾りも、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極楽思ひやらる。初めの日は先帝の御料、次の日は母後の御ため、またの日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましささえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり。今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、薪こるほど

よりうちはじめ、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちもさまさまの捧物ささげてめぐりたまふに、大将殿の御用意など、なほ似るものなし。常におなじことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをば、いかがはせむ。

果ての日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし仏に申させたまふに、みな人びと驚きたまひぬ。兵部卿宮、大将の御心も動きて、あさましと思す。親王は、なかばのほどに立ちて入りたまひぬ。心強う思し立つさまのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよしのたまはず。御伯父の横川の僧都、近う参りたまひて、御髪下ろしたまふほどに、宮の内ゆすりてゆゆしう泣きみちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御けしきにも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。参りたまへる人びとも、おほかたのこのさまもあはれに尊ければ、みな袖濡らしてぞ帰りたまひける。故院の御子たちは、昔の御ありさまを思し出づるに、いとどあはれに悲しう思されて、みなとぶらひきこえたまふ。大将は立ちとまりたまひて、聞こえ出でたまふべきかたもなく、暮れまどひて思さるれど、なかさしもと人見たてまつるべければ、親王など出でたまひぬる後にぞ御前に参りたまへる。

やうやう人静まりて、女房ども鼻うちかみつ、所々に群れるたり。月は隈なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔のこと思ひやらるるに、いと堪へがたう思さるれど、いとよう思し静めて、「いかやうに思し立たせたまひて、かうにはかには」と聞こえたまふ。「今はじめて思ひたまふることにもあらぬを、ものさわがしきやうなりつれば、心乱れぬべく」など、例の命婦して聞こえたまふ。御簾のうちのけはひ、そこら集ひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかに振る舞ひなして、うち身じろきつつ、悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆ

るけしき、ことわりにいみじと聞きたまふ。風はげしう吹きふぶきて、御簾のうちの匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薰りあひ、めでたく、極楽思ひやらるる夜のさまなり。春宮の御使も参れり。のたまひしさま思ひ出できこえさせたまふにぞ、御心強さも堪へがたくて、御返りも聞こえさせやらせたまはねば、大将ぞ、言加はへ聞こえたまひける。誰も誰も、ある限り心収まらぬほどなれば、思すことどももえうち出でたまはず。

「月のすむ雲居をかけて慕ふともこの世の闇になほや惑はむ

と思ひたまへらるるこそかひなく。思し立たせたまへる恨めしきは限りなう」とばかり聞こえたまひて、人びと近うさぶらへば、さまざま乱るる心のうちをだに、え聞こえあらはしたまはず、いぶせし。

「おほふかたの憂きにつけては厭へどもいつかこの世を背き果つべき

かつ濁りつつ」など、かたへは御使の心しらひなるべし。あはれのみ尽きせねば胸苦しうてまかだたまひぬ。

殿にても、わが御方に一人うち臥したまひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるるにも、春宮の御ことのみぞ心苦しき。母宮をだにおほやけがたさまにと思しおきしを、世の憂さに堪へずかくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ、我さへ見たてまつり捨てては、など思し明かすこと限りなし。今はかかるかたがさまの御調度どもをこそは、と思せば、年の内にと急がせたまふ。命婦の君も御供になりければ、それも心深うとぶらひたまふ。詳しう言ひ続けむにこととしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かうやうの折こそをかしき歌など出で来るやうもあれ、さうざうしや。参りたまふも、今はつつましき薄らぎて、御みづから聞こえたまふ折もありけり。思ひしめてしことは、さらに御心に離れねど、ましてあるまじきことなりかし。



年も変はりぬれば、内わたりはなやかに、内宴、踏歌など聞きたまふも、もののみあはれにて、御行なひしめやかにしたまひつつ、後の世のことをのみ思すに頼もしく、むつかしかりしこと離れて思ほさる。常の御念誦堂をばさるものにて、ことに建てられたる御堂の、西の対の南にあたりて、すこし離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる御行なひせさせたまふ。大将、参りたまへり。改まるしるしもなく、宮の内のどかに、人目まれにて、宮司どもの親しきばかり、うちうなだれて、見なしにやあらむ、屈しいたげに思へり。白馬ばかりぞ、なほ引きかへぬものにて、女房などの見ける。所狭う参り集ひたまひし上達部など、道を避きつつひき過ぎて、向かひの大殿に集ひたまふを、かかるべきことなれど、あはれに思さるるに、千人にも変へつべき御さまにて、深うたづね参りたまへるを見るに、あいなく涙ぐまる。

客人も、いともあはれなるけしきに、うち見まはしたまひて、とみに物ものたまはず。さま変はれる御住まひに、御簾の端、御几帳も青鈍にて、隙々よりほの見えたる薄鈍、梶子の袖口など、なかなかなまめかしう奥ゆかしう思ひやられたまふ。解けわたる池の薄氷、岸の柳のけしきばかりは時を忘れぬなど、さまざま眺められたまひて、「むべも心ある」と忍びやかにうち誦じたまへる、またなうなまめかし。

ながめかる海人のすみかとするからにまづしほたるる松が浦島  
と聞こえたまへば、奥深うもあらず、みな仏に譲りきこえたまへる御座所なれば、すこしけ近き心地して、

ありし世のなごりだになき浦島に立ち寄る波のめづらしきかな

とのたまふもほの聞こゆれば、忍ぶれど、涙ほろほるとこぼれたまひぬ。世を思ひ澄ましたる尼君たちの見るらむもはしたなければ、言少なにて出でたまひぬ。「さもたぐひなくねびまさりたまふかな。心もとなきところなく世に栄え、

時にあひたまひし時はさる一つものにて、何につけてか世を思し知らむと推し量られたまひしを、今はいといたう思ししづめて、はかなきことにつけても、ものあはれなるけしきさへ添はせたまへるは、あいなう心苦しうもあるかな」など、老いしらへる人びと、うち泣きつつめできこゆ。宮も思し出づること多かり。

司召のころ、この宮の人は賜はるべき官も得ず、おほかたの道理にても、宮の御賜はりにても、かならずあるべき加階などをだにせずなどして、嘆くたぐひいと多かり。かくても、いつしかと、御位を去り、御封などの停まるべきにもあらぬを、ことつけて変はること多かり。みなかねて思し捨ててし世なれど、宮人どももよりどころなげに悲しと思へるけしきどもにつけてぞ、御心動く折々あれど、わが身をなきになしても春宮の御代をたひらかにおはしまさば、とのみ思しつつ、御行なひたゆみなくつとめさせたまふ。人知れず、危ふくゆゆしう思ひきこえさせたまふことしあれば、我にその罪を軽めてゆるしたまへ、と仏を念じきこえたまふに、よろづを慰めたまふ。大将も、しか見たてまつりたまひて、ことわりに思す。この殿の人どもも、また同じきさまに、からきことのみあれば、世の中はしたなく思されて、籠もりおはす。

左の大臣も、公私ひき変へたる世のありさまに、もの憂く思して、致仕の表たてまつりたまふを、帝は、故院のやむごとなく重き御後見と思して、長き世のかためと聞こえ置きたまひし御遺言を思し召すに、捨てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひなきことと、たびたび用ゐさせたまはねど、せめて返さひ申したまひて、籠もりゐたまひぬ。今はいとど一族のみ返す返す栄えたまふこと限りなし。世の重しとものしたまへる大臣の、かく世を逃がれたまへば、おほやけも心細う思され、世の人も心ある限りは嘆きけり。

御子どもは、いづれともなく人がらめやすく世に用ゐられて、心地よげにも

のしたまひしを、こよなう静まりて、三位中将なども、世を思ひ沈めるさま、こよなし。かの四の君をも、なほかれがれにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心解けたる御婿のうちにも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず、大将殿かう静かにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、ましてことわりと思しなして、常に参り通ひたまひつつ、学問をも遊びをも、もろともにしたまふ。いにしへもの狂ほしきまで、挑みきこえたまひしを思し出でて、かたみに今もはかなきことにつけつつ、さすがに挑みたまへり。春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊き事どもをせさせたまひなどして、またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻塞ぎなどやうのすさびわざどもをもしなど、心をやりて、宮仕へをもをさをさしたまはず、御心にまかせてうち遊びておはするを、世の中には、わづらはしきことども、やうやう言ひ出づる人びとあるべし。

夏の雨のどかに降りて、つれづれなるころ、中将、さるべき集どもあまた持たせて参りたまへり。殿にも、文殿開けさせたまひて、まだ開かぬ御厨子どもの、めづらしき古集のゆゑなからぬ、すこし選り出でさせたまひて、その道の人びと、わざとはあらねどあまた召したり。殿上人も大学のも、いと多う集ひて、左右に、こまどりに方分かせたまへり。賭物どもなど、いと二なくて、挑みあへり。塞ぎもて行くままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふところどころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。「いかでかうしもたらひたまひけむ、なほさるべきにて、よろづのこと人にすぐれたまへるなりけり」とめできこゆ。つひに右負けにけり。

二日ばかりありて、中将負けわざしたまへり。ことことしうはあらでなまめきたる桧破籠ども、賭物などさまざまにて、今日も例の人びと多く召して文な

ど作らせたまふ。階のものと薔薇、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう、かたちもをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、高砂を出だして謡ふ、いとうつくし。大将の君、御衣脱ぎてかづけたまふ。例よりはうち乱れたまへる御顔の匂ひ、似るものなく見ゆ。薄物の直衣、単衣を着たまへるに、透きたまへる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて、涙落しつゝみたり。「逢はましものを小百合ばの」と謡ふとぢめに、中将、御土器参りたまふ。

それもがと今朝開けたる初花に劣らぬ君が匂ひをぞ見る  
ほほ笑みて取りたまふ。

「時ならで今朝咲く花は夏の雨にしをれにけらし匂ふほどなく  
衰へにたるものを」と、うちさうどきて、らうがはしく聞こし召しなすを、咎め出でつつしひきこえたまふ。多かめりし言どもも、かうやうなる折の、まほならぬこと数々に書きつくる、心地なきわざとか、貫之が諫め、たうるる方にて、むつかしければ、とどめつ。みなこの御ことをほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作り続けたり。わが御心地にもいたう思しおごりて、「文王の子、武王の弟」とうち誦じたまへる、御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかのたまはむとすらむ。そればかりやまた心もとなからむ。兵部卿宮も常に渡りたまひつつ、御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御遊びどもなり。

そのころ、かむの君まかでたまへり。わらは病に久しう悩みたまひて、まじ

なひなども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたりたまひぬれば、誰も誰もうれしう思すに、例のめづらしき隙なるをと、聞こえ交はしたまひて、わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。いと盛りに、にぎははしきはひしたまへる人の、すこしうち悩みて痩せ瘦せになりたまへるほど、いとをかしげなり。後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びてたび重なりゆけば、けしき見る人びともあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなむと啓せず。大臣はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、神いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて、近う集ひ参るに、いとわりなく、出でたまはむ方なくて、明け果てぬ。御帳のめぐりにも人びとしげく並み見たれば、いと胸つぶらはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。

神鳴り止み、雨すこしを止みぬるほどに、大臣渡りたまひて、まづ宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにてえ知りたまはぬに、軽らかにふとはひ入りたまひて、御簾引き上げたまふままに、「いかにぞ、いとうたてありつる夜のさまに、思ひやりきこえながら、参り来でなむ。中将、宮の亮などさぶらひつや」などのたまふけはひの舌疾にあはつけきを、大将は、もののまぎれにも、左の大臣の御ありさま、ふと思し比べられて、たとしへなうぞほほ笑まれたまふ。げに、入り果ててものたまへかしな。かむの君、いとわびしう思されて、やをらるぎり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、なほ悩ましう思さるるにや、と見たまひて、「など御けしきの例ならぬ。もののけなどのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」とのたまふに、薄二藍なる帯の御衣にまつはれて引き出でられたるを、見つけたまひて、あやしと思すに、また畳紙の手習ひなどしたる、御几帳のもとに落ちたり。これはいかなる物どもぞ、と御心おどろか

れて、「かれは誰れがぞ。けしき異なるものさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる、紛らはすべきかたもなければ、いかがはいらへきこえたまはむ。我にもあらでおはするを、子ながらも恥づかしと思すらむかしと、さばかりの人は思し憚るべきぞかし。されどいと急に、のどめたるところおはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、畳紙を取りたまふままに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、慎ましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顔ひき隠して、とかう紛らはす。あさましうめざましう心やましけれど、ひたおもてにはいかでか現はしたまはむ。目もくるる心地すれば、この畳紙を取りて、寢殿に渡りたまひぬ。かむの君は、我かの心地して死ぬべく思さる。大将殿も、いとほしう、つひに用なき振る舞ひのつもりて、人のもどきを負はむとすること、と思せど、女君の心苦しき御けしきをとかく慰めきこえたまふ。

大臣は、思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性に、いとど老いの御ひがみさへ添ひたまふに、これは何ごとにかはとどこほりたまはむ、ゆくゆくと宮にも愁へきこえたまふ。「かうかうのことなむはべる。この畳紙は、右大将の御手なり。昔も心ゆるされでありそめにけることなれど、人柄によるづの罪をゆるして、さても見むと言ひはべりし折は、心もとどめずめざましげにもてなされにしかば、やすからず思ひたまへしかど、さるべきにこそはとて、世にけがれたりとも思し捨つまじきを頼みにて、かく本意のごとくたてまつりながら、なほその憚りありて、うけばりたる女御なども言はせたまはぬをだに、飽かず口惜しう思ひたまふるに、またかかることさへはべりければ、さらにいと心憂くなむ思ひなりはべりぬる。男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、我が

ためもよかるまじきことなれば、よもさる思ひやりなきわざし出でられじなむ、時の有職と天の下をなびかしたまへるさまことなめれば、大将の御心を疑ひはべらざりつる」などのたまふに、宮はいとどしき御心なれば、いとものしき御けしきにて、「帝と聞こゆれど、昔よりみな人思ひ落としきこえて、致仕の大臣も、またなくかしづく一つむすめを、このかみの坊にておはするにはたてまつらで、弟の源氏にていときなきが元服の添ひ臥しにとり分き、またこの君をも宮仕へにと心ぎしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰れも誰れもあやしとやは思したりし。みなかの御方にこそ御心寄せはべるめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひたまふめれど、いとほしさに、いかでさる方にてても、人に劣らぬさまにもてなしきこえむ、さばかりねたげなりし人の見るところもあり、などこそは思ひはべりつれど、忍びて我が心の入る方になびきたまふにこそははべらめ。齋院の御ことはましてきもあらむ。何ごとにつけても、おほやけの御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の御世、心寄せ殊なる人なればことわりになむあめる」と、すくすくしうのたまひ続けるに、さすがにいとほしう、など聞こえつることぞと思さるれば、「さはれ、しばしこのこと漏らしはべらじ。内にも奏せさせたまふな。かくのごと罪はべりとも、思し捨つまじきを頼みにて、あまえてはべるなるべし。うちうちに制しのたまはむに、聞きはべらずは、その罪に、ただみづから当たりはべらむ」など、聞こえ直したまへど、ことに御けしきも直らず。かく一所におはして隙もなきに、つつむところなく、さて入りものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは、と思しなすに、いとどいみじうめざましく、このついでに、さるべきことども構へ出でむによきたよりなり、と思しめぐらすべし。

花  
散  
里



人知れぬ御心づからのもの思はしきは、いつとなきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへわづらはしう思し乱ることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。麗景殿と聞こえしは、宮たちもおはせず、院隠れさせたまひて後、いよいよあはれなる御ありさまを、ただこの大将殿の御心にもて隠されて過ぐしたまふなるべし。御おとうとの三の君、内わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れも果てたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心をのみ尽くし果てたまふべかめるをも、このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには、思ひ出でたまふには忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。

何ばかりの御よそひなくうちやつして、御前などもなく、忍びて中川のほどおはし過ぐるに、ささやかなる家の、木立などよしばめるに、よく鳴る琴をあづまに調べて、搔き合はせにぎははしく弾きなすなり。御耳とまりて、門近なる所なれば、すこしさし出でて見入れたまへば、大きな桂の木の追ひ風に、祭のころ思し出でられて、そこはかたなくけはひをかしきを、ただ一目見たまひし宿りなりと見たまふ、ただならず。ほど経にける、おぼめかしくや、とつつましけれど、過ぎがてにやすらひたまふ、折しもほととぎす鳴きて渡る。もよほしきこえ顔なれば、御車おし返させて、例の惟光入れたまふ。

をちかへりえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に  
 寝殿とおぼしき屋の西のつまに人びとゐたり。先々も聞きし声なれば、声づくりけしきとりて、御消息聞こゆ。若やかなるけしきどもして、おぼめくなるべし。

ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおぼつかかな五月雨の空

ことさらたどると見れば、「よしよし、植ゑし垣根も」とて出づるを、人知れ

ぬ心には、ねたうもあはれにも思ひけり。さもつつむべきことぞかし、ことわりにもあれば、さすがなり。かやうの際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづ思し出づ。いかなるにつけても、御心の暇なく、苦しげなり。年月を経ても、なほかやうに、見しあたり情け過ぐしたまはぬにしも、なかなかあまたの人のもの思ひぐさなり。

かの本意の所は、思しやりつるもしるく、人目なく静かにておはするありさまを見たまふも、いとあはれなり。まづ女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き蔭ども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしき方には思したりしものを、など思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかきつらね思されて、うち泣きたまふ。

ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。慕ひ来にけるよ、と思さるるほども、艶なりかし。「いかに知りてか」など、忍びやかにうち誦んじたまふ。

「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

いにしへの忘れがたき慰めには、なほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ紛るることも、数添ふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語りもかきくづすべき人、少なうなりゆくを、まして、つれづれも紛れなく思さるらむ」と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれに思し続けたる御けしきの浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞ添ひにける。

人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ

とばかりのたまへる、さはいへど人にはいとことなりけり、と思し比べらる。

西面には、わざとなく忍びやかにうち振る舞ひたまひて覗きたまへるも、めづらしきに添へて、世に目なれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例のなつかしく語らひたまふも、思さぬことにあらざるべし。かりにも見たまふかぎりは、おしなべての際にはあらず、さまざまにつけて、いふかひなしと思さるるはなければにや、憎げなく、我も人も情けを交はしつつ過ぐしたまふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくに変はるもことわりの世のさがと思ひなしたまふ。ありつる垣根も、さやうにてありさま変はりたるあたりなりけり。

須

磨

世の中いとわづらはしくはしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもやと思しなりぬ。かの須磨は、昔こそ人の住みかなどもありけれ、今はいと里離れ心すぐくて、海人の家だにまれになど聞きたまへど、人しげくひたたけたらむ住まひはいと本意なかるべし、さりとて都を遠ざからむも古里おぼつかかなかるべきを、人わるくぞ思し乱るる。

よろづのこと来し方行く末思ひ続けたまふに、悲しきこといとさまざまなり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむことを思すには、いと捨てがたきこと多かるなかにも、姫君の明け暮れにそへては思ひ嘆きたまへるさまの心苦しうあはれなるを、行きめぐりてもまた逢ひ見むことをかならずと思さむにてだに、なほ一二日のほど、よそよそに明かし暮らす折々だにおぼつかなきものにおぼえ、女君も心細うのみ思ひたまへるを、幾年そのほどと限りある道にもあらず、逢ふを限りに隔たりゆかむも、定めなき世に、やがて別るべき門出にもや、といみじうおぼえたまへば、忍びてもろともにもや、と思し寄る折あれど、さる心細からむ海づらの波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて引き具したまへらむもいとつきなく、わが心にもなかなかもの思ひのつまなるべきを、など思し返すを、女君は、いみじからむ道にも、後れきこえずだにあらばとおもむけて、恨めしげに思いたり。

かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ、心細くあはれなる御ありさまを、この御蔭に隠れてものしたまへば、思し嘆きたるさまもいとことわりなり。なほざりにてもほのかに見たてまつり通ひたまひし所々、人知れぬ心をくだきたまふ人ぞ多かりける。入道の宮よりも、ものの聞こえやまたいかがりなさむと、わが御ためつつましけれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。昔かやうに相思し、あはれをも見せたまはましかば、とうち思ひ出でたまふにも、さもさまざまに心のみ尽くすべかりける人の御契りかな、とつらく思ひきこえ

たまふ。三月二十日あまりのほどになむ、都を離れたまひける。人にいつとしも知らせたまはず、ただいと近う仕うまつり馴れたる限り七八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ。さるべき所々に、御文ばかりうち忍びたまひしにも、あはれと忍ぶるばかり尽くいたまへるは、見どころもありぬべかりしかど、その折の心地の紛れに、はかばかしうも聞き置かずなりにけり。

二三日かねて、夜に隠れて大殿に渡りたまへり。網代車のうちやつれたるにて、女車のやうにて隠ろへ入りたまふも、いとあはれに夢とのみ見ゆ。御方いと寂しげにうち荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔さぶらひし人のなかに、まかで散らぬ限り、かく渡りたまへるをめぐらしがりきこえて、参う上り集ひて見たてまつるにつけても、ことにもの深からぬ若き人びとさへ、世の常なき思ひ知られて涙にくれたり。若君はいとうつくしうて、され走りおはしたり。「久しきほどに忘れぬこそあはれなれ」とて膝に据ゑたまへる御けしき、忍びがたげなり。

大臣こなたに渡りたまひて、対面したまへり。「つれづれに籠もらせたまへらむほど、何とはべらぬ昔物語も、参りて聞こえさせむと思うたまへれど、身の病重きにより、おほやけにも仕うまつらず、位をも返したてまつりてはべるに、私ざまには腰のべてなむどもの聞こえひがひがしかるべきを、今は世の中憚るべき身にもはべらねど、いちはやき世のいと恐ろしうはべるなり。かかる御ことを見たまふるにつけて、命長きは心憂く思うたまへらるる世の末にもはべるかな。天の下をさかさまになしても、思うたまへ寄らざりし御ありさまを見たまふれば、よろづいとあぢきなくなむ」と聞こえたまひて、いたうしほたれたまふ。「とあることもかかるとも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。さしてかく官爵を取られず、あさはかなることにかかづらひてだに、おほやけのかしこまりなる人

のうつしぎまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに人の国にもしはべるなるを、遠く放ちつかはすべき定めなどもはべるなるは、さま異なる罪に当たるべきにこそはべるなれ。濁りなき心にまかせてつれなく過ぐしはべらむいと懼り多く、これより大きな恥にのぞまぬさきに世を逃れなむと思うたまへ立ちぬる」など、こまやかに聞こえたまふ。昔の御物語、院の御こと、思しのたまはせし御心ばへなど聞こえ出でたまひて、御直衣の袖もえ引き放ちたまはぬに、君もえ心強くもてなしたまはず。若君の何心なく紛れありきて、これかれに馴れきこえたまふを、いみじと思いたり。「過ぎはべりにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲しびはべるを、この御ことになむ、もしはべる世ならましかば、いかやうに思ひ嘆きはべらまし、よくぞ短くて、かかる夢を見ずなりにけると、思うたまへ慰めはべり。幼くものしたまふが、かく齡過ぎぬるなかにとまりたまひて、なづさひきこえぬ月日や隔たりたまはむと思ひたまふるをなむ、よろづのことよりも悲しうはべる。いにしへの人も、まことに犯しあるにてしも、かかることに当たらざりけり。なほさるべきにて、人のみかどにもかかるたぐひ多うはべりけり。されど、言ひ出づる節ありてこそ、さることとはべりけれ、とぎまかうぎまに思ひたまへ寄らむかたなくなむ」など多くの御物語聞こえたまふ。

三位中将も参りあひたまひて、大御酒など参りたまふに、夜更けぬれば泊まりたまひて、人びと御前にさぶらはせたまひて物語などせさせたまふ。人よりはこよなう忍び思す中納言の君、言へばえに悲しう思へるさまを、人知れずあはれと思す。人みな静まりぬるに、とりわきて語らひたまふ。これにより泊まりたまへるなるべし。明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭のいと白き庭に薄く霧りわたるりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれにおほくたちまされり。

隅の高欄におしかかりて、とばかり眺めたまふ。中納言の君、見たてまつり送らむとにや、妻戸おし開けてゐたり。「また対面あらむことこそ、思へばいと難けれ。かかりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月ごろ、さしも急がで隔てしよ」などのたまへば、ものも聞こえず泣く。

若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より御消息聞こえたまへり。

身づから聞こえまほしきを、かきくらす乱り心地ためらひはべるほどに、

いと夜深う出でさせたまふなるも、さま変はりたる心地のみしはべるかな。

心苦しき人のいぎたなきほどは、しばしもやすらはせたまはで。

と聞こえたまへれば、うち泣きたまひて、

鳥辺山燃えし煙もまがふやと海人の塩焼く浦見にぞ行く

御返りともなくうち誦じたまひて、「暁の別れは、かうのみや心尽くしなる。

思ひ知りたまへる人もあらむかし」とのたまへば、「いつとなく、別れといふ文字こそうたてはべるなるなかにも、今朝はなほたぐひあるまじう思うたまへらるるほどかな」と鼻声にて、げに浅からず思へり。「聞こえさせまほしきことも、返す返す思うたまへながら、ただに結ばほればべるほど推し量らせたまへ。いぎたなき人は、見たまへむにつけても、なかなか憂き世逃れがたう思うたまへられぬべければ、心強う思うたまへなして、急ぎまかではべり」と聞こえたまふ。出でたまふほどを人びと覗きて見たてまつる。入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、虎狼だに泣きぬべし。ましていはけなくおはせしほどより見たてまつりそめてし人びとなれば、たとしへなき御ありさまをいみじと思ふ。まことや、御返り、

亡き人の別れやいとど隔たらむ煙となりし雲居ならでは

取り添へて、あはれのみ尽きせず、出でたまひぬる名残、ゆゆしきまで泣きあへり。



殿におはしたれば、わが御方の人びとも、まどろまざりけるけしきにて、所々に群れゐて、あさましとのみ世を思へるけしきなり。侍には、親しう仕まつる限りは、御供に参るべき心まうけして、私の別れ惜しむほどにや、人もなし。さらぬ人は、とぶらひ参るも重き咎めあり、わづらはしきことまされば、所狭く集ひし馬、車の、方もなく寂しきに、世は憂きものなりけりと思し知る。大盤などもかたへは塵ばみて、畳所々引き返したり。見るほどだにかかり、ましていかに荒れゆかむと思す。

西の対に渡りたまへれば、御格子も参らで眺め明かしたまひければ、簀子などに、若き童女所々に臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直姿どもをかしうてゐるを見たまふにも心細う、年月经ば、かかる人びともえしもあり果てでや行き散らむ、など、さしもあるまじきことさへ御目のみとまりけり。「よべはしかしかして夜更けにしかばなむ。例の思はずなるさまにや思しなしつる。かくてはべるほどだに御目離れずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことのおのづから多かりける、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にも情けなきものと心おかれ果てむと、いとほしうてなむ」と聞こえたまへば、「かかる世を見るよりほかに、思はずなることは、何ごとにか」とばかりのたまひて、いみじと思し入れたるさま、人よりことなるを、ことわりぞかし、父親王いとおろかに、もとより思しつきにけるに、まして世の聞こえをわづらはしがりて、訪れきこえたまはず、御とぶらひにだに渡りたまはぬを、人の見るらむことも恥づかし、なかなか知られたてまつらでやみなましを、継母の北の方などの、「にはかなりし幸ひのあわたたしき。あなゆゆしや。思ふ人、方々につけて別れたまふ人かな」とのたまひけるを、さる便りありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えて訪れきこえたまはず。また、頼もしき人もなく、げにぞあはれなる御ありさまなる。「なほ、世に許されがたうて年月を経ば、

巖の中にも迎へたてまつらむ。ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり。おほやけにかしこまりきこゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身を振る舞ふことも、いと罪重かなり。過ちなけれど、さるべきにこそかかるともあらめと思ふに、まして思ふ人具するは例なきことなるを、ひたおもむきにもものぐるほしき世にて、立ちまさることもありなむ」など聞こえ知らせたまふ。日たくるまで大殿籠もれり。

帥宮、三位中将などおはしたり。対面したまはむとて、御直衣などたてまつる。位なき人はとて、無紋の直衣、なかなかいとなつかしきを着たまひてうちやつれたまへる、いとめでたし。御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや痩せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙一目うけて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてきすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ  
と聞こえたまへば、

別れても影だにとまるものならば鏡を見ても慰めてまし  
柱隠れにみ隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、なほこころ見るなかにたぐひなかりけり、と思し知らるる人の御ありさまなり。親王はあはれなる御物語聞こえたまひて、暮るるほどに帰りたまひぬ。

花散里の心細げに思して、常に聞こえたまふもことわりにて、かの人も今ひとたび見ずは、つらしとや思はむと思せば、その夜はまた出でたまふものから、いともの憂くて、いたう更かしておはしたれば、女御、「かく数まへたまひて、立ち寄せたまへること」とよろこびきこえたまふさま、書き続けむもうるさし。いとみじう心細き御ありさま、ただ御蔭に隠れて過ぐいたまへる年月、いとど荒れまさらむほど思しやられて、殿の内いとかすかなり。月おぼろにさ

し出でて、池広く山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巖のなか、思しやらる。

西面は、かうしも渡りたまはずや、とうち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影のなまめかしうしめやかなるに、うち振る舞ひたまへるにほひ、似るものなくていと忍びやかに入りたまへば、すこしるぎり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。「短夜のほどやかばかりの対面もまたはえしもやと思ふこそ、ことなしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先のためしになるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方のことどものたまひて、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入り果つるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、

月影の宿れる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を

いみじと思いたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし雲らむ空な眺めそ

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心を昏らすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

よろづのことどもしたためさせたまふ。親しう仕まつり、世になびかぬ限りの人びと、殿の事とり行なふべき上下定め置かせたまふ。御供に慕ひきこゆる限りは、また選り出でたまへり。かの山里の御住みかの具は、えさらずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそぎて、さるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。所狭き御調度、はなやかなる御よそひなどさらに具したまはず、あやしの山賤めきてもてなしたまふ。さぶらふ人びとよりはじめ、よろづのことみな西の対に聞こえわたしたまふ。領じたまふ御荘、御牧よりはじめて、さるべき所々、券などみなたてまつり置

きたまふ。それよりほかの御倉町、納殿などいふことまで、少納言をはかばか  
しきものに見置きたまへれば、親しき家司ども具して、しろしめすべきさまど  
ものたまひ預く。わが御方の中務、中將などやうの人びと、つれなき御もて  
なしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、何ごとにつけてか、と思へども、  
「命ありてこの世にまた帰るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、こな  
たにさぶらへ」とのたまひて、上下みな参う上らせたまふ。若君の御乳母たち、  
花散里なども、をかしきさまのはさるものにて、まめまめしき筋に思し寄らぬ  
ことなし。

尚侍の御もとに、わりなくして聞こえたまふ。

問はせたまはぬもことわりに思ひたまへながら、今はと世を思ひ果つるほ  
どの憂さもつらさも、たぐひなきことにこそはべりけれ。

逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや流るる瀦の初めなりけむ

と思ひたまへ出づるのみなむ、罪逃れがたうはべりける。

道のほども危ふければ、こまかには聞こえたまはず。女いといみじうおぼえた  
まひて、忍びたまへどあ御袖よりあまるも所狭うなむ。

涙河浮かぶみなわも消えぬべし流れて後の瀬をも待たずて

泣く泣く乱れ書きたまへる御手いとをかしげなり。今ひとたび対面なくやと思  
すはなほ口惜しけれど、思し返して、憂しと思しなすゆかり多うて、おぼろけ  
ならず忍びたまへば、いとあながちにも聞こえたまはずなりぬ。

明日とて、暮には院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ詣でたまふ。

暁かけて月出づるころなれば、まづ入道の宮に参うでたまふ。近き御簾の前に  
御座参りて、御みづから聞こえさせたまふ。春宮の御事をいみじうしろめた  
きものに思ひきこえたまふ。かたみに心深きどちの御物語は、よろづあはれま  
さりけむかし。なつかしうめでたき御けはひの昔に変はらぬに、つらかりし御

心ばへもかすめきこえさせまほしけれど、今さらにうたてと思さるべし、わが御心にもなかなか今ひとときは乱れまさりぬべければ、念じ返して、ただ、「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一節になむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身はなきになしても、宮の御世にだにことなくおはしまさば」とのみ聞こえたまふぞことわりなるや。宮も、みな思し知らるることにしあれば、御心のみ動きて聞こえやりたまはず。大将、よろづのことかき集め、思し続けて泣きたまへるけしき、いと尽きせずなまめきたり。「御山に参りはべるを、御ことつてや」と聞こえたまふに、とみにもものも聞こえたまはず、わりなくためらひたまふ御けしきなり。

見しはなくあるは悲しき世の果てを背きしかひもなくぞ経る

いみじき御心惑ひどもに、思し集むることどもも、えぞ続けさせたまはぬ。

別れしに悲しきことは尽きにしをまたぞこの世の憂さはまされる

月待ち出でて出でたまふ。御供にただ五六人ばかり、下人もむつまじき限りして、御馬にてぞおはする。さらなることなれど、ありし世の御ありきに異なり、みないと悲しう思ふなり。なかに、かの御禊の日、仮の御隨身にて仕うまつりし右近の将監の蔵人、得べきかうぶりもほど過ぎつるを、つひに御簡削られ、官も取られてはしたなければ、御供に参るうちなり。賀茂の下の御社をかれと見渡すほど、ふと思ひ出でられて、下りて、御馬の口を取る。

ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣

と言ふを、げにいかに思ふらむ、人よりけにはなやかなりしものを、と思すも心苦し。君も御馬より下りたまひて、御社のかた拝みたまふ。神にまかり申したまふ。

憂き世をば今ぞ別るとどまらむ名をば糺の神にまかせて

とのたまふさま、ものめでする若き人にて、身にしみてあはれにめでたしと見

たてまつる。

御山に詣うでたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうに思し出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人ぞ、言はむかたなく口惜しきわぎなりける。よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはに承りたまはねば、さばかり思しのたまはせしさまさまの御遺言は、いづちか消え失せにけむ、といふかひなし。御墓は道の草茂くなりて、分け入りたまふほどいとど露けきに、月も隠れて、森の木立木深く心すごし。帰り出でむ方もなき心地して拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

亡き影やいかが見るらむよそへつつ眺むる月も雲隠れぬる

明け果つるほどに帰りたまひて、春宮にも御消息聞こえたまふ。王命婦を御代はりにてさぶらはせたまへば、その御局にとて、

今日なむ都離れはべる。また参りはべらずなりぬるなむ、あまたの憂へにまさりて思うたまへられはべる。よろづ推し量りて啓したまへ。

いつかまた春の都の花を見む時失へる山賤にして

桜の散りすきたる枝につけたまへり。「かくなむ」と御覽ぜさすれば、幼き御心地にも、まめだちておはします。「御返りいかがものしたまふらむ」と啓すれば、「しばし見ぬだに恋しきものを、遠くはましていかに、と言へかし」とのたまはす。ものはかなの御返りやとあはれに見たてまつる。あぢきなきことに御心をくだきたまひし昔のこと、折々の御ありさま思ひ続けらるるにも、もの思ひなくて我も人も過ぐいたまひつべかりける世を、心と思し嘆きけるを、悔しう、わが心ひとつにかからむことのやうにぞおぼゆる。御返りは、

さらに聞こえさせやりはべらず。御前には啓しはべりぬ。心細げに思し召したる御けしきもいみじくなむ。

と、そこはかたなく、心の乱れけるなるべし。

咲きてとく散るは憂けれどゆく春は花の都を立ち帰り見よ

時しあらば。

と聞こえて、名残もあはれなる物語をしつつ、一宮のうち、忍びて泣きあへり。一目も見たてまつれる人は、かく思しくづほれぬる御ありさまを、嘆き惜しきこえぬ人なし。まして常に参り馴れたりしは、知り及びたまふまじきをさめ、御厠人まで、ありがたき御顧みの下なりつるを、しばしにても見たてまつらぬほどや経む、と思ひ嘆きけり。

おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひきこえむ。七つになりたまひしこのかた、帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳をよろこばぬやありし。やむごとなき上達部、弁官などのなかにも多かり。それより下は数知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりて、いちはやき世を思ひ憚りて、参り寄るもなし。世ゆすりて惜しみきこえ、下におほやけをそしり恨みたてまつれど、身を捨ててとぶらひ参らむにも、何のかひかはと思ふにや、かかる折は人わろく恨めしき人多く、世の中はあぢきなきものかな、とのみよろづにつけて思す。その日は女君に御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて、例の夜深く出でたまふ。狩の御衣など、旅の御よそひいたくやつしたまひて、「月出でにけりな。なほすこし出でて見だに送りたまへかし。いかに聞こゆべきこと多くつもりにけりとおぼえむとすらむ。一日二日たまさかに隔たる折だに、あやしういぶせき心地するものを」とて、御簾巻き上げて、端にいぎなひきこえたまへば、女君泣き沈みたまへるを、ためらひてみぎり出でたまへる、月影にいみじうをかしげにてみたまへり。わが身かくてはかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらへたまはむ、とうしろめたく悲しけれど、思し入りたるに、いとどしかる

べければ、

「生ける世の別れを知らで契りつつ命を人に限りけるかな  
はかなし」など、あさはかに聞こえなしたまへば、

惜しからぬ命に代へて目の前の別れをしばしとどめてしがな  
げにさぞ思さるらむ、といと見捨てがたけれど、明け果てなばはしたなかるべ  
きにより、急ぎ出でたまひぬ。

道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。日  
長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかりに、かの浦に着きたまひ  
ぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをか  
さもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるし  
なる。

唐国に名を残しける人よりも行方知らぬ家居をやせむ

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」とうち誦じたまへる  
さま、さる世の古言なれど、珍しう聞きなされ、悲しとのみ御供の人びと思へ  
り。うち顧みたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外の  
心地するに、權の雫も堪へがたし。

ふるさとを峰の霞は隔つれど眺むる空は同じ雲居か  
つらからぬものなくなむ。

おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩垂れつつ侘びける家居近きわたりな  
りけり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり。垣のさまよりは  
じめてめづらかに見たまふ。茅屋ども、葦葺ける廊めく屋などをかしうしつら  
ひなしたり。所につけたる御住まひ、やう変はりて、かからぬ折ならばをか  
うもありなまし、と昔の御心のすさび思し出づ。近き所々の御荘の司召して、  
さるべきことどもなど、良清朝臣、親しき家司にて、仰せ行なふもあはれなり。



時の間に、いと見所ありてしなさせたまふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まりたまふ心地うつならず。国の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕うまつる。かかる旅所ともなう人騒がしけれども、はかばかしう物をものたまひあはすべき人しなければ、知らぬ国の心地していと埋れいたく、いかで年月を過ぐさまし、と思しやらる。

やうやう事静まりゆくに、長雨のころになりて、京のことも思しやらるるに、恋しき人多く、女君の思したりしさま、春宮の御事、若君の何心もなく紛れたまひしなどをはじめ、ここかしこ思ひやりきこえたまふ。京へ人出だし立てたまふ。二条院へたてまつりたまふと、入道の宮のとは、書きもやりたまはず、昏されたまへり。宮には、

松島の海人の苦屋もいかならむ須磨の浦人しほたるるころ

いつとはべらぬなかにも、来し方行く先かきくらし、汀まさりてなむ。

尚侍の御もとに、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、

つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼く海人やいかか思はむ

さまざま書き尽くしたまふ言の葉思ひやるべし。大殿にも宰相の乳母にも、仕うまつるべきことなど書きつかはす。

京には、この御文、所々に見たまひつつ、御心乱れたまふ人びとのみ多かり。二条院の君は、そのままに起きも上がりたまはず、尽きせぬさまに思しこがるれば、さぶらふ人びともこしらへわびつつ、心細う思ひあへり。もてならしたまひし御調度ども、弾きならしたまひし御琴、脱ぎ捨てたまひつる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世になからむ人のやうにのみ思したれば、かつはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈りのことなど聞こゆ。二方に御修法などせさせたまふ。かつは思し嘆く御心静めたまひて、思ひなき世にあらせたてまつりた

まへ、と心苦しきままに祈り申したまふ。旅の御宿直物など調じてたてまつりたまふ。かたりの御直衣、指貫、さま変はりたる心地するもいみじきに、「去らぬ鏡」とのたまひし面影の、げに身に添ひたまへるもかひなし。出で入りたまひし方、寄りゐたまひし真木柱などを見たまふにも胸のみふたがりて、ものをとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の人だにあり、まして馴れむつびきこえ、父母にもなりて生ほし立てならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり。ひたすら世になくなりなむは言はむ方なくて、やうやう忘れ草も生ひやすらむ、聞くほどは近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらで、思すに尽きせずなむ。

入道宮にも、春宮の御事により、思し嘆くさまいとさらなり。御宿世のほどを思すには、いかが浅く思されむ。年ごろは、ただものの聞こえなどのつつましきに、すこし情けあるけしき見せば、それにつけて人のとがめ出づることもこそ、とのみひとへに思し忍びつつ、あはれをも多う御覧じ過ぐし、すくすくしうもてなしたまひしを、かばかり憂き世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくて止みぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし、あはれに恋しうもいかが思し出でざらむ。御返りもすこしこまやかにて、

このころはいとど、

塩垂るることをやくにて松島に年ふる海人も嘆きをぞつむ

かむの君の御返りには、

浦にたく海人だにつつむ恋なればくゆる煙よ行く方ぞなき

さらなることどもはえなむ。

とばかりいささか書きて、中納言の君の中にあり。思し嘆くさまなどいみじう言ひたり。あはれと思ひきこえたまふ節々もあれば、うち泣かれたまひぬ。

姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、浦人の潮くむ袖に比べ見よ波路へだつる夜の衣を

ものの色、したまへるさまなどいときよらなり。何ごともらうらうじうものしたまふを、思ふさまにて、今は他事に心あわたたしう行きかかづらふ方もなく、しめやかにてあるべきものを、と思すに、いみじう口惜しう、夜昼面影におぼえて、堪へがたう思ひ出でられたまへば、なほ忍びてや迎へまし、と思す。またうち返し、なぞや、かく憂き世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて明け暮れ行なひておはす。大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、おのづから逢ひ見てむ、頼もしき人びとものしたまへば、うしろめたうはあらず、と思しなさるるは、なかなか子の道の惑はれぬにやあらむ。

まことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへ尋ね参れり。浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしく、いたり深う見えたり。

なほうつつとは思ひたまへられぬ御住ひをうけたまはるも、明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりとも、年月隔てたまはじと思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめかる伊勢をの海人を思ひやれ藻塩垂るてふ須磨の浦にてよろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになり果つべきにか。と多かり。

伊勢島や潮干の潟に漁りてもいふかひなきは我が身なりけり

ものをあはれと思しけるままにうち置きうち置き書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻き続けて、墨つきなど見所あり。あはれに思ひきこえし人を、ひとふし憂しと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひ倦じて別れたまひにし、と思せば、今にいとほしうかたじけなきものに思ひきこえたまふ。折

からの御文いとあはれなれば、御使さへむつまじうて、二三日据ゑさせたまひて、かしこの物語などせさせて聞こしめす。若やかに、けしきある侍の人なりけり。かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人もおのづからもの遠からで、ほの見たてまつる御さまかたちを、いみじうめでたしと涙落しをりけり。御返り書きたまふ、言の葉思ひやるべし。

かく世を離るべき身と思ひたまへましかば、同じくは慕ひきこえましものを、などなむ。つれづれと心細きままに、

伊勢人の波の上漕ぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを

海人がつむなげきのなかに塩垂れていつまで須磨の浦に眺めむ

聞こえさせむことのいつともはべらぬこそ、尽きせぬ心地しはべれ。

などぞありける。かやうに、いづこにもおぼつかかなからず聞こえかはしたまふ。花散里も、悲しと思しけるままに、書き集めたまへる御心々見たまふ、をかしきも目なれぬ心地して、いづれもうち見つつ慰めたまへど、もの思ひのよほしぐさなめり。

荒れまさる軒のしのぶを眺めつつしげくも露のかかる袖かな

とあるを、げに葎よりほかの後見もなきさまにておはすらむ、と思しやりて、長雨に築地所々崩れてなむと聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御荘の者などもよほさせて仕うまつるべき由のたまはず。

かむの君は、人笑へにいみじう思しくづほるるを、大臣いとかなうしたまふ君にて、せちに宮にも内にも奏したまひければ、限りある女御、御息所にもおはせず、公さまの宮仕へと申し直り、またかの憎かりしゆゑこそいかめしきことも出で来しか、許されたまひて参りたまふべきにつけても、なほ心に染みにし方ぞあはれにおぼえたまける。七月になりて参りたまふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人のそしりもしろしめされず、例の上につとさぶらはせた

まひて、よろづに怨み、かつはあはれに契らせたまふ。御さまかたちもいとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心のうちぞかたじけなき。御遊びのついでに、「その人のなきこそいとさうざうしけれ。いかにましてき思ふ人多からむ。何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、「院の思いのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませたまふに、え念じたまはず。「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむさらに思はぬ。さもなりなむに、いかが思さるべき。近きほどの別れに思ひ落とされむこそねたけれ。生ける世にとは、げによからぬ人の言ひ置きけむ」といとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、「さりや、いづれに落つるにか」とのたまはず。「今まで御子たちのなきこそさうざうしけれ。春宮を院ののたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来れば、心苦しう」など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人びとのあるに、若き御心の強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

須磨にはいとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目を覚まして枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりにけり。琴をすこしかき鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

と歌ひたまへるに、人びとおどろきて、めでたうおぼゆるに、忍ばれで、あい

なう起きみつ、鼻を忍びやかにみわたす。げにいかに思ふらむ、我が身ひとつにより、親はらから、片時立ち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる、と思すにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむと思せば、昼は何くれとうちのたまひ紛らはし、つれづれなるまに、色々の紙を継ぎつつ手習ひをしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまざまの絵どもをかきすさびたまへる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人びとの語り聞こえし海山のありさまを、遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なくかき集めたまへり。「このころの上手にすめる千枝、常則などを召して作り絵仕うまつらせばや」と心もとながりあへり。なつかしうめでたき御さまに、世のもの思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつとさぶらひける。

前裁の花色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふさまのゆゆしうきよらなること、所からはましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏の弟子」と名のりてゆるるかに読みたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うち眺めたまひて、涙こぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへる、ふるさとの女恋しき人びと、心みな慰みにけり。

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

とのたまへば、良清、

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども

民部大輔、

心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

前右近将督、

「常世出でて旅の空なる雁がねもつらに遅れぬほどぞ慰む

友まどはしては、いかにはべらまし」と言ふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれで参れるなりけり。下には思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけり、と思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所々眺めたまふらむかし、と思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのたまはせしほど言はむ方なく恋しく、折々のこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ月の都は遥かなれども

その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身を放たず、かたはらに置きたまへり。

憂しとのみひとへにもものは思ほえで左右にも濡るる袖かな

そのころ、大式は上りける。いかめしく類広く、娘がちにて所狭かりければ、北の方は舟にて上る。浦づたひに逍遙しつつ来るに、他よりもおもしろきわたりなれば心とまるに、大将かくておはすと聞けば、あいなう好いたる若き娘たちは、舟の内さへ恥づかしう心懸想せらる。まして五節の君は、綱手引き過ぐるも口惜しきに、琴の声風につきて遙かに聞こゆるに、所のさま、人の御ほど、物の音の心細さ取り集め、心ある限りみな泣きにけり。帥、御消息聞こえたり。

いと遙かなるほどよりまかり上りては、まづいつしかさぶらひて、都の御物語もとこそ思ひたまへはべりつれ、思ひの外にかくておはしましける御宿をまかり過ぎはべる、かたじけなう悲しうもはべるかな。あひ知りてはべる人びと、さるべきこれかれ、まで来向ひてあまたはべれば、所狭さを思ひたまへ憚りはべることどもはべりて、えさぶらはぬこと。ことさらに参りはべらむ。

など聞こえたり。子の筑前守ぞ参れる。この殿の蔵人になし顧みたまひし人なれば、いとも悲し、いみじと思へども、また見る人びとのあれば、聞こえを思ひてしばしも立ち止まらず。「都離れて後、昔親しかりし人びとあひ見ること難うのみなりにたるに、かくわざと立ち寄りものしたること」とのたまふ。御返りもさやうになむ。守、泣く泣く帰りて、おはする御ありさま語る。帥よりはじめ迎への人びと、まがまがしう泣き満ちたり。五節は、とかくして聞こえたり。

琴の音に弾きとめらるる綱手縄たゆたふ心君知るらめや

好き好きしきも、人な咎めそ。

と聞こえたり。ほほ笑みて見たまふ、いと恥づかしげなり。

心ありて引き手の綱のたゆたはばうち過ぎましや須磨の浦波

いさりせむとは思はざりしはや。

とあり。駅の長に句詩取らする人もありけるを、まして落ちとまりぬべくなむおぼえける。

都には、月日過ぐるままに、帝を初めたてまつりて、恋ひきこゆる折ふし多かり。春宮はまして常に思し出でつつ忍びて泣きたまふ。見たてまつる御乳母、まして命婦の君はいみじうあはれに見たてまつる。入道の宮は春宮の御ことをゆゆしうのみ思ししに、大将もかくさすらへたまひぬるを、いみじう思し嘆か



る。御はらからの御子たち、むつまじう聞こえたまひし上達部など、初めつ方はとぶらひきこえたまふなどありき。あはれなる文を作り交はし、それにつけても世の中にのみめでられたまへば、後の宮聞こしめして、いみじうのたまひけり。「おほやけの勘事なる人は、心に任せてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ、おもしろき家居して、世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する」など、悪しきことども聞こえければ、わづらはしとて、消息聞こえたまふ人なし。

二条院の姫君は、ほど経るままに思し慰む折なし。東の対にさぶらひし人びとも、みな渡り参りし初めは、などかさしもあらむと思ひしかど、見たてまつり馴るるままに、なつかしうをかしき御ありさま、まめやかなる御心ばへも思ひやり深うあはれなれば、まかで散るもなし。なべてならぬ際の人びとには、ほの見えなどしたまふ。そこのなかにすぐれたる御心ぎしもことわりなりけり、と見たてまつる。

かの御住まひには、久しくなるままに、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど、我が身だにあさましき宿世とおぼゆる住まひに、いかでかは、うち具しては、つきなからむさまを思ひ返したまふ。所につけて、よろづのことさま変はり、見たまへ知らぬ下人のうへをも見たまひ慣らはぬ御心地に、めざまじう、かたじけなうみづから思さる。煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと思しわたるは、おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。めづらかにて、

山賤の庵に焚けるしばしも言問ひ来なむ恋ふる里人

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすごく眺めたまひて、琴を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など弾きたまへるに、他物の声どもはやめて、涙をのご

ひあへり。昔胡の国に遣しけむ女を思しやりて、ましていかなりけむ、この世に我が思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、「霜の後の夢」と誦じたまふ。月いと明かうさし入りて、はかなき旅の御座所、奥まで隈なし。床の上に、夜深き空も見ゆ。入り方の月影すぐく見ゆるに、「ただ是れ西に行くなり」とひとりごちたまて、

いづ方の雲路に我も迷ひなむ月の見るらむことも恥づかし  
とひとりごちたまひて、例のまどろまれぬ暁の空に千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥諸声に鳴く暁はひとり寝覚めの床も頼もし

また起きたる人もなければ、返す返すひとりごちて臥したまへり。夜深く御手水参り、御念誦などしたまふも、めづらしきことのやうにめでたうのみおぼえたまへば、え見たてまつり捨てず、家にあからさまにもえ出でざりけり。

明石の浦は、ただはひ渡るほどなれば、良清の朝臣、かの入道の娘を思ひ出でて文など遣りけれど、返り事もせず、父入道ぞ、「聞こゆべきことなむ。あからさまに對面もがな」と言ひけれど、うけひかざらむものゆゑ、行きかかりて、むなしく帰らむ後手もをこなるべし、と屈指いたうて行かず。世に知らず心高く思へるに、国の内は守のゆかりのみこそは、かしこきことにすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで、年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の源氏の光る君こそ、おほやけの御かしこまりにて、須磨の浦にもしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君にをたてまつらむ」と言ふ。母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻どもいと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻さへあやまちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山賤を心とどめたまひてむや」と言ふ。腹立ちて、「え知りたまはじ。思ふ心ことなり。さる心をしたまへ。つ

いでして、ここにもおはしまさせむ」と心をやりて言ふも、かたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。

母君、「などか、めでたくとも、ものの初めに、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとどめたまふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじきことなり」と言ふを、いといたくつぶやく。「罪に当たたることは、唐土にも我がみかどにも、かく世にすぐれ、何ごとも人にことになりぬる人のかならずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父にもものしたまひし按察使大納言の娘なり。いとかうぎくなる名をとりて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人の嫉み重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへる、いとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとて、思し捨てじ」など言ひひたり。

この娘すぐれたるかたちならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。身のありさまを、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人びとに後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君、所狭く思ひかしづきて、年に二たび、住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。

須磨には、年返りて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲き初めて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふ折多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人びとの御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜盛りになりぬらむ、ひととせの花の宴に、院の御けしき、内の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。

いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり

いとつれづれなるに、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてもものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、ものの折ごとに恋しくおぼえたまへば、ことの聞こえありて罪に当たるともいかがはせむ、と思しなして、にはかに参うでたまふ。うち見るより、めづらしううれしきにも、ひとつ涙ぞこぼれける。住まひたまへるさま、言はむかたなく唐めいたり。所のさま、絵にかきたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びもてなしたまへるしも、いみじう見るに笑まれてきよらなり。取り使ひたまへる調度もかりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁、双六盤、調度、弾棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行なひ勤めたまひけりと見えたり。もの参れるなど、ことさら所につけ興ありてしなしたり。海人ども漁りして、かひつ物持て参れるを召し出でて御覽ず。浦に年経るさまなど問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行方は同じこと、何か異なる、とあはれに見たまふ。御衣どもなどかづけさせたまふを、生けるかひありと思へり。御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる稲取り出でて飼ふなど、めづらしう見たまふ。飛鳥井すこし歌ひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、「若君の何とも世を思さでものしたまふ悲しさを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」など語りたまふに、堪へがたく思したり。尽きすべくもあらねば、なかなか片端もえまねばず。夜もすがらまどろまらず文作り明かしたまふ。さ言ひながらも、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰りたまふ、いとなかなかなり。御土器参りて、「酔ひの悲しび涙そそく春の盃の裏」と諸声に誦じたまふ。御供の人も涙を流す。おのがじしはつかなる別れ惜

しむべかめり。朝ぼらけの空に雁連れて渡る。あるじの君、

ふるさとをいづれの春か行きて見むうらやましきは帰る雁がね

宰相さらに立ち出でむ心地せで、

あかなくに雁の常世を立ち別れ花の都に道や惑はむ

さるべき都の苞など、由あるさまにてあり。あるじの君、かくかたじけなき御送りにとて、黒駒たてまつりたまふ。「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当たりにてはいばえぬべければなむ」と申したまふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。「形見に偲びたまへ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべきことはかたみにえしたまはず。日やうやうさし上がりて、心あわたたしければ、顧みのみしつ出でたまふを、見送りとまふけしき、いとなかなかなり。「いつまた対面は」と申したまふに、あるじ、

「雲近く飛び交ふ鶴も空に見よ我は春日の曇りなき身ぞ

かつは頼まれながら、かくなりぬる人、昔のかしこき人だに、はかばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ、何か、都のさかひをまた見むとなむ思ひはべらぬ」などのたまふ。宰相、

「たづかなき雲居にひとり音をぞ鳴く翼並べし友を恋ひつつ

かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもと悔しう思ひたまへらるる折多く」など、しめやかにあらで帰りとまひぬる名残、いとど悲しう眺め暮らしたまふ。

弥生のついたちに出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思すことある人は、御禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へせさせたまふ。舟にこととしき人形乗せて流すを見たまふに、よそへられて、

知らざりし大海の原に流れ来てひとかたにやはものは悲しき

とてゐたまへる御さま、さる晴れに出でて、言ふよしく見えたまふ。海の面うらうらと凧ぎわたりて、行方も知らぬに、来し方行く先思し続けられて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓へもし果てず、立ち騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ちて、人びとの足をそらなり。海の面は袈を張りたらむやうに光り満ちて、神、鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうしてたどり来て、「かかる目は見ずもあるかな。風などは吹くもけしきづきてこそあれ、あさましうめづらかなり」と惑ふに、なほ止まず鳴りみちて、雨の脚、当たる所とほりぬべくはらめき落つ。かくて世は尽きぬるにや、と心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに経うち誦じておはす。暮れぬれば、神すこし鳴り止みて、風ぞ夜も吹く。「多く立てつる願の力なるべし」「今しばしかくあらば、波に引かれて入りぬべかりけり」「高潮といふものになむ、とりあへず人そこなはるるとは聞けど、いとかかることはまだ知らず」と言ひあへり。暁方、みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどりありくと見るに、おどろきて、さは海の中の龍王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけり、と思すに、いとものむつかしう、この住まひ堪へがたく思しなりぬ。

明  
石

なほ雨風やまず、神、鳴り静まらで日ごろになりぬ。いとどものわびしきこと数知らず、来し方行く先悲しき御ありさまに、心強うしもえ思しなさず。いかにせまし、かかりとて都に帰らむことも、まだ世に許されもなくては、人笑はれなることこそまさらめ、なほこれより深き山を求めてやあと絶えなまし、と思すにも、波風に騒がれてなど、人の言ひ伝へむこと、後の世までいと軽々しき名や流し果てむ、と思し乱る。夢にも、ただ同じさまなる物のみ来つつ、まつはしきこゆと見たまふ。雲間なくて明け暮るる日数に添へて、京の方もいとどおぼつかなく、かくながら身をはふらかしつるにや、と心細う思せど、頭さし出づべくもあらぬ空の乱れに、出で立ち参る人もなし。

二条院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そほち参れる。道かひにてだに、人か何ぞとだに御覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき賤のをの、むつまじうあはれに思さるるも、我ながらかたじけなく、屈しにける心のほど思ひ知らる。御文に、

あさましくを止みなきころのけしきに、いとど空さへ閉づる心地して、眺めやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うち濡らし波間なきころ

あはれに悲しきことども書き集めたまへり。いとど汀まさりぬべく、かきくらす心地したまふ。「京にも、この雨風、あやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。内に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政事も絶えてなむはべる」など、はかばかしようもあらず、かたくなしう語りなせど、京の方のことと思せばいぶかしようて、御前に召し出でて問はせたまふ。「ただ、例の雨のを止みなく降りて、風は時々吹き出でて、日ごろになりはべるを、例ならぬことに驚きはべるなり。いとかく地の底とほるばかりの氷降り、雷の静まらぬことははべらざりき」など、いみじきさまに驚き懼



ぢてをる顔のいとからきにも、心細さまさりける。

かくしつ世は尽きぬべきにや、と思さるるに、そのまたの日の暁より、風  
いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと、巖も山も残るまじきけしきな  
り。神の鳴りひらめくさま、さらに言はむ方なくて、落ちかかりぬとおぼゆる  
に、ある限り、さかしき人なし。「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を  
見るらむ。父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔をも見で死ぬべきこと」と嘆  
く。君は御心を静めて、何ばかりのあやまちにてか、この渚に命をば極めむ、  
と、強う思しなせど、いとも騒がしければ、色々の幣帛ささげさせたまひて、  
「住吉の神、近き境を鎮め守りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば、助  
けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。おのおのみづからの命をばさるもの  
にて、かかる御身のまたなき例に沈みたまひぬべきことのみみじう悲しき、心  
を起こして、すこしものおぼゆる限りは、身に代へてこの御身一つを救ひたて  
まつらむ、とよみて、諸声に仏神を念じたてまつる。「帝王の深き宮に養は  
れたまひて、いろいろの楽しみにおごりたまひしかど、深き御うつくしみ大八  
洲にあまねく、沈めるともがらをこそ多く浮かべたまひしか。今何の報いにか、  
ここら横様なる波風には溺ほれたまはむ。天地ことわりたまへ。罪なくて罪に  
当たり、官位を取られ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ安き空なく嘆きたま  
ふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなむとするは、前の世の報いか、この世  
の犯しか、神仏明らかにましますば、この愁へやすめたまへ」と御社の方に向  
きてさまさまの願を立てたまふ。また、海の中の龍王、よろづの神たちに願を  
立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ち  
かかりぬ。炎燃え上がりて、廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限り惑ふ。後の方  
なる大炊殿とおぼしき屋に移したてまつりて、上下となく立ち込みていとらう  
がはしく、泣きとよむ声、雷にも劣らず。空は墨をすりたるやうにて、日も暮

れにけり。

やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいとめづらかなるも、いとかたじけなくて、寝殿に返し移したてまつらむとするに、焼け残りたる方も疎ましげに、そこらの人の踏みとどろかし惑へるに、御簾などもみな吹き散らしてけり。夜を明してこそは、とたどりあへるに、君は御念誦したまひて、思しめぐらすに、いと心あわたたし。月さし出でて、潮の近く満ち来ける跡もあらはに、名残なほ寄せ返る波荒きを、柴の戸押し開けて、眺めおはします。近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやくやくとはかばかしう悟る人もなし。あやしき海人どもなどの、貴き人おはする所とて、集り参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、え追ひも払はず。「この風、今しばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しといへばおろかなり。

海にます神の助けにかからずは潮の八百会にさすらへなまし

ひねもすにいりもみつる神の騒ぎに、さこそいへ、いたう困じたまひにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院ただおはしましさまながら立ちたまひて、「など、かくあやしき所にもものするぞ」とて御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままには、はや舟出して、この浦を去りね」とのたまはす。いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまさま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや捨てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど、暇なくて、この世を顧みざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに、

堪へがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことのあるによりなむ、急ぎ上りぬる」とて、立ち去りたまひぬ。飽かず悲しくて、「御供に参りなむ」と泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。年ごろ、夢のうちにも見たてまつらで、恋しうおぼつかなき御さまを、ほのかなれど、さだかに見たてまつりつるのみ面影におぼえたまひて、我かく悲しびを極め命尽きなむとしつるを、助けに翔りたまへる、とあはれに思すに、よくぞかかる騒ぎもありける、と名残頼もしううれしうおぼえたまふこと限りなし。胸つとふたがりて、なかなかなる御心惑ひに、うつつの悲しきこともうち忘れ、夢にも御いらへを今すこし聞こえずなりぬること、といぶせさに、またや見えたまふと、ことさらに寝入りたまへど、さらに御目も合はで、暁方になりけり。

渚に小さやかなる舟寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿りをさして参る。「何人ならむ」と問へば、「明石の浦より、前の守新発意の、御舟装ひて参れるなり。源少納言さぶらひたまはば、対面して、ことの心とり申さむ」と言ふ。良清おどろきて、「入道はかの国の得意にて、年ごろあひ語らひはべりつれど、私にいささかあひ恨むることはべりて、ことなる消息をだに通はさで、久しうなりはべりぬるを、波の紛れにいかなることかあらむ」とおぼめく。君の、御夢なども思し合はすることもありて、「はや会へ」とのたまへば、舟に行きて会ひたり。さばかり激しかりつる波風に、いつの間にか舟出しつらむ、と心得がたく思へり。「去ぬるついたちの日、夢にさま異なるものの告げ知らずるところとはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、「十三日にあらたなるしるし見せむ。舟装ひまうけて、かならず雨風止まばこの浦にを寄せよ」とかねて示すことのはべりしかば、心みに舟の装ひをまうけて待ちはべりしに、い

かめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、人のみかどにも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらむとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべることに、まことに神のしるべ違はずなむ。ここにも、もししろしめすことやはべりつらむとてなむ。いと憚り多くはべれど、このよし、申したまへ」と言ふ。良清、忍びやかに伝へ申す。君思しまはすに、夢うつつ、さまざま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末思し合はせて、世の人の聞き伝へむ後のそしりもやすからざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを背くものならば、またこれよりまかりて、人笑はれなる目をや見む、うつつぎまの人の心だになほ苦し、はかなきことをもつつみて、我より齡まさり、もしは位高く、時世の寄せ今一際まさる人には、なびき従ひて、その心むけをたどるべきものなりけり、退きて咎なしとこそ、昔、さかしき人も言ひ置きけれ、げにかく命を極め、世にまたなき目の限りを見尽くしつ、さらに後のあとの名をはぶくとても、たけきこともあらじ、夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとか疑はむ、と思して、御返りのたまふ。「知らぬ世界にめづらしき愁への限り見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし。ただ行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の友と眺めはべるに、うれしき釣舟をなむ。かの浦に、静やかに隠ろふべき隈はべりなむや」とのたまふ。限りなくよろこび、かしこまり申す。「ともあれかくもあれ、夜の明け果てぬ先に、御舟にたてまつれ」とて、例の親しき限り四五人ばかりしてたてまつりぬ。例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただはひ渡るほどに、片時の間といへど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひに背きける。入道の領占めたる所々、海のつらにも山隠れにも、時々につけて興をさか

すべき渚の苦屋、行なひをして後の世のことを思ひ澄ましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧を行なひ、この世のまうけに秋の田の実を刈り収め、残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、折々所につけたる、見どころありてし集めたり。高潮に怖ぢて、このころ、娘などは岡辺の宿に移して住ませければ、この浜の館に心やすくおはします。

舟より御車にたてまつり移るほど、日やうやうさし上がりて、ほのかに見たてまつるより、老忘れ、齡延ぶる心地して、笑みさかえて、まづ住吉の神をかつがつ拝みたてまつる。月日の光を手に得たてまつりたる心地して、いとなみ仕うまつること、ことわりなり。所のさまをばさらにも言はず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などのありさま、えも言はぬ入江の水など、絵にかば、心のいたり少なからむ絵師は、かき及ぶまじと見ゆ。月ごろの御住まひよりは、こよなくあきらかになつかしき。御しつらひなどえならずして、住まひけるさまなど、げに都のやむごとなき所々に異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりざまにぞ見ゆる。

すこし御心静まりては、京の御文ども聞こえたまふ。参れりし使は、今は「いみじき道に出で立ちて、悲しき目を見る」と泣き沈みて、あの須磨に留まりたるを召して、身にあまれる物ども多くたまひて遣はす。むつまじき御祈りの師ども、さるべき所々には、このほどの御ありさま、詳しく言ひ遣はすべし。入道の宮ばかりには、めづらかにてよみがへるさまなど聞こえたまふ。二条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置きうち置きおしのごひつつ聞こえたまふ御けしき、なほことなり。

返す返すいみじき目の限りを尽くし果てつるありさまなれば、今はと世を思ひ離るる心のみまさりはべれど、「鏡を見ても」とのたまひし面影の離るる世なきを、かくおぼつかかなながらや、とこころ悲しきさまさまのうれ

はしきは、さしおかれて、

遙かにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦伝ひして

夢のうちなる心地のみして、覚め果てぬほど、いかにひがこと多からむ。

と、げにそこはかとなく書き乱りたまへるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、いとこよなき御心ぎしのほどと人びと見たてまつる。おのおのふるさとに心細げなる言つてすべかめり。を止みなかりし空のけしき、名残なく澄みわたりて、漁する海人ども誇らしげなり。須磨はいと心細く、海人の岩屋もまれなりしを、人しげき厭ひはしたまひしかど、ここはまた、さまことにあはれなること多くて、よろづに思し慰まる。

明石の入道、行なひ勤めたるさま、いみじう思ひ澄ましたるを、ただこの娘一人をもてわづらひたるけしき、いとかたはらいたきまで、時々漏らし愁へきこゆ。御心地にもをかしと聞きおきたまひし人なれば、かくおぼえなくてめぐりおはしたるもさるべき契りあるにやと思しながら、なほかう身を沈めたるほどは、行なひより他のことは思はじ、都の人も、ただなるよりは言ひしに違ふと思さむも心恥づかしう思さるれば、けしきだちたまふことなし。ことに触れて、心ばせありさまなべてならずもありけるかな、とゆかしう思されぬにしもあらず。ここには、かしこまりて、みづからもをさをさ参らず、もの隔たりたる下の屋にさぶらふ。さるは、明け暮れ見たてまつらまほしう、飽かず思ひきこえて、思ふ心を叶へむと、仏神をいよいよ念じたてまつる。年は六十ばかりになりたれど、いときよげにあらまほしう、行なひさらばひて、人のほどのあてはかなればにやあらむ、うちひがみほればれしきことはあれど、いにしへのことをも知りて、ものきたなからず、よしづきたることもまじれば、昔物語などせさせて聞きたまふに、すこしつれづれの紛れなり。年ごろ、公私御暇なく、さしも聞き置きたまはぬ世の古事どもくづし出でて、かかる所をも人を

も見ざらましかばさうざうしくや、とまで興ありと思すことも交る。かうは馴れきこゆれど、いと気高う心恥づかしき御ありさまに、きこそ言ひしか、つつましうなりて、わが思ふことは心のままにもえうち出できこえぬを、心もとなう口惜しと、母君と言ひ合はせて嘆く。正身は、おしなべての人だにめやすきは見えぬ世界に、世にはかかる人もおはしけり、と見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いと遙かにぞ思ひきこえける。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、似げなきことかな、と思ふに、ただなるよりはものあはれなり。

四月になりぬ。衣がへの御装束、御帳の帷子など、よしあるさまにし出でつつ、よろづに仕うまつりいとなむを、いとほしうすすろなりと思せど、人ぎまのあくまで思ひ上がりたるさまのあてなるに、思しゆるして見たまふ。京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし故郷の池水思ひまがへられたまふに、言はむかたなく恋しきこと、いず方となく行方なき心地したまひて、ただ目の前に見やらるるは淡路島なりけり、「あはと遙かに」などのたまひて、

あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄める夜の月

久しう手触れたまはぬ琴を袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからずあはれに悲しう思ひあへり。広陵といふ手を、ある限り弾きすましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。何とも聞きわくまじきこのもかものしはふる人どもも、すすろはしくて、浜風をひきありく。入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ参れり。「さらに、背きにし世の中も、取り返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらるる夜のさまかな」と泣く泣くめできこゆ。わが御心にも、折々の御

遊び、その人かの人の琴笛、もしは声の出でしさまに、時々につけて世にめでられたまひしありさま、帝よりはじめたてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも思し出でられて、夢の心地したまふままに、かき鳴らしたまへる声も心すごく聞こゆ。古人は涙もとどめあへず、岡辺に琵琶、箏の琴取りにやりて、入道、琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手一つ二つ弾きたり。箏の御琴参りたれば、少し弾きたまふも、さまざまいみじうのみ思ひきこえたり。いとさしも聞こえぬ物の音だに、折からこそはまさるものなるを、はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる蔭どもなまめかしきに、水鶏のうちたたきたるは、誰が門さして、とあはれにおぼゆ。音もいと二なう出づる琴どもを、いとなつかしう弾き鳴らしたるも、御心とまりて、「これは、女のなつかしきさまにてしどけなう弾きたるこそをかしけれ」とおほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて、「あそばすよりなつかしきさまなるは、いづこのかはべらむ。なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること四代になむなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れはべりぬるを、もののせちにいぶせき折々はかき鳴らしはべりしを、あやうまねぶ者のはべるこそ、自然にかの先大王の御手に通ひてはべれ。山伏のひが耳に松風を聞きわたしはべるにやあらむ。いかで、これも忍びて聞こしめさせてしがな」と聞こゆるままに、うちわななきて涙落とすべかめり。君、「琴を琴とも聞きたまふまじかりけるあたりに、ねたきわぎかな」とて、押しやりたまふに、「あやしう、昔より箏は、女なむ弾き取るものなりける。嵯峨の御伝へにて、女五の宮さる世の中の上手にもものしたまひけるを、その御筋にて取り立てて伝ふる人なし。すべて、ただ今世に名を取れる人びと、掻き撫での心やりばかりにのみあるを、ここにかう弾きこめたまへりける、いと興あり



けることかな。いかでかは聞くべき」とのたまふ。「聞こしめさむには、何の憚りかはべらむ。御前に召しても。商人の中にてだにこそ、古琴聞きはやす人ははべりけれ。琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人、いにしへも難うはべりしを、をさをさとどこほることなう、なつかしき手など筋ことになむ。いかでたどるにかはべらむ。荒き波の声に交るは、悲しくも思うたまへられながら、かき積むるもの嘆かしさ、紛るる折々もはべり」など好きむれば、をかしと思して、箏の琴取り替へて賜はせたり。げにいとすぐしてかい弾きたり。今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づかひいといったう唐めき、ゆの音深う澄ましたり。伊勢の海ならねど、「清き渚に貝や拾はむ」など声よき人に歌はせて、我も時々拍子とりて、声うち添へたまふを、琴弾きさしつづめできこゆ。御くだものなど、めづらしきさまにて参らせ、人びとに酒強ひそしなどして、おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。

いたく更けゆくままに、浜風涼しうて、月も入り方になるままに澄みまさり、静かなるほどに、御物語残りなく聞こえて、この浦に住みはじめしほどの心づかひ、後の世を勤むるさまかきくづし聞こえて、この娘のありさま、問はず語りに聞こゆ。をかしきものの、さすがにあはれと聞きたまふ節もあり。「いと取り申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし年ごろ老い法師の祈り申しはべる神仏のあはれびおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにや、となむ思うたまふる。その故は、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童いときなうはべりしより、思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとに、かならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意叶へたまへとなむ念じはべる。前の世の契りつたなくてこそ、かく口惜しき山賤となりはべりけめ、親、大臣

の位を保ちたまへりき。みづからかく田舎の民となりにてはべり。次々さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむと悲しく思ひはべるを、これは生れし時より頼むところなむはべる。いかにして都の貴き人にたてまつらむと思ふ心深きにより、ほどほどにつけて、あまたの人のそねみを負ひ、身のためからき目を見る折々も多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。命の限りは狭き衣にもはぐくみはべりなむ。かくながら見捨てはべりなば、浪のなかにもまじり失せね、となむ掟てはべる」など、すべてまねぶべくもあらぬことどもをうち泣きうち泣き聞こゆ。君もものをさまさま思し続ける折からは、うち涙ぐみつつ聞こしめす。「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界にただよふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつる、今宵の御物語に聞き合はすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそは、とあはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行なひより他のことなくて月日を経るに、心もみなくつほれにけり。かかる人ものしたまふとはほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ捨てたまふらめ、と思ひ屈しつるを、さらば導きたまふべきにこそあなれ。心細き一人寝の慰めにも」などのたまふを、限りなくうれしと思へり。

「一人寝は君も知りぬやつれづれと思ひ明かしの浦さびしさを  
 まして年月思ひたまへわたるいぶせさを、推し量らせたまへ」と聞こゆるけはひ、うちわななきたれど、さすがにゆるなからず。「されど、浦なれたまへらむ人は」とて、

旅衣うら悲しさに明かしかね草の枕は夢も結ばず

とうち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、言ふよしなき御けはひなる。  
 数知らぬことども聞こえ尽くしたれど、うるさしや。ひがことどもに書きなし

たれば、いとどをこにかたくなしき入道の心ばへもあらはれぬべかめり。

思ふことかつがつ叶ひぬる心地して、涼しう思ひるたるに、またの日の昼つ方、岡辺に御文つかはす。心恥づかしきまなめるも、なかなかかかるもの隈にぞ、思ひの外なることも籠もるべかめると、心づかひしたまひて、高麗の胡桃色の紙に、えならずひきつくろひて、

をちこちも知らぬ雲居に眺めわびかすめし宿の梢をぞ訪ふ

思ふには。

とばかりやありけむ。入道も、人知れず待ちきこゆとて、かの家に来るたりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで酔はず。御返り、いと久し。内に入りてそそのかせど、娘はさらに聞かず。恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥づかしうつつまし。人の御ほど、わが身のほど思ふにこよなくて、心地悪しとて寄り臥しぬ。言ひわびて、入道ぞ書く。

いとかしこきは、田舎びてはべる袂につつみあまりぬるにや。さらに見たまへも及びはべらぬかしこさになむ。さるは、

眺むらむ同じ雲居を眺むるは思ひも同じ思ひなるらむ

となむ見たまふる。いと好き好きしや。

と聞こえたり。陸奥紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。げにも好きたるかな、とめざましう見たまふ。御使に、なべてならぬ玉裳などかづけたり。またの日、「宣旨書きは見知らずなむ」とて、

いぶせくも心にものを悩むかなやよやいかにと問ふ人もなみ

言ひがたみ。

と、このたびは、いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書きたまへり。若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ。めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、なかなか世にあるものと尋

ね知りたまふにつけて涙ぐまれて、さらに例の動なきを、せめて言はれて、浅からず染めたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

思ふらむ心のほどややよいかはまだ見ぬ人の聞きか悩まむ

手のさま、書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう上ずめきたり。京のことおぼえて、をかしと見たまへど、うちしきりて遣はさむも人目つつましければ、二三日隔てつつ、つれづれなる夕暮れ、もしはものあはれなる曙などやうに紛らはして、折々同じ心に見知りぬべきほど推し量りて書き交はしたまふに、似げなからず。心深う思ひ上がりたるけしきも、見ではやまじと思すものから、良清が領じて言ひしけしきもめざましう、年ごろ心つけてあらむを、目の前に思ひ違へむもいとほしう思しめぐらされて、人進み参らば、さる方にも紛らはしてむと思せど、女はた、なかなかやむごとなき際の人よりもいたう思ひ上がりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心比べにてぞ過ぎける。京のことを、かく関隔たりては、いよいよおぼつかなく思ひきこえたまひて、いかにせまし、たはぶれにくくもあるかな、忍びてや迎へたてまつりてまし、と思し弱る折々あれど、さりとともかくてやは年を重ねむ、と今さらに人わろきことをば、と思し静めたり。

その年、おほやけにもものさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、神鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに立たせたまひて、御けしきいと悪しうて、にらみきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御事なりけむかし。いと恐ろしういとほしと思して、后に聞こえさせたまひければ、「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。にらみたまひしに、目見合はせたまふと見しけにや、御目患ひたまひて、堪へがたう悩みたまふ。御つつしみ、内に

も宮にも限りなくせさせたまふ。太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡なれど、次々におのづから騒がしきことあるに、大宮もそこはかとなう患ひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内に思し嘆くことさまざまなり。「なほこの源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなむとなむおぼえはべる。今はなほもとの位をも賜ひてむ」とたびたび思ひのたまふを、「世のもどき、軽々しきやうなるべし。罪に懼ぢて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず許されむことは、世の人もいかが言ひ伝へはべらむ」など、后かたく諫めたまふに、思し憚るほどに、月日かさなりて、御悩みどもさまざまに重りまさらせたまふ。

明石には、例の、秋、浜風のことなるに、一人寝もまめやかにものわびしうて、入道にも折々語らはせたまふ。「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを、正身はたさらに思ひ立つべくもあらず。いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらむものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へむ、かく及びなき心を思へる親たちも、世籠もりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ、と思ひて、ただこの浦におはせむほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそ、おろかならね、年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまをほのかにも見たてまつらむなど、思ひかけざりし御住まひにて、まほならねど、ほのかにも見たてまつり、世になきものと聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかなからで、かくまで世にあるものと思し尋ぬるなどこそ、かかる海人のなかに朽ちぬる身にあまることなれ、など思ふに、いよいよ恥づかしくて、つゆも気近きことは思ひ寄らず。親たちは、ここらの年ごろの祈りの叶ふべきを思ひながら、ゆくり

かに見せたてまつりて思し数まへざらむ時、いかなる嘆きをかせむと思ひやるに、ゆゆしくて、めでたき人と聞こゆとも、つらういみじうもあるべきかな、目にも見えぬ仏神を頼みたてまつりて、人の御心をも宿世をも知らで、なごうち返し思ひ乱れたり。君は、このころの波の音に、「かの物の音を聞かばや。さらずは、かひなくこそ」など、常はのたまふ。

忍びてよろしき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちゐ、かかやくばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。君は、好きのさまやと思せど、御直衣たてまつりひきつくろひて、夜更かして出でたまふ。御車は二なく作りたれど、所狭しとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。やや遠く入る所なりけり。道のほども四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを思ひ出できこえたまふに、やがて馬引き過ぎて赴きぬべく思す。

#### 秋の夜の月毛の駒よ我が恋ふる雲居を翔れ時の間も見む

とうちひとりごたれたまふ。造れるさま、木深く、いたき所まさりて、見どころある住まひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、ここにゐて思ひ残すことはあらじと思しやらるるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の声、松風に響きあひても悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。娘住ませたる方は心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口、けしきばかり押し開けたり。うちやすらひ、何かとのたまふにも、かうまでは見えたてまつらじと深う思ふに、もの嘆かしうてうちとけぬ心ぎまを、こよなうも人めきたるかな、さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるに、あなづらはしきに

や、とねたうさまさまに思し惱めり。情けなうおし立たむも、ことのさまに違へり、心比べに負けむこそ人わろけれ、など乱れ怨みたまふさま、げにもの思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳の紐に箏の琴の弾き鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさぐりけるほど見えてをかしければ、「この聞きならしたる琴をさへや」など、よろづにのたまふ。

むつごとを語りあはせむ人もがな憂き世の夢もなかば覚むやと

明けぬ夜にやがて惑へる心にはいづれを夢とわきて語らむ

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心もなくうちとけてゐたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける障子の内に入りて、いかで固めけるにか、いと強きを、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。されど、さのみもいかでかあらむ。人さまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞしたる。かうあながちなりける契りを思すにも、浅からずあはれなり。御心ざしの近まさりするなるべし、常は厭はしき夜の長さも、とく明けぬる心地すれば、人に知られじと思すも、心あわたたしうて、こまかに語らひ置きて出でたまひぬ。

御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。ここにも、かかることいかで漏らさじとつつみて、御使ことこしうももてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらむと思し憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを、げにいかならむと、入道も極楽の願ひをば忘れて、ただこの御けしきを待つことにはす。今さらに心を乱るも、いといとほしげなり。

二条の君の、風につても漏り聞きたまはむことは、たはぶれにても心の隔てありけると思ひ疎まれたてまつらむ、心苦しう恥づかしう思さるるも、あながちなる御心ざしのほどなりかし。かかる方のことをば、さすがに心とどめて

怨みたまへりし折々、などてあやなきすさびごとにつけても、さ思はれたてまつりけむ、など取り返さまほしう、人のありさまを見たまふにつけても、恋しさの慰む方なければ、例よりも御文こまやかに書きたまひて、

まことや、我ながら心より外なるなほざりごとにて、疎まれたてまつりし節々を、思ひ出づるさへ胸いたきに、またあやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。かう聞こゆる問はず語りに、隔てなき心のほどは思し合はせよ。誓ひしことも。

など書きて、

何事につけても、

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさびなれどもとある御返り、何心なくらうたげに書きて、

忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひ合はせらるること多かるを、

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと

おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを、いとあはれにうち置きがたく見たまひて、名残久しう、忍びの旅寝もしたまはず。

女、思ひしもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する。行く末短げなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に人並々になるべき身と思はざりしかど、ただそこはかとなくて過ぐしつる年月は、何ごとをか心をも悩ましけむ、かういみじうもの思はしき世にこそありけれ、とかねて推し量り思ひしよりもよろづに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬさまに見えたてまつる。あはれとは月日に添へて思ひませど、やむごとなき方の、おぼつかなくて年月を過ぐしたまひ、ただならずうち思ひおこせたまふらむが、いと心苦しければ、独り臥しがちにて過ぐしたまふ。絵をさまざまかき集めて、思ふことどもを書きつけ、返りこと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心に染み



ぬべきもののさまなり。いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふ折々、同じやうに絵をかき集めたまひつつ、やがて我が御ありさま、日記のやうに書きたまへり。いかなるべき御さまどもにかあらむ。

年変はりぬ。内に御葉のことありて、世の中さまさまにのしる。当代の御子は、右大臣のむすめ、承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし。春宮にこそは譲りきこえたまはめ、おほやけの御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこと、いとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めを背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。去年より、后も御もののけ悩みたまひ、さまさまのもののさとしきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしたまふしるしにやよろしうおはしましける御目の悩みさへ、このころ重くならせたまひて、もの心細く思されければ、七月二十余日のほどに、また重ねて、京へ帰りたまふべき宣旨下る。つひのことと思ひしかど、世の常なきにつけても、いかになり果つべきにか、と嘆きたまふを、かうにはかなれば、うれしきに添へても、またこの浦を今はと思ひ離れむことを思し嘆くに、入道、さるべきことと思ひながら、うち聞くより胸ふたがりておぼゆれど、思ひのごと栄えたまはばこそは、我が思ひの叶ふにはあらめ、など思ひ直す。そのころは夜離れなく語らひたまふ。六月ばかりより、心苦しきけしきありて悩みけり。かく別れたまふべきほどなれば、あやにくなるにやありけむ、ありしよりもあはれに思して、あやしうもの思ふべき身にもありけるかな、と思し乱る。女はさらにも言はず思ひ沈みたり、いとことわりなりや。思ひの外に悲しき道に出で立ちたまひしかど、つひには行きめぐり来なむと、かつは思し慰めき。このたびはうれしき方の御出で立ちの、またやは帰り見るべきと思すに、あはれなり。さぶ

らふ人びと、ほどほどにつけてはよろこび思ふ。京よりも御迎へに人びと参り、心地よげなるを、あるじの入道、涙にくれて、月も立ちぬ。ほどさへあはれなる空のけしきに、なぞや、心づから今も昔もすずろなることにて身をはふらかすらむ、とさまさまに思し乱れたるを、心知れる人びとは、「あな憎、例の御癖ぞ」と見たてまつりむつかるめり。「月ごろはつゆ人にけしき見せず、時々はひ紛れなどしたまへるつれなさを、このころあやにくに、なかなかの、人の心づくしにか」とつきしろふ。少納言しるべして聞こえ出でし初めのことなどささめきあへるを、ただならず思へり。

あさてばかりになりて、例のやうにいたくも更かさで渡りたまへり。さやかにもまだ見たまはぬかたちなど、いとよしよしう気高きさまして、めざましうもありけるかな、と見捨てがたく口惜しう思さる。さるべきさまにして迎へむと思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰めたまふ。男の御かたちありさま、はたさらにも言はず、年ごろの御行なひにいたく面瘦せたまへるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつつ、あはれ深く契りたまへるは、ただかばかりを幸ひにても、などか止まざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、我が身のほどを思ふも尽きせず。波の声、秋の風にはなほ響きことなり。塩焼く煙かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり。

このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じ方になびかむとのたまへば、

かきつめて海人のたく藻の思ひにも今はかひなき恨みだにせじ

あはれにうち泣きて、言少ななるものから、さるべき節の御いらへなど、浅からず聞こゆ。この常にゆかしがりたまふ物の音など、さらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。「さらば、形見にも偲ぶばかりの一ことを

だに」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる、深き夜の澄めるはたとへむ方なし。入道、え堪へで、箏の琴取りてさし入れたり。みづからもいとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきに誘はるるなるべし、忍びやかに調べたるほど、いと上ずめきたり。入道の宮の御琴の音をただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、今めかしうあなめでたと聞く人の心ゆきて、かたちさへ思ひやらるることは、げにいと限りなき御琴の音なり。これはあくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまさされる。この御心にだに、初めてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手など、心やましきほどに弾きさしつつ、飽かず思さるるにも、月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむ、と悔しう思さる。心の限り行く先の契りをのみしたまふ。「琴は、また掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、

なほざりに頼め置くめる一ことを尽きせぬ音にやかけて偲ばむ  
言ふともなき口すさびを恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに変はらざらなむ  
この音違はぬさきにならずあひ見む」と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなきを思ひむせたるも、いとことわりなり。

立ちたまふ暁は、夜深く出でたまひて、御迎への人びとも騒がしければ、心も空なれど、人まをはからひて、

うち捨てて立つも悲しき浦波の名残いかにと思ひやるかな  
御返り、

年経つる苦屋も荒れて憂き波の返る方にや身をたぐへまし  
とうち思ひけるままなるを見たまふに、忍びたまへど、ほろほろとこぼれぬ。  
心知らぬ人びとは、なほかかる御住まひなれど、年ごろといふばかり馴れたま

へるを、今はと思すはさもあることぞかし、など見たてまつる。良清などは、おろかならず思すなめりかし、と憎くぞ思ふ。うれしきにも、げに今日を限りにこの渚を別るること、などあはれがりて、口々しほたれ言ひあへることどもあめり。されど、何かはとてなむ。入道、今日の御まうけ、いとかめしう仕うまつれり。人びと、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず。御衣櫃あまたかけさぶらはす。まことの都の苞にしつべき御贈り物ども、ゆゑづきて思ひ寄らぬ限なし。今日たてまつるべき狩の御装束に、

寄る波に立ちかさねたる旅衣しほどけしとや人の厭はむ

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの日数隔てむ中の衣を

とて、心ざしあるを、とてたてまつり替ふ。御身になれたるどもを遣はす。げに今ひとへ偲ばれたまふべきことを添ふる形見なめり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかが人の心にも染めざらむ。入道、「今はと世を離ればべりにし身なれども、今日の御送りに仕うまつらぬこと」など申して、かひをつくるもいとほしなから、若き人は笑ひぬべし。

「世をうみにこころしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね

心の闇はいとど惑ひぬべくはべれば、境までだに」と聞こえて、「好き好きしきさまなれど、思し出でさせたまふ折はべらば」など御けしき賜はる。いみじうものをあはれと思して、所々うち赤みたまへる御まみのわたりなど、言はむかたなく見えたまふ。「思ひ捨てがたき筋もあめれば、今いととく見直したまひてむ。ただこの住みかこそ見捨てがたけれ。いかがすべき」とて、

都出でし春の嘆きに劣らめや年経る浦を別れぬる秋

とて、おし拭ひたまへるに、いとどものおぼえず、しほたれまさる。立ちぬも

あさましようよろぼふ。

正身の心地たとふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひ沈むれど、身の憂きをもとにて、わりなきことなれど、うち捨てたまへる恨みのやる方なきに、たけきこととはただ涙に沈めり。母君も慰めわびては、「何にかく心尽くしなることを思ひそめけむ。すべてひがひがしき人に従ひける心のおこたりぞ」と言ふ。「あなかまや。思し捨つまじきこともものしたまふめれば、さりとも思すところあらむ。思ひ慰めて、御湯などをだに参れ。あなゆゆしや」とて、片隅に寄りゐたり。乳母、母君など、ひがめる心を言ひ合はせつつ、「いつしか、いかで思ふさまにて見たてまつらむと、年月を頼み過ぐし、今や思ひ叶ふところ頼みきこえつれ、心苦しきことをも、もののはじめに見るかな」と嘆くを見るにもいとほしければ、いとどほけられて、昼は日一日寝をのみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、数珠の行方も知らずなりにけりとて、手をおしすりて仰ぎゐたり。弟子どもにあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片側に腰もつきそこなひて、病み臥したるほどになむ、すこしもの紛れける。

君は難波の方に渡りて御被へしたまひて、住吉にも、平らかにて、いろいろの願果たし申すべきよし、御使して申させたまふ。にはかに、所狭うて、みづからはこのたびえ詣でたまはず、ことなる御逍遥などなくて、急ぎ入りたまひぬ。二条院におはしまし着きて、都の人も、御供の人も、夢の心地して行き合ひ、喜び泣きどもゆゆしきまで立ち騒ぎたり。女君も、かひなきものに思し捨てつる命、うれしう思さるらむかし。いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、所狭かりし御髪のすこしへがれたるしも、いみじうめでたきを、今はかくて見るべきぞかし、と御心落ちるるにつけては、またかの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しう思しやらる。なほ世とともに、かかる方

にて御心の暇ぞなきや。その人のことどもなど聞こえ出でたまへり。思し出でたる御けしき浅からず見ゆるを、ただならずや見たてまつりたまふらむ、わざとならず、「身をば思はず」などほのめかしたまふぞ、をかしうらうたく思ひきこえたまふ。かつ見るにだに飽かぬ御さまを、いかで隔てつる年月ぞと、あさましきまで思ほすに、取り返し世の中もいと恨めしうなむ。ほどもなく、元の御位あらたまりて、数より外の権大納言になりたまふ。次々の人も、さるべき限りは元の官返し賜はり、世に許さるるほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。

召しありて、内に参りたまふ。御前にさぶらひたまふに、ねびまさりて、いかでさるものむつかしき住まひに年経たまひつらむ、と見たてまつる女房などの、院の御時さぶらひて、老いしらへるどもは、悲しくて、今さらに泣き騒ぎめできこゆ。上も恥づかしうさへ思し召されて、御よそひなど、ことに引きつくろひて出でおはします。御心地例ならで、日ごろ経させたまひければ、いたう衰へさせたまへるを、昨日今日ぞすこしよろしう思されける。御物語しめやかにありて夜に入りぬ。十五夜の月おもしろう静かなるに、昔のことかき尽くし思し出でられて、しほたれさせたまふ。もの心細く思さるるなるべし。「遊びなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」とのたまはするに、

わたつ海にしなえうらぶれ蛭の児の脚立たざりし年は経にけり

と聞こえたまへり。いとあはれに心恥づかしう思されて、

宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春の恨み残すな

いとなまめかしき御ありさまなり。

院の御ために、八講行はるべきこと、まづ急がせたまふ。春宮を見たてまつりたまふに、こよなくおよすげさせたまひて、めづらしう思しよろこびたるを、

限りなくあはれと見たてまつりたまふ。御才もこよなくまさらせたまひて、世をたもたせたまはむに、憚りあるまじく、かしこく見えさせたまふ。入道の宮にも、御心すこし静めて、御対面のほどにも、あはれなることどもあらむかし。まことや、かの明石には、返る波に御文遣はす。ひき隠してこまやかに書きたまふめり。

波のよるよるいかに、

嘆きつつ明石の浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな

かの帥の娘五節、あいなく人知れぬもの思ひさめぬる心地して、まくなぎつくらせてさし置かせけり。

須磨の浦に心を寄せし舟人のやがて朽たせる袖を見せばや  
手などこよなくまさりにけり、と見おほせたまひて遣はす。

帰りてはかことやせまし寄せたりし名残に袖の干がたかりしを

飽かずをかしと思しし名残なれば、おどろかされたまひて、いとど思し出づれど、このごろはさやうの御振る舞ひ、さらにつつみたまふめり。花散里なども、ただ御消息などばかりにて、おぼつかなく、なかなか恨めしげなり。

滯

標



さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御ことを心にかけてきこえたまひて、いかでかの沈みたまふらむ罪救ひたてまつることをせむ、と思し嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御急ぎしたまふ。神無月に御八講したまふ。世の人なびき仕うまつること、昔のやうなり。大后、御悩み重くおはしますうちにも、つひにこの人をえ消たずなりなむことと心病み思しけれど、帝は院の御遺言を思ひきこえたまふ。ものの報いありぬべく思しけるを、直し立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。時々おこり悩ませたまひし御目もさはやぎたまひぬれど、おほかた世にえ長くあるまじう心細きことのみ、久しからぬことを思しつつ、常に召しありて、源氏の君は参りたまふ。世の中のことなども隔てなくのたまはせつつ、御本意のやうなれば、おほかたの世の人も、あいなくうれしきことに喜びきこえける。

下りみなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍心細げに世を思ひ嘆きたまひつる、いとあはれに思されけり。「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、我が世残り少なき心地するになむ、いといとほしう、名残なきさまにてとまりたまはむとすらむ。昔より人には思ひ落としたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御ことのみなむあはれにおぼえける。立ちまさる人、また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしもなずらはざらむ、と思ふさへこそ心苦しけれ」とてうち泣きたまふ。女君、顔はいと赤く匂ひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覧ぜらる。「などか御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人のためには、今見出でたまひてむと思ふも口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」など、行く末のことをさへのたまはするに、いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ。御かたちなど、なまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの、年月に添ふやうにも

てなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまふままに、などてわが心の若くいほけなきにまかせて、さる騒ぎをさへ引き出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ、など思し出づるに、いと憂き御身なり。

明くる年の如月に、春宮の御元服のことあり。十一になりたまへど、ほどよりの大きにおとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つに写したらむやうに見えたまふ。いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど、母宮、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ。内にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、太后思しあわてたり。「かひなきさまながらも、心のどかに御覽ぜらるべきことを思ふなり」とぞ聞こえ慰めたまひける。坊には承香殿の御子ゐたまひぬ。世の中改まりて、引き変へ今めかしきことども多かり。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりてくつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。やがて世の政事をしたまふべきなれど、「さやうの事しげき職には堪へずなむ」とて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし譲りきこえたまふ。「病によりて位を返したてまつりてしを、いよいよ老のつもり添ひて、さかしきことはべらじ」と受けひき申したまはず。人の国にもこと移り世の中定まらぬ折は深き山に跡を絶えたる人だにも、治まれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、まことの聖にはしけれ、病に沈みて返し申したまひける位を、世の中変はりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう、公私定めらる。さる例もありければ、すまひ果てたまはで、太政大臣になりたまふ。御年も六十三にぞなりたまふ。世の中すさまじきにより、かつは籠もりゐたまひしを、とりかへし花やぎたまへば、御子どもなど沈むやうにものしたまへる

を、みな浮かびたまふ。とりわきて宰相中将、権中納言になりたまふ。かの四の君の御腹の姫君十二になりたまふを、内に参らせむとかしづきたまふ。かの高砂歌ひし君もかうぶりせさせて、いと思ふさまなり。腹々に御子どもいとあまた次々に生ひ出でつつ、にぎははしげなるを、源氏の大臣は羨みたまふ。大殿腹の若君、人よりことにうつくしうて、内、春宮の殿上したまふ。故姫君の亡せたまひにし嘆きを、宮、大臣またさらに改めて思し嘆く。されど、おはせぬ名残も、ただこの大臣の御光によろづもてなされたまひて、年ごろ思し沈みつる名残なきまで榮えたまふ。なほ昔に御心ばへ変はらず、折節ごとに渡りたまひなどしつつ、若君の御乳母たち、さらぬ人びとも、年ごろのほどまかで散らざりけるは、みなさるべきことに触れつつ、よすがつけむことを思しおきつるに、幸ひ人多くなりぬべし。二条院にも、同じごと待ちきこえける人をあはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将、中務やうの人びとには、ほどほどにつけつつ情けを見えたまふに、御いとまなくてほか歩きもしたまはず。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人びと住ませむなど、思し当てて繕はせたまふ。まことや、かの明石に、心苦しげなりしことはいかにと、思し忘るる時なければ、公私いそがしき紛れに、え思すままにも訪ひたまはざりけるを、三月ついたちのほど、このころやと思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけりとく帰り参りて、「十六日になむ、女にてたひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。めづらしきさまにてきへあなるを思すにおろかならず。などで京に迎へてかかることをもせさせざりけむ、と口惜しう思さる。宿曜に、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた、上なき位に昇り、世をまつりごちたまふべきこと、さばかりかしこかりしあまたの相人ども

の聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを、当代のかく位にかなひたまひぬることを、思ひのごとうれしと思す。みづからも、もて離れたまへる筋は、さらにあるまじきことと思す。あまたの御子たちのなかにすぐれてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり、内のかくておはしますを、あらはに人の知るることならねど、相人の言むなしからず、と御心のうちに思しけり。今行く末のあらましごとを思すに、住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてむ、と思して、東の院急ぎ造らすべきよしもよほし仰せたまふ。

さる所にはかばかしき人しもありがたからむを思して、故院にさぶらひし宣旨の娘、宮内卿の宰相にて亡くなりにし人の子なりしを、母なども亡せてかすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと聞こしめしつけたるを、知る便りありてことのついでにまねびきこえける人召して、さるべきさまにのたまひ契る。まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばら家に眺むる心細さなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて、参るべきよし申させたり。いとあはれにかつは思して、出だし立てたまふ。もののついでに、いみじう忍びまぎれておはしまいたり。さは聞こえながら、いかにせましと思ひ乱れけるを、いとかたじけなきによろづ思ひ慰めて、「ただのたまはせむままに」と聞こゆ。よろしき日なりければ、急がし立てたまひて、「あやしう思ひやりなきやうなれど、思ふさまことなることにてなむ。みづからもおぼえぬ住まひに結ばほれたりし例を思ひよそへて、しばし念じたまへ」など、ことのありやう詳しう語らひたまふ。上の宮仕へ

時々せしかば、見たまふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまも言ひ知らず荒れまどひて、さすがに大きな所の、木立など疎ましげに、いかで過ぐしつらむと見ゆ。人のさま若やかにをかしければ、御覧じ放たれず、とかく戯れたまひて、「取り返しつべき心地こそすれ。いかに」とのたまふにつけても、げに同じうは御身近うも仕うまつり馴れば、憂き身も慰みなましと見たてまつる。

「かねてより隔てぬ仲とならねど別れは惜しきものにぞありける  
慕ひやしなまし」とのたまへば、うち笑ひて、

うちつけの別れを惜しむかことにて思はむ方に慕ひやはせぬ  
馴れて聞こゆるを、いたしと思す。

車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さし添へたまひて、ゆめ漏らすまじく口がためたまひて遣はず。御佩刀、さるべきものなど、所狭きまで思しやらぬ隈なし。乳母にもありがたうこまやかなる御いたはりのほど浅からず。入道の思ひかしづき思ふらむありさま思ひやるも、ほほ笑まれたまふこと多く、またあはれに心苦しうも、ただこのことの御心にかかるも、浅からぬにこそは。御文にも、おろかにもてなし思ふまじと、返す返すいませめたまへり。

いつしかも袖うちかけむをとめ子が世を経て撫づる岩の生ひ先

津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて急ぎ行き着きぬ。

入道待ちとり、喜びかしこまりきこゆること限りなし。そなたに向きて拝みきこえて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよいよいたはしう恐ろしきまで思ふ。稚児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすることたぐひなし。げにかしこき御心にかしづききこえむと思したるはむべなりけり、と見たてまつるに、あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる嘆きもさめにけり。いとうつくしうらうたうおぼえて、扱ひきこゆ。子持ちの君も、月ごろものをのみ思ひ沈みて、

いとど弱れる心地に、生きたらむとおぼえざりつるを、この御おきての、すこしもの思ひ慰めらるるにぞ、頭もたげて、御使にも二なきさまの心ざしを尽くす。とく参りなむと急ぎ苦しければ、思ふことどもすこし聞こえ続けて、

ひとりして撫づるは袖のほどなきに覆ふばかりの蔭をしぞ待つ

と聞こえたり。あやしきまで御心にかかり、ゆかしう思さる。

女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこともこそと思して、「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなむ。女にてあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひ捨つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と聞こえたまへば、面うち赤みて、「あやしう、つねにかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、われながら疎ましけれ。もの憎みはいつならふべきにか」と怨じたまへば、いとよくうち笑みて、「そよ、誰がならはしにかあらむ、思はずにぞ見えたまふや。人の心より外なる思ひやりごととして、もの怨じなどしたまふよ。思へば悲し」とて、果て果ては涙ぐみたまふ。年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし御心のうちども、折々の御文の通ひなど思し出づるには、よろづのことすさびにこそあれと、思ひ消たれたまふ。「この人をかうまで思ひやり言問ふは、なほ思ふやうのはべるぞ。まだきに聞こえは、またひが心得たまふべければ」とのたまひさして、「人がらのをかしかりしも、所からにや、めづらしうおぼえきかし」など、語りきこえたまふ。あはれなりし夕べの煙、言ひしことなど、まほならねどその夜のかたちほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、われはまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても心を分けたまひけむよ、とただならず思ひ続けたまひて、われはわれとうち背き眺めて、「あはれなりし世のありさま」

など、独り言のやうにうち嘆きて、

思ふどちなびく方にはあらずともわれぞ煙に先立ちなまし

「何とか、心憂や。」

誰れにより世を海山に行きめぐり絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ

いでや、いかでか見えたてまつらむ。命こそかなひがたかべいものなめれ。はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、ただ一つゆゑぞや」とて、箏の御琴引き寄せて、掻き合せすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。いとおほどかにうつくしうたをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきてももの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて、腹立ちなしたまふををかしう見どころありと思す。

五月五日にぞ、五十日には当たるらむと、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。何ごともいかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし、口惜しのわざや、さる所にしも、心苦しきさまにて出で来たるよ、と思す。男君ならましかば、かうしも御心にかけたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世も、この御ことにつけてぞかたほなりけり、と思さるる。御使出だし立てたまふ。「かならずその日違へずまかり着け」とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることもありがたうめでたきさまにて、まめまめしき御訪らひもあり。

海松や時ぞともなき蔭にゐて何のあやめもいかにわくらむ

心のおくがるるまでなむ。なほかくてはえ過ぐすまじきを、思ひ立ちたまひね。さりともしろめたきことは、よも。

と書いたまへり。

入道、例の喜び泣きしてゐたり。かかる折は生けるかひもつくり出でたる、ことわりなりと見ゆ。ここにも、よろづ所狭きまで思ひ設けたりけれど、この

御使なくは、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女君のあはれに思ふやうなるを語らひ人にて、世の慰めにしけり。をさをさ劣らぬ人も、類に触れて迎へ取りてあらずれど、こよなく衰へたる宮仕へ人などの、巖の中尋ぬるが落ち止まれるなどこそあれ、これはこよなうこめき思ひあがり。聞きどころある世の物語などして、大臣の君の御ありさま、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば、げにかく思し出づばかりの名残とどめたる身も、いとたけくやうやう思ひなりけり。御文ももろともに見て、心のうちに、あはれ、かうこそ思ひの外にめでたき宿世はありけれ、憂きものはわが身こそありけれ、と思ひ続けらるれど、「乳母のことはいかに」など、こまかに訪らはせたまへるもかたじけなく、何ごとも慰めけり。御返りには、

数ならぬみ島隠れに鳴く鶴を今日もいかにと問ふ人ぞなき

よろづに思うたまへ結ばほるるありさまを、かくたまさかの御慰めにかけてはべる命のほどもはかなくなむ。げに後ろやすく思うたまへ置くわざもがな

とまめやかに聞こえたり。うち返し見たまひつつ、「あはれ」と長やかにひとりごちたまふを、女君、しり目に見おこせて、「浦よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかにひとりごち眺めたまふを、「まことは、かくまでとりなしたまふよ。こはただかばかりのあはれぞや。所のさまなどうち思ひやる時々、来し方のと忘れがたき独り言を、ようこそ聞き過ぐいたまはね」など、恨みきこえたまひて、上包ばかりを見せたてまつらせたまふ。筆などのいとゆゑづきて、やむごとなき人苦しげなるを、かかればなめりと思す。

かくこの御心とりたまふほどに、花散里などを離れ果てたまひぬるこそいとほしけれ。公事も繁く、所狭き御身に思し憚るに添へても、めづらしく御目お



どろくことのなきほど、思ひしづめたまふなめり。五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思し起こして渡りたまへり。よそながらも、明け暮れにつけよろづに思しやり訪らひきこえたまふを頼みにて過ぐいたまふ所なれば、今めかしう心にくきさまに、そばみ恨みたまふべきならねば、心やすげなり。年ごろにいよいよ荒れまさり、すごげにておはす。女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつつましかれど、端近うち眺めたまひけるさまながら、のどやかにてもものしたまふけはひ、いとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だにおどろかさずはいかにして荒れたる宿に月を入れまし

と、いとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、とりどりに捨てがたき世かな、かかるところなかなか身も苦しけれ、と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそ入れ

うしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思されざりけり。「空な眺めそ」と頼めきこえたまひし折のことものたまひ出でて、「などで、たぐひあらじといみじうものを思ひ沈みけむ。憂き身からは、同じ嘆かしきにこそ」とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。例のいづこの御言の葉にかあらむ、尽きせず語らひ慰めきこえたまふ。

かやうのついでにも、かの五節を思し忘れず、また見てしがなと心にかけたまへれど、いとかたきことにてえ紛れたまはず。女、もの思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経むことを思ひ絶えたり。心やすき殿造りしては、かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもと思す。かの院の造りざま、なかなか見どころ

多く今めいたり。よしある受領などを選びて、当て当てに催したまふ。尚侍の君、なほえ思ひ放ちきこえたまはず。こりずまに立ち返り御心ばへもあれど、女は憂きに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず、なかなか所狭う、さうざうしう世の中思さる。

院はのどやかに思しなりて、時々につけてをかしき御遊びなど好ましげにておはします。女御、更衣みな例のごときぶらひたまへど、春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、かむの君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かく引き変へめでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。入道後の宮、御位をまた改めたまふべきならねば、太上天皇にならずらへて、御封賜らせたまふ。院司どもなりてさまことにいつくし。御行なひ、功德のことを常の御いとなみにておはします。年ごろ、世に憚りて出で入りも難く、見たてまつりたまはぬ嘆きをいぶせく思しけるに、思すさまにて参りまかだたまふもいとめでたければ、大后は、憂きものは世なりけり、と思し嘆く。大臣はことに触れて、いと恥づかしげに仕まつり心寄せきこえたまふも、なかなかいとほしげなるを、人もやすからず聞こえけり。

兵部卿の親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の間こえをのみ思し憚りたまひしことを、大臣は憂きものに思しおきて、昔のやうにもむつびきこえたまはず。なべての世にはあまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情けなき節もうちませたまふを、入道の宮は、いとほしう本意なきことに見たてまつりたまへり。世の中のこと、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御ままなり。権中納言の御むすめ、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿みたちて、儀式などいとあらまほし。兵部卿宮の中の君も、さや

うに心ざしてかしづきたまふ名高きを、大臣は、人よりまさりたまへとしも思さずなむありける。いかがしたまはむとすらむ。

その秋、住吉に詣でたまふ。願ども果たしたまふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部、殿上人、我も我もと仕うまつりたまふ。折しも、かの明石の人、年ごとの例のことにて詣づるを、去年今年は障ることありて、おこたりけるかしこまり取り重ねて、思ひ立ちけり。舟にて詣でたり。岸にさし着くるほど、見れば、ののしりて詣でたまふ人のけはひ渚に満ちて、いつくしき神宝を持て続けたり。楽人、十列など装束をととのへかたちを選びたり。「誰が詣でたまへるぞ」と問ふれば、「内大臣殿の御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなきほどの下種だに心地よげにうち笑ふ。げにあさましよう、月日もこそあれ、なかなかこの御ありさまを遥かに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ。さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だにもの思ひなげにて、仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかなく思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らで立ち出でつらむ、など思ひ続けるにいと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる、うへのきぬの濃き薄き数知らず。六位のなかにも蔵人は青色しるく見えて、かの賀茂の瑞垣恨みし右近将監も鞆負になりて、ことごとしげなる隨身具したる蔵人なり。良清も同じ佐にて、人よりことにももの思ひなきけしきにて、おどろおどろしき赤衣姿いときよげなり。すべて、見し人びと引き変へはなやかに、何ごと思ふらむと見えてうち散りたるに、若やかなる上達部殿上人の、我も我もと思ひいどみ、馬、鞍などまで飾りを整へ磨きたまへるは、いみじき物に田舎人も思へり。御車を遥かに見やれば、なかなか心やましくて、恋しき御影をもえ見たてまつらず。河原大臣の御例をまねびて、童隨身を賜りたまひける、いとをかし

げに装束き、みづら結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、丈姿ととのひ、うつくしげにて十人、さまことに今めかしう見ゆ。大殿腹の若君、限りなくかしづき立てて、馬添ひ童のほどもな作りあはせて、やう変へて装束きわけたり。雲居遙かにめでたく見ゆるにつけても、若君の数ならぬさまにてもしたまふをいみじと思ふ。いよいよ御社の方を拝みきこゆ。国の守参りて、御まうけ、例の大臣などの参りたまふよりは、ことに世になく仕うまつりけむかし。いとはしたなければ、立ちまじり、数ならぬ身のいささかのことせむに、神も見入れ数まへたまふべきにもあらず、帰らむにも中空なり、今日は難波に舟さし止めて、祓へをだにせむ、とて漕ぎ渡りぬ。

君は夢にも知りたまはず、夜一夜いろいろのことをせさせたまふ。まことに神の喜びたまふべきことをし尽くして、来し方の御願にもうち添へ、ありがたきまで遊びののしり明かしたまふ。惟光やうの人は、心のうちに神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立ち出でたまへるにさぶらひて、聞こえ出でたり。

住吉の松こそものはかなしけれ神代のことをかけて思へば  
げにと思し出でて、

「荒かりし波のまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする  
験ありな」とのたまふも、いとめでたし。

かの明石の舟、この響きに圧されて過ぎぬることも聞こゆれば、知らざりけるよ、とあはれに思す。神の御しるべを思し出づるもおろかならねば、いささかなる消息をだにして心慰めばや、なかなか思ふらむかし、と思す。御社立ちたまで、所々に逍遙を尽くしたまふ。難波の御祓へ、七瀬によそほしう仕まつる。堀江のわたりを御覧じて、「今はた同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光うけたまはりやしつらむ、さる召し

もやと、例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など、御車とどむる所にてたてまつれり。をかしと思して、畳紙に、

みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな

とてたまへれば、かしこの心知れる下人して遣りけり。駒並めてうち過ぎたまふにも心のみ動くに、露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、うち泣きぬ。

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ

田蓑の島に御禊仕うまつる御祓への物につけて、たてまつる。日、暮れ方になりゆく。夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなる折からなればにや、人目もつつまずあひ見まほしくさへ思さる。

露けさの昔に似たる旅衣田蓑の島の名には隠れず

道のままに、かひある逍遙、遊びののしりたまへど、御心にはなほかかりて思しやる。遊びどもの集ひ参れる、上達部と聞こゆれど若やかにこと好ましげなるは、みな目とどめたまふべかめり。されど、いでや、をかしきこともものあはれも人からこそあべけれ、なのめなることをだに、すこしあはき方に寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを、と思すに、おのが心をやりてよしめきあへるも、疎ましう思しけり。

かの人は過ぐしきこえて、またの日ぞよろしかりければ、御幣たてまつる。

ほどにつけたる願どもなかつが果たしける。またなかなかもの思ひ添はりて、明け暮れ口惜しき身を思ひ嘆く。今や京におはし着くらむと思ふ日数も経ず御使あり。このころのほどに迎へむことをぞのたまへる。いと頼もしげに数まへのたまふめれど、いさや、また島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむ、と思ひわづらふ。入道も、さて出だし放たむはいとうしろめたう、さりとてかく埋もれ過ぐさむを思はむも、なかなか来し方の年ごろよりも心尽くしなり。

よろづにつつましう、思ひ立ちがたきことを聞こゆ。

まことや、かの齋宮も替はりたまひにしかば、御息所上りたまひてのち、変はらぬさまに何ごとも訪らひきこえたまふことは、ありがたきまで情けを尽くしたまへど、昔だにつれなかりし御心ばへの、なかなかならむ名残は見じ、と思ひ放ちたまへれば、渡りたまひなどすることはことになし。あながちに動かしきこえたまひても、わが心ながら知りがたく、とかくかかづらはむ御歩きなども、所狭う思しなりにたれば、強ひたるさまにもおはせず。齋宮をぞ、いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思ひきこえたまふ。なほかの六条の古宮をいとよく修理しつくるひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへること古りがたくて、よき女房など多く、好いたる人の集ひ所にて、ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、もののいと心細く思されければ、罪深き所ほとりに年経つるもいみじう思して、尼になりたまひぬ。

大臣聞きたまひて、かけかけしき筋にはあらねど、なほさる方のものをも聞こえあはせ人に思ひきこえつるを、かく思しなりにけるが口惜しうおぼえたまへば、おどろきながら渡りたまへり。飽かずあはれなる御訪らひ聞こえたまふ。近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかかりて御返りなど聞こえたまふも、いたう弱りたまへるけはひなれば、絶えぬ心ぎしのほどは、え見えたてまつらでや、と口惜しうて、いみじう泣いたまふ。かくまでも思しとどめたりけるを、女もよろづにあはれに思して、齋宮の御ことをぞ聞こえたまふ。「心細くてとまりたまはむを、かならずことに触れて数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。かひなき身ながらも、今しばし世の中を思ひのどむるほどは、とぎまかうさまにものを思し知るまで、見たてまつらむことこそ思ひたまへつれ」とても、消え入りつつ泣いたまふ。「かかる御こ

となくてだに、思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひては、何ごとも後見きこえむとなむ思うたまふる。さらにうしろめたくな思ひきこえたまひそ」など聞こえたまへば、「いとかたきこと。まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることこそはべるめれ。まして思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうちまじり、人に心も置かれたまはむ。うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな。憂き身をつみはべるにも、女は思ひの外にて、もの思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思うたまふる」など聞こえたまへば、あひなくものたまふかな、と思せど、「年ごころによろづ思うたまへ知りにたるものを、昔の好き心の名残あり顔にのたまひなすも本意なくなむ。よし、おのづから」とて、外は暗うなり、内は大殿油のほのかにものより通りて見ゆるを、もしもやと思して、やをら御几帳のほころびより見たまへば、心もとなきほどの火影に、御髪いとをかしげにはなやかにそぎて寄りゐたまへる、絵にかきたらむさましていみじうあはれなり。帳の東面に添ひ臥したまへるぞ宮ならむかし。御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。はつかなれど、いとうつくしげならむと見ゆ。御髪のかかりたるほど、頭つき、けはひあてに気高きものからひちちかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、心もとなくゆかしきにも、さばかりのたまふものを、と思し返す。「いと苦しきさまよりはべる。かたじけなきを、はや渡らせたまひね」とて、人にかき臥せられたまふ。「近く参り来たるしるしに、よろしう思さればうれしかるべきを、心苦しきわざかな。いかに思さるるぞ」とて、覗きたまふけしきなれば、「いと恐ろしげにはべりや。乱り心地のいとかく限りなる折しも渡らせたまへるは、まことに浅からずなむ。思ひはべること

をすこしも聞こえさせつれば、さりととも頼もしくなむ」と聞こえさせたまふ。「かかる御遺言のつらに思しけるもいとどあはれになむ。故院の御子たちあまたものしたまへど、親しくむつび思ほすもをさをさなきを、上の同じ御子たちのうちに数まへきこえたまひしかば、きこそは頼みきこえはべらめ。すこしおとなしきほどになりぬる齡ながら、あつかふ人もなければ、さうざうしきを」など聞こえて帰りたまひぬ。御訪らひ今すこしたちまさりて、しばしば聞こえたまふ。

七八日ありて亡せたまひにけり。あへなう思さるるに、世もいとはかなくて、もの心細く思されて、内へも参りたまはず、とかくの御ことなど掟てさせたまふ。また頼もしき人もことにおはせざりけり。古き齋宮の宮司など、仕うまつり馴れたるぞ、わづかにことども定めける。御みづからも渡りたまへり。宮に御消息聞こえたまふ。「何ごともおぼえはべらでなむ」と、女別当して聞こえたまへり。「聞こえさせ、のたまひ置きしこともはべしを、今は隔てなきさまに思されば、うれしくなむ」と聞こえたまひて、人びと召し出でて、あるべきことども仰せたまふ。いと頼もしげに、年ごろの御心ばへ取り返しつべう見ゆ。いといかめしう、殿の人びと数もなう仕うまつらせたまへり。あはれにうち眺めつつ、御精進にて、御簾下ろしこめて行はせたまふ。宮には、常に訪らひきこえたまふ。やうやう御心静まりたまひては、みづから御返りなど聞こえたまふ。つつましう思したれど、御乳母など、「かたじけなし」と、そそのかしきこゆるなりけり。

雪霰かき乱れ荒るる日、いかに宮のありさまかすかに眺めたまふらむ、と思ひやりきこえたまひて、御使たてまつれたまへり。

ただ今の空をいかに御覧ずらむ。

降り乱れひまなき空に亡き人の天翔るらむ宿ぞ悲しき



空色の紙の曇らはしきに書いたまへり。若き人の御目にとどまるばかりと、心してつくろひたまへる、いと目もあやなり。宮はいと聞こえにくくしたまへど、これかれ「人づてには、いと便なきこと」と、責めきこゆれば、鈍色の紙のいと香ばしう艶なるに、墨つきなど紛らはして、

消えがてにふるぞ悲しきかきくらしわが身それとも思ほえぬ世に

つつましげなる書きざま、いとおほどかに、御手すぐれてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。下りたまひしほどより、なほあらず思したりしを、今は心にかけてともかくも聞こえ寄りぬべきぞかしと思すには、例の引き返し、いとほしくこそ、故御息所のいとうしろめたげに心おきたまひしを、ことわりなれど、世の中の人もさやうに思ひ寄りぬべきことなるを、引き違へ心清くあつかひきこえむ、上の今すこしもの思し知る齢にならせたまひなば、内住みせさせたてまつりて、さうぎうしきに、かしづきぐさにこそ、と思しなる。いとまめやかにねむごろに聞こえたまひて、さるべき折々は渡りなどしたまふ。

「かたじけなくとも、昔の御名残に思しなずらへて、氣遠からずもてなさせたまはばなむ、本意なる心地すべき」など聞こえたまへど、わりなくもの恥ぢをしたまふ奥まりたる人ざまにて、ほのかにも御声など聞かせたてまつらむは、いと世になくめづらかなることと思したれば、人びとも聞こえわづらひて、かかる御心ざまを愁へきこえあへり。女別当、内侍などいふ人びと、あるは離れたてまつらぬわかむどほりなどにて、心ばせある人々多かるべし、この人知れず思ふ方のまじらひをせさせたてまつらむに、人に劣りたまふまじかめり、いかでさやかに御かたちを見てしがな、と思すも、うちとくべき御親心にはあらずやありけむ。わが御心も定めがたければ、かく思ふといふことも、人にも漏らしたまはず。御わざなどの御ことをも取り分きてせさせたまへば、ありがたき御心を宮人もよろこびあへり。

はかなく過ぐる月日に添へて、いとどさびしく心細きことのみまさるに、さぶらふ人びともやうやうあかれ行きなどして、下つ方の京極わたりなれば、人氣遠く、山寺の入相の声々に添へても、音泣きがちにてぞ過ぐしたまふ。同じき御親と聞こえしなかにも、片時の間も立ち離れたてまつりたまはでならはしたてまつりたまひて、齋宮にも親添ひて下りたまふことは例なきことなるを、あながちに誘ひきこえたまひし御心に、限りある道にては、たぐひきこえたまはずなりにしを、干る世なう思し嘆きたり。さぶらふ人びと、貴きも賤しきもあまたあり。されど、大臣の、「御乳母たちだに心にまかせたること、引き出だし仕うまつるな」など親がり申したまへば、いと恥づかしき御ありさまに、「便なきこと聞こし召しつけられじ」と言ひ思ひつつ、はかなきことの情けもさらにつくらず。院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御かたちを、忘れがたう思しおきければ、「参りたまひて、齋院など、御はらからの宮々おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」と、御息所にも聞こえたまひき。されど、やむごとなき人びとさぶらひたまふに、数々なる御後見もなくてやと思しつつみ、上はいとあつしうおはしますも恐ろしう、またもの思ひや加へたまはむ、と憚り過ぐしたまひしを、今はまして誰かは仕うまつらむと人びと思ひたるを、ねむごろに院には思しのたまはせけり。

大臣聞きたまひて、院より御けしきあらむを、引き違へ横取りたまはむを、かたじけなきことと思すに、人の御ありさまのいとらうたげに、見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞こえたまひける。「かうかうのことをなむ思うたまへわづらふに、母御息所いと重々しく心深きさまにものはべりしを、あぢきなき好き心にまかせて、さるまじき名をも流し、憂きものに思ひ置かれはべりにしをなむ、世にいとほしく思ひたまふる。この世にて、その恨みの心と

けず過ぎはべりにしを、今はとなりての際に、この齋宮の御ことをなむものせられしかば、さも聞き置き心にも残すまじうこそはさすがに見おきたまひけめと思ひたまふるにも、忍びがたう、おほかたの世につけてだに、心苦しきことは見聞き過ぐされぬわざにはべるを、いかでなき蔭にても、かの恨み忘るばかりと思ひたまふるを、内にもさこそおとなびさせたまへど、いときなき御齡におはしますを、すこし物の心知る人はさぶらはれてもよくやと思ひたまふるを、御定めに」など聞こえたまへば、「いとよう思し寄りけるを、院にも思さむことは、げにかたじけなういとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて、知らず顔に参らせたてまつりたまへかし。今はた、さやうのことわざとも思しとどめず、御行なひがちになりたまひて、かう聞こえたまふを、深うしも思しとどめじと思ひたまふる」「さらば、御けしきありて数まへさせたまはば、もよほしばかりの言を添ふるになしはべらむ。とぎまかうざまに思ひたまへ残すことなきに、かくまでさばかりの心構へもまねびはべるに、世人やいかにとこそ憚りはべれ」など聞こえたまで、後には、げに知らぬやうにて、ここに渡したてまつりてむと思す。女君にも、しかなむ思ひ語らひきこえて、「過ぐいたまはむに、いとよきほどなるあはひならむ」と聞こえ知らせたまへば、うれしきことに思して、御渡りのことをいそぎたまふ。

入道の宮、兵部卿宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、大臣の、隙ある仲にて、いかがもてなしたまはむと心苦しく思す。権中納言の御むすめは、弘徽殿の女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。上もよき御遊びがたきに思いたり。「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを、おとなしき御後見はいとうれしかべいこと」と思しのたまひて、さる御けしき聞こえたまひつつ、大臣のよろづに思し至らぬことなく、公方の御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こま

かなる御心ばへのいとあはれに見えたまふを、頼もしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心やすくさぶらひたまふこともかたきを、すこしおとなびて添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。

絵

合

前齋宮の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ、こまかなる御とぶらひまで、とり立てたる御後見もなしと思しやれど、大殿は、院に聞こし召さむことを憚りたまひて、二条の院に渡したてまつらむことをも、このたびは思しとまりて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど、おほかたのことどもはとりもちて、親めききこえたまふ。院はいと口惜しく思し召せど、人わろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うちみだれの箱、香壺の箱ども、世の常ならず、くさぐさの御薫物ども、薰衣香またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことに調べさせたまへり。大臣見たまひもせむにと、かねてよりや思しまうけむ、いとわざとがましかむめり。殿も渡りたまへるほどにて、「かくなむ」と女別当御覽ぜさす。ただ、御櫛の箱の片つ方を見たまふに、尽きせずこまかになまめきてめづらしきさまなり。挿櫛の箱の心葉に、

別れ路に添へし小櫛をかことにて遙けき仲と神やいさめし

大臣これを御覽じつけて思しめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて、わが御心のならひあやなくなる身をつみて、かの下りたまひしほど御心に思ほしけむこと、かう年経て帰りましたまひて、その御心ざしをも遂げたまふべきほどに、かかる違ひ目のあるをいかに思すらむ、御位を去り、もの静かにて、世を恨めしと思すらむ、など、我になりて心動くべきふしかな、と思し続けたまふに、いとほしく、何にかくあながちなることを思ひはじめて、心苦しく思ほし悩ますらむ、つらしとも思ひきこえしかど、またなつかしうあはれなる御心ばへを、など思ひ乱れたまひて、とばかりうち眺めたまへり。「この御返りは、いかやうにか聞こえさせたまふらむ。また御消息もいかが」など聞こえたまへど、いとかたはらいたければ、御文はえ引き出でず。宮は悩ましげに思ほして、御返りいとももの憂くしたまへど、「聞こえたまはざらむも、いと情けなく、かたじ

けなかるべし」と、人びとそそのかしわづらひきこゆるけはひを聞きたまひて、「いとあるまじき御ことなり。しるしばかり聞こえさせたまへ」と聞こえたまふもいと恥づかしけれど、いにしへ思し出づるに、いとなまめききよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし御幼心も、ただ今のこととおぼゆるに、故御息所の御ことなど、かきつらねあはれに思されて、ただかく、

別るとて遙かに言ひし一言もかへりてものは今ぞ悲しき

とばかりやありけむ。御使の祿、品々に賜はず。大臣は御返りをいとゆかしう思せど、え聞こえたまはず。

院の御ありさまは、女にて見たてまつらまほしきを、この御けはひも似げなからず、いとよき御あはひなめるを、内はまだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へきこゆるを、人知れずものしとや思すらむ、など、憎きことをさへ思しやりて胸つぶれたまへど、今日になりて思しとどむべきことにしあらねば、事どもあるべきさまにのたまひおきて、むつまじう思す修理の宰相を詳しく仕うまつるべくのたまひて、内に参りたまひぬ。うけばりたる親さまには聞こし召されじと、院をつつみきこえたまひて、御訪らひばかりと見せたまへり。よき女房などはもとより多かる宮なれば、里がちなりしも参り集ひて、いと二なくけはひあらまほし。あはれ、おはせましかば、いかにかひありて思しいたづかまし、と昔の御心さま思し出づるに、おほかたの世につけては、惜しうあたらしかりし人の御ありさまぞや、さこそえあらぬものなりけれ、よしありし方はなほすぐれて、物の折ごとに思ひ出できこえたまふ。

中宮も内にぞおはしましける。上は、めづらしき人参りたまふと聞こし召しければ、いとうつくしう御心づかひしておはします。ほどよりはいみじうされおとなびたまへり。宮も、「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして

見えたてまつらせたまへ」と聞こえたまひけり。人知れず、大人は恥づかしうやあらむと思しけるを、いたう夜更けて参う上りたまへり。いとつつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしと思しけり。弘徽殿には御覧じつきたれば、睦ましうあはれに心やすく思ほし、これは人ざまもいたうしめり恥づかしげに、大臣の御もてなしもやむごとなくよそほしければ、あなづりにくく思されて、御宿直などは等しくしたまへど、うちとけたる御童遊びに昼など渡らせたまふことは、あなたがちにおはします。権中納言は、思ふ心ありて聞こえたまひけるに、かく参りたまひて、御むすめにきしろふさまにてさぶらひたまふを、方々にやすからず思すべし。

院には、かの櫛の箱の御返り御覧せしにつけても、御心離れがたかりけり。そのころ大臣の参りたまへるに、御物語こまやかなり。ことのついでに、齋宮の下りたまひしこと、先々ものたまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、さ思ふ心なむありしなどはえあらはしたまはず。大臣も、かかる御けしき聞き顔にはあらで、ただいかが思したるとゆかしさに、とかう、かの御事をのたまひ出づるに、あはれなる御けしきあさはかならず見ゆれば、いといとほしく思す。めでたしと思ほししみにける御かたち、いかやうなるをかしさにかとゆかしう思ひきこえたまへど、さらにえ見たてまつりたまはぬを、ねたう思ほす。いと重りかにて、夢にもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ、おのづからほの見えたまふついででもあらめ、心にき御けはひのみ深さまされば、見たてまつりたまふままに、いとあらまほしと思ひきこえたまへり。かく隙間なくて二所さぶらひたまへば、兵部卿宮、すがすがともえ思ほし立たず、帝おとなびたまひなば、さりともえ思ほし捨てじ、とぞ待ち過ぐしたまふ。二所の御おぼえども、とりどりに挑みたまへり。

上はよろづのことにすぐれて絵を興あるものに思したり。立てて好ませたま



へばにや、二なくかかせたまふ。齋宮の女御、いとをかしうかかせたまふべければ、これに御心移りて、渡らせたまひつつ、かき通はさせたまふ。殿上の若き人びともこのことまねぶをば、御心とどめてをかきものに思ほしたれば、ましてをかしげなる人の、心ばへあるさまにまほならずかきすさび、なまめかしく添ひ臥して、とかく筆うちやすらひたまへる御さま、らうたげさに御心してみて、いとしげう渡らせたまひて、ありしよりけに御思ひまされるを、権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしく今めきたまへる御心にて、われ人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもにかき集めさせたまふ。「物語絵こそ心ばへ見えて見所あるものなれ」とて、おもしろく心ばへある限りを選りつつかかせたまふ。例の月次の絵も見馴れぬさまに、言の葉を書き続けて御覽ぜさせたまふ。わぎとをかしうしたれば、またこなたにてもこれを御覽ずるに、心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持て渡らせたまふを惜しみ領じたまへば、大臣聞きたまひて、「なほ、権中納言の御心ばへの若々しきこそ、改まりがたかめれ」など笑ひたまふ。「あながちに隠して、心やすくも御覽ぜさせず悩ましきこゆる、いとめざましや。古体の御絵どものはべる、参らせむ」と奏したまひて、殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、今めかしきはそれそれと選り調へさせたまふ。長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、事の忌みあるはこたみはたてまつらじと選りとどめたまふ。かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ女君にも見せたてまつりたまひける。御心深く知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて忘れがたく、その世の夢を思し覚ます折なき御心どもには、取りかへし悲しう思し出でらる。今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞

こえたまひける。

「一人ゐて嘆きしよりは海人の住むかたをかくてぞ見るべかりける  
おぼつかなきは、慰みなましものを」とのたまふ。いとあはれと思して、

憂きめ見しその折よりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か

中宮ばかりには見せたてまつるべきものなり。かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々のありさまさやかに見えたるを選りたまふついでにも、かの明石の家居ぞ、まづいかにと思しやらぬ時の間なき。

かう絵ども集めらると聞きたまひて、権中納言いと心を尽くして、軸、表紙、紐の飾り、いよいよ調べたまふ。弥生の十日のほどなれば、空もうららかにて、人の心ものび、ものおもしろき折なるに、内わたりも、節会どものひまなれば、ただかやうのことどもにて、御方々暮らしたまふを、同じくは御覧じ所もまさりぬべくてたてまつらむの御心つきて、いとわざと集め参らせたまへり。こなたかなたとさまさまに多かり。物語絵は、こまやかになつかしきさまさるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆるある限り、弘徽殿は、そのころ世にめづらしくをかしき限りを選りかかせたまへれば、うち見る目の今めかしきはなやかさは、いとこよなくまされり。上の女房なども、よしある限り、これはかれはなど定めあへるを、このころのことにする。

中宮も参らせたまへるころにて、方々御覧じ捨てがたく思ほすことなれば、御行なひも怠りつつ御覧ず。この人びとのとりどりに論ずるを聞こし召して、左右と方分かたせたまふ。梅壺の御方には、平内侍のすけ、侍従の内侍、少将の命婦、右には大弐の内侍のすけ、中将の命婦、兵衛の命婦をただ今は心にくき有職どもにて、心々に争ふ口つきどもををかしと聞こし召して、まづ、物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせて争ふ。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ、かくや姫のこの世の濁り

にも穢れず、はるかに思ひのぼれる契り高く、神代のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。右は、「かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のこととこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光には並ばずなりにけり。阿部のおほしが千々のこがねを捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるもいとあへなし。庫持の御子の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまちとなす」。絵は巨勢相覽、手は紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺をはいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常の装ひなり。「俊蔭は、はげしき波風におぼほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きける方の心ぎしもかなひて、つひに人のみかどにもわが国にもありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心を言ふに、絵のさまも唐土と日の本とを取り並べて、おもしろきことどもなほ並びなし」と言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで見ゆ。左はそのことわりなし。

次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず。これも右はおもしろくにぎははしく、内わたりよりうちはじめ、近き世のありさまをかきたるは、をかしう見所まざる。平内侍、

「伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき

世の常のあだことのひきつくろひ飾れるに圧されて、業平が名をや朽たすべき」と争ひかねたり。右のすけ、

雲の上に思ひのぼれる心には千尋の底もはるかにぞ見る

「兵衛の大君の心高さはげに捨てがたけれど、在五中将の名をばえ朽たさじ」とのたまはせて、宮、

みるめこそうらふりぬらめ年経にし伊勢をの海人の名をや沈めむ

かやうの女言にて乱りがはしく争ふに、一卷に言の葉を尽くしてえも言ひやら  
ず。ただあさはかなる若人どもは、死にかへりゆかしがれど、上のも宮のも、  
片端をだにえ見ず、いといたう秘めさせたまふ。

大臣参りたまひて、かくとりどりに争ひ騒ぐ心ばへどもをかしく思して、  
「同じくは、御前にてこの勝負定めむ」とのたまひなりぬ。かかることもやと  
かねて思しければ、中にもことなるは選りとどめたまへるに、かの須磨、明石  
の二巻は、思すところありて取り交ぜさせたまへり。中納言もその御心劣らず、  
このころの世には、ただかくおもしろき紙絵をととのふることを天の下いとな  
みたり。「今あらためかかむことは、本意なきことなり。ただありけむ限りを  
こそ」とのたまへど、中納言は人にも見せて、わりなき窓をあけてかかせたま  
ひけるを、院にもかかること聞かせたまひて、梅壺に御絵どもたてまつらせた  
まへり。年の内の節会どもおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに  
かけるに、延喜の御手づから事の心かかせたまへるに、またわが御世の事もか  
かせたまへる巻に、かの齋宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて  
思しければ、かくべきやう詳しく仰せられて、公茂が仕うまつれるがいとみ  
じきをたてまつらせたまへり。艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなど  
いと今めかし。御消息はただ言葉にて、院の殿上にさぶらふ左近中将を御使に  
てあり。かの大極殿の御輿寄せたる所の神々しきに、

身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちを忘れしもせず

とのみあり。聞こえたまはざらむもいとかたじけなければ、苦しう思しながら、  
昔の御髪ざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ恋しき

とて縹の唐の紙に包みて参らせたまふ。御使の祿など、いとなまめかし。院の  
帝御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思ほ

しける。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。院の御絵は、後の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。尚侍の君も、かやうの御好ましさは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。

その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかしきさまにはかなうしなして、左右の御絵ども参らせたまふ。女房のさぶらひに御座よそはせて、北南方々別れてさぶらふ。殿上人は、後涼殿の簀子におのおの心寄せつつさぶらふ。左は紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、裃は紅に藤襲の織物なり。姿、用意など、なべてならず見ゆ。右は、沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、花足の心ばへなど、今めかし。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の裃着たり。みな御前に昇き立つ。上の女房、前後と装束き分けたり。召しありて、内大臣、権中納言参りたまふ。その日、帥宮も参りたまへり。いとよしありておはするうちに、絵を好みたまへば、大臣の下にすすめたまへるやうやあらむ、ことごとしき召しにはあらで、殿上におはするを、仰せ言ありて、御前に参りたまふ。この判仕うまつりたまふ。いみじうげにかき尽くしたる絵どもあり。さらにえ定めやりたまはず。例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろきことどもを選びつつ、筆とどこほらずかきながしたるさま、たとへむかたなしと見るに、紙絵は限りありて、山水のゆたかなる心ばへをえ見せ尽くさぬものなれば、ただ筆の飾り、人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔のあと恥なくにぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くの争ひども、今日は方々に興あることも多かり。朝餉の御障子をあけて中宮もおはしませば、深うしろしめしたらむと思ふに、大臣もいと優におぼえたまひて、所々の判ども心もとなき折々に、時々さしいらへたまひけるほどあらまほし。定めかねて夜

に入りぬ。左は、なほ数一つある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐれたるを選び置きたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひすまして静かにかきたまへるは、たとふべきかたなし。親王よりはじめたてまつりて、涙とどめたまはず。その世に、心苦し悲しと思ほししほどよりも、おはしけむありさま、御心に思ししことども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々、磯の隠れなくかきあらはしたまへり。草の手に仮名の所々に書きまぜて、まほの詳しき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし。誰もこと事思ほさず、さまざまの御絵の興、これにみな移り果てて、あはれにおもしろし。よろづみなおしゆづりて、左勝つになりぬ。

夜明け方近くなるほどに、ものいとあはれに思されて、御土器など参るついでに、昔の御物語ども出で来て、「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院ののたまはせしやう、「才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるは、いとかたきものになむ。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道な深く習ひそ」と諫めさせたまひて、本才の方々のもの教へさせたまひしに、つたなきこともなく、またとり立ててこのことと心得ることもはべらざりき。絵かくことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかりかきて見るべきと、思ふ折々はべりしを、おぼえぬ山賤になりて、四方の海の深き心を見しに、さらに思ひ寄らぬ隈なく至られにしかど、筆のゆく限りありて、心よりはことゆかずなむ思うたまへられしを、ついでなくて御覧ぜさすべきならねば、かう好き好きしきやうなる、後の聞こえやあらむ」と、親王に申したまへば、「何の才も、心より放ちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、学び所あらむは、事の

深さ浅さは知らねど、おのづから移さむに跡ありぬべし。筆取る道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを、深き労なく見ゆるおれ者も、さるべきにて書き打つたぐひも出で来れど、家の子の中には、なほ人に抜けぬる人、何ごとをも好み得けるとぞ見えたる。院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかはさまざまとりどりの才習はさせたまはざりけむ。その中にも、とり立てたる御心に入れて、伝へ受けとらせたまへるかひありて、文才をばさるものにて言はず、さらぬことの中には、琴弾かせたまふことなむ一の才にて、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、次々に習ひたまへると、上も思しのたまはせき。世の人、しか思ひきこえさせたるを、絵はなほ筆のついでにすさびさせたまふあだこととこそ思ひたまへしか、いとかうまさなきまで、いにしへの墨がきの上手ども跡をくらうなしつべかめるは、かへりてけしからぬわざなり」と、うち乱れて聞こえたまひて、酔ひ泣きにや、院の御こと聞こえ出でて、みなうちしほれたまひぬ。

二十日あまりの月さし出でて、こなたはまださやかならねど、おほかたの空をかしきほどなるに、書の司の御琴召し出でて、和琴、権中納言賜はりたまふ。さはいへど、人にまさりてかき立てたまへり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少将の命婦仕うまつる。上人の中にすぐれたるを召して、拍子賜はず。いみじうおもしろし。明け果つるままに、花の色も人の御かたちどもほのかに見えて、鳥のさへづるほど、心地ゆきめでたき朝ぼらけなり。祿どもは、中宮の御方より賜はず。親王は、御衣また重ねて賜はりたまふ。

そのころのことには、この絵の定めをしたまふ。「かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせたまへ」と聞こえさせたまひければ、これが初め、残りの巻々ゆかしがらせたまへど、「今次々に」と聞こえさせたまふ。上にも御心ゆかせたまひて思し召したるを、うれしく見たてまつりたまふ。はかなきことにつけても、

かうもてなしきこえたまへば、権中納言は、なほおぼえおさるべきにやと、心やましう思さるべかめり。上の御心ざしはもとより思ししみにければ、なほこまやかに思し召したるさまを、人知れず見たてまつり知りたまひてぞ、頼もしく、さりとともと思されける。さるべき節会どもにも、この御時より、と末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私ざまのかかるはかなき御遊びもめづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世なり。大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、今すこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなむと深く思ほすべかめる。昔のためしを見聞くにも、齢足らで官位高く昇り、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり、この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり、中ごろなきになりて沈みたりし愁へに代はりて、今までもながらふるなり、今より後の栄えはなほ命うしろめたし、静かに籠もりゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べむ、と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせさせたまふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思し召すにぞ、とく捨てたまはむことはかたげなる。いかに思しおきつるにかと、いと知りがたし。



松

風

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにし置かせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見所ありてこまかなる。寝殿はふたげたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり。

明石には御消息絶えず、今はなほ上りたまひぬべきことをばのたまへど、女はなほわが身のほどを思ひ知るに、こよなくやむごとなき際の人びとだに、なかなかさてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてか、さし出でまじらはむ、この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそ現はれめ、たまさかにはひ渡りたまふついでを待つことにて、人笑へにはしたなきこといかにあらむ、と思ひ乱れても、またさりとて、かかる所に生ひ出で、数まへられたまはざらむもいとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず、親たちもげにことわりと思ひ嘆くに、なかなか心も尽き果てぬ。昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後はかばかしうあひ継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼び取りて語らふ。「世の中を今とは思ひ果てて、かかる住まひに沈みそめしかども、末の世に思ひかけぬこと出で来てなむ、さらに都の住みか求むるを、にはかにまばゆき人中いとはしたなく、田舎びにける心地も静かなるまじきを、古き所尋ねてとなむ思ひ寄る。さるべき物は上げ渡さむ。修理などして、かたのごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」と言ふ。預り、「この年ごろ、領ずる人もものしたまはず、あやしきやうになりてはべれば、下屋にぞ繕ひて

宿りはべるを、この春のころより、内の大殿の造らせたまふ御堂近くて、かのわたりなむ、いと気騒がしうなりにてはべる。いかめしき御堂ども建てて、多くの人なむ造りいとなみはべるめる。静かなる御本意ならば、それや違ひはべらむ」「何か。それも、かの殿の御蔭にかたかけてと思ふことありて。おのづからおひおひに内のことどもはしてむ。まづ急ぎておほかたのことどもをものせよ」と言ふ。「みづから領ずる所にはべらねど、また知り伝へたまふ人もなければ、かごかなるならひにて、年ごろ隠ろへはべりつるなり。御荘の田畠などいふことのいたづらに荒れはべりしかば、故民部大輔の君に申し賜はりて、さるべき物などたてまつりてなむ、領じ作りはべる」など、そのあたりの貯へることどもを危ふげに思ひて、髭がちにつなしにくき顔を、鼻などうち赤めつつはちぶき言へば、「さらにその田などやうのことは、ここに知るまじ。ただ年ごろのやうに思ひてものせよ。券などはここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年ごろともかくも尋ね知らぬを、そのことも今詳しくしたためむ」など言ふにも、大殿のけはひをかくれば、わづらはしくて、その後、物など多く受け取りてなむ急ぎ造りける。かやうに思ひ寄るらむとも知りたまはで、上らむことをもの憂がるも心得ず思し、若君のさてつくづくともものしたまふを、後の世に人の言ひ伝へむ、今ひとときは人わろき疵にや、と思ほすに、造り出でてぞ、「しかしかの所をなむ思ひ出でたる」と聞こえさせける。人にまじらはむことを苦しげにのみものするは、かく思ふなりけり、と心得たまふ。口惜しからぬ心の用意かなと思しなりぬ。惟光朝臣、例の忍ぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば遣はして、さるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、さやうの住まひによしなからずはありぬべし、と思す。造らせたまふ御堂は、大覚寺の南にあたりて、滝殿の心ばへなど劣らず

おもしろき寺なり。これは川面に、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで思し寄る。

親しき人びといみじう忍びて下し遣はす。逃れがたくて今はと思ふに、年経つる浦を離れなむことあはれに、入道の心細くて一人とまらむことを思ひ乱れて、よろづに悲し。すべてなどかく心尽くしになりはじめけむ身にかと、露のかからぬたぐひうらやましくおぼゆ。親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても願ひわたりし心ぎしのかなふというれしけれど、あひ見で過ぎさむいぶせきの、堪へがたう悲しければ、夜昼思ひほれて、同じことをのみ、「さらば、若君をば見たてまつらでははべるべきか」と言ふよりほかのことなし。母君も、いみじうあはれなり。年ごろだに同じ庵にも住まずかけ離れつれば、まして誰れによりてかはかけとどまらむ。ただ、あだにうち見る人のあさはかなる語らひだに、見なれそなれて、別るるほどはただならざめるを、まして、もてひがめたる頭つき、心おきてこそ頼もしげなけれど、またさるかたに、これこそは世を限るべき住みななれと、あり果てぬ命を限りに思ひて契り過ぐし来つるを、にはかに行き離れなむも心細し。若き人びとのいぶせう思ひ沈みつるは、うれしきものから、見捨てがたき浜のさまを、またはえしも帰らじかすと、寄する波に添へて袖濡れがちなり。

秋のころほひなれば、もののはれ取り重ねたる心地して、その日とある暁に、秋風涼しくて虫の音もとりあへぬに、海の方を見出だしてゐるに、入道、例の、後夜より深う起きて、鼻すすりうちして行なひましたり。いみじう言忌すれど、誰も誰もいとしのびがたし。若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、袖よりほかに放ちきこえざりつるを、見馴れてまつはしたまへる心ぎまなど、ゆゆしきまでかく人に違へる身をいまいまいしく思ひ

ながら、片時見たてまつらではいかでか過ぐさむとすらむ、とつつみあへず。

「行く先をはるかに祈る別れ路に堪へぬは老いの涙なりけり

いともゆゆしや」とて、おしのごひ隠す。尼君、

もろともに都は出で来このたびやひとり野中の道に惑はむ

とて泣きたまふさま、いとことわりなり。こころ契りかはして積もりぬる年月のほどを思へば、かう浮きたることを頼みて捨てし世に帰るも、思へばはかなしや。御方、

「いきてまたあひ見むことをいつとてか限りも知らぬ世をば頼まむ

送りにだに」と切にのたまへど、方々につけてえさるまじきよしを言ひつつ、さすがに道のほども、いとうしろめたなきけしきなり。「世の中を捨てはじめしに、かかる人の国に思ひ下りはべりしことども、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心になふやうもやと思ひたまへ立ちしかど、身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに都に帰りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬葎、元のありさま改むることなきもの中から、公私にをこがましき名を広めて、親の御なき影を恥づかしめむことはいみじさになむ、やがて世を捨てつる門出なりけりと人にも知られにしを、その方につけてはよう思ひ放ちてけりと思ひはべるに、君のやうやう大人びたまひ、もの思ほし知るべきに添へては、などかう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらむと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりともかうつたなき身に引かれて、山賤の庵にはまじりたまはじと思ふ心一つを頼みはべりしに、思ひ寄りがたくてうれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどをとぎまかうぎまに悲しう嘆きはべりつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむもいとかたじけなう、契りことにおぼえたまへば、見たてまつらざらむ心惑

ひは静めがたけれど、この身は長く世を捨てし心はべり、君達は世を照らしたまふべき光しるければ、しばしかかる山賤の心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ、天に生まるる人の、あやしき三つの道に帰るらむ一時に思ひなずらへて、今日長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こしめすとも、後のこと思しいとなむな。さらぬ別れに御心動かしたまふな」と言ひ放つものから、  
 「煙ともならむ夕べまで、若君の御ことをなむ、六時の勤めにもなほ心ぎたなくうちまぜはべりぬべき」とて、これにぞうちひそみぬる。

御車はあまた続けむも所狭く、片へづつ分けむもわづらはしとて、御供の人もあながちに隠ろへ忍ぶれば、舟にて忍びやかにと定めたり。辰の時に舟出したまふ。昔の人もあはれと言ひける浦の朝霧、隔たりゆくままにいともの悲しくて、入道は心澄み果つまじくあくがれ眺めたり。ここら年を経て今さらには帰るも、なほ思ひ尽きせず、尼君は泣きたまふ。

かの岸に心寄りにし海人舟の背きし方に漕ぎ帰るかな

御方、

いくかへり行きかふ秋を過ぐしつ浮木に乗りてわれ帰るらむ

思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。人に見咎められじの心もあれば、路のほども軽らかにしなしたり。家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所変へたる心地もせず、昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。造り添へたる廊などゆるあるさまに、水の流れもをかしうしなしたり。まだこまやかなるにはあらねども、住みつかばさてもありぬべし。親しき家司に仰せ賜ひて、御まうけのことせさせたまひけり。渡りたまはむことは、とかう思したばかりほどに、日ごろ経ぬ。なかなかもの思ひ続けられて、捨てし家居も恋しうつれづれなれば、かの御形見の琴を掻き鳴らす。折のいみじう忍びがたければ、人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風

はしたなく響きあひたり。尼君もの悲しげにて、寄り臥したまへるに、起き上がりがりて、

身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

御方、

故里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰れか分くらむ

かやうにものはかなくて明かし暮らすに、大臣なかなか静心なく思さるれば、人目をもえ憚りあへたまはで渡りたまふを、女君は、かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりけるを、例の、聞きもや合はせたまふとて、消息聞こえたまふ。「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。訪らはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来りて待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御訪らひすべければ、二三日ははべりなむ」と聞こえたまふ。桂の院といふ所、にはかに造らせたまふと聞くは、そこに据ゑたまへるにや、と思すに心づきなければ、「斧の柄さへ改めたまはむほどや、待ち遠に」と心ゆかぬ御けしきなり。例の比べ苦しき御心、いにしへのありさま名残なしと、世人も言ふなるものを、何やかやと御心とりたまふほどに、日たけぬ。

忍びやかに、御前疎きはませで、御心づかひして渡りたまひぬ。たそかれ時におはし着きたり。狩の御衣にやつれたまへりしだに、世に知らぬ心地せしを、ましてさる御心してひきつくろひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。めづらしうあはれにて、若君を見たまふもいかが浅く思されむ。今まで隔てける年月だに、あさましく悔しきまで思ほす。大殿腹の君を、うつくしげなりと世人もて騒ぐは、なほ時世によれば、人の見なすなりけり。かくこそは、すぐれたる人の山口はしるかりけれど、うち笑みたる顔の何心なきが愛敬づき匂ひたるを、いみじう

らうたしと思す。乳母の、下りしほどは衰へたりしかたちねびまさりて、月ごろの御物語など馴れ聞こゆるを、あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらむことを思しのたまふ。「ここにも、いと里離れて、渡らむこともかたきを、なほかの本意ある所に移ろひたまへ」とのたまへど、「いとうひうひしきほど過ぐして」と聞こゆるもことわりなり。夜一夜、よろづに契り語らひ明かしたまふ。

繕ふべき所、所の預かり、今加へたる家司などに仰せらる。桂の院に渡りたまふべしとありければ、近き御荘の人びと、参り集まりたりけるも、みな尋ね参りたり。前裁どもの折れ伏したるなど繕はせたまふ。「ここかしこの立石どももみな転び失せたるを、情けありてしなさばをかしかりぬべき所かな。かかる所をわざと繕ふもあいなきわざなり。さても過ぐし果てねば、立つ時もの憂く心とまる、苦しかりき」など、来し方のことものたまひ出でて、泣きみ笑ひみうちとけのたまへる、いとめでたし。尼君のぞきて見たてまつるに、老いも忘れ、もの思ひも晴るる心地して、うち笑みぬ。東の渡殿の下より出づる水の心ばへ繕はせたまふとて、いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたううれしと見たてまつるに、闕伽の具などのあるを見たまふに、思し出でて、「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出でてたてまつる。几帳のもとに寄りたまひて、「罪軽く生ほし立てたまへる人のゆゑは、御行なひのほどあはれにこそ思ひなしきこゆれ。いといたく思ひ澄ましたまへりし御住みかを捨てて憂き世に帰りたまへる心ざし浅からず、またかしこには、いかにとまりて思ひおこせたまふらむと、さまざまになむ」といとなつかしうのたまふ。「捨てはべりし世を、今さらにたち帰り、思ひたまへ乱るるを、推し量らせたまひければ、命長さのしるしも思ひたまへ知られぬ」と、うち泣きて、「荒磯蔭に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今



は頼もしき御生ひ先と祝ひきこえさするを、浅き根ざしゆゑやいかかたがた心尽くされはべる」など聞こゆるけはひよしなからねば、昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかことがましう聞こゆ。

住み馴れし人は帰りてたどれども清水は宿のあるじ顔なる

わぎとはなくて言ひ消つさま、みやびかによしと聞きたまふ。

「いさらるはやくのことも忘れじをもとのあるじや面変はりせる

あはれ」とうち眺めて立ちたまふ姿にほひ、世に知らずとのみ思ひきこゆ。

御寺に渡りたまうて、月ごとの十四五日、つごもりの日行はるべき普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて、またまた加へ行はせたまふべきことなど定め置かせたまふ。堂の飾り、仏の御具などめぐらし仰せらる。月の明かきに帰りたまふ。

ありし夜のことと思し出でらるる折過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかとなくものあはれなるに、え忍びたまはで掻き鳴らしたまふ。まだ調べも変はらず、ひきかへしその折今の心地したまふ。

契りしに変はらぬ琴の調べにて絶えぬ心のほどは知りきや

女、

変はらじと契りしことを頼みにて松の響きに音を添へしかな

と聞こえ交はしたるも、似げなからぬこそは、身にあまりたるありさまなめれ。こよなうねびまさりにけるかたちけはひ、え思ほし捨つまじう、若君はた、尽きもせずまばられたまふ。いかにせまし、隠ろへたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二条の院に渡して心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪免れなむかし、と思ほせど、また思はむこといとほしくて、えうち出でたまはで涙ぐみて見たまふ。幼き心地に、すこし恥ぢらひたりしが、やうやう

ちとけて、もの言ひ笑ひなどしてむつれたまふを見るままに、匂ひまさりてうつくし。抱きておはするさま、見るかひありて、宿世こよなしと見えたり。

またの日は、京へ帰らせたまふべければ、すこし大殿籠もり過ぐして、やがてこれより出でたまふべきを、桂の院に人びと多く参り集ひて、ここにも殿上人あまた参りたり。御装束などしたまひて、「いとはしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。心苦しければ、さりげなく紛らはして立ちとまりたまへる戸口に、乳母、若君抱きてさし出でたり。あはれなる御けしきにかき撫でたまひて、「見ではいと苦しかりぬべきこそ、いとうちつけなれ。いかがすべき。いと里遠しや」とのたまへば、「遙かに思ひたまへ絶えたりつる年ごろよりも、今からの御もてなしのおぼつかなうはべらむは、心尽くしに」など聞こゆ。若君手をさし出でて、立ちたまへるを慕ひたまへば、つゐるたまひて、「あやしうもの思ひ絶えぬ身にこそありけれ。しばしにても苦しや。いづら、などもろともに出でては惜しみたまはぬ。さらばこそ、人心地もせめ」とのたまへば、うち笑ひて、女君にかくなむと聞こゆ。なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人びともかたはらいたがれば、しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、御子たちといはむにも足りぬべし。帷子引きやりて、こまやかに語らひたまふとて、とばかり返り見たまへるに、さこそ静めつれ、見送りきこゆ。いはむかたなき盛りの御かたちなり。いたうそびやぎたまへりしが、すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、かくてこそものものしかりけれと、御指貫の裾までなまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞ、あながちなる見なしなるべき。かの解けたりし蔵人も、還なりにけり。鞆負の尉にて、今年かうぶり得てけり。昔に改め、心地よげにて御佩刀取りに寄り来たり。人影を見

つけて、「来し方のもの忘れしはべらねど、かしこければ、えこそ。浦風おぼえはべりつる暁の寢覚にも、おどろかしきこえさすべきよすがだになくて」とけしきばむを、「八重立つ山は、さらに島隠れにも劣らざりけるを、松も昔のとたどられつるに、忘れぬ人もものしたまひけるに頼もし」など言ふ。こよなしや、我も思ひなきにしもあらざりしを、など、あさましうおぼゆれど、「今ことさらに」と、うちけざやぎて参りぬ。

いとよそほしくさし歩みたまふほど、かしかましう追ひ払ひて、御車の尻に、頭中将、兵衛督乗せたまふ。「いと軽々しき隠れ家、見あらはされぬこそねたう」と、いたうからがりたまふ。「昨夜の月に、口惜しう御供に後れはべりにけると思ひたまへられしかば、今朝霧を分けて参りはべりつる。山の錦はまだしうはべりけり。野辺の色こそ盛りにはべりけれ。なにがしの朝臣の、小鷹にかかづらひて立ち後れはべりぬる、いかがなりぬらむ」など言ふ。今日はなほ、桂殿にとて、そなたざまにおはしましぬ。にはかなる御あるじと騒ぎて、鵜飼ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。野に泊りぬる君達、小鳥しるしばかりひき付けさせたる荻の枝など苞にして参れり。大御酒あまたたび順流れて、川のわたり危ふげなれば、酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。おのおの絶句など作りわたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊び始まりて、いと今めかし。弾きもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして、折に合ひたる調子吹き立つるほど、川風吹き合はせておもしろきに、月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人四五人ばかり連れて参れり。上にさぶらひけるを、御遊びありけるついでに、「今日は六日の御物忌明く日にて、かならず参りたまふべきを、いかなれば」と仰せられければ、ここにかう泊らせたまひにけるよし聞こし召して、御消息あるなりけり。御使は蔵人弁なりけり。

月のすむ川のをちなる里なれば桂の影はのどけかるらむ

うらやましよう。

とあり。かしこまりきこえさせたまふ。上の御遊びよりも、なほ所からのすごさ添へたるものの音をめでて、また酔ひ加はりぬ。ここにはまうけの物もさぶらはざりければ、大堰に、「わざとならぬまうけの物や」と言ひつかはしたり。取りあへたるに従ひて参らせたり。衣櫃二かけにてあるを、御使の弁はとく帰り参れば、女の装束かづけたまふ。

久方の光に近き名のみして朝夕霧も晴れぬ山里

行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。「中に生ひたる」とうち誦んじたまふついでに、かの淡路島を思し出でて、躬恒が「所からか」とおぼめきけむことなどのたまひ出でたるに、ものあはれなる酔ひ泣きどもあるべし。

めぐり来て手に取るばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月

頭中将、

浮雲にしばしまがひし月影のすみはつる夜ぞのどけかるべき

左大弁、すこしおとなびて、故院の御時にもむつまじう仕うまつりなれし人なりけり。

雲の上のすみかを捨てて夜半の月いづれの谷にかけ隠しけむ

心々にあまたあめれど、うるさくてなむ。氣近ううち静まりたる御物語すこしうち乱れて、千年も見聞かまほしき御ありさまなれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、今日さへはとて急ぎ帰りたまふ。物ども品々にかづけて、霧の絶え間に立ち混じりたるも、前栽の花に見えまがひたる色あひなど、ことにめでたし。近衛府の名高き舎人、物の節どもなさぶらふに、さうざうしければ、其駒など乱れ遊びて、脱ぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと思ゆ。のしりて帰らせたまふ響き、大堰にはもの隔てて聞きて、名残さびしう眺めたまふ。

御消息をだにせでと、大臣も御心にかかれり。

殿におはして、とばかりうち休みたまふ。山里の御物語など聞こえたまふ。「暇聞こえしほど過ぎつれば、いと苦しうこそ。この好き者どもの尋ね来て、いといたう強ひとどめしに引かされて、今朝はいとなやまし」とて、大殿籠もれり。例の心とけず見えたまへど、見知らぬやうにて、「なずらひならぬほどを思し比ぶるも、わろきわざなめり。我は我と思ひなしたまへ」と教へきこえたまふ。暮れかかるほどに、内へ参りたまふに、ひきそばめて急ぎ書きたまふは、かしこへなめり。側目こまやかに見ゆ。うちささめきて遣はすを、御達など憎みきこゆ。

その夜は内にもさぶらひたまふべけれど、解けぎりつる御けしきとりに、夜更けぬれど、まかでたまひぬ。ありつる御返り持て参れり。え引き隠したまはで御覽ず。ことに憎かるべきふしも見えねば、「これ破り隠したまへ。むつかしや。かかるものの散らむも、今はつきなきほどになりけり」とて、御脇息に寄りゐたまひて、御心のうちにはいとあはれに恋しう思しやらるれば、灯をうち眺めて、ことにものたまはず。文は広がりながらあれど、女君見たまはぬやうなるを、「せめて見隠したまふ御目尻こそわづらはしけれ」とてうち笑みたまへる、御愛敬所狭きまでこぼれぬべし。さし寄りたまひて、「まことはらうたげなるものを見しかば、契り浅くも見えぬを、さりとてものめかさむほども憚り多かるに、思ひなむわづらひぬる。同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定めたまへ。いかがすべき。ここにて育みたまひてむや。蛭の子が齢にもなりにけるを。罪なきさまなるも、思ひ捨てがたうこそ。いはけなげなる下つ方も紛らはさむなど思ふを、めざましと思さずは引き結ひたまへかし」と聞こえたまふ。「思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて見知らずうらなくやは、とてこそ。いはけなからむ御心には、いとようかなひぬべくなむ。

いかにうつくしきほどに」とて、すこしうち笑みたまひぬ。稚児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、得て抱きかしづかばやと思す。

いかにせまし、迎へやせまし、と思し乱る。渡りたまふこといとかたし。嵯峨野の御堂の念仏など待ち出でて、月に二度ばかりの御契りなめり。年のわたりに立ちまさりぬべかめるを、及びなきことと思へども、なほいかかもの思はしからぬ。

薄

雲

冬になりゆくままに、川づらの住まひいとど心細さまさりて、うはの空なる心地のみしつ明かし暮らすを、君も、「なほかくてはえ過ぐさじ。かの近き所に思ひ立ちね」とすすめたまへど、つらき所多く、心みはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてか、などいふやうに思ひ乱れたり。「さらばこの若君を。かくてのみは便なきことなり。思ふ心あればかたじけなし。対に聞き置きて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着の事なども、人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ」と、まめやかに語らひたまふ。さ思すらむと思ひわたることなれば、いとど胸つぶれぬ。改めてやむごとなき方にもてなされたまふとも、人の漏り聞かむことは、なかなかやつくろひがたく思されむ、とて放ちがたく思ひたる、ことわりにはあれど、「うしろやすからぬ方にやなどは、な疑ひたまひそ。かしこには、年経ぬれどかかる人もなきがさうざうしくおぼゆるままに、前斎宮のおとなびものしたまふをだにこそ、あながちに扱ひきこゆめれば、ましてかく憎みがたげなめるほどを、おろかには見放つまじき心ばへに」など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。

げにいにしへは、いかばかりのことに定まりたまふべきにかと、つてにもほの聞こえし御心の、名残なく静まりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず、人の御ありさまも、ここの御なかにすぐれたまへるにこそは、と思ひやられて、数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人もめざましと思すことやあらむ、わが身はとてもかくても同じこと、生ひ先遠き人の御うへも、つひにはかの御心にかかるべきにこそあめれ、さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲りきこえまし、と思ふ。また手を放ちてうしろめたからむこと、つれづれも慰む方なくては、いかが明かし暮らすべからむ、何につけてかたまさかの御立ち寄りもあらむ、などさまさまに思ひ乱るるに、身の憂きこと限りなし。



尼君、思ひやり深き人にて、「あぢきなし。見たてまつらざらむことは、いと胸いたかりぬべけれど、つひにこの御ためによかるべからむことをこそ思はめ。浅く思してのたまふことにはあらじ。ただうち頼みきこえて、渡したてまつりたまひてよ。母方からこそ、帝の御子も際々におはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら、世に仕へたまふは、故大納言の今ひとときざみなり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそはおはすめれ。ましてただ人はなずらふべきことにもあらず。また親王たち、大臣の御腹といへど、なほさし向かひたる劣りの所には、人も思ひ落とし、親の御もてなしもえ等しからぬものなり。ましてこれは、やむごとなき御方々にかかる人出でものしたまはば、こよなく消たれたまひなむ。ほどほどにつけて、親にもひとふしもてかしづかれぬる人こそ、やがて落としめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみじき心を尽くすとも、かかる深山隠れにては何の栄かあらむ。ただ任せきこえたまひて、もてなしきこえたまはむありさまをも聞きたまへと教ふ。

さかしき人の心の占どもにも、もの問はせなどするにも、なほ「渡りたまひてはまさるべし」とのみ言へば、思ひ弱りにたり。殿も、しか思しながら、思はむところのいとほしきに、しひてもえのたまはで、

御袴着のことは、いかやうにか。

とのたまへる御返りに、

よろづのこと、かひなき身にたぐへきこえては、げに生ひ先もいとほしかるべくおぼえはべるを、たち交じりても、いかに人笑へにや。

と聞こえたるを、いとどあはれに思す。日など取らせたまひて、忍びやかにさるべきことなどのたまひおきてさせたまふ。放ちきこえむことは、なほいとあはれにおぼゆれど、君の御ためによかるべきことをこそは、と念ず。

「乳母をもひき別れなむこと、明け暮れのもの思はしき、つれづれをもうち語らひて慰めならひつるに、いとどたつきなきことさへ取り添へ、いみじくおぼゆべきこと」と、君も泣く。乳母も、「さるべきにや、おぼえぬさまにて見たてまつりそめて、年ごろの御心ばへの忘れがたう恋しうおぼえたまふべきを、うち絶えきこゆることはよもはべらじ。つひにはと頼みながら、しばしにてもよそよそに、思ひのほかの交じらひしはべらむが、安からずもはべるべきかな」など、うち泣きつつ過ぐすほどに、師走にもなりぬ。

雪、霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまさまにも思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見たり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出で居などもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよかななるあまた着て、眺めたる様体、頭つき、うしろでなど、限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめ、と人びとも見る。落つる涙をかき払ひて、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

雪深み深山の道は晴れずともなほ文かよへ跡絶えずして

とのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山を訪ねても心のかよふ跡絶えめやは

と言ひ慰む。

この雪すこし解けて渡りたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ。わが心にこそあらめ、いなびきこえむをしひてやは、あぢきな、とおぼゆれど、軽々しきやうなりと、せめて思ひ返す。いとうつくしげにて前にゐたまへるを見たまふに、おろかには思ひがたかりける人の宿世かな、と思ほす。この春より生ふす御髪、尼削ぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき、まみの薫れるほどなど、言へば

さらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推し量りたまふにいと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。「何か、かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひあはれなり。

姫君は何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗りたまへ」と引くもいみじうおぼえて、

末遠き二葉の松に引き別れいつか木高きかげを見るべき

えも言ひやらずいみじう泣けば、さりや、あな苦し、と思して、

「生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代をならべむ

のどかにを」と慰めたまふ。さることとは思ひ静むれど、えなむ堪へざりける。乳母の少将とて、あてやかなる人ばかり、御佩刀、天児やうの物取りて乗る。

人だまひによろしき若人、童女など乗せて、御送りに参らす。道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに罪や得らむと思す。

暗うおはし着きて、御車寄するより、はなやかにけはひことなるを、田舎びたる心地どもは、はしたなくてや交じらはむと思ひつれど、西面をことにしつらはせたまひて、小さき御調度どもうつくしげに調へさせたまへり。乳母の局には西の渡殿の北に当れるをせさせたまへり。

若君は道にて寝たまひにけり。抱き下ろされて、泣きなどはしたまはず、こなたにて御くだもの参りなどしたまへど、やうやう見めぐらして、母君の見えぬをもとめて、らうたげにうちひそみたまへば、乳母召し出でて、慰め紛らしきこえたまふ。山里のつれづれ、ましていかにと思しやるはいとほしけれど、明け暮れ思すさまにかしづきつつ見たまふは、ものあひたる心地したまふらむ、いかにぞや人の思ふべききずなきことは、このわたりに出でおはせで、と口惜

しく思さる。

しばしは人びともとめて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上にいとよくつき睦びきこえたまへれば、いみじうつくしきもの得たりと思しけり。こと事なく抱き扱ひ、もてあそびきこえたまひて、乳母も、おのづから近う仕うまつり馴れにけり。またやむごとなき人の乳ある、添へて参りたまふ。

御袴着は、何ばかり、わざと思しいそぐことはなけれど、けしきことなり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。参りたまへる客人ども、ただ明け暮れのけぢめしなければ、あながちに目も立たざりき。ただ姫君の襷引き結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげき添ひて見えたまひつる。

大堰には、尽きせず恋しきにも、身のおこたりを嘆き添へたり。さこそ言ひしか、尼君もいと涙もろなれど、かくもてかしづかれたまふを聞くはうれしかりけり。何ごとをか、なかなか訪らひきこえたまはむ、ただ御方の人びとに、乳母よりはじめて、世になき色あひを思ひいそぎてぞ贈りきこえたまひける。

待ち遠ならむも、いとどさればよと思はむにいとほしければ、年の内に忍びて渡りたまへり。いとどさびしき住まひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて、思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶え間なく遣はす。女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり。

年も返りぬ。うらかなる空に、思ふことなき御ありさまはいとどめでたく、磨き改めたる御よそひに、参り集ひたまふめる人の、おとなしきほどののは、七日、御よろこびなどしたまふ、ひき連れたまへり。若やかなるは、何ともなく心地よげに見えたまふ。次々の人も、心のうちには思ふこともやあらむ、うはべは誇りかに見ゆるころほひなりかし。東の院の対の御方も、ありさまは好ましうあらまほしきさまに、さぶらふ人びと、童女の姿などうちとけず、心づか

ひしつづ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇の隙などにはふとはひ渡りなどしたまへど、夜たち泊りなどやうに、わざとは見えたまはず、ただ御心ぎまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめ、と思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすく、のどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、あなづりきこゆべうはあらねば、同じごと人参り仕うまつりて、別当どもも事おこたらず、なかなか乱れたるところなく目やすき御ありさまなり。

山里のつれづれをも絶えず思しやれば、公私もの騒がしきほど過ぐして渡りたまふとて、常よりことにうち化粧じたまひて、桜の御直衣にえならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ、装束きたまひてまかり申したまふさま、隈なき夕日にいとどしくきよらに見えたまふ。女君、ただならず見たてまつり送りましたまふ。姫君はいはけなく御指貫の裾にかかりて、慕ひきこえたまふほどに、外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれと思したり。こしらへおきて、  
「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中將の君して聞こえたまへり。

舟とむる遠方人のなくはこそ明日帰り来むせなと待ち見め  
いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

行きて見て明日もさね来むなかなか遠方人は心置くとも  
何事とも聞き分かでされありきたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、遠方人のめぎましきもこよなく思しゆるされにたり。いかに思ひおこすらむ、われにていみじう恋しかりぬべきさまを、とうちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ、戯れるたまへる御さま見どころ多かり。御前なる人びとは、「などか同じくは」「いでや」など語らひあへり。

かしこには、いとのだやかに心ばせあるけはひに住みなして、家のありさまもやう離れめづらしきに、みづからのけはひなどは、見るたびごとにやむごとなき人びとなどに劣るけぢめこよなからず、かたち、用意あらまほしうねびまさりゆく。ただ世の常のおぼえにかき紛れたらば、さるたぐひなくやほと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞こえなどこそ苦しけれ、人のほどなどはさてもあるべきを、など思す。はつかに飽かぬほどにのみあればにや、心のどかならず立ち帰りたまふも苦しくて、「夢のわたりの浮橋か」とのみうち嘆かれて、箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜更けたりし音も、例の思し出でらるれば、琵琶をわりなく責めたまへば、すこし掻き合はせたる、いかでかうのみひき具しけむと思さる。若君の御ことなどこまやかに語りたまひつつおはす。

ここはかかる所なれど、かやうに立ち泊りたまふ折々あれば、はかなき果物、強飯ばかりはきこしめす時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには乱れたまはねど、またいとけぎやかにはしたなくおしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは、いとおぼえことには見ゆめれ。女も、かかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりと思すばかりのことはし出でず、またいたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。おぼろげにやむごとなき所にてだに、かばかりもうちとけたまふことなく、気高き御もてなしを聞き置きたれば、近きほどに交じらひては、なかなかいと目馴れて、人あなづられなることどももぞあらまし、たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそたけき心地すれ、と思ふべし。明石にも、さこそ言ひしか、この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、おぼつかながら人は通はしつつ、胸つぶるることもあり、またおもだたくうれしと思ふことも多くなむありける。

そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。世の重しとおはしつる人なれば、おほやけにも思し嘆く。しばし籠もりたまひしほどをだに天の下の騒ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり。源氏の大臣もいと口惜しく、よろづことおし譲りきこえてこそ暇もありつるを、心細く事しげくも思されて、嘆きおはす。帝は、御年よりはこよなう大人大人しうねびさせたまひて、世の政事もうしろめたく思ひきこえたまふべきにはあらねども、またとりたてて御後見したまふべき人もなきを、誰れに譲りてかは静かなる御本意もかなはむと思すに、いと飽かず口惜し。後の御わぎなどにも、御子ども孫に過ぎてなむ、こまやかに弔らひ扱ひたまひける。

その年おほかた世の中騒がしくて、おほやげさまにものさとししげく、のどかならで、天つ空にも例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ、世の人おどろくこと多くて、道々の勘文どもたてまつれるにも、あやしく世になべてならぬことども混じりたり。内の大臣のみなむ、御心のうちにわづらはしく思し知らるることありける。

入道後の宮、春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月にはいと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。院に別れたてまつらせたまひしほどは、いといはけなくて、もの深くも思されざりしを、いみじう思し嘆きたる御けしきなれば、宮もいと悲しく思し召さる。「今年はかならず逃るまじき年と思ひたまへつれど、おどろおどろしき心地にもはべらざりつれば、命の限り知り顔にはべらむも、人やうたてことことしう思はむと憚りてなむ、功德のことなどもわざと例よりも取り分きてしもはべらずなりにける。参りて、心のどかに昔の御物語もなど思ひたまへながら、うつしぎまなる折少なくはべりて、口惜しくいぶせて過ぎはべりぬること」といと弱げに聞こえたまふ。三十七にぞおはしましける。されど、いと若く盛りにおはしますさまを、惜しく悲しと見たてま

つらせたまふ。「慎ませたまふべき御年なるに、晴れ晴れしからで月ごろ過ぎさせたまふことをだに嘆きわたりはべりつるに、御慎みなどをも常よりことにせさせたまはざりけること」と、いみじう思し召したり。ただこのころぞおどろきてよろづのことせさせたまふ。月ごろは常の御悩みとのみうちたゆみたりつるを、源氏の大臣も深く思し入りたり。限りあればほどなく帰らせたまふも、悲しきこと多かり。

宮いと苦しうて、はかばかしうものも聞こえさせたまはず、御心のうちに思し続けるに、高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふことも人にまさりける身、と思し知らる。上の、夢のうちにもかかる事の心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、これのみぞうしろめたく、むすぼほれたることに思し置かるべき心地したまひける。

大臣は、おほやけ方さまにても、かくやむごとなき人の限り、うち続き亡せたまひなむことを思し嘆く。人知れぬあはれ、はた限りなくて、御祈りなど思し寄らぬことなし。年ごろ思し絶えたりつる筋さへ、今一たび聞こえずなりぬるがいみじく思さるれば、近き御几帳のもとに寄りて、御ありさまなどもさるべき人びとに問ひ聞きたまへば、親しき限りさぶらひてこまかに聞こゆ。「月ごろ悩ませたまへる御心地に、御行なひを時の間もたゆませたまはずせさせたまふ積もりの、いとどいたうくづほれさせたまふに、このころとなりては柑子などをだに触れさせたまはずなりにたれば、頼みどころなくならせたまひにたること」と泣き嘆く人びと多かり。「院の御遺言にかなひて、内の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかは、その心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、今なむあはれに口惜しく」と、ほのかにのたまはするもほのぼの聞こゆるに、御いらへも聞こえやりたまはず泣きたまふさまいといみじ。などかうしも心弱



きさまにと人目を思し返せど、いにしへよりの御ありさまを、おほかたの世につけてもあたらしく惜しき人の御さまを、心になふわざならねば、かけとどめきこえむ方なく、いふかひなく思さるること限りなし。「はかばかしからぬ身ながらも、昔より御後見仕うまつるべきことを、心のいたる限りおろかならず思ひたまふるに、太政大臣の隠れたまひぬるをだに、世の中心あわたたく思ひたまへらるるに、またかくおはしませば、よろづに心乱れはべりて、世にはべらむことも残りなき心地なむしはべる」など、聞こえたまふほどに、灯火などの消え入るやうにて果てたまひぬれば、いふかひなく悲しきことを思し嘆く。

かしこき御身のほどと聞こゆるなかにも、御心ばへなどの、世のためしにも、あまねくあはれにおはしまして、豪家にことよせて、人の愁へとあることなどもおのづからうち混じるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕うまつることをも、世の苦しみとあるべきことをば止めたまふ。功德の方とても、勧むるによりたまひて、いかめしうめづらしうしたまふ人なども、昔のさかしき世に皆ありけるを、これはさやうなることなく、ただもとよりの宝物、得たまふべきつかさ、かうぶり、御封の物のさるべき限りして、まことに心深きことどもの限りをし置かせたまへれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみきこゆ。

をさめたてまつるにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。殿上人などなべてひとつ色に黒みわたりて、ものの栄なき春の暮なり。二条院の御前の桜を御覧じて、花の宴の折など思し出づ。「今年ばかりは」と一人ごちたまひて、人の見とがめつべければ、御念誦堂に籠もりゐたまひて、日一日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど、いともあはれに思さる。

入り日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる  
人聞かぬ所なればかひなし。

御わざなども過ぎて、事ども静まりて、帝もの心細く思したり。この入道の宮の御母後の御世より伝はりて、次々の御祈りの師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しきものに思したりしを、おほやけにも重き御おぼえにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、今は終りの行なひをせむとて籠もりたるが、宮の御事によりて出でたるを、内より召しありて常にさぶらはせたまふ。このごろは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし、大臣も勧めのたまへば、「今は、夜居などいと堪へがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」とてさぶらふに、静かなる暁に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、古体にうちしはぶきつつ、世の中のことも奏したまふついでに、「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと、思ひたまへ憚る方多かれど、知ろし召さぬに罪重くて、天眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終りはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとや思し召さむ」とばかり奏しきして、えうち出でぬことあり。上、何事ならむ、この世に恨み残るべく思ふことやあらむ、法師は聖といへども、あるまじき横様のそねみ深く、うたてあるものを、と思して、「いはけなかりし時より、隔て思ふことなきを、そこにはかく忍び残されたることありけるをなむ、つらく思ひぬる」とのたまはすれば、「あなかしこ。さらに仏の諫め守りたまふ真言の深き道をだに、隠しとどむることなく広め仕うまつりはべり。まして心に隈あること、何ごとにかはべらむ。これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましたにし院、後の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべてかへりてよからぬ事にや漏り出ではべらむ。かかる老い法師の身

には、たとひ愁へはべりとも何の悔かはべらむ。仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。わが君は生まれおはしましたりし時より、故宮の深く思し嘆くことありて、御祈り仕うまつらせたまふゆゑなむはべりし。詳しくは法師の心にえ悟りはべらず。事の違ひめありて、大臣横様の罪に当たりたまひし時、いよいよ懼ぢ思し召して、重ねて御祈りども承はりはべりしを、大臣も聞こし召してなむ、またさらに言加へ仰せられて、御位に即きおはしましまで仕うまつることどもはべりし。その承りしさま」とて、詳しく奏するを聞こし召すに、あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れたり。とばかり御いらへもなければ、僧都、進み奏しつるを便なく思し召すにや、とわづらはしく思ひて、やをらかしこまりてまかづるを、召し止めて、「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍び籠められたりけるをなむ、かへりてはうしろめたき心なりと思ひぬる。またこの事を知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」とのたまはず。「さらに、なにがしと王命婦とより他の人、この事のけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変しきりにさとし、世の中静かならぬはこのけなり。いときなくものの心知ろし召すまじかりつるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまして、何事もわきまへさせたまふべき時に至りて、咎をも示すなり。よろづのこと、親の御世より始まるにこそはべるなれ。何の罪とも知ろし召さぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてしことを、さらに心より出しはべりぬること」と、泣く泣く聞こゆるほどに、明け果てぬればまかでぬ。

上は、夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて、いろいろに思し乱れさせたまふ。故院の御ためもうしろめたく、大臣のかくただ人にて世に仕へたまふも、あはれにかたじけなかりける事、かたがた思し悩みて、日たくるまで出でさせたまはねば、かくなむと聞きたまひて、大臣も驚きて参りたまへるを御覽

ずるにつけても、いとど忍びがたく思し召されて、御涙のこぼれさせたまひぬるを、おほかた故宮の御事を干る世なく思し召したるころなればなめり、と見たてまつりたまふ。その日、式部卿の親王亡せたまひぬるよし奏するに、いよいよ世の中の騒がしきことを嘆き思したり。かかるころなれば、大臣は里にもえまかでたまはで、つとさぶらひたまふ。

しめやかなる御物語のついでに、「世は尽きぬるにやあらむ、もの心細く例ならぬ心地なむするを、天の下もかくのどかならぬに、よろづあわたたしくなむ。故宮の思さむところによりてこそ世間のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ」と語らひきこえたまふ。「いとあるまじき御ことなり。世の静かならぬことは、かならず政事のなほくゆがめるにもよりはべらず。さかしき世にしもなむよからぬことどもはべりける。聖の帝の世にも、横様の乱れ出で来ること、唐土にもはべりける。わが国にもさなむはべる。ましてことわりの齢どもの時至りぬるを、思し嘆くべきことにもはべらず」など、すべて多くのことどもを聞こえたまふ。片端まねぶもいとかたはらいたしや。

常よりも黒き御装ひにやつしたまへる御かたち、違ふところなし。上も年ごろ御鏡にも思しよることなれど、聞こし召ししことの後は、またこまかに見たてまつりたまひつつ、ことにいとあはれに思し召さるれば、いかでこのことをかすめ聞こえばやと思せど、さすがにはしたなくも思しぬべきことなれば、若き御心地につつましくて、ふともえうち出できこえたまはぬほどは、ただおほかたのことどもを常よりことになつかしう聞こえさせたまふ。うちかしこまりたまへるさまにて、いと御けしきことなるを、かしこき人の御目にはあやしと見たてまつりたまへど、いとかくさださだと聞こし召したらむとは思さざりけり。

上は王命婦に詳しきことは問はまほしう思し召せど、今さらに、しか忍びたまひけむこと知りにけり、とかの人にも思はれじ、ただ大臣にいかでほのめかし問ひきこえて、先々のかかる事の例はありけりや、と問ひ聞かむ、とぞ思せど、さらについでもなければ、いよいよ御学問をせさせたまひつつ、さまざまの書どもを御覧するに、唐土には、現はれても忍びても乱りがはしき事いと多かりけり。日本には、さらに御覧じ得るところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする、一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位にも即きたまひつるも、あまたの例ありけり、人柄のかしこきにごよせて、さもや譲りきこえまし、などよろづにぞ思しける。

秋の司召に太政大臣になりたまふべきこと、うちうちに定め申したまふついでになむ、帝思し寄する筋のこと漏らしきこえたまひけるを、大臣、いとまばゆく恐ろしう思して、さらにあるまじきよしを申し返したまふ。「故院の御心ざし、あまたの御子たちの御中に、とりわきて思し召しながら、位を譲らせたまはむことを思し召し寄らずなりにけり。何か、その御心改めて、及ばぬ際には昇りはべらむ。ただもとの御おきてのままに、おほやけに仕うまつりて、今すこしの齢かさなりはべりなば、のどかなる行なひに籠もりはべりなむと思ひたまふる」と、常の御言の葉に変はらず奏したまへば、いと口惜しうなむ思しける。太政大臣になりたまふべき定めあれどしはしと思すところありて、ただ御位添ひて、牛車ゆるされて参りまかでしたまふを、帝飽かずかたじけなきものに思ひきこえたまひて、なほ親王になりたまふべきよしを思したまはすれど、世の中の御後見したまふべき人なし、権中納言、大納言になりて右大将かけたまへるを、今一際あがりなむに、何ごとも譲りてむ、さて後に、ともかくも静かなるさまに、とぞ思しける。

なほ思しめぐらすに、故宮の御ためにもいとほしう、また上のかく思し召し悩めるを見たてまつりたまふもかたじけなきに、誰れかかることを漏らし奏しけむ、とあやしう思さる。命婦は、御匣殿の替はりたる所に移りて、曹司たまはりて参りたり。大臣対面したまひて、「このことを、もしものついでに、露ばかりにても漏らし奏したまふことやありし」と案内したまへど、「さらに、かけても聞こし召さむことをいみじきことに思し召して、かつは罪得ることにやと、上の御ためをなほ思し召し嘆きたりし」と聞こゆるにも、ひとかたならず心深くおはせし御ありさまなど、尽きせず恋ひきこえたまふ。

齋宮の女御は、思しもしるき御後見にて、やむごとなき御おぼえなり。御用意、ありさまなども、思ふさまにあらまほしう見えたまへれば、かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり。秋のころ、二条院にまかでたまへり。寝殿の御しつらひいとど輝くばかりしたまひて、今はむげの親さまにもてなし扱ひきこえたまふ。秋の雨いと静かに降りて、御前の前裁の、色々乱れたる露のしげさに、いにしへのこともかき続け思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。こまやかなる鈍色の御直衣姿にて、世の中の騒がしきなどことつけたまひて、やがて御精進なれば、数珠ひき隠して、さまよくもてなしたまへる、尽きせずなまめかしき御ありさまにて、御簾の内に入りたまひぬ。御几帳ばかりを隔てて、みづから聞こえたまふ。「前裁どもこそ残りなく紐解きはべりにけれ。いとものすさまじき年なるを、心やりて時知り顔なるもあはれにこそ」とて、柱に寄りゐたまへる夕ばえ、いとめでたし。昔の御ことども、かの野の宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ出でたまふ。いとものあはれと思したり。宮も、かくればとにや、すこし泣きたまふけはひいとらうたげにて、うち身じろきたまふほども、あさましくやはらかになまめきておはすべかめる、見たてまつらぬこそ口惜しけれと、胸のうちつぶるるぞうたてあ

るや。

「過ぎにし方、ことに思ひ悩むべきこともなくてはべりぬべかりし世の中にも、なほ心から、好き好きしきことにつけて、もの思ひの絶えずもはべりけるかな。さるまじきことどもの、心苦しきがあまはべりし中に、つひに心も解けずむすぼほれて止みぬること、二つなむはべる。一つはこの過ぎたまひにし御ことよ。あさましようのみ思ひつめて止みたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも仕うまつり御覽ぜらるるをなむ、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙のむすぼほれたまひけむは、なほいぶせうこそ思ひたまへらるれ」とて、今一つはのたまひさしつ。「中ごろ身のなきに沈みはべりしほど、方々に思ひたまへしことは、片端づつかなひにたり。東の院にもする人の、そこはかたなくて心苦しうおぼえわたりはべりしも、おだしう思ひなりにてはべり。心ばへの憎からぬなど、我も人も見たまへあきらめて、いそこそさはやかなれ。かく立ち返りおほやけの御後見仕うまつるよろこびなどは、さしも心に深く染まず、かやうなる好きがましき方は静めがたうのみはべるを、おぼろけに思ひ忍びたる御後見とは思し知らせたまふらむや。あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」とのたまへば、むつかしうて、御いらへもなければ、「さりや、あな心憂」とて、異事に言ひ紛らはしたまひつ。「今はいかでのどやかに生ける世の限り思ふこと残さず、後の世の勤めも心にまかせて籠もりみなむと思ひはべるを、この世の思ひ出しつべきふしのはべらぬこそ、さすがに口惜しうはべりぬべけれ。かならず、幼き人のはべる、生ひ先いと待ち遠なりや、かたじけなくともなほこの門広げさせたまひて、はべらざるなりなむ後にも数まへさせたまへ」など聞こえたまふ。御いらへはいとおほどかなるさまに、からうして一言ばかりかすめたまへるけはひ、いとなつかしげなるに聞きつきて、しめじめと暮るるまでおはす。

「はかばかしき方の望みはさるものにて、年のうち行き交はる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心の行くこともしはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人争ひはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらぎなれ。唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべめり、大和言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。

狭き垣根のうちなりとも、その折の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも堀り移して、いたづらなる野辺の虫をも棲ませて、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」と聞こえたまふに、いと聞こえにくきことと思せど、むげに絶えて御いらへ聞こえたまはざらむもうたてあれば、「ましていかが思ひ分きはべらむ。げにいつとなきなかに、あやしと聞きし夕べこそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」としどけなげにのたまひ消つもいとらうたげなるに、え忍びたまはで、

「君もさはあはれを交はせ人知れずわが身にしむる秋の夕風

忍びがたき折々もはべりかし」と聞こえたまふに、いづこの御いらへかはあらむ、心得ずと思したる御けしきなり。このついでに、え籠めたまはで恨みきこえたまふことどもあるべし。今すこしひがこともしたまひつべけれども、いとあたてと思いたるもことわりに、わが御心も若々しうけしからずと思し返して、うち嘆きたまへるさまのもの深うなまめかしきも、心づきなうぞ思しなりぬるやをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば、「あさましうも疎ませたまひぬるかな。まことに心深き人はかくこそあらぎなれ。よし、今よりは憎ませたまふなよ。つらからむ」とて、渡りたまひぬ。うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ疎ましく思さる。人びと、御格子など参りて、「この御茵の移り香、言



ひ知らぬものかな。いかでかく取り集め、柳の枝に咲かせたる御ありさまならむ。ゆゆしう」と聞こえあへり。

対に渡りたまひて、とみにも入りたまはず、いたう眺めて端近う臥したまへり。燈籠遠くかけて、近く人びとさぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。かうあながちなることに胸ふたがる癖のなほありけるよ、とわが身ながら思し知らる。これはいと似げなきことなり、恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへの好きは思ひやりすくなきほどの過ちに、仏神も許したまひけむ、と思しきまますも、なほこの道はうしろやすく深き方のまさりけるかな、と思し知られたまふ。

女御は、秋のあはれを知り顔にいらへ聞こえてけるも、悔しう恥づかしく御心ひとつにもものむつかしうて、悩ましげにさへしたまふを、いとすくよかにつれなくて、常よりも親がりありきたまふ。女君に、「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の、春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな」と、「公私のいとなみしげき身こそふさはしからね、いかで思ふこととしてしがな」と、「ただ御ためさうさうしくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひきこえたまふ。

山里の人も、いかになど絶えず思しやれど、所狭さのみまさる御身にて、渡りたまふこといとかたし。世の中をあぢきなく憂しと思ひ知るけしき、などかさしも思ふべき、心やすく立ち出でて、おほぞうの住まひはせじと思へるを、おほけなし、とは思すものから、いとほしくて、例の不断の御念仏にことつけて渡りたまへり。住み馴るるままに、いと心すごげなる所のさまに、いと深からざらむことにてだにあはれ添ひぬべし。まして見たてまつるにつけても、つらかりける御契りのさすがに浅からぬを思ふになかなかにて、慰めがたきけし

きなれば、こしらへかねたまふ。いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし。「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」とのたまふに、

「漁りせし影忘れぬ篝火は身のうき舟や慕ひ来にけむ  
思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば、

「浅からぬしたの思ひを知らねばやなほ篝火の影は騒げる  
誰れ憂きもの」とおし返し恨みたまへる。おほかたもの静かに思さるるころなれば、尊きことどもに御心とまりて、例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひ紛れけむとぞ。

朝

顔

齋院は、御服にて下りみたまひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶えぬ御癖にて、御訪らひなどいとしげう聞こえたまふ。宮、わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。

長月になりて、桃園の宮に渡りたまひぬるを聞きて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御訪らひにことづけて参うでたまふ。故院の、この御子たちをば心ことにやむごとなく思ひきこえたまへりしかば、今も親しく次々に聞こえ交はしたまふめり。同じ寝殿の西東にぞ住みたまひける。ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。

宮、対面したまひて、御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮は、あらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかにこちごちしくおぼえたまへるも、さるかたなり。「院の上隠れたまひてのち、よろづ心細くおぼえはべりつるに、年の積もるままに、いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨てたまへれば、いよいよあるかなきかにとまりはべるを、かく立ち寄り訪はせたまふになむ、もの忘れしぬべくはべる」と聞こえたまふ。かしこくも古りたまへるかな、と思へど、うちかしこまりて、「院隠れたまひてのちは、さまざまにつけて同じ世のやうにもはべらず、おぼえぬ罪に当たりはべりて、知らぬ世に惑ひはべりしを、たまたまおほやけに数まへられたてまつりては、またとり乱り暇なくなどして、年ごろも、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを、いぶせく思ひたまへわたりつつなむ」など聞こえたまふを、「いともいともあさましく、いづ方につけても定めなき世を、同じさまにて見たまへ過ぐす、命長さの恨めしきこと多くはべれど、かくて世に立ち返りたまへる御よろこびになむ、ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば、口惜しからまし、とおぼえはべり」と、うちわななきたまひて、「いときよらに

ねびまさりたまひにけるかな。童にもしたまへりしを見たてまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたることと驚かれはべりしを、時々見たてまつるごとに、ゆゆしくおぼえはべりてなむ。内の上なむいとよく似たてまつらせたまへり、と人びと聞こゆるを、さりともし劣りたまへらむとこそ推し量りはべれ」と、長々と聞こえたまへば、ことにかくさし向かひて人のほめぬわざかな、とをかしく思す。「山賤になりて、いたう思ひくづほれはべりし年ごろののち、こよなく衰へにてはべるものを。内の御かたちは、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御推し量りになむ」と聞こえたまふ。「時々見たてまつらば、いとどしき命や延びはべらむ。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きみな去りぬる心地なむ」とても、また泣いたまふ。「三の宮うらやましく、さるべき御ゆかり添ひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふ折々ありしか」とのたまふにぞ、すこし耳とまりたまふ。「さもさぶらひ馴れなましかば、今に思ふさまにはべらまし。皆さし放たせたまひて」と、恨めしげにけしきばみきこえたまふ。

あなたの御前を見やりたまへば、枯れ枯れなる前裁の心ばへもことに見渡されて、のどやかに眺めたまふらむ御ありさま、かたちも、いとゆかしくあはれにて、え念じたまはで、「かくさぶらひたるついでを過ぐしはべらむは、心ざしなきやうなるを、あなたの御訪らひ聞こゆべかりけり」とて、やがて簀子より渡りたまふ。暗うなりたるほどなれど、鈍色の御簾に、黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹き通し、けはひあらまほし。簀子はかたはらいたければ、南の廂に入れたてまつる。

宣旨対面して、御消息は聞こゆ。「今さらに若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の労数へられはべるに、今は内外も許させたまひてむとぞ頼

みはべりける」とて、飽かず思したり。「ありし世は皆夢に見なして、今なむ覚めてはかなきにやと思ひたまへ定めがたくはべるに、労などは静かにやと定めきこえさすべうはべらむ」と、聞こえ出だしたまへり。げにこそ定めがたき世なれと、はかなきことにつけても思し続けらる。

「人知れず神の許しを待ちし間にこころつれなき世を過ぐすかな

今は、何のいさめにか、かこたせたまはむとすらむ。なべて世にわづらはしきことさへはべりしのち、さまざまに思ひたまへ集めしかな。いかで片端をだに」と、あながちに聞こえたまふ御用意なども、昔よりも今すこしなまめかしきけさへ添ひたまひにけり。さるは、いといたう過ぐしたまへど、御位のほどには合はざめり。

なべて世のあはればかりを問ふからに誓ひしことと神やいさめむ

とあれば、「あな心憂。その世の罪はみな科戸の風にたぐへてき」とのたまふ愛敬もこよなし。「みそぎを神はいかがはべりけむ」など、はかなきことを聞こゆるも、まめやかにはいとかたはらいたし。世づかぬ御ありさまは、年月に添へても、もの深くのみ引き入りたまひて、え聞こえたまはぬを、見たてまつり悩めり。「好き好きしきやうになりぬるを」など、浅はかならずうち嘆きて立ちたまふ。「齢の積りには、面なくこそなるわぎなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞとだに聞こえさすべくやはもてなしたまひける」とて、出でたまふ名残、所狭きまで、例の聞こえあへり。おほかたの空もをかしきほどに、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしものあはれとり返しつつ、その折々、をかしくもあはれにも深く見えたまひし御心ばへなども、思ひ出できこえさす。

心やましくて立ち出でたまひぬるは、まして寢覚がちに思し続けらる。とく御格子参らせたまひて、朝霧を眺めたまふ。枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれにはひまつはれて、あるかなきかに咲きて、匂ひもことに変はれるを、

折らせたまひてたてまつれたまふ。

けぎやかなりし御もてなしに、人わろき心地しはべりて、うしろでもいと  
 どいかが御覧じけむとねたく。されど、

見し折のつゆ忘れぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ

年ごろの積りもあはれとばかりは、さりとも思し知るらむやとなむ、かつ  
 は。

など聞こえたまへり。おとなびたる御文の心ばへに、おぼつかなからむも見知  
 らぬやうにや、と思し、人びとも御硯とりまかなひて聞こゆれば、

秋果てて霧の籬にむすぼほれあるかなきかに移る朝顔

似つかはしき御よそへにつけても、露けく。

とのみあるは、何のをかしきふしもなきを、いかなるにか、置きがたく御覧ず  
 めり。青鈍の紙のなよびかなる墨つきはしも、をかく見ゆめり。人の御ほど、  
 書きざまなどに繕はれつつ、その折は罪なきことも、つきづきしくまねびなす  
 には、ほほゆがむこともあめればこそ、さかしらに書き紛らはしつつ、おぼつ  
 かなきことも多かりけり。立ち返り今さらに、若々しき御文書きなども似げな  
 きことと思せども、なほかく昔よりもて離れぬ御けしきながら、口惜しくて過  
 ぎぬるを思ひつつ、えやむまじくて思さるれば、さらがへりてまめやかに聞こ  
 えたまふ。

東の対に離れおはして、宣旨を迎へつつ語らひたまふ。さぶらふ人びとの、  
 さしもあらぬ際のことをだに、なびきやすなるなどは、過ちもしつべくめでき  
 こゆれど、宮は、そのかみだにこよなく思し離れたりしを、今はまして、誰も  
 思ひなかるべき御齡、おぼえにて、はかなき木草につけたる御返りなどの折過  
 ぐさぬも、軽々しくやとりなさるらむなど、人の物言ひを憚りたまひつつ、う  
 ちとけたまふべき御けしきもなければ、古りがたく同じさまなる御心ばへを、

世の人に変わり、めづらしくもねたくも思ひきこえたまふ。

世の中に漏り聞こえて、「前齋院をねむごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮などもよろしく思したなり。似げなからぬ御あはひならむ」など言ひけるを、対の上は伝へ聞きたまひて、しばしは、さりとも、さやうならむこともあらば、隔てては思したらじ、と思しけれど、うちつけに目とどめきこえたまふに、御けしきなども例ならずあくがれたるも心憂く、まめまめしく思しなるらむことを、つれなく戯れに言ひなしたまひけむよ、と、同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなばはしたなくもあべいかな、年ごろの御もてなしなどは、立ち並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむこと、など、人知れず思し嘆かる。かき絶え、名残なきさまにはもてなしたまはずとも、いとものはかなきさまにて、見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ、など、さまさまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそうち怨じなど憎からず聞こえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。端近う眺めがちに、内住みしげくなり、役とは御文を書きたまへば、げに人の言はむなしかるまじきなめり、けしきをだにかすめたまへかし、と、疎ましくのみ思ひきこえたまふ。

夕つ方、神わざなども止まりてさうざうしきに、つれづれと思しあまりて、五の宮に例の近づき参りたまふ。雪うち散りて、艶なるたそかれ時に、なつかしきほどに馴れたる御衣どもをいよいよたきしめたまひて、心ことに化粧じ暮らしたまへれば、いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。さすがにまかり申しはた聞こえたまふ。「女五の宮の悩ましくしたまふなるを、訪らひきこえになむ」とて、つゐるたまへれど、見もやりたまはず、若君をもてあそび紛らしおはする側目のただならぬを、「あやしく御けしきの変はれるべきころかな。罪もなしや。塩焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとて、とだえ



置くを、またいかか」など聞こえたまへば、「馴れゆくこそ、げに憂きこと多かりけれ」とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見捨てて出でたまふ道、もの憂けれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。かかりけることもありける世を、うらなくて過ぐしけるよ、と思ひ続けて臥したまへり。鈍びたる御衣どもなれど、色合ひ、重なり好ましくなかなか見えて、雪の光にいみじく艶なる御姿を見出だして、まことに離れまさりたまはば、と忍びあへず思さる。御前など忍びやかなる限りして、「内より他の歩きはもの憂きほどになりけりや。桃園の宮の心細きさまにてもものしたまふも、式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを、今は頼むなど思のたまふもことわりにいとほしければ」など、人びとにもものたまひなせど、「いでや、御好き心の古りがたきぞ、あたら御きずなめる。軽々しきことも出で来なむ」などつぶやきあへり。

宮には、北面の人しげき方なる御門は、入りたまはむも軽々しければ、西なるがこととしきを、人入れさせたまひて、宮の御方に御消息あれば、今日しも渡りたまはじと思しけるを、驚きて開けさせたまふ。御門守り、寒げなるけはひ、うすすき出で来て、とみにもえあけやらず。これより他の男はたなきなるべし、ごほごほと引きて、「錠のいといたく錆びにければあかず」と愁ふるをあはれと聞こし召す。昨日今日と思すほどに、三年のあなたにもなりにける世かな、かかるを見つつ、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず、木草の色にも心を移すよ、と思し知らるる。口ずさびに、

いつのまに蓬がもととむすばほれ雪降る里と荒れし垣根ぞ

やや久しうひこしらひあけて入りたまふ。

宮の御方に、例の御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、ねぶたきに、宮も欠伸うちしたまひて、「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらす」とのたまふほ

どもなく、軒とか聞き知らぬ音すれば、よろこびながら立ち出でたまはむとす  
 るに、またいと古めかしきはぶきうちして、参りたる人あり。「かしこけれ  
 ど、聞こし召したらむと頼みきこえさするを、世にある者とも数まへさせたま  
 はぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」など名のり出づるにぞ思し  
 出づる。源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行なふ、  
 と聞きしかど、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを、あさましようなり  
 ぬ。「その世のことは、みな昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細  
 きに、うれしき御声かな。親なしに臥せる旅人と育みたまへかし」とて寄りゐ  
 たまへる御けはひに、いとど昔思ひ出でつつ、古りがたくなまめかしきさまに  
 もてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるる声づかひの、さすがに舌  
 つきにて、うちされむとはなほ思へり。「言ひこしほどに」など聞こえかかる  
 まばゆさよ。今しも来たる老いのやうになど、ほほ笑まれたまふものから、ひ  
 きかへ、これもあはれなり。この盛りに挑みたまひし女御、更衣、あるはひた  
 すら亡くなりたまひ、あるはかひなくてはかなき世にさすらへたまふもあべか  
 めり、入道の宮などの御齡よ、あさましとのみ思さるる世に、年のほど身の残  
 り少なげさに、心ばへなどもものはかなく見えし人の生きとまりて、のどやか  
 に行なひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なり、と思すに、  
 ものあはれなる御けしきを、心ときめきに思ひて若やぐ。

年経れどこの契りこそ忘れね親の親とか言ひし一言

と聞こゆれば、疎ましくて、

「身を変へて後も待ち見よこの世にて親を忘るるためしありやと

頼もしき契りぞや。今のどかにぞ聞こえさすべき」とて立ちたまひぬ。

西面には御格子参りたれど、厭ひきこえ顔ならむもいかかとて、一間二間は  
 下ろさず。月さし出でて、薄らかに積もれる雪の光りあひて、なかなかいとお

もしろき夜のさまなり。ありつる老いらくの心げさうも、良からぬものの世のたとひとか聞きし、と思し出でられてをかしくなむ。今宵はいとまめやかに聞こえたまひて、「一言、憎しなども人づてならでのたまはせむを、思ひ絶ゆるふしにもせむ」とおり立ちて責めきこえたまへど、昔、われも人も若やかに罪許されたりし世にだに、故宮などの心寄せ思したりしを、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを、世の末に、さだすぎつきなきほどにて、一声もいとまばゆからむ、と思して、さらに動きなき御心なれば、あさましうつらしと思ひきこえたまふ。さすがに、はしたなくさし放ちてなどはあらぬ人づての御返りなどぞ心やましきや。夜もいたう更けゆくに、風のけはひはげしくて、まことにいとも心細くおぼゆれば、さまよきほどおし拭ひたまひて、

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらきに添へてつらけれ心づからの」とのたまひすさぶるを、「げにかたはらいたし」と、人びと、例の聞こゆ。

「あらためて何かは見えむ人のうへにかかりと聞きし心変はりを昔に変はることはならず」など聞こえたまへり。

いふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも、いと若々しき心地したまへば、「いとかく世の例になりぬべきありさま、漏らしたまふなよ、ゆめゆめ。いさら川などもなれなれしや」とて、せちにうちささめき語らひたまへど、何ごとにかあらむ。人びとも、「あなかたじけな。あながちに情けおくれても、もてなしきこえたまふらむ。軽らかにおし立ちてなどは見えたまはぬ御けしきを。心苦しう」と言ふ。げに人のほどのをかしきにもあはれにも思し知らぬにはあらねど、もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人の、めできこゆらむつらにや思ひなされむ、かつは軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまを、と思せば、なつかし

からむ情けもいとあいなし、よその御返りなどはうち絶えて、おぼつかかなるまじきほどに聞こえたまひ、人づての御いらへ、はしたなからで過ぐしてむ、年ごろ沈みつる罪失ふばかり御行なひを、とは思し立てど、にはかにかかることをしもて離れ顔にあらむも、なかなか今めかしきやうに見え聞こえて、人のとりなさじやは、と、世の人の口さがなさを思し知りにかば、かつさぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行なひをのみしたまふ。御はらからの君達あまたものしたまへど、ひとつ御腹ならねば、いとうとうとしく、宮のうちいとかすかになり行くままに、さばかりめでたき人の、ねむごろに御心を尽くしきこえたまへば、皆人、心を寄せきこゆるも、ひとつ心と見ゆ。

大臣はあながちに思しいらるるにしもあらねど、つれなき御けしきのうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、げにはた人の御ありさま、世のおぼえことにあらまほしく、ものを深く思し知り、世の人のとあるかかるけぢめも聞き集めたまひて、昔よりもあまた経まさりて思さるれば、今さらの御あだけもかつは世のもどきをも思しながら、むなしからむはいよいよ人笑へなるべし、いかにせむ、と、御心動きて、二条院に夜離れ重ねたまふを、女君はたはぶれにくくのみ思す。忍びたまへど、いかがうちこぼるる折もなからむ。

「あやしく例ならぬ御けしきこそ心得がたけれ」とて、御髪をかきやりつつ、いとほしと思したるさまも、絵にかかまほしき御あはひなり。「宮亡せたまひて後、上のいとさうごうしげにのみ世を思したるも心苦しう見たてまつり、太政大臣もものしたまはで、見譲る人なきことしげさになむ。このほどの絶え間などを、見ならはぬことに思すらむも、ことわりにあはれなれど、今はさりとも心のどかに思せ。おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまにもものしたまふこそらうたけれ」など、まろがれたる御額髪

ひきつくろひたまへど、いよいよ背きてものも聞こえたまはず。「いといたく若びたまへるは、誰がならはしきこえたるぞ」とて、常なき世にかくまで心置かるるもあぢきなのわざやと、かつはうち眺めたまふ。「齋院にはかなしごと聞こゆるや、もし思しひがむる方ある。それはいともて離れたることぞよ。おのづから見たまひてむ。昔よりこよなうけどほき御心ばへなるを、さうぎうしき折々、ただならで聞こえ悩ますに、かしこもつれづれにものしたまふ所なれば、たまさかのいらへなどしたまへど、まめまめしきさまにもあらぬを、かくなむあるとしも愁へきこゆべきことにやは。うしろめたうはあらじとを思ひ直したまへ」など、日一日慰めきこえたまふ。

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御かたちも光まさりて見ゆ。「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやう色なきものの身にしみて、この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬ折なれ。すさまじき例に言ひ置きけむ人の心浅さよ」とて、御簾巻き上げさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽の蔭心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすぎきに、童女下ろして、雪まろばしせさせたまふ。をかしげなる姿、頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまざまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなうあまれる髪の毛の末、白きにはましてもてはやしたる、いとけぎやかなり。小さきは童げてよろこび走るに、扇なども落して、うちとけ顔をかしげなり。いと多うまろばさむとふくつけがれど、えも押し動かさでわぶめり。かたへは東のつまなどに出でて、心もとなげに笑ふ。

「一年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほ

めづらしくもはかなきことをしなしたまへりしか。何の折々につけても、口惜しう飽かずもあるかな。いとけどほくもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものには思したりきかし。うち頼みきこえて、とあることかか折につけて、何ごとも聞こえかよひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、いふかひあり、思ふさまに、はかなきことわざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、君こそはさいへど、紫のゆるこよなからずものしたまふれど、すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ。前斎院の御心ばへは、またさまことにご見ゆる。さうぎうしきに何とはなくとも聞こえあはせ、われも心づかひせらるべきあたり、ただこの一所や、世に残りたまへらむ」とのたまふ。「内侍のかみこそは、らうらうじくゆるゆるしき方は人にまさりたまへれ。浅はかなる筋など、もて離れたまへりける人の御心を、あやしくもありけることどもかな」とのたまへば、「さかし。なまめかしくかたちよき女の例には、なほ引き出でつべき人ぞかし。さも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいてうちあだけ好きたる人の、年積りゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはことなき静けさと思ひしだに」などのたまひ出でて、かむの君の御ことにも、涙すこしは落したまひつ。「この数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎ、ものの心など得つべけれど、人よりことなべきものなれば、思ひ上がれるさまをも見消ちてはべるかな。いふかひなき際の人はまだ見ず。人はすぐれたるはかたき世なりや。東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。さはた、さらにえあらぬものを、さる方につけての心ばせ人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに

思ひて過ぎぬるよ。今はたかたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」など、昔今の御物語に夜更けゆく。月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

水閉ぢ石間の水は行きなやみ空澄む月の影ぞ流るる

外を見出だして、すこし傾きたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとり重ねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

かきつめて昔恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦の浮寝か

入りたまひても、宮の御ことを思ひつつ大殿籠もれるに、夢ともなくほのかに見たてまつる、いみじく恨みたまへる御けしきにて、「漏らさじとのたまひしかど、憂き名の隠れなかりければ、恥づかしう苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。御いらへ聞こゆと思すに、襲はるる心地して、女君の、「こは。などかくは」とのたまふにおどろきて、いみじく口惜しく、胸のおきどころなく騒げば、抑へて、涙も流れ出でにけり。今もいみじく濡らし添へたまふ。女君、いかなることにかと思すに、うちもみじろかで臥したまへり。

とけて寝ぬ寢覚さびしき冬の夜にむすぼはれつる夢の短さ

なかなか飽かず悲しと思すに、とく起きたまひて、さとはなくて所々に御誦経などせさせたまふ。苦しき目見せたまふと恨みたまへるも、さぞ思さるらむかし、行なひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、この一つことにてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ、と、ものの心を深く思したるに、いみじく悲しければ、何わぎをして、知る人なき世界におはすらむを、訪らひきこえに参うでて、罪にも代はりきこえばや、などつくづくと思す。かの御ためにとり立てて何わぎをもしたまはむは、人とがめきこえつべし、内にも御心の鬼に思すところやあらむ、と思しつつむほどに、阿弥陀仏を心にか

て念じたてまつりたまふ。同じ蓮にとこそは、

亡き人を慕ふ心にまかせても影見ぬ三つの瀬にや惑はむ  
と思すぞ憂かりけるとや。



少  
女

年変はりて、宮の御果ても過ぎぬれば、世の中色改まりて、更衣のほどなども今めかしきを、まして祭のころは、おほかたの空のけしき心地よげなるに、前齋院はつれづれと眺めたまふを、前なる桂の下風なつかしきにつけても、若き人びとは思ひ出づることどもあるに、大殿より、「御禊の日はいかにのどやかに思さるらむ」と、訪らひきこえさせたまへり。

今日は、

かけきやは川瀬の波もたちかへり君が禊の藤のやつれを

紫の紙、立文すくよかにて藤の花につけたまへり。折のあはれなれば、御返りあり。

藤衣着しは昨日と思ふまに今日は禊の瀬にかはる世を

はかなく。

とばかりあるを、例の、御目止めたまひて見おはす。御服直しのほどなどにも、宣旨のもとに、所狭きまで思しやれることどもあるを、院は見苦しきことに思しのたまへど、をかしやかに、けしきばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞こえ返さめ、年ごろも、おほやけざまの折々の御訪らひなどは聞こえならはしたまひて、いとまめやかなれば、いかがは聞こえも紛らはすべからむ、ともてわづらふべし。

女五の宮の御方にも、かやうに折過ぐさず聞こえたまへば、いとあはれに、「この君の、昨日今日の稚児と思ひしを、かくおとなびて訪らひたまふこと。かたちのいともきよらなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ」とほめきこえたまふを、若き人びとは笑ひきこゆ。あなたにも対面したまふ折は、「この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、今始めたる御心ざしにもあらず。故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、「思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひし

こと」などのたまひ出でつつ、悔しげにこそ思したりし折々ありしか。されど、故大殿の姫君ものせられし限りは、三の宮の思ひたまはむことのいとほしきにとかく言添へきこゆることもなかりしなり。今は、そのやむごとなくえさらぬ筋にてもものせられし人さへ亡くなられにしかば、げに、などてかは、さやうにておはせましも悪しかるまじ、とうちおぼえはべるにも、さらがへりてかくねむごろに聞こえたまふも、さるべきにもあらむとなむ思ひはべる」など、いと古体に聞こえたまふを、心づきなしと思して、「故宮にも、しか心ごはきものに思はれたてまつりて過ぎはべりにしを、今さらにまた世になびきはべらむも、いとつきなきことになむ」と聞こえたまひて、恥づかしげなる御けしきなれば、しひてもえ聞こえおもむけたまはず。宮人も、上下みな心かけきこえたれば、世の中いとうしろめたくのみ思さるれど、かの御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、人の御けしきのうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、さやうにあながちなるさまに、御心破りきこえむなどは、思さざるべし。

大殿腹の若君の御元服のことらしいそぐを、二条の院にてと思せど、大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせたてまつりたまふ。右大将をはじめきこえて、御伯父の殿ばら、みな上達部のやむごとなき御おぼえことにてのみものしたまへば、あるじ方にも、我も我もと、さるべきことどもはとりどりに仕うまつりたまふ。おほかた世ゆすりて、所狭き御いそぎの勢なり。

四位になしてむと思し、世人もさぞあらむと思へるを、まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからむもなかなか目馴れたることなり、と思しとどめつ。浅葱にて殿上に帰りたまふを、大宮は、飽かずあさましきことと思したるぞ、ことわりにいとほしかりける。御対面ありて、

このこと聞こえたまふに、「ただ今、かうあながちにしも、まだきに老いつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしばし習はさむの本意はべるにより、今二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづからおほやけにも仕うまつりぬべきほどになれば、今人となりはべりなむ。みづからは、九重のうちに生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはず、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむはかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず及ばぬところの多くなむはべりける。はかなき親にかしこき子のまさる例は、いとかたきことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。高き家の子として、つかさかうぶり心になひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵に昇りぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、けしきとりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれ、世衰ふる末には、人に軽めあなづらるるに、取るところなきことになむはべる。なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さしあたりては心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてを習ひなば、はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。ただ今はかばかしからずながらも、かくて育みはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひあなづる人もよもはべらじと思つたまふる」など聞こえ知らせたまへば、うち嘆きたまひて、「げにかくも思し寄るべかりけることを、この大将なども、あまり引き違へたる御ことなり、とかたぶけはべるめるを、この幼心地にもいと口惜しく、大将、左衛門の督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとした

りしだに、皆おのおの加階し昇りつつ、およすげあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるに、心苦しくはべるなり」と聞こえたまへば、うち笑ひたまひて、「いとおよすげても恨みはべるななりな。いとかなしや、この人のほどよ」とて、いとうつくしと思したり。「学問などして、すこしものの心得はべらば、その恨みはおのづから解けはべりなむ」と聞こえたまふ。

字つくることは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、珍しくいぶかしきことにして、我も我もと集ひ参りたまへり。博士どももなかなか臆しぬべし。「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、厳しう行なへ」と仰せたまへば、しひてつれなく思ひなして、家より他に求めたる装束どもの、うちあはずかたくなしき姿なども恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座に着き並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。若き君達は、え堪へずほほ笑まれぬ。さるは、もの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ、静まれる限りをと選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出でつつおろす。「おほし垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」など言ふに、人びと皆ほころびて笑ひぬれば、また、「鳴り高し。鳴り止まむ。はなはだ非常なり。座を退きて立ちたうびなむ」など、おどし言ふもいとをかし。見ならひたまはぬ人びとは、珍しく興ありと思ひ、この道より出で立ちたまへる上達部などは、したり顔にうちほほ笑みなどしつつ、かかる方ざまを思し好みて、心ざしたまふがめでたきことと、いとど限りなく思ひきこえたまへり。いささかも言ふをも制す、なめげなりとても咎む、かしかましようののしりをる顔どもも、夜に入りては、なかなか今すこし掲焉なる火影に、猿樂がましくわ

びしげに人わるげなるなど、さまさまに、げにいとなべてならず、さまことなるわざなりけり。大臣は、「いとあざれ、かたくななる身にて、けうさうしまどはかさねなむ」とのたまひて、御簾のうちに隠れてぞ御覧じける。数定まれる座に着きあまりて、帰りまかづる大学の衆どもあるを聞こしめして、釣殿の方に召しとどめて、ことに物など賜はせけり。

事果ててまかづる博士、才人も召して、またまた文作らせたまふ。上達部、殿上人も、さるべき限りをば、皆とどめさぶらはせたまふ。博士の人びとは四韻、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句作りたまふ。興ある題の文字選りて、文章博士たてまつる。短きころの夜なれば、明け果ててぞ講ずる。左中弁、講師仕うまつる。かたちいときよげなる人の、こわづかひものものしく、神さびて読み上げたるほど、おもしろし。おぼえ心ことなる博士なりけり。かかる高き家に生まれたまひて、世界の栄花にのみ戯れたまふべき御身もちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らしたまふ心ざしのすぐれたるよしを、よろづのことによそへなずらへて心々に作り集めたる、句ごとにおもしろく、唐土にも持て渡り伝へまほしげなる夜の文どもなりとなむ、そのころ世にめでゆすりける。大臣の御はさらなり、親めきあはれなることさへすぐれたるを、涙おとして誦じ騒ぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。

うち続き、入学といふことせさせたまひて、やがてこの院のうちに御曹司作りて、まめやかに才深き師に預けきこえたまひてぞ、学問せさせたてまつりたまひける。大宮の御もともにも、をさをさ参うでたまはず。夜昼うつくしみて、なほ稚児のやうにのみもてなしきこえたまへれば、かしこにてはえもの習ひたまはじとて、静かなる所に籠めたてまつりたまへるなりけり。一月に三たびばかりを、参りたまへとぞ、許しきこえたまひける。

つと籠もりゐたまひて、いぶせきままに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある、と思ひきこえたまへど、おほかたの人がらまめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべき書どもとく読み果てて、まじらひもし、世にも出でたらむと思ひて、ただ四五月のうちに、史記などいふ書、読み果てたまひてけり。

今は寮試受けさせむとて、まづ我が御前にて試みさせたまふ。例の大將、左大弁、式部大輔、左中弁などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き卷々、寮試受けむに、博士のかへさふべきふしを引き出でて、一わたり読ませたてまつりたまふに、至らぬ句もなく、かたがたに通はし読みたまへるさま、爪じるし残らず、あさましきまでありがたければ、さるべきにこそおはしけれど、誰も誰も涙落としたまふ。大將は、まして、「故大臣おはせましかば」と、聞こえ出でて泣きたまふ。殿も、え心強うもてなしたまはず、「人のうへにて、かたくななりと見聞きはべりしを、子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れゆくことは、いくばくならぬ齡ながら、かかる世にこそはべりけれ」などのたまひて、おし拭ひたまふを見る御師の心地、うれしく面目ありと思へり。大將盃さしたまへば、いたう酔ひ痴れてをる顔つき、いと痩せ瘦せなり。世のひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じ得るところありて、かくとりわき召し寄せたるなりけり。身に余るまで御顧みを賜はりて、この君の御徳にたちまちに身を変へたると思へば、まして行く先は並ぶ人なきおぼえにぞあらむかし。

大学に参りたまふ日は、寮門に上達部の御車ども数知らず集ひたり。おほかた世に残りたるあらじと見えたるに、またなくもてかしづかれて、つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま、げにかかるまじらひには堪へず、あてにう

つくしげなり。例の、あやしき者どもの立ちまじりつつ、来りたる座の末をからしと思すぞ、いとことわりなるや。ここにても、またおろしののしる者どもありて、めざましけれど、すこしも臆せず読み果てたまひつ。昔おぼえて大学の栄ゆるころなれば、上中下の人、我も我もこの道に志し集れば、いよいよ世の中に、才ありはかばかしき人多くなむありける。文人擬生などいふなることどもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子もいと励みましたまふ。殿にも文作りしげく、博士、才人ども所得たり。すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現はるる世になむありける。

かくて、后のたまふべきを、「齋宮女御をこそは、母宮も後見と譲りきこえたまひしかば」と、大臣もことづけたまふ。源氏のうちしきり后にゐたまはむこと、世の人許しきこえず、弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかなど、うちうちに、こなたかなたに心寄せきこゆる人びと、おぼつかながりきこゆ。兵部卿宮と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむことなき御おぼえにておはする、御むすめ本意ありて参りたまへり。同じごと王女御にてさぶらひたまふを、同じくは、御母方にて親しくおはすべきにこそは、母后のおはしまさぬ御代はりの後見にとことよせて、似つかはしかるべくとりどりに思し争ひたれど、なほ梅壺のたまひぬ。御幸ひの、かく引きかへすぐれたまへりけるを、世の人おどろききこゆ。

大臣、太政大臣に上がりたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。世の中のことども政りごちたまふべく、譲りきこえたまふ。人がらいとすくよかに、きらしくて、心もちるなどもかしこくものしたまふ。学問を立ててしたまひければ、韻塞には負けたまひしかど、公事にかしこくなむ。腹々に御子ども十余人、おとなびつつものしたまふも、次々になり出でつつ、劣らず栄えたる御



家のうちなり。

女は女御と今一所なむおはしける。わかむどほり腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察使大納言の北の方になりて、さしむかへる子どもの数多くなりて、それに混ぜて後の親に譲らむいとあいなしとて、とり放ちきこえたまひて、大宮にぞ預けきこえたまへりける。女御には、こよなく思ひおとしきこえたまひつれど、人がらかたちなどいとうつくしくぞおはしける。

冠者の君、一つにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十に余りたまひて後は、御方ことにて、「むつましき人なれど、をのこ子にはうちとくまじきものなり」と、父大臣聞こえたまひて、けどほくなりたるを、幼心地に思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれありきて、心ぎしを見えきこえたまへば、いみじう思ひかはして、けぎやかに今も恥ぢきこえたまはず。御後見どもも、何かは、若き御心どちなれば、年ごろ見ならひたまへる御あはひを、にはかにもいかかはもて離れ、はしたなめはきこえむと見るに、女君こそ何心なくおはすれど、男はさこそものげなきほどと見きこゆれ、おほけなくいかなる御仲らひにかありけむ、よそよそになりては、これをぞ静心なく思ふべき。まだ片生ひなる手の、生ひ先うつくしきにて、書きかはしたまへる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折あるを、御方の人びとは、ほのぼの知れるもありけれど、何かは、かくこそと誰にも聞こえむ、見隠しつつあるなるべし。

所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちして萩の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かせたてまつりたまふ。宮はよろづのものの上手におはすれば、いづれも伝へたてまつりたまふ。「琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれど、らうらうじきものにはべれ。今の世にまことし

う伝へたる人をさをさはべらずなりにたり。何の親王、くれの源氏」など数へたまひて、「女の中には、太政大臣の山里に籠め置きたまへる人こそ、いと上手と聞きはべれ。物の上手の後にはべれど、末になりて、山賤にて年経たる人のいかでさしも弾きすぐれけむ。かの大臣、いと心ことにこそ思ひてのたまふ折々はべれ。こと事よりは、遊びの方の才はなほ広う合はせ、かれこれに通はしはべるこそかしこけれ、ひとりごとにて上手となりけむこそ、珍しきことなれ」などのたまひて、宮にそそのかしきこえたまへば、「柱さすことうひうひしくなりにけりや」とのたまへど、おもしろう弾きたまふ。「幸ひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老いの世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたてまつりて、身に添へてもやつしるたらず、やむごとなきに譲れる心おきて、こともなかるべき人なりとぞ聞きはべる」など、かつ御物語聞こえたまふ。「女はただ心ばせよりこそ、世に用ゐらるるものにはべりけれ」など、人の上のたまひ出でて、「女御を、けしうはあらず、何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしと思ひたまへしかど、思はぬ人におされぬる宿世になむ、世は思ひのほかなるものと思ひはべりぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なしはべらむ。春宮の御元服ただ今のことになりぬるをと、人知れず思うたまへ心ざしたるを、かういふ幸ひ人の腹の后がねこそ、また追ひ次ぎぬれ。立ち出でたまへらむに、ましてきしろふ人ありがたくや」とうち嘆きたまへば、「なかさしもあらむ。この家にさる筋の人出でものしたまはで止むやうあらじと、故大臣の思ひたまひて、女御の御ことをもみたちいそぎたまひしものをおはせましかば、かくもてひがむることなからまし」など、この御ことにぞ、太政大臣をも恨めしげに思ひきこえたまへる。姫君の御さまのいとさびはにうつくしうて、箏の御琴弾きたまふを、御髪のがり、髪ざしなどのあてになまめかしきをうちまもりたまへば、恥ぢらひてすこしそばみたまへるかたは

らめ、つらつきうつくしげにて、とりゆの手つき、いみじう作りたる物の心地するを、宮も限りなくなしと思したり。掻きあはせなど弾きすさびたまひて、押しやりたまひつ。

大臣和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかなか今めきたるを、さる上手の乱れて掻い弾きたまへる、いとおもしろし。御前の梢ほろほろと残らぬに、老い御達など、ここかしこの御几帳のうしろにかしらを集へたり。「風の力蓋し寡し」とうち誦じたまひて、「琴の感ならねど、あやしくものあはれなる夕べかな。なほあそばさむや」とて、秋風楽に掻きあはせて、唱歌したまへる声いとおもしろければ、皆さまさま、大臣をもうとうつくしと思ひきこえたまふに、いとど添へむとにやあらむ、冠者の君参りたまへり。

「こなたに」とて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり。「をさをさ対面もえ賜はらぬかな。などかくこの御学問のあながちならむ。才のほどよりあまり過ぎぬるもあぢきなきわざと、大臣も思し知れることなるを、かくおきてきこえたまふ、やうあらむとは思ひたまへながら、かう籠もりおはすることな心苦しうはべる」と聞こえたまひて、「時々はことわざしたまへ。笛の音にも古事は伝はるものなり」とて、御笛たてまつりたまふ。いと若うをかしげなる音に吹きたてて、いみじうおもしろければ、御琴どもをばし止めて、大臣、拍子おどろおどろしからずうち鳴らしたまひて、「萩が花摺り」など歌ひたまふ。「大殿も、かやうの御遊びに心とどめたまひて、いそがしき御政事どもをば逃れたまふなりけり。げにあぢきなき世に、心のゆくわざをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」などのたまひて、御土器参りたまふに、暗うなれば、御殿油参り、御湯漬くだものなど、誰も誰もきこしめす。姫君はあなたに渡したてまつりたまひつ。しひて気遠くもてなしたまひ、御琴の音ばかりをも聞かせたてまつらじと、今はこよなく隔てきこえたまふを、「いとほしきことあり

ぬべき世なるこそ」と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人どもささめきけり。大臣出でたまひぬるやうにて、忍びて人にもものたまふとて立ちたまへりけるを、やをらかい細りて出でたまふ道に、かかるささめき言をするに、あやしうなりたまひて御耳とどめたまへば、わが御うへをぞ言ふ。「かしこがりたまへど、人の親よ。おのづからおれたることこそ出で来べかめれ。子を知るといふは、そら事なめり」などぞつきしろふ。あさましくもあるかな、さればよ、思ひ寄らぬことにはあらねど、いはけなきほどにうちたゆみて、世は憂きものにもありけるかな、とけしきをつぶつぶと心得たまへど、音もせで出でたまひぬ。御前駆追ふ声のいかめしきにぞ、「殿は今こそ出でさせたまひけれ。いづれの隈におはしましつらむ。今さへかかるあだけこそ」と言ひあへり。ささめき言の人びとは、「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしつるところと思ひつれ。あなむくつけや。しりう言やほの聞こしめしつらむ。わづらはしき御心を」とわびあへり。殿は道すがら思すに、いと口惜しくあしきことにはあらねど、めづらしげなきあはひに、世人も思ひ言ふべきこと、大臣の、しひて女御をおし沈めたまふもつらきに、わくらばに、人にまさることともやとこそ思ひつれ、ねたくもあるかな、と思す。殿の御仲の、おほかたには、昔も今もいとよくおはしながら、かやうの方にては、挑みきこえたまひし名残も思し出でて、心憂ければ、寢覚がちにて明かしたまふ。大宮をも、さやうのけしきには御覧ずらむものを、世になくかなしくしたまふ御孫にて、まかせて見たまふならむと、人びとの言ひしけしきを、ねたしと思すに、御心動きて、すこし男々しくあぎやぎたる御心には、静めがたし。

二日ばかりありて参りたまへり。しきりに参りたまふ時は、大宮もいと御心ゆき、うれしきものに思いたり。御尼額ひきつくろひ、うるはしき御小桂などたてまつり添へて、子ながら恥づかしげにおはする御人ざまなれば、まほなら

ずぞ見えたてまつりたまふ。大臣御けしきあしくて、「ここにさぶらふもはしたなく、人びといかに見はべらむと心置かれにたり。はかばかしき身にはべらねど、世にはべらむ限り、御目かれず御覧ぜられ、おぼつかなき隔てなくところ思ひたまふれ。よからぬものうへにて、恨めしと思ひきこえさせつべきことの出でまうで来たるを、かうも思うたまへじと、かつは思ひたまふれど、なほ静めがたくおぼえはべりてなむ」と涙おし拭ひたまふに、宮、化粧じたまへる御顔の色違ひて、御目も大きになりぬ。「いかやうなることにてか、今さらにの齡の末に、心置きては思さるらむ」と聞こえたまふも、さすがにいとほしけれど、「頼もしき御蔭に、幼き者をたてまつりおきて、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、まづ目に近きがまじらひなどはかばかしからぬを見たまへ嘆きいとなみつ、さりとも人となさせたまひてむと頼みわたりはべりつるに、思はずなることのはべりければ、いと口惜しうなむ。まことに天の下並ぶ人なき有職にはものせらるめれど、親しきほどにかかるは、人の聞き思ふところもあはつけきやうになむ、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだに示はべるを、かの人の御ためにもいとかたはなることなり。さし離れ、きらきらしうめづらしげあるあたりに、今めかしうもてなさるるこそをかしけれ。ゆかりむつび、ねぢけがましきさまにて、大臣も聞き思すところはべりなむ。さるにても、かかることなむと知らせたまひて、ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをませてこそはべらめ。幼き人びとの心にまかせて御覧じ放ちけるを、心憂く思うたまふる」など聞こえたまふに、夢にも知りたまはぬことなれば、あさましう思して、「げにかうのたまふもことわりなれど、かけてもこの人びとの下の心なむ知りはべらざりける。げにいと口惜しきことは、ここにこそまして嘆くべくはべれ。もろともに罪をおほせたまふは、恨めしきことになむ。見たてまつりしより、心ことに思ひはべりて、そこに思しいたらぬこと

をも、すぐれたるさまにもてなさむところ、人知れず思ひはべれ。ものげなきほどを、心の闇に惑ひて、急ぎものせむとは思ひ寄らぬことになむ。さても誰かかかることは聞こえけむ。よからぬ世の人の言につきて、きはだけく思しのたまふもあぢきなく、むなしきことにて人の御名やけがれむ」とのたまへば、「何の浮きたることにかはべらむ。さぶらふめる人びとも、かつは皆もどき笑ふべかめるものを、いと口惜しく、やすからず思うたまへらるるや」とて、立ちたまひぬ。心知れるどちは、いみじういとほしく思ふ。一夜のしりう言の人びとは、まして心地も違ひて、何にかかる睦物語りをしけむと思ひ嘆きあへり。

姫君は、何心もなくしておはするに、さしのぞきたまへれば、いとらうたげなる御さまをあはれに見たてまつりたまふ。「若き人といひながら、心幼くものしたまひけるを知らで、いとかく人なみなみに思ひける我こそ、まさりてはかなかりけれ」とて、御乳母どもをさいなみたまふに、聞こえむ方なし。「かやうのことは、限りなき帝の御いつきむすめも、おのづから過つ例、昔物語にもあめれど、けしきを知り伝ふる人、さるべき隙にてこそあらめ、これは明け暮れ立ちまじりたまひて、年ごろおはしましつるを、何かは、いはけなき御ほどを、宮の御もてなしよりさし過ぐしても隔てきこえさせむと、うちとけて過ぐしきこえつるを、をととしばかりよりは、けぎやかなる御もてなしになりてはべるめるに、若き人ともうち紛ればみ、いかにぞや、世づきたる人もおはすべかめるを、夢に乱れたるところおはしまさざめれば、さらに思ひ寄らざりけること」とおのがどち嘆く。「よし、しばしかかること漏らさじ。隠れあるまじきことなれど、心をやりて、あらぬこととだに言ひなされよ。今かしこに渡したてまつりてむ。宮の御心のいとつらきなり。そこたちは、さりとも、いとかがれとしも思はれざりけむ」とのたまへば、いとほしきなかにも、うれしくのたまふと思ひて、「あないみじや。大納言殿に聞きたまはむことをさへ思

ひはべれば、めでたきにても、ただ人の筋は何のめづらしきにか思ひたまへかけむ」と聞こゆ。姫君は、いと幼げなる御さまにて、よろづに申したまへども、かひあるべきにもあらねば、うち泣きたまひて、いかにしてかいたづらになりたまふまじきわざはすべからむと、忍びてさるべきどちのたまひて、大宮のみぞ恨みきこえたまふ。

宮はいとほしと思すなかにも、男君の御かなしきはすぐれたまふにやあらむ、かかる心のありけるもうつくしう思さるるに、情けなくこよなきことやうに思しのたまへるを、などかさしもあるべき、もとよりいたう思ひつきたまふことなく、かくまでかしづかむとも思し立たざりしを、わがかくもてなしそめたればこそ、春宮の御ことをも思しかけたためれ、とりはづして、ただ人の宿世あらば、この君よりほかにまさるべき人やはある、かたちありさまよりはじめて、等しき人のあるべきかは、これより及びなからむ際にもとこそ思へ、と、わが心ざしのまさればにや、大臣を恨めしう思ひきこえたまふ。御心のうちを見せたてまつりたらば、ましていかに恨みきこえたまはむ。

かく騒がるらむとも知らで、冠者の君参りたまへり。一夜も人目しげうて、思ふことをもえ聞こえずなりにしかば、常よりもあはれにおぼえたまひければ、夕つ方おはしたるなるべし。宮、例は是非知らずうち笑みて待ちよろこびきこえたまふを、まめだちて物語など聞こえたまふついでに、「御ことにより、内大臣の怨じてものしたまひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて、人にも思はせたまひつべきが心苦しきこと。かうも聞こえじと思へど、さる心も知りたまはでやと思へばなむ」と聞こえたまへば、心にかかれることの筋なれば、ふと思ひ寄りぬ。面赤みて、「何ごとにかはべらむ。静かなる所に籠もりはべりにしのち、ともかくも人にまじる折なければ、恨みたまふべきことはべらじとなむ思ひたまふる」とて、いと恥づかし

と思へるけしきを、あはれに心苦しうて、「よし、今よりだに用意したまへ」とばかりにて、異事に言ひなしたまうつ。

いとど文なども通はむことのかたきなめりと思ふに、いと嘆かしう、物参りなどしたまへど、さらに参らで寝たまひぬるやうなれど、心も空にて、人静まるほどに、中障子を引けど、例はことに鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して人の音もせず。いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁の鳴きわたる声のほのかに聞こゆるに、幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、「雲居の雁もわがごとや」と独りごちたまふけはひ、若うらうたげなり。いみじう心もとなければ、「これ開けさせたまへ。小侍従やさぶらふ」とのたまへど、音もせず。御乳母子なりけり。独り言を聞きたまひけるも恥づかしうて、あいなく御顔も引き入れたまへど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母たちなど近く臥して、うちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。

さ夜中に友呼びわたる雁が音にうたて吹き添ふ萩の上風身にしみけるかなと思ひ続けて、宮の御前に帰りて嘆きがちなるも、御目覚めてや聞かせたまふらむとつつましく、みじろき臥したまへり。

あいなくもの恥づかしうて、わが御方にとく出でて御文書きたまへれど、小侍従もえ逢ひたまはず、かの御方さまにもえ行かず、胸つぶれておぼえたまふ。女はた、騒がれたまひしことのみ恥づかしうて、わが身やいかがあらむ、人やいかが思はむとも深く思し入れず、をかしうらうたげにて、うち語らふさまなど、疎ましも思ひ離れたまはざりけり。またかう騒がるべきことも思さざりけるを、御後見どもいみじうあはめきこゆれば、え言も通はしたまはず。おとなびたる人やさるべき隙をも作り出づらむ、男君も今すこしものはかなき年のほどにて、ただいと口惜しとのみ思ふ。



大臣はそのままに参りたまはず、宮をいとつらしと思ひきこえたまふ。北の方には、かかることなむとけしきも見せたてまつりたまはず。ただおほかたいとむつかしき御けしきにて、「中宮のよそほひことにて参りたまへるに、女御の世の中思ひしめりてものしたまふを、心苦しう胸いたきに、まかでさせたまつりて、心やすくうち休ませたてまつらむ。さすがに、上につとさぶらはせたまひて、夜昼おはしますめれば、ある人びとも心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに」とのたまひて、にはかにまかでさせたてまつりたまふ。御暇も許されがたきを、うちむつかりたまて、上はしぶしぶに思し召したるを、しひて御迎へしたまふ。「つれづれに思されむを、姫君渡して、もろともに遊びなどしたまへ。宮に預けたてまつりたるうしろやすけれど、いとさくじりおよすけたる人立ちまじりておのづから気近きも、あいなきほどになりたればなむ」と聞こえたまひて、にはかに渡しきこえたまふ。宮いとあへなしと思して、「ひとりものせられし女亡くなりたまひてのち、いとさうざうしく心細かりしに、うれしうこの君を得て、生ける限りのかしづきものと思ひて、明け暮れにつけて、老いのむつかしきも慰めむとこそ思ひつれ。思ひのほかに隔てありて思しなすもつらく」など聞こえたまへば、うちかしこまりて、「心に飽かず思うたまへらるることは、しかなむ思うたまへらるるとばかり聞こえさせしになむ。深く隔て思ひたまふることはいかでかはべらむ。内にさぶらふが、世の中恨めしげにて、このころまかではべるに、いとつれづれに思ひて屈しはべれば、心苦しう見たまふるを、もろともに遊びわざをもして慰めよと思うたまへてなむ、あからさまにものははべる」とて、「育み、人となさせたまへるを、おろかにはよも思ひきこえさせじ」と申したまへば、かう思し立ちにたれば、とどめきこえさせたまふとも思し返すべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しう思されて、「人の心こそ憂きものはあれ。とかく幼き心どもにも、われに隔てて疎

ましかりけることよ。またさもこそあらめ、大臣の、ものの心を深う知りたまひながら、われを怨じて、かく率て渡したまふこと。かしこにて、これよりうしろやすきこともあらじ」とうち泣きつつのたまふ。

折しも冠者の君参りたまへり。もしいささかの隙もやと、このころはしげうほのめきたまふなりけり。内の大臣の御車のあれば、心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、わが御方に入りゐたまへり。内の大殿の君達、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど、御簾の内は許したまはず。左兵衛督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのまに、今も参り仕うまつりたまふことねむごろなれば、その御子どももさまざま参りたまへど、この君に似るにほひなく見ゆ。大宮の御心ざしも、なずらひなく思したるを、ただこの姫君をぞ、気近うらうたきものと思しかしづきて、御かたはらさけず、うつくしきものに思したりつるを、かくて渡りたまひなむが、いとさうぎうしきことを思す。殿は、「今のほどに内に参りはべりて、夕方方迎へに参りはべらむ」とて出でたまひぬ。いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、さてもやあらましと思せど、なほいと心やましければ、人の御ほどのすこしものものしくなりなむに、かたはならず見なして、そのほど心ざしの深さ浅さのおもむきをも見定めて、許すとも、ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ、制し諫むとも、一所にては、幼き心のままに、見苦しうこそあらめ、宮もよもあながちに制したまふことあらじ、と思せば、女御の御つれづれにことつけて、ここにもかしこにもおいらかに言ひなして、渡したまふなりけり。

宮の御文にて、

大臣こそ恨みもしたまはめ、君はさりともし心ざしのほども知りたまふらむ。渡りて見えたまへ。

と聞こえたまへれば、いとをかしげにひきつくろひて渡りたまへり。十四になむおはしける。かたなりに見えたまへど、いと子めかしう、しめやかにうつくしきさましたまへり。「かたはらさけたてまつらず、明け暮れのもてあそびものに思ひきこえつるを、いとさうぎうしくもあるべきかな。残りすくなき齡のほどにて、御ありさまを見果つまじきことと、命をこそ思ひつれ、今さらに見捨てて移ろひたまふや、いづちならむと思へば、いところあはれなれ」とて泣きたまふ。姫君は恥づかしきことを思せば、顔ももたげたまはで、ただ泣きにのみ泣きたまふ。男君の御乳母、宰相の君出で来て、「同じ君とこそ頼みきこえさせつれ、口惜しくかく渡らせたまふこと。殿はことざまに思しなることおはしますとも、さやうに思しなびかせたまふな」など、ささめき聞こゆれば、いよいよ恥づかしと思して、物ものたまはず。「いで、むつかしきことな聞こえられそ。人の御宿世宿世いと定めがたく」とのたまふ。「いでや、ものげなしとあなづりきこえさせたまふにはべるめりかし。さりとも、げにわが君や人に劣りきこえさせたまふ、と聞こしめし合はせよ」と、なま心やましきままに言ふ。

冠者の君、物のうしろに入りみて見たまふに、人の咎めむもよろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おし拭ひつつおはするけしきを、御乳母いと心苦しう見て、宮にとかく聞こえたばかりて、夕まぐれの人のまよひに對面させたまへり。かたみにもの恥づかしく胸つぶれて、物も言はで泣きたまふ。「大臣の御心のいとつらければ、さはれ、思ひやみなむと思へど、恋しうおはせむこそわりなかるべけれ。などで、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よそに隔てつらむ」とのたまふさまも、いと若うあはれげなれば、「まろも、さこそはあらめ」とのたまふ。「恋しとは思しなむや」とのたまへば、すこしうなづきたまふさまも幼げなり。

御殿油参り、殿まかでたまふけはひ、こちたく追ひののしる御前駆の声に、人びと、「そそや」など懼ち騒げば、いと恐ろしと思してわななきたまふ。さも騒がればと、ひたぶる心に、許しきこえたまはず。御乳母参りてもとめたてまつるに、けしきを見て、あな心づきなや、げに宮知らせたまはぬことにはあらざりけり、と思ふに、いとつらく、「いでや、憂かりける世かな。殿の思しのたまふことはさらにも聞こえず、大納言殿にもいかに聞かせたまはむ。めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」とつぶやくもほの聞こゆ。ただこの屏風のうしろに尋ね来て、嘆くなりけり。男君、我をば位なしとてはしたなむるなりけりと思すに、世の中恨めしければ、あはれもすこしさむる心地して、めざまし。「かれ聞きたまへ。

くれなるの涙に深き袖の色を浅緑にや言ひしをるべき  
恥づかし」とのたまへば、

いろいろに身の憂きほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ  
と物のたまひ果てぬに、殿入りたまへば、わりなくて渡りたまひぬ。

男君は、立ちとまりたる心地も、いと人わるく胸ふたがりて、わが御方に臥したまひぬ。御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも、静心なければ、宮の御前より、「参りたまへ」とあれど、寝たるやうにて動きもしたまはず。涙のみとまらねば、嘆きあかして、霜のいと白きに急ぎ出でたまふ。うちはれたるまみも、人に見えむが恥づかしきに、宮はた召しまつはすべかめれば、心やすき所にとて、急ぎ出でたまふなりけり。道のほど、人やりならず心細く思ひ続けるに、空のけしきもいたう雲りて、まだ暗かりけり。

霜氷うたてむすべる明けぐれの空かきくらし降る涙かな

大殿には、今年五節たてまつりたまふ。何ばかりの御いそぎならねど、童女の装束など、近うなりぬとて急ぎせさせたまふ。東の院には、参りの夜の人び

との装束せさせたまふ。殿には、おほかたのことども、中宮よりも、童、下仕への料など、えならでたてまつれたまへり。過ぎにし年、五節などとまれりしが、さうごうしかりし積り取り添へ、上人の心地も常よりもはなやかに思ふべかめる年なれば、所々挑みて、いといみじくよろづを尽くしたまふ聞こえあり。按察使大納言、左衛門督、上の五節には、良清、今は近江の守にて左中弁なるなむたてまつりける。皆とどめさせたまひて、宮仕へすべく、仰せ言ことなる年なれば、むすめをおのおのたてまつりたまふ。殿の舞姫は、惟光の朝臣の、津の守にて左京大夫かけたるが女、かたちなどいとをかしげなる聞こえあるを召す。からいことに思ひたれど、「大納言の、外腹のむすめをたてまつらるるに、朝臣のいつきむすめ出だし立てたらむ、何の恥かあるべき」とさいなめば、わびて、同じくは宮仕へやがてせさすべく思ひおきてたり。舞習はしなどは、里にていとよう仕立てて、かしづきなど、親しう身に添ふべきは、いみじう選り整へて、その日の夕つけて参らせたり。殿にも、御方々の童女、下仕へのすぐれたるをと御覧じ比べ、選り出でらるる心地どもは、ほどほどにつけて、いとおもだたしげなり。御前に召して御覧ぜむうちならしに、御前を渡らせてと定めたまふ。捨つべうもあらず、とりどりなる童女の様体、かたちを思しわづらひて、「今一所の料を、これよりたてまつらばや」など笑ひたまふ。ただもてなし用意によりてぞ選びに入りける。

大学の君、胸のみふたがりて、物なども見入れられず、屈指いたくて、書も読まで眺め臥したまへるを、心もや慰むと立ち出でて、紛れありきたまふ。さまたちはめでたくをかしげにて、静やかになまめいたまへれば、若き女房などは、いとをかしと見たてまつる。上の御方には、御簾の前にだに、もの近うももてなしたまはず、わが御心ならひ、いかに思すにかありけむ、疎々しければ、御達なども気遠きを、今日はものの紛れに入り立ちたまへるなめり。舞姫

かしづき下ろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りてのぞきたまへば、悩ましげにて添ひ臥したり。ただかの人の御ほどと見えて、今すこしそびやかに、様体などのことさらびをかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければこまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引き鳴らいたまふに、何心もなく、あやしと思ふに、

「天にます豊岡姫の宮人もわが心ざすしめを忘るな

乙女子が袖振る山の瑞垣の」とのたまふぞうちつけなりける。若うをかしき声なれど、誰ともえ思ひたどられず、なまむつかしきに、化粧じ添ふとて騒ぎつる後見ども、近う寄りて人騒がしうなれば、いと口惜しうて立ち去りたまひぬ。浅葱の心やましければ、内へ参ることもせずもの憂がりたまふを、五節にとつけて、直衣などさま変はれる色ゆるされて参りたまふ。きびはにきよらなるものから、まだきにおよすけて、されありきたまふ。帝よりはじめたてまつりて、思したるさまなべてならず、世にめづらしき御おぼえなり。

五節の参る儀式は、いづれともなく心々に二なくしたまへるを、舞姫のかたち、大殿と大納言とはすぐれたりとめでののしる。げにいとをかしげなれど、ここしうつくしげなることは、なほ大殿のにはえ及ぶまじかりけり。ものきよげに今めきて、そのものとも見ゆまじう仕立てたる様体などのありがたうをかしげなるを、かうほめらるるなめり。例の舞姫どもよりは皆すこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。殿参りたまひて、御覧ずるに、昔御目とまりたまひしをとめの姿思し出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文のうち思ひやるべし。

をとめも神さびぬらし天つ袖古き世の友よはひ経ぬれば

少女  
年月の積りを数へて、うち思しけるままのあはれをえ忍びたまはぬばかりの、

をかしようおぼゆるも、はかなしや。

かけて言へば今日のこととぞ思ほゆる日蔭の霜の袖にとけしも

青摺りの紙よくとりあへて、紛らはし書いたる濃墨、薄墨、草がちにうち交ぜ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覽ず。冠者の君も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひありきたまへど、あたり近くだに寄せず、いとけけしうもてなしたれば、ものつつまשיきほどの心には嘆かしようてやみぬ。かたちはしもいと心につきて、つらき人の慰めにも、見るわざしてむやと思ふ。

やがて皆とめさせたまひて、宮仕へすべき御けしきありけれど、このたびはまかでさせて、近江のは辛崎の祓へ、津の守は難波と挑みてまかでぬ。大納言もことさらに参らすべきよし奏せさせたまふ。左衛門督その人ならぬをたてまつりて咎めありけれど、それもとどめさせたまふ。津の守は、「内侍のすけあきたるに」と申させたれば、さもやいたはらまし、と大殿も思いたるを、かの人には聞きたまひて、いと口惜しと思ふ。わが年のほど、位などかくものげなからずは、請ひみてましものを、思ふ心ありとだに知られでやみなむことと、わざとのことにはあらねど、うち添へて涙ぐまるる折々あり。

せうとの童殿上する、常にこの君に参り仕うまつるを、例よりもなつかしう語らひたまひて、「五節はいつか内へ参る」と問ひたまふ。「今年とこそは聞きはべれ」と聞こゆ。「顔のいとよかりしかば、すずろにこそ恋しけれ。ましが常に見るらむも羨ましきを、また見せてむや」とのたまへば、「いかでかさはべらむ。心にまかせてもえ見はべらず。男はらからとて近くも寄せはべらねば、まして、いかでか君達には御覽ぜさせむ」と聞こゆ。「さらば、文をだに」とて賜へり。先々かやうのことは言ふものをと苦しけれど、せめて賜へば、いとほしうて持ていぬ。年のほどよりはされてやありけむ、をかしと見けり。緑の薄様の好ましき重ねなるに、手はまだいと若けれど、生ひ先見えていとをか

しげに、

日影にもしるかりけめやをとめ子が天の羽袖にかけし心は

二人見るほどに、父主ふと寄り来たり。恐ろしうあきれて、え引き隠さず。「なぞの文ぞ」とて取るに、面赤みてゐたり。「よからぬわざしけり」と憎めば、せうと逃げて行くを、呼び寄せて、「誰がぞ」と問へば、「殿の冠者の君のしかしかのたまうて賜へる」と言へば、名残なくうち笑みて、「いかにうつくしき君の御され心なり。きむぢらは、同じ年なれど、いふかひなくはかなかめりかし」などほめて、母君にも見す。「この君達の、すこし人数に思しぬべからましかば、宮仕へよりは、たてまつりてまし。殿の御心おきて見るに、見そめたまひてむ人を、御心とは忘れたまふまじきところ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」など言へど、皆急ぎ立ちにたり。

かの方は、文をだにえやりたまはず、立ちまさる方のごとし心にかかりて、ほど経るままに、わりなく恋しき面影に、またあひ見でやと思ふよりほかのことなし。宮の御もとへ、あいなく心憂くて参りたまはず。おはせしかた、年ごろ遊び馴れし所のみ思ひ出でらるることまされば、里さへ憂くおぼえたまひつ、また籠もりゐたまへり。殿はこの西の対にぞ聞こえ預けたてまつりたまひける。「大宮の御世の残り少なげなるを、おはせずなりなむのちも、かく幼きほどより見ならして後見おぼせ」と聞こえたまへば、ただのたまふままの御心にて、なつかしうあはれに思ひ扱ひたてまつりたまふ。

ほのかになど見たてまつるにも、かたちのまほならずもおはしけるかな、かかる人も人は思ひ捨てたまはざりけり、など、わがあながちにつらき人の御かたちを心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ、と思ふ。また、向ひて見るかひなからむもいとほしげなり、かくて年経たまひにけれど、殿の、さやうなる御かたち、御心と見た



まうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ、何くれともてなし紛らはしたまふめるも、むべなりけり、と思ふ心のうちぞ恥づかしかりける。大宮のかたちこにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこにも、人はかたちよきものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御かたちの、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ痩せに御髪少ななるなどが、かくそしらはしきなりけり。

年の暮には、睦月の御装束など、宮はただこの君一所の御ことを、まじることなういそぎたまふ。あまたくだりいときよらに仕立てたまへるを、見るもの憂くのみおぼゆれば、「ついたちなどには、かならずしも内へ参るまじう思ひたまふるに、何にかくいそがせたまふらむ」と聞こえたまへば、「などてかさもあらむ。老いくづほれたらむ人のやうにもものたまふかな」とのたまへば、「老いねど、くづほれたる心地ぞするや」と独りごちて、うち涙ぐみてゐたまへり。かのことを思ふならむといと心苦しうて、宮もうちひそみたまひぬ。

「男は、口惜しき際の人だに心を高うこそつかふなれ。あまりしめやかに、かくなものしたまひそ。何とか、かう眺めがちに思ひ入れたまふべき。ゆゆしう」とのたまふも、「何かは。六位など人のあなづりはべるめれば、しばしのこととは思ふたまふれど、内へ参るもの憂くてなむ。故大臣おはしまさしかば、戯れにても人にはあなづられはべらざらまし。もの隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたり、たやすくも参り馴れはべらず。東の院にてのみなむ、御前近くはべる。対の御方こそあはれにものしたまへ、親今一所おはしまさしかば、何ごとを思ひはべらまし」とて、涙の落つるを紛らはいたまへるけしき、いみじうあはれなるに、宮はいとどほろほろと泣きたまひて、「母にも後るる人は、ほどほどにつけてきのみこそあはれなれど、おのづから宿世宿世に人と成りたちぬれば、おろかに思ふもなきわ

ぎなるを、思ひ入れぬさまにてもものしたまへ。故大臣の今しばしだにものしたまへかし。限りなき蔭には、同じことと頼みきこゆれど、思ふにかなはぬことの多かるかな。内大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと、世人もめで言ふなれど、昔に変はることのみまさりゆくに、命長さも恨めしきに、生ひ先遠き人さへ、かくいささかにも世を思ひしめりたまへれば、いとなむよろづ恨めしき世なる」とて、泣きおはします。

ついたちにも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはします。良房の大臣と聞こえける、いにしへの例にならずらへて、白馬ひき、節会の日、内の儀式をうつして、昔の例よりも事添へて、いつかしき御ありさまなり。

如月の二十日あまり、朱雀院に行幸あり。花盛りはまだしきほどなれど、弥生は故宮の御忌月なり、とく開けたる桜の色もおもしろければ、院にも御用意ことにつくろひ磨かせたまひ、行幸に仕うまつりたまふ上達部、親王たちよりはじめ、心づかひしたまへり。人びとみな青色に桜襲を着たまふ。帝は赤色の御衣たてまつれり。召しありて、太政大臣参りたまふ。おなじ赤色を着たまへれば、いよいよひとつものとかかやきて見えまがはせたまふ。人びとの装束、用意常にことなり。院もいときよらにねびまさらせたまひて、御さまの用意、なまめきたる方に進ませたまへり。今日はわざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す。式部のつかさの試みの題をなずらへて、御題賜ふ。大殿の太郎君の試みたまふべきなめり。臆だかき者どもは、ものもおぼえず、繋ぐぬ舟に乗りて池に放れ出でて、いと術なげなり。日やうやうくだりて、楽の舟ども漕ぎまひて、調子ども奏するほどの、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君は、かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものを、と世の中恨めしうおぼえたまひけり。春鶯囀舞ふほどに、昔の花の宴のほど思し出でて、院の帝も、「またさばかりのこと見てむや」とのた

まはするにつけて、その世のことあはれに思し続けらる。舞ひ果つるほどに、大臣、院に御土器参りたまふ。

鶯のさへづる声は昔にて睦れし花の蔭ぞ変はれる

院の上、

九重を霞隔つるすみかにも春と告げくる鶯の声

帥の宮と聞こえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器参りたまふ。

いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ変はらぬ

あぎやかに奏しなしたまへる、用意ことにめでたし。取らせたまひて、

鶯の昔を恋ひてさへづるは木伝ふ花の色やあせたる

とのたまはする御ありさま、こよなくゆゑゆゑしくおはします。これは御私ざまに、うちうちのことなれば、あまたにも流れずやなりにけむ、また書き落してけるにやあらむ。楽所遠くておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿宮琵琶、内大臣和琴、箏の御琴院の御前に参りて、琴は例の太政大臣に賜はりたまふ。せめきこえたまふ。さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの尽くしたまへる音は、たとへむかたなし。唱歌の殿上人あまたさぶらふ。あなたうと遊びて、次に桜人、月おぼろにさし出でてをかしきほどに、中島のわたりに、ここかしこ篝火ども灯して、大御遊びはやみぬ。

夜更けぬれど、かかるついでに、大后の宮おはします方をよきて訪らひきこえさせたまはざらむも情けなければ、帰さに渡らせたまふ。大臣もろともにさぶらひたまふ。后待ち喜びたまひて、御対面あり。いといたうさだ過ぎたまひにける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえたまひて、かく長くおはしますたぐひもおはしけるものを、と口惜しう思ほす。「今はかく古りぬる齢に、よろづのこと忘れはべりにけるを、いとかたじけなく渡りおはしまいたるになむ、さらに昔の御世のこと思ひ出でられはべる」とうち泣きたまふ。「さるべき御

蔭どもに後ればべりてのち、春のけぢめも思うたまへわかれぬを、今日なむ慰めはべりぬる。またまたも」と聞こえたまふ。大臣もさるべきさまに聞こえて、「ことさらにさぶらひてなむ」と聞こえたまふ。のどやかならで帰らせたまふ響きにも、后は、なほ胸うち騒ぎて、いかに思し出づらむ、世をたもちたまふべき御宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔い思す。

内侍のかんの君も、のどやかに思し出づるに、あはれなること多かり。今もさるべき折、風のつてにもほのめききこえたまふこと絶えざるべし。后はおほやけに奏せさせたまふことある時々ぞ、御たうばりのつかさ、こうぶり、何くれのことに触れつつ、御心になはぬ時ぞ命長くてかかる世の末を見ること、と取り返さまほしう、よろづ思しむつかりける。老いもおはするままに、さかなさまさりて、院もくらべ苦しうたとへがたくぞ思ひきこえたまひける。

かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。年積れるかしこき者どもを選らばせたまひしかど、及第の人わづかに三人なむありける。秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ。かの人の御こと、忘るる世なけれど、大臣の切にまもりきこえたまふもつらければ、わりなくなども対面したまはず。御消息ばかり、さりぬべきたよりに聞こえたまひて、かたみに心苦しき御仲なり。

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも集へ住ませむの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町をこめて造らせたまふ。式部卿宮、明けむ年ぞ五十になりたまひける。御賀のこと、対の上思しまうくるに、大臣もげに過ぐしがたきことどもなりと思して、さやうの御いそぎも、同じくめづらしからむ御家居にてといそがせたまふ。年返りて、ましてこの御いそぎのこと、御としみのこと、楽人、舞人の定めなどを、御心に入れていとなみたまふ。経、仏、

法事の日の装束、祿などをなむ、上はいそがせたまひける。東の院に、分けてしたまふことどもあり。御なからひ、ましていとみやびかに聞こえかはしてなむ過ぐしたまひける。世の中響きゆすれる御いそぎなるを、式部卿宮にも聞こしめして、年ごろ世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情けなく、事に触れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひ置きたまふことこそはありけめ、といとほしくもからくも思しけるを、かくあまたかかづらひたまへる人びと多かるなかに、取りわきたる御思ひすぐれて、世に心にくくめでたきことに思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ、わが家まではにほひ来ねど、面目に思すに、またかくこの世にあまるまで響かし営みたまふは、おぼえぬ齡の末の栄えにもあるべきかなと喜びたまふを、北の方は心ゆかずものしとのみ思したり。女御、御まじらひのほどなごにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし。

八月にぞ、六条院造り果てて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御古宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩し変へて、水の趣き、山のおきてを改めて、さまざまに御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩つつじなどやうの春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をばむらむらほのかに混ぜたり。中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを添へて、泉の水遠く澄まし、やり水の音まさるべき巖立て加へ、滝落として、秋の野をはるかに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山無徳にけおされた

る秋なり。北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花草々を植ゑて、春秋の本草、そのなかにうち混ぜたり。東面は、分けて馬場の御殿作り、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて、向かひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。西の町は、北面築き分けて、御倉町なり。隔ての垣に松の木茂く、雪をもてあそばむたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき菊の籬、われは顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。

彼岸のころほひ渡りたまふ。ひとたびにと定めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。例のおいらかにけしきばまぬ花散里ぞ、その夜添ひて移ろひたまふ。春の御しつらひは、このころに合はねどいと心ことなり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位殿上人などは、さるべき限りを選らせたまへり。こちたきほどにはあらず、世のそしりもやと省きたまへれば、何事もおどろおどろしいかめしきことはなし。今一方の御けしきも、をさをさ落としたまはで、侍従の君添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり。女房の曹司町ども、当て当てのこまけぞ、おほかたのことよりもめでたかりける。五六日過ぎて、中宮まかでさせたまふ。この御けしきはたさは言へど、いと所狭し。御幸ひのすぐれたまへりけるをばさるものにて、御ありさまの心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれたまへることすぐれてなむおはしませける。この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして、気近くをかしきあはひにしなしたまへり。

長月になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の御前えも言はずおもしろし。風

うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、色々の花紅葉をこき混ぜて、こなたにたてまつらせたまへり。大きやかなる童女の、濃き袂、紫苑の織物重ねて、赤朽葉の羅の汗衫いといたうなれて、廊、渡殿の反橋を渡りて参る。うるはしき儀式なれど、童女のをかしきをなむ、え思し捨てざりける。さる所にさぶらひなれたれば、もてなしありさま他には似ず、このましうをかし。御消息には、

心から春まつ園はわが宿の紅葉を風につてにだに見よ

若き人びと、御使もてはやすさまどもをかし。御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、

風に散る紅葉は軽し春の色を岩根の松にかけてこそ見ぬ

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬ作りごとどもなりけり。とりあへず思ひ寄りたまひつるゆゑゆゑしさを、をかく御覧ず。御前なる人びともめであへり。大臣、「この紅葉の御消息、いとねたげなめり。春の花盛りに、この御いらへは聞こえたまへ。このころ紅葉を言ひ朽さむは、龍田姫の思はむこともあるを、さし退きて、花の蔭に立ち隠れてこそ強きことは出で来ぬ」と聞こえたまふも、いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに、いと思ふやうなる御住まひにて、聞こえ通はしたまふ。

大堰の御方は、かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人はいつとなく紛らはさむと思して、神無月になむ渡りたまひける。御しつらひ、ことのありさま劣らずして、渡したてまつりたまふ。姫君の御ためを思せば、おほかたの作法も、けぢめこよなからず、いともものしくもてなさせたまへり。

梅

枝



御裳着のことらしいそぐ御心おきて、世の常ならず。春宮も、同じ二月に御かうぶりのことあるべければ、やがて御参りもうち続くべきにや。正月のつごもりなれば、公私のどやかなるころほひに、薫物合はせたまふ。大弐の奉れる香ども御覧するに、なほいにしへのには劣りてやあらむ、と思して、二条院の御倉開けさせたまひて、唐の物ども取り渡させたまひて、御覧じ比ぶるに、「錦、綾なども、なほ古きものこそなつかしうこまやかにありけれ」とて、近き御しつらひの、物の覆ひ、敷物、茵などの端どもに、故院の御世の初めつ方、高麗人のたてまつれりける綾、緋金錦どもなど、今の世のものに似ず、なほさまざま御覧じあてつつせさせたまひて、このたびの綾、羅などは、人びとに賜はす。香どもは、昔今の取り並べさせたまひて、御方々に配りたてまつらせたまふ。「二種づつ合はせさせたまへ」と聞こえさせたまへり。贈り物、上達部の禄など、世になきさまに、内にも外にも、ことしげくいとなみたまふに添へて、方々に選りとのへて、鉄白の音耳かしかましきころなり。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つのはうを、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にしめて合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御はうを伝へて、かたみに挑み合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、「匂ひの深さ浅さも、勝ち負けの定めあるべし」と大臣のたまふ、人の御親げなき御あらそひ心なり。いづ方にも、御前にさぶらふ人あまたならず。御調度どもも、そこらのきよらを尽くしたまへるなかにも、香壺の御箱どものやう、壺の姿、火取りの心ばへも、目馴れぬさまに今めかしうやう変へさせたまへるに、所々の心を尽くしたまへらむ匂ひどもの、すぐれたらむどもを、かぎあはせて入れむと思すなりけり。

二月の十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなき

ほどに、兵部卿宮渡りたまへり。御いそぎの今日明日になりけることども、訪らひきこえたまふ。昔より取り分きたる御仲なれば、隔てなくそのことかのことと聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに、前齋院よりとて、散りすきたる梅の枝につけたる御文持て参れり。宮、聞こしめすこともあれば、いかなる御消息のすすみ参れるにかとて、をかしと思したれば、ほほ笑みて、「いと馴れ馴れしきこと聞こえつけたりしを、まめやかに急ぎものしたまへるなめり」とて、御文は引き隠したまひつ。沈の箱に、瑠璃の坏二つ据ゑて、大きにまろがしつつか入れたまへり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を選びて、同じくひき結びたる糸のさまも、なよびやかになまめかしうぞしたまへる。「艶あるものさまかな」とて、御目とめたまへるに、

花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖に浅くしまめや

ほのかなるを御覧じつけて、宮は、ことごとしう誦じたまふ。宰相の中將、御使尋ねとどめさせたまひて、いたう酔はしたまふ。紅梅襲の唐の細長添へたる女の装束かづけたまふ。御返りもその色の紙にて、御前の花を折らせてつけさせたまふ。宮、「うちのこと思ひやらるる御文かな。何ごとの隠ろへあるにか、深く隠したまふ」と恨みて、いとゆかしと思したり。「何ごとかはべらむ。隈々しく思したるこそ苦しけれ」とて、御硯のついでに、

花の枝にいとど心をしむるかな人のとがめむ香をばつつめど

とやありつらむ。「まめやかには好き好きしきやうなれど、またもなかめる人の上にて、これこそはことわりのいとなみなめれ、と思ひたまへなしてなむ。いと醜ければ、疎き人はかたはらいたさに、中宮まかさせたてまつりて、と思ひたまふる。親しきほどに馴れきこえかよへど、恥づかしきところの深うおはする宮なれば、何ごとも世の常にて見せたてまつらむ、かたじけなくてなむ」など、聞こえたまふ。「あえものも、げにかならず思し寄るべきことなりけり」

とことわり申したまふ。

このついでに、御方々の合はせたまふども、おのおの御使して、「この夕暮れのしめりにこころみむ」と聞こえたまへれば、さまざまをかしうしなして奉りたまへり。「これ分かせたまへ。誰れにか見せむ」と聞こえたまひて、御火取りども召してこころみさせたまふ。「知る人にもあらずや」と卑下したまへど、言ひ知らぬ匂ひどもの、進み遅れたる、香一種などがいささかの咎を分きて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる、汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛の尉堀りて参れり。宰相中将取りて伝へ参らせたまふ。宮、「いと苦しき判者にも当たりてはべるかな。いと煙たしや」と、悩みたまふ。同じうこそは、いづくにも散りつつ広ごるべかめるを、人びとの心々に合はせたまへる、深さ浅さをかぎあはせたまへるに、いと興あること多かり。

さらにいづれともなき中に、齋院の御黒ぼう、さいへども、心にくくしづやかなる匂ひことなり。侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なり、と定めたまふ。対の上の御は、三種ある中に、梅花はなやかに今めかしう、すこしはやき心しつらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。夏の御方には、人びとのかう心々に挑みたまふなる中に、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉を一種合はせたまへり。さま變はり、しめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれむもあいなしと思して、薫衣香のはうのすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠の朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩のはうなど思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる、心おき

てすぐれたり、といづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。

月さし出でぬれば、大御酒など参りて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、おとどのあたり言ひ知らず匂ひ満ちて、人の御心地いと艶あり。蔵人所の方にも、明日の御遊びのうちならしに、御琴どもの装束などして、殿上人などあまた参りて、をかしき笛の音ども聞こゆ。内の大殿の頭中将、弁の少将なども、見参ばかりにてまかづるをとどめさせたまひて、御琴ども召す。宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴参りて、頭中将和琴賜はりて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将横笛吹きたまふ。折にあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたたり。弁の少将、拍子取りて、梅が枝出だしたるほど、いとをかし。童にて韻塞の折、高砂うたひし君なり。宮も大臣もさしいらへしたまひて、ことごとしからぬものから、をかしき夜の御遊びなり。御土器参るに、宮、

「鶯の声にやいとどあくがれむ心しめつる花のあたりに

千代も経ぬべし」と聞こえたまへば、

色も香もうつるばかりにこの春は花咲く宿をかれずもあらなむ

頭中将に賜へば、取りて、宰相中将にさす。

鶯のねぐらの枝もなびくまでなほ吹きとほせ夜半の笛竹

宰相中将、

「心ありて風の避くめる花の木にとりあへぬまで吹きや寄るべき

情けなく」と、皆うち笑ひたまふ。弁少将、

霞だに月と花とを隔てずはねぐらの鳥もほころびなまし

まことに明け方になりてぞ、宮帰りたまふ。御贈り物に、みづからの御料の御直衣の御よそひ一くだり、手触れたまはぬ薰物二壺添へて、御車にたてまつら

せたまふ。宮、

花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりと妹やとがめむ

とあれば、「いと屈したりや」と笑ひたまふ。御車かくるほどに追ひて、

「めづらしと故里人も待ちぞ見む花の錦を着て帰る君

またなきことと思さるらむ」とあれば、いといたうからがりたまふ。次々の君達にも、ことことしからぬさまに、細長、小桂などかづけたまふ。

かくて、西のおとどに戌の時に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上の内侍などもやがてこなたに参れり。上も、このついでに、中宮に御対面あり。御方々の女房押しあはせたる、数しらず見えたり。子の時に御裳たてまつる。大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたし、と宮は見たてまつれたまふ。大臣、「思し捨つまじきを頼みにて、なめげなる姿を進み御覽ぜられはべるなり。後の世のためしにやと、心狭く忍び思ひたまふる」など聞こえたまふ。宮、「いかなるべきこととも思うたまへ分きはべらざりつるを、かうことごとしうとりなさせたまふになむ、なかなか心おかれぬべく」とのたまひ消つほどの御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、大臣も、思すさまにをかしき御けはひどものさし集ひたまへるを、あはひめでたく思さる。母君のかかる折だにえ見たてまつらぬを、いみじと思へりしも心苦しうて、参う上らせやせましと思せど、人のもの言ひをつつみて過ぐしたまひつ。かかる所の儀式は、よろしきにだにいとこと多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむもなかなかやとて、こまかに書かず。

春宮の御元服は二十余日のほどになむありける。いと大人しくおはしませば、人のむすめども、競ひ参らすべきことを心ざし思すなれど、この殿の思しきぎすさまのいとことなれば、なかなかにてやまじらはむと、左の大臣なども思しとどまるなるを聞こしめして、「いとたいだいしきことなり。宮仕への筋は、

あまたあるなかに、すこしのけぢめを挑まむこそ本意ならめ。そこらの警策の姫君たち引き籠められなば、世にはえあらじ」とのたまひて、御参り延びぬ。次々にもと、しづめたまひけるを、かかるよし所々に聞きたまひて、左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ。

この御方は、昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて、御参り延びぬるを、宮にも心もとながらせたまへば、四月にと定めさせたまふ。御調度どもも、もとあるよりもとのへて、御みづからも、もの下形、絵様なども御覧じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。草子の箱に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選らせたまふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのものも多くさぶらふ。

「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる。古き跡は定まれるやうにはあれど、広き心ゆたかならず、一筋に通ひてなむありける。妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人びとありけれど、女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集へたりしなかに、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一くだりばかり、わざとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。さてあるまじき御名も立てきこえしぞかし。悔しきことに思ひしみたまへりしかど、さしもあらざりけり。宮にかく後見仕うまつることを、心深うおはせしかば、亡き御影にも見直したまふらむ。宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらむ」と、うちささめきて聞こえたまふ。「故入道の宮の御手は、いと気色深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞすくなかりし。院の尚侍こそ今の世の上手におはすれど、あまりそばれて癖ぞ添ひためる。さはありとも、かの君と、前斎院と、ここにこそは書きたまはめ」と

ゆるしきこえたまへば、「この数にはまばゆくや」と聞こえたまへば、「いたうな過ぐしたまひそ。にこやかなる方のなつかしきはことなるものを。真名のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそ混じるめれ」とて、まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。「兵部卿の宮、左衛門の督などにもせむ。みづから一よろいは書くべし。けしきばみいますがりとも、え書き並べじや」と、われぼめをしたまふ。

墨、筆並びなく選り出でて、例の所々に、ただならぬ御消息あれば、人びと難きことに思して、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞こえたまふ。高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、「このもの好みする若き人びと試みむ」とて、宰相の中將、式部卿の宮の兵衛督、内の大殿の頭の中將などに、「葦手、歌絵を、思ひ思ひに書け」とのたまへば、皆心々に挑むべかめり。

例の寢殿に離れおはしまして書きたまふ。花さかり過ぎて、浅緑なる空うららかなるに、古き言どもなど思ひすましたまひて、御心のゆく限り、草のもただのも女手も、いみじう書き尽くしたまふ。御前に人しげからず、女房二三人ばかり、墨などすませたまひて、ゆゑある古き集の歌など、いかにぞやなど選り出でたまふに、口惜しからぬ限りさぶらふ。御簾上げわたして、脇息の上に草子うち置き、端近くうち乱れて、筆の尻くはへて、思ひめぐらしたまへるさま、飽く世なくめでたし。白き赤きなど、掲焉なる枚は、筆とり直し、用意したまへるさまさへ、見知らむ人はげにめでぬべき御ありさまなり。

「兵部卿宮渡りたまふ」と聞こゆれば、おどろきて御直衣たてまつり、御茵参り添へさせたまひて、やがて待ち取り入れたてまつりたまふ。この宮もいときよげにて、御階さまよく歩み昇りたまふほど、内にも人びとのぞきて見たてまつる。うちかしこまりて、かたみにうるはしだちたまへるもいとよらなり。

「つれづれに籠もりはべるも、苦しきまで思うたまへらるる心ののどけさに、折よく渡らせたまへる」とよろこびきこえたまふ。かの御草子持たせて渡りたまへるなりけり。やがて御覧ずれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただかたかどに、いいたう筆澄みたるけしきありて、書きなしたまへり。歌もことさらめき、そばみたる古言どもを選びて、ただ三くだりばかりに、文字少なに、好ましくぞ書きたまへる、大臣御覧じ驚きぬ。「かうまでは思ひたまへずこそありつれ。さらに筆投げ捨てつべしや」とねたがりたまふ。「かかる御中に面なくくだす筆のほど、さりとともなむ思うたまふる」など戯れたまふ。書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば、取う出たまひて、かたみに御覧ず。唐の紙のいとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、肌こまかに和うなつかしきが、色などははなやかならでなまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべきかたなし。見たまふ人の涙さへ水茎に流れ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、またここの紙屋の色紙の色あひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見所限りなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもに目も見やりたまはず。

左衛門督は、ことごとしうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆の掟て澄まぬ心地して、いたはり加へたるけしきなり。歌なども、ことさらめきて選り書きたり。女の御は、まほにも取り出でたまはず。齋院のなどは、まして取う出たまはざりけり。葦手の草子どもぞ、心々に、はかなうをかしき。宰相の中将のは、水の勢ひゆたかに書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるどころあり。またいといかめしうひきかへて、文字やう、石などのたたずまひ、好み書きたまへる枚もあめり。「目も及ばず、これは暇いりぬべきものかな」と興じめでたま



ふ。何事ももの好みし、艶がりおはする親王にて、いといみじうめできこえたまふ。

今日はまた、手のことどものたまひ暮らし、さまざまの継紙の本ども、選り出でさせたまへるついでに、御子の侍従して、宮にさぶらふ本ども取りに遣はす。嵯峨の帝の、古万葉集を選び書かせたまへる四卷、延喜の帝の、古今和歌集を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、緞の唐組の紐などなまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる、大殿油短く参りて御覧するに、「尽きせぬものかな。このころの人は、ただかたそばをけしきばむにこそありけれ」などめでたまふ。やがてこれとはどめたてまつりたまふ。「女子などを持てはべらましにだに、をさをさ見はやすまじきには伝ふまじきを、まして朽ちぬべきを」など聞こえてたてまつれたまふ。侍従に、唐の本などのいとわぎとがましき、沈の箱に入れて、いみじき高麗笛添へて奉れたまふ。

またこのころは、ただ仮名の定めをしたまひて、世の中に手書くとおぼえたる、上中下の人びとにも、さるべきものども思しはからひて、尋ねつつ書かせたまふ。この御箱には、立ち下れるをば混ぜたまはず、わぎと人のほど、品分かせたまひつつ、草子、巻物皆書かせたてまつりたまふ。よろづにめづらかなる御宝物ども、人のみかどまでありがたげなる中に、この本どもなむ、ゆかしと心動きたまふ若人、世に多かりける。御絵どもととのへさせたまふ中に、かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむと思せど、今すこし世をも思し知りなむに、と思し返して、まだ取り出でたまはず。

内の大臣は、この御いそぎを人の上にて聞きたまふも、いみじう心もとなくさうざうし、と思す。姫君の御ありさま、盛りにととのひて、あたらしうつくしげなり。つれづれとうちしめりたまへるほど、いみじき御嘆きぐさなるに、

かの人の御けしき、はた同じやうになだらかなれば、心弱く進み寄らむも人笑はれに、人のねむごろなりしきぎみになびきなましかば、など人知れず思し嘆きて、一方に罪をもおほせたまはず。かくすこしたわみたまへる御けしきを、宰相の君は聞きたまへど、しばしつらかりし御心を憂しと思へば、つれなくもてなししづめて、さすがに他さまの心はつくべくもおぼえず、心づから戯れにくき折多かれど、浅緑聞こえごちし御乳母どもに、納言に昇りて見えむの御心深かるべし。

大臣は、あやしう浮きたるさまかな、と思し悩みて、「かのわたりのこと思ひ絶えにたらば、右大臣、中務の宮などのけしきばみ言はせたまふめるを、いづくも思ひ定められよ」とのたまへど、ものも聞こえたまはず、かしこまりたる御さまにてさぶらひたまふ。「かやうのことは、かしこき御教へにだに従ふべくもおぼえざりしかば、言ませま憂けれど、今思ひあはするには、かの御教へこそ長き例にはありけれ。つれづれともすれば、思ふところあるにやと、世人も推し量るらむを、宿世の引く方にて、なほなほしきことに、ありありてなびく、いとしりびに人わろきことぞや。いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限りのあるものから、好き好きしき心つかはるな。いはけなくより宮の内に生ひ出でて、身を心にまかせず所狭く、いささかの事のあやまりもあらば、軽々しきそしりをや負はむとつみしだに、なほ好き好きしき咎を負ひて、世にはしたなめられき。位浅く何となき身のほど、うちとけ、心のままなる振る舞ひなどのせらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るる例ありける。さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、みづからも恨みを負ふなむ、つひのほだしとなりける。とりあやまりつつ見む人の、わが心になはず、忍ばむこと難き節ありとも、なほ思ひ返さむ心をならひて、もしは親の心にゆづり、もし

は親なくて世の中かたほにありとも、人柄心苦しうなどあらむ人をば、それを片かどに寄せても見たまへ。わがため人のため、つひによかるべき心ぞ深うあるべき」など、のどやかにつれづれなる折は、かかる御心づかひをのみ教へたまふ。

かやうなる御諫めにつきて、戯れにても他ぎまの心を思ひかかるはあはれに、人やりならずおぼえたまふ。女も、常よりことに大臣の思ひ嘆きたまへる御けしきに、恥づかしう憂き身と思し沈めど、上はつれなくおほどかにて、眺め過ぐしたまふ。御文は、思ひあまりたまふ折々、あはれに心深きさまに聞こえたまふ。誰がまことをか、と思ひながら、世馴れたる人こそ、あながちに人の心をも疑ふなれ、あはれと見たまふふし多かり。「中務の宮なむ、大殿にも御けしき賜はりて、さもやと思しかはしたなる」と人の聞こえければ、大臣はひき返し、御胸ふたがるべし。忍びて、「さることをこそ聞きしか。情けなき人の御心にもありけるかな。大臣の口入れたまひしに、執念かりきとて、引き違へたまふなるべし。心弱くなびきても人笑へならましこと」など、涙を浮けてのたまへば、姫君、いと恥づかしきにも、そこはかたなく涙のこぼるれば、はしたなくて背きたまへる、らうたげさ限りなし。いかにせまし、なほや進み出でてけしきをとらまし、など思し乱れて、立ちたまひぬる名残も、やがて端近く眺めたまふ。あやしく心おくれても進み出でつる涙かな、いかに思しつらむ、などよろづに思ひるたまへるほどに、御文あり。さすがにぞ見たまふ。こまやかにて、

つれなさは憂き世の常になりゆくを忘れぬ人や人にことなる  
とあり。けしきばかりもかすめぬつれなきよ、と思ひ続けたまふは憂けれど、  
限りとて忘れがたきを忘るるもこや世になびく心なるらむ  
とあるを、あやしと、うち置かれず、傾きつつ見るたまへり。

藤  
裏  
葉

御いそぎのほどにも、宰相の中将は眺めがちにて、ほれぼれしき心地するを、かつはあやしく、わが心ながら執念きぞかし、あながちにかう思ふことならば、関守のうちも寝ぬべきけしきに思ひ弱りたまふなるを聞きながら、同じくは人わるからぬさまに見果てむ、と念ずるも苦しう思ひ乱れたまふ。女君も、大臣のかすめたまひしことの筋を、もしさもあらば何の名残かは、と嘆かして、あやしく背き背きに、さすがなる御もろ恋なり。大臣も、さこそ心強がりたまひしかど、たけからぬに思しわづらひて、かの宮にもさやうに思ひ立ち果てたまひなば、またとかく改め思ひかかづらはむほど、人のためも苦しう、わが御方さまにも人笑はれに、おのづから軽々しきことやまじらむ、忍ぶとすれど、うちうちのことあやまりも、世に漏りにたるべし、とかく紛らはして、なほ負けぬべきなめり、と思しなりぬ。

上はつれなくて、恨み解けぬ御仲なれば、ゆくりなく言ひ寄らむもいかが、と思し憚りて、ことごとしくもてなさむも人の思はむところをこなり、いかなるついでしてかはほのめかすべき、など思すに、三月二十日、大殿の大宮の御忌日にて、極楽寺に詣でたまへり。君達皆ひき連れ、勢ひあらまほしく、上達部などもあまた参り集ひたまへるに、宰相の中将、をさをさけはひ劣らずよそほしくて、かたちなどただ今のみじき盛りにねびゆきて、取り集めめでたき人の御ありさまなり。この大臣をばつらし、と思ひきこえたまひしより、見えたとてまつるも心づかひせられて、いといたう用意し、もてしづめてものしたまふを、大臣も常よりは目とどめたまふ。御誦経など、六条院よりもせさせたまへり。宰相の君は、ましてよろづをとりもちて、あはれにいとなみ仕うまつりたまふ。

夕かけて皆帰りたまふほど、花は皆散り乱れ、霞たどたどしきに、大臣、昔を思し出でて、なまめかしうそぶき眺めたまふ。宰相もあはれなる夕べのけ

しきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と、人びとの騒ぐに、なほ眺め入りてゐたまへり。心ときめきに見たまふことやありけむ、袖を引き寄せて、「などか、いとこよなくは勘じたまへる。今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪許したまひてよや。残り少なくなりゆく末の世に思ひ捨てたまへるも、恨みきこゆべくなむ」とのたまへば、うちかしまりて、「過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに、うけたまはりおくことはべりしかど、許しなき御けしきに憚りつつなむ」と聞こえたまふ。心あわたたしき雨風に、皆ちりぢりに競ひ帰りたまひぬ。君、いかに思ひて、例ならずけしきばみたまひつらむ、など世とともに心をかけたる御あたりなれば、はかなきことなれど耳とまりて、とやかうやと思ひ明かしたまふ。

ここの年のごろの思ひのしるしにや、かの大臣も名残なく思し弱りて、はかなきついで、わざとはなく、さすがにつきづきしからむを思すに、四月のついたちごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れ行くほどのいとど色まされるに、頭の中將して御消息あり。「一日の花の蔭の対面の飽かずおぼえはべりしを、御暇あらば立ち寄りたまひなむや」とあり。御文には、わが宿の藤の色濃きたそかれに尋ねやは来ぬ春の名残を

げにいとおもしろき枝につけたまへり。待ちつけたまへるも心ときめきせられて、かしまりきこえたまふ。

なかなか折りやまどはむ藤の花たそかれ時のたどたどしくはと聞こえて、「口惜しくこそ臆しにけれ。取り直したまへよ」と聞こえたまふ。「御供にこそ」とのたまへば、「わづらはしき隨身は否」とて返しつ。

大臣の御前に、かくなむとて御覽ぜさせたまふ。「思ふやうありてものしたまひつるにやあらむ。さも進みものしたまはばこそは、過ぎにし方のけふなか

りし恨みも解けぬ」とのたまふ。御心おごりこよなうねたげなり。「さしもはべらじ。対の前の藤、常よりもおもしろう咲きてはべるなるを、静かなるころほひなれば、遊びせむなどにやはべらむ」と申したまふ。「わざと使ひさされたりけるを、早うものしたまへ」と許したまふ。いかならむ、と下には苦しうただならず。「直衣こそ、あまり濃くて軽びためれ。非参議のほど、何となき若人こそ、二藍はよけれ、ひき繕はむや」とて、わが御料の心ことなるに、えならぬ御衣ども具して、御供に持たせてたてまつれたまふ。

わが御方にて、心づかひいみじう化粧じて、たそかれも過ぎ、心やましきほどに参うでたまへり。あるじの君達、中將をはじめて、七八人うち連れて迎へ入れたてまつる。いづれとなくをかしきかたちどもなれど、なほ人にすぐれてあぎやかにきよなるものから、なつかしうよしづき恥づかしげなり。大臣、御座ひきつくろはせなどしたまふ御用意おろかならず。御冠などしたまひて出でたまふとて、北の方、若き女房などに、「覗きて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意などいと静かにもものしや。あぎやかに抜け出でおよすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公さまはすこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これは才の際もまさり、心もちる男々しくすくよかに、足らひたりと世におぼえためり」など、のたまひてぞ対面したまふ。ものまめやかにむべむべしき御物語はすこしばかりにて、花の興に移りたまひぬ。「春の花いづれとなく、皆ひらけ出づる色ごとに、目おどろかぬはなきを、心短くうち捨てて散りぬるが、恨めしうおぼゆるころほひ、この花のひとり立ち後れて、夏に咲きかかるほどなむ、あやしう心にくくあはれにおぼえはべる。色もはたなつかしきゆかりにしつべし」とて、うちほほ笑みたまへる、けしきありて、匂ひきよげなり。

月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬほどなるを、もてあそぶに心を寄せて、大御酒参り、御遊びなどしたまふ。大臣、ほどなく空酔ひをしたまひて、乱りがはしく強ひ酔はしたまふを、さる心していたうすまひ悩めり。「君は、末の世にはあまるまで天の下の有職にもしたまふめるを、齡古りぬる人、思ひ捨てたまふなむつらかりける。文籍にも家礼といふことあるべくや。なにがしの教へもよく思し知るらむと思ひたまふるを、いたう心悩ましたまふと恨みきこゆべくなむ」などのたまひて、酔ひ泣きにや、をかしきほどにけしきばみたまふ。「いかでか。昔を思うたまへ出づる御変はりどもには、身を捨つるさまにもとこそ思うたまへ知りはべるを、いかに御覧じなすことにかはべらむ。もとよりおろかなる心のおこたりにこそ」とかしこまりきこえたまふ。御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御けしきを賜はりて、頭中将、花の色濃くことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。取りてもて悩むに、大臣、

紫にかことはかけむ藤の花まつより過ぎてうれたけれども

宰相、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

いく返り露けき春を過ぐし来て花の紐解く折にあふらむ

頭の中將に賜へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ

次々順流るめれど、酔ひの紛れにはかばかしからで、これよりまさらず。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。げに、まだほのかなる梢どものさうざうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁少將、声いとなつかしくて、葦垣を謡ふ。大臣、「いとけやけうも仕う



まつるかな」とうち乱れたまひて、「年経にけるこの家の」とうち加へたまへる御声、いとおもしろし。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。やうやう夜更け行くほどに、いたうそら悩みして、「乱り心地いと堪へがたうて、まかでむ空もほとほとしようこそはべりぬべけれ。宿直所譲りたまひてむや」と、中將に愁へたまふ。大臣、「朝臣や、御休み所求めよ。翁いたう酔ひ進みて無礼なれば、まかり入りぬ」と言ひ捨てて入りたまひぬ。中將、「花の蔭の旅寝よ。いかにぞや、苦しきしるべにぞはべるや」と言へば、「松に契れるはあだなる花かは。ゆゆしや」と責めたまふ。中將は心のうちに、ねたのわざや、と思ふところあれど、人さまの思ふさまにめでたきにかうもあり果てなむと心寄せわたることなれば、うしろやすく導きつ。

男君は、夢かとおぼえたまふにも、わが身いとどいつかしうぞおぼえたまひけむかし。女は、いと恥づかしと思ひしみてものしたまふも、ねびまされる御ありさま、いとど飽かぬところなくめやすし。「世の例にもなりぬべかりつる身を、心もてこそかうまでも思し許さるめれ。あはれを知りたまはぬも、さま異なるわざかな」と怨みきこえたまふ。「少將の進み出だしつる葦垣の趣きは、耳とどめたまひつや。いたき主かなな。河口の、とこそさしいらへまほしかりつれ」とのたまへば、女いと聞き苦しと思して、

「浅き名を言ひ流しける河口はいかが漏らしし関の荒垣

あさまし」とのたまふさま、いとこめきたり。すこしうち笑ひて、

「漏りにける岫田の関を河口の浅きにのみはおほせざらなむ

年月の積もりも、いとわりなくて悩ましきに、ものおぼえず」と、酔ひにかこちて、苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人びと聞こえわづらふを、大臣、「したり顔なる朝寝かな」ととがめたまふ。されど明かし果てでぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔見るかひありかし。

御文は、なほ忍びたりつるさまの心づかひにてあるを、なかなか今日はえ聞こえたまはぬを、もの言ひさがなき御達つきじろふに、大臣渡りて見たまふぞ、いとわりなきや。

尽きせざりつる御けしきに、いとど思ひ知らるる身のほどを、堪へぬ心にまた消えぬべきも。

とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ今日あらはるる袖のしづくを  
 など、いと馴れ顔なり。うち笑みて、「手をいみじうも書きなられにけるかな」  
 などのたまふも、昔の名残なし。御返り、いと出で来がたげなれば、「見苦し  
 や」とて、さも思し憚りぬべきことなれば、渡りたまひぬ。御使の禄、なべて  
 ならぬさまにて賜へり。中将、をかしきさまにもてなしたまふ。常にひき隠し  
 つつ隠ろへありきし御使、今日は面もちなど、人びとしく振る舞ふめり。右近  
 の将監なる人の、むつましう思し使ひたまふなりけり。

六条の大臣も、かくと聞こし召してけり。宰相、常よりも光添ひて参りたまへれば、うちまもりたまひて、「今朝はいかに、文などもものしつや。賢しき人も、女の筋には乱るる例あるを、人わろくかかづらひ、心いられせで過ぐされたるなむ、すこし人に抜けたりける御心とおぼえける。大臣の御おきてのあまりすくみて、名残なくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出づることあらむや。さりとても、わが方たけう思ひ顔に、心おごりして、好き好きしき心ばへなど漏らしたまふな。さこそおいらかに、大きな心おきてと見ゆれど、下の心ばへ男々しからず癖ありて、人見えにくきところつきたまへる人なり」など、例の教へきこえたまふ。ことうちあひ、めやすき御あはひと思さる。御子とも見えず、すこしがこのかみばかりと見えたまふ。ほかほかにては、同じ顔を写し取りたると見ゆるを、御前にては、さまざまあなめでたと見えたまへり。大臣は薄き御直衣、白き御衣の唐めきたるが、紋けぎやかにつやつやと透きたるを

たてまつりて、なほ尽きせずあてになまめかしうおはします。宰相殿は、すこし色深き御直衣に、丁子染めの焦がるるまでしめる、白き綾のなつかしきを着たまへる、ことさらめきて艶に見ゆ。

灌仏率てたてまつりて、御導師遅く参りければ、日暮れて、御方々より童女出だし、布施など公ぎまに変はらず、心々にしたまへり。御前の作法を移して、君達なども参り集ひて、なかなかうるはしき御前よりもあやしう心づかひせられて臆しがちなり。

宰相は、静心なく、いよいよ化粧じ、ひきつくろひて出でたまふを、わざとならねど情けだちたまふ若人は、恨めしと思ふもありけり。年ごろの積り取り添へて、思ふやうなる御仲らひなめれば、水も漏らむやは。あるじの大臣、いとどしき近まさを、うつくしきものに思して、いみじうもてかしづきこえたまふ。負けぬる方の口惜しさはなほ思せど、罪も残るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを、ありがたく思し許す。女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらまほしければ、北の方、さぶらふ人びとなどは、心よからず思ひ言ふもあれど、何の苦しきことかはあらむ。按察使の北の方なども、かかる方にてうれしと思ひきこえたまひけり。

かくて、六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。対の上みあれに詣うでたまふとて、例の御方々いぎなひきこえたまへど、なかなかさしも引き続き、心やましきを思して、誰も誰もとまりたまひて、こととしきほどにもあらず、御車二十ばかりして、御前などもくぐりださしき人数多くもあらず、ことそぎたるしもけはひことなり。祭の日の暁に詣うでたまひて、かへさには、物御覽すべき御棧敷におはします。御方々の女房、おのおの車引き続き、御前、所占めたるほどいかめしう、かれはそれと、遠目よりおどろおどろしき御

勢ひなり。大臣は、中宮の御母御息所の、車押しさけられたまへりし折のこと  
 思し出でて、「時により心おごりして、さやうなることなむ情けなきことなり  
 ける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」と、そ  
 のほどはのたまひ消ちて、「残りとまれる人の、中将はかくただ人にて、わづ  
 かになりのぼるめり。宮は並びなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれ  
 なれ。すべていと定めなき世なればこそ、何ごとも思ふさまにて、生ける限り  
 の世を過ぐさまほしけれど、残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へな  
 どをさへ思ひ憚らるれば」とうち語らひたまひて、上達部なども御棧敷に参り  
 集ひたまへれば、そなたに出でたまひぬ。

近衛司の使は頭の中将なりけり。かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人びとは  
 参りたまうける。藤典侍も使なりけり。おぼえことにて、内、春宮よりはじめ  
 たてまつりて、六条院などよりも、御訪らひども所狭きまで、御心寄せいとめ  
 でたし。宰相の中将、出で立ちの所にさへ訪らひたまへり。うちとけずあはれ  
 を交はしたまふ御仲なれば、かくやむごとなき方に定まりたまひぬるを、ただ  
 ならずうち思ひけり。

「何とかや今日のかぎしよかつ見つつおぼめくまでもなりにけるかな  
 あさまし」とあるを、折過ぐしたまはぬばかりを、いかが思ひけむ、いともの  
 騒がしく車に乗るほどなれど、

「かぎしてもかつたどらるる草の名は桂を折りし人や知るらむ  
 博士ならでは」と聞こえたり。はかなけれど、ねたきいらへと思す。なほこの  
 内侍にぞ思ひ離れず、はひまぎれたまふべき。

かくて御参りは、北の方添ひたまふべきを、常に長々しうえ添ひさぶらひた  
 まはじ、かかるついでに、かの御後見をや添へまし、と思す。上も、つひにあ  
 るべきことの、かく隔たりて過ぐしたまふを、かの人もものしと思ひ嘆かるら

む、この御心にも、今はやうやうおぼつかなくあはれに思し知るらむ、かたがた心おかれたてまつらむもあいなし、と思ひなりたまひて、「この折に添へたてまつりたまへ。まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶことの、心いたる限りあるを、みづからはえつとしもさぶらはざらむほど、うしろやすかるべく」と聞こえたまへば、いとよく思し寄るかな、と思して、さなむとあなたにも語らひのたまひければ、いみじくうれしく、思ふこと叶ひはべる心地して、人の装束、何かのことも、やむごとなき御ありさまに劣るまじくいそぎたつ。尼君なむ、なほこの御生ひ先見たてまつらむの心深かりける。今一たび見たてまつる世もやと、命をさへ執念くなくて念じけるを、いかにしてかは、と思ふも悲し。

その夜は、上添ひて参りたまふに、さて車にも立ちくだりうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただかく磨きたてまつりたまふ玉の疵にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。御参りの儀式、人の目おどろくばかりのことはせじ、と思しつづめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや。限りもなくかしづきすすたてまつりたまひて、上は、まことにあはれにうつくし、と思ひきこえたまふにつけても、人に譲るまじう、まことにかかるともあらましかば、と思す。大臣も宰相の君も、ただこのことひとつをなむ、飽かぬことかなと思しける。三日過ごしてぞ、上はまかでさせたまふ。

たち変はりて参りたまふ夜、御対面あり。「かくおとなびたまふげぢめになむ、年月のほども知らればべれば、疎々しき隔ては残るまじくや」と、なつかしうのたまひて、物語などしたまふ。これもうちとけぬる初めなめり。ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはと、めざましう見たまふ。またいと気

高う盛りなる御けしきを、かたみにめでたしと見て、そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まりたまひけるも、いとことわりと思ひ知らるるに、かうまで立ち並びきこゆる契りおろかなりやは、と思ふものから、出でたまふ儀式のいとことによそほしく、御手車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを思ひ比ぶるに、さすがなる身のほどなり。

いとうつくしげに、雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、一つものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざま憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。思ふさまにかしづきこえて、心およばぬこと、はたをさをさなき人のらうらうじさなれば、おほかたの寄せ、おぼえよりはじめ、なべてならぬ御ありさまかたちなるに、宮も、若き御心地に、いと心ことに思ひきこえたまへり。挑みたまへる御方々の人などは、この母君のかくてさぶらひたまふを、疵に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。いまめかしう並びなきことをばさらにもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなきことにつけてもあらまほしうもてなしきこえたまへれば、殿上人なども、めづらしき挑み所にて、とりどりにさぶらふ人びとも、心をかけたる女房の、用意、ありさまさへ、いみじくととのへなしたまへり。

上も、さるべき折節には参りたまふ。御仲らひあらまほしううちとけゆくに、さりとしてさし過ぎもの馴れず、あなづらはしかるべきもてなし、はたつゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま心ばへなり。大臣も、長からずのみ思さるる御世のこなたに、と思しつる御参りの、かひあるさまに見たてまつりなしたまひて、心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまにしづまりたまひぬれば、御心おちる果てたまひて、今は本意も遂げなむと思しなる。対の上の御ありさまの見捨てがたきにも、中宮お

はしませば、おろかならぬ御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親ぎまには、まづ思ひきこえたまふべければ、さりとともと思し譲りけり。夏の御方の、時に花やぎたまふまじきも、宰相のものしたまへば、と皆とりどりにうしろめたからず思しなりゆく。

明けむ年四十になりたまふ。御賀のことを、おほやけよりはじめたてまつりて、大きなる世のいそぎなり。その秋、太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、つかさかうぶりなど皆添ひたまふ。かからでも世の御心に叶はぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めで、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひたまへば、内に参りたまふべきこと難かるべきをぞ、かつは思しける。かくても、なほ飽かず帝は思して、世の中を憚りて、位をえ譲りきこえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。

内大臣上がりたまひて、宰相の中將、中納言になりたまひぬ。御よろこびに出でたまふ。光いとどまさりたまへるさま、かたちよりはじめて、飽かぬことなきを、あるじの大臣も、なかなか人に圧されまし宮仕へよりは、と思し直る。女君の大輔乳母、「六位宿世」とつぶやきし宵のこと、ものの折々に思し出でければ、菊のいとおもしろくて移ろひたるを賜はせて、

「浅緑若葉の菊を露にても濃き紫の色とかけきや

からかりし折の一言葉こそ忘れね」と、いと匂ひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしういとほしきものから、うつくしう見たてまつる。

「双葉より名立たる園の菊なれば浅き色わく露もなかりき

いかに心おかせたまへりけるにか」といと馴れて苦しがる。

御勢ひまさりて、かかる御住まひも所狭ければ、三条殿に渡りたまひぬ。すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、宮のおはしましし方を改めしつらひて住みたまふ。昔おぼえてあはれに思ふさまなる御住まひなり。前裁ど

もなど、小さき木どもなりしもいとしげき蔭となり、一村薄も心にまかせて乱れたりける、つくろはせたまふ。遣水の水草もかき改めて、いと心ゆきたるけしきなり。をかしき夕暮のほどを、二所眺めたまひて、あさましかりし世の御幼さの物語などしたまふに、恋しきことも多く、人の思ひけむことも恥づかしう、女君は思し出づ。古人どものまかで散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど、参う上り集りて、いとうれしと思ひあへり。男君、

なれこそは岩守るあるじ見し人の行方は知るや宿の真清水  
女君、

亡き人の影だに見えずつれなくて心をやれるいさらゐの水  
などのたまふほどに、大臣、内よりまかでたまひけるを、紅葉の色に驚かされて渡りたまへり。

昔おはさひし御ありさまにもをさをさ変はることなく、あたりあたりおとなしく住まひたまへるさま、はなやかなるを見たまふにつけても、いとものあはれに思さる。中納言も、けしきことに顔すこし赤みて、いとどしづまりてものしたまふ。あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、女は、またかかるかたちのたぐひもなかなかからむと見えたまへり。男は、際もなくきよらにおはす。古人ども御前に所得て、神さびたることども聞こえ出づ。ありつる御手習どもの散りたるを御覧じつけて、うちしほたれたまふ。「この水の心尋ねまほしけれど、翁は言忌して」とのたまふ。

そのかみの老木はむべも朽ちぬらむ植ゑし小松も苔生ひにけり  
男君の御宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、

いづれをも蔭とぞ頼む双葉より根ざし交はせる松の末々  
老人どもも、かやうの筋に聞こえ集めたるを、中納言はをかしと思す。女君は  
あいなく面赤み苦しと聞きたまふ。



神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉の盛りにて、興あるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院さへ渡りおはしますべければ、世にめづらしくありがたきことにて、世人も心をおどろかす。あるじの院方も御心を尽くし、目もあやなる御心まうけをせさせたまふ。

巳の時に行幸ありて、まづ馬場殿に左右の寮の御馬牽き並べて、左右近衛立ち添ひたる作法、五月の節にあやめわかれず通ひたり。未くたるほどに、南の寝殿に移りおはします。道のほどの反橋、渡殿には錦を敷き、あらはなるべき所には軟障を引き、いつくしうしなさせたまへり。東の池に舟ども浮けて、御厨子所の鶉飼のおさ、院の鶉飼を召し並べて、鶉をおろさせたまへり。小さき鮎ども食ひたり。わぎとの御覧とはなけれども、過ぎさせたまふ道の興ばかりになむ。山の紅葉いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁を崩し、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせたまふ。御座二つよそひて、あるじの御座は下れるを、宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝は、なほ限りあるみやるやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなむ、思しける。池の魚を、左少将捕り、蔵人所の鷹飼ひの、北野に狩仕まつれる鳥一つがひを、右のすけ捧げて、寝殿の東より御前に出でて、御階の左右に膝をつきて奏す。太政大臣仰せ言賜ひて、調じて御膳に参る。親王たち上達部などの御まうけもめづらしきさまに、常の事どもを変へて仕うまつらせたまへり。皆御酔ひになりて、暮れかかるほどに楽所の人召す。わぎとの大楽にはあらず、なまめかしきほどに、殿上の童べ舞ひ仕うまつる。朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。賀王恩といふものを奏するほどに、太政大臣の御おとごの十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。内の帝、御衣ぬぎて賜ふ。太政大臣下りて舞踏したまふ。

あるじの院、菊を折らせたまひて、青海波の折を思し出づ。

色まさる籬の菊も折々に袖うちかけし秋を恋ふらし

大臣、その折は同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど思し知らる。時雨、折知り顔なり。

「紫の雲にまがへる菊の花濁りなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」と聞こえたまふ。

夕風の吹き敷く紅葉の色々濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、かたちをかしき童べの、やむごとなき家の子どもなどにて、青き赤き白椽、蘇芳、葡萄染めなど、常のごと、例のみづらに、額ばかりのけしきを見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭に返り入るほど、日の暮るるもいと惜しげなり。

楽所などおどろおどろしくはせず。上の御遊び始まりて、書の司の御琴ども召す。ものの興切なるほどに、御前に皆御琴ども参れり。宇多の法師の変はらぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こし召す。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉の折をこそ見ね

うらめしげにぞ思したるや。帝、

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と聞こえ知らせたまふ。御かたちいよいよねびととのほりたまひて、ただ一つものと見えさせたまふを、中納言さぶらひたまふが、ことことならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りまさらむ、あぎやかに匂はしきところは添ひてさへ見ゆ。笛仕うまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふ中に、弁の少将の声すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり。